ｈｅ Ｃａｓｔｌｅ Ｌｉｋｅ Ａ Ｇｏｒｇｅｏｕｓ Ｐｒｉｓｏｎ†††―城は煌びやかな牢獄だ

月葉りんご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
†††Ｔｈｅ　Ｃａｓｔｌｅ　Ｌｉｋｅ　Ａ　Ｇｏｒｇｅｏｕｓ　Ｐｒｉｓｏｎ†††―城は煌びやかな牢獄だ

【Ｎコード】
Ｎ１４１６Ｌ

【作者名】
月葉りんご

【あらすじ】
とある世界――とある国――、とある城の王女の話。王女レティシアは容姿はまさに王女といった美少女である。しかし、このレティシアは城の者を騒がせる問題児。国王は見かねてある行動に出て絶対に守らなければならない約束をさせるが、そんなレティシアの元に思わぬアクシデントが…ッ。そこに現れた謎の男とは…。そしてその人物がレティシアに影響を及ぼしていくことになろうとはその時は全く知らなかった。

さらに、暗下で忍び寄る怪しい大計画に、家出ならぬ城出をするはめとなるレティシアに待ち受けていた数奇な運命とは……いかに!?

という長編ファンタジー小説です。えと、執筆処女作品となります。稚拙な文章かと思いますが、温かい目で見守ってくれる方どうぞ読んでやってくださいませ…。一人でも読んでくださる方がいれば嬉しい限りですっ

感想とか校正必要箇所とかご連絡いただけると嬉しいですっ。

結構気付かないで載せてしまって後で直す事も多いので、すみません。

【序章】プロローグ（前書き）

はじめまして。突然小説を書いてみたくなって書き始めました。未熟かとは思いますが、少しずつＵＰしていきたいと思います。温かく見守ってくれる方や感想アドバイス等何か気軽にメッセージ頂けると幸いです。どうぞよろしくお願いします。では。

ＢＹ　月葉（つきのは）りんご

＞ｉ６５１８―１０４９＜

【序章】プロローグ

それは――。

突如、自分の元へ舞い降りてきた。
驚く間もなく……ほんの一瞬の出来事だった。
――記憶に焼きついているのは

視界をほぼ覆うかの様に
宙を舞うが如く揺れ動く……
澄んだ翡翠の様な緑石色（りょくせき）に輝く何か。

一瞬耳を霞めた気がした
思わず漏れてしまったが
息をしただけでもあるかの様な……
小さくか細いが、とても澄んだ声。

――とっさに腕を伸ばした瞬間

まだ朝靄の漂う薄暗い中……
朝露の水の雫をその花びらに纏い
きらきらと時折輝いて凛として美しく咲き誇る
真紅の薔薇の庭園に足を踏み入れた様な
煌びやかな幻影が広がった気がする――。

絶大な存在感に目を奪われるが如く
体が動かせなくなり……
優雅な憂いの果てにある妖艶さをも感じさせる

甘美な香りに心をも奪い取られるが如く
意識が遠のいていく様な……
それは不思議な感覚だった――。

その美しい花の風貌からは忘れてしまいそうで
触れてから気づく事もある
優雅に咲き開いた花びらの部分以外に
細やかにその身に纏わせる様に
無数に存在する……

――“棘”――。

見る者を魅了しては
自分に触れる者全てを傷つける
それは――……

“決して、簡単に触れる事を許す者などいない”と――。
そう　はっきりと拒絶されている様であるが故
女王に君臨する者の高貴さをも感じさせる…
――誇り高き真紅の花。

口にはせずに　ただ……
静かにその身をもって表わし
拒絶の意志を揺るがす事はないのだろう――――。

――隼の如く飛び込んで来たとはいえ
自分の腕で受け止めたそれにも、
無数の“棘”が存在していようとは……
その時、一体、誰が想像出来たであろうか――。

そこに漂わせた人々を魅了するその高貴な香りからは
想像も出来ない強い衝撃――――。

……それは“棘”の代わりなのだろうか。

その拒絶の前に成す術もなく
後ろに倒れ行く
たった一瞬という短い時間（とき）の流れの中…
そのまま床に身が打ちつけられんとしている
と――そう確信していた時も
花は……ただ静かに……
より一層強く――。
その誇り高き高貴さを示すべく
辺りに香りを漂よわせていた――。

ルーセスト大陸の南東に位置する
エンブレミア王国、マールシェスタ城。
東棟2階階段前廊下にて――。

階段と廊下が合流するこの場所に
城の中を見て回っていて
偶然通りがかっただけの
――とある男。

大急ぎで階段を駆けおりて来て
不意に足を踏みはずしてしまって
廊下へ落ちていってしまうと
覚悟までしていたという
窮地に立たされていた
――とある少女。

――――かくして　全ての物語は

この偶然の出来事がきっかけで

始まったのだった……。

【第一章】　強敵現わる――！？　†††††††††††††††††††††††††††Ｅｐｉｓｏｄｅ０　へ……

【序章】プロローグ（後書き）

男目線でのプロローグでした。

【第一章】強敵現わる――!?†　ep. 0　初対面†

――男――

――……っ、一体、何だ……？

男は少し起き上がり、自分が受けとめたそれに目を向けた――。

あの一瞬にして強く印象付けられた宙を舞うが如く揺れ動いていた――澄んだ翡翠の様な緑石色をした何かと同じ色の長い髪の毛は、床に流れるように静かに横たわり沈黙を保っている。艶のあるその髪は細く――、またそれはよく見れば途中から少し巻き毛がかっている。

受け止めた矢先に嗅いだ香りは、未だにその高貴さと誇り高い地位を誇示し、周りを漂わせ続けていた。髪の毛の間から僅かに覗かせる顔は、苦しさに歪められてはいるものの…美しい顔立ちをしている――。

――男に飛び込んで来たそれは、紛れもなく美しい少女の姿だった。

「……お、おい……お嬢ちゃん――大丈夫か……？」

そう声をかけた瞬間、びくっとして少女の息遣いが止まった様に思えた。

何か言いたそうに口が開かれたが、息切れがひどくて声にならない様子で、その口から漏れるのは繰り返される辛そうな激しい息遣いだけ。

倒れ込んで一緒に添えられた手に、一度その身を起こそうと試みる様に力が込められた。

しかし――、恐らく急いで走って来たのだろう…。すぐにそれは、少女を起こすことも叶わず、緩められた。

この状況を、脳の一部が『第三者の冷静な目線』という課題を投げかける。

男は少しだけ状態を起こしているものの、少女の脚と男の脚は元より絡み合う様に密着しており、そして自分の胸板の上では、まだ起き上がることの出来ない少女が悩ましく、その息を切らしている――という…誰もがこれを見れば在らぬ誤解でもかけてしまいそうな、如何わしげな構図が存在していた――。

冷静に課題を解いた男はぎょっとして、苦しそうに呼吸を繰り返す少女をそっと持ち上げ身を離していき、少女を床に降ろしていたちょうどその時――。

「……痛っ」

床に降ろした少女が苦痛の声を漏らし、蹲る様にその身を動かし右足首に手を添えている。少女の身は何とかかばい衝撃を和らげたと思っていたが、足が痛めたみたいだ。きつく閉じられた目には涙も浮かんでいる。

やれやれ……どうやら足を挫いたようだ……

大丈夫そう……ではないな。

男はしばし少女の様子が落ち着くのを待つことにした――…。

一方――。

――少女――。

……痛……足が……っ

少女はあの時、階段を急いで駆け降りていた――。

確かに誤って右足を踏み外し、勢いもついていたこともあってか足は激痛を訴えていた。

それは自分を階段から突き落とすように倒れかけさせ、考える間もなく右足に再び負荷をかけ左足を踏み出すという反射的な行動。

しかし、左足を他の段に着地させた後も勢いは止まらず、次に交互に踏み出す筈の足は――右足――。右足を踏み出すわけにはいかないという咄嗟の判断で、そのまま左足に力を込め飛ぶという手段を選んだ……というわけであった。

飛んだ後の身の危険を考えなかったわけではない。

段数にして12段位……。階段を転げ落ちるか、床に身を打ちつけられるか――……どちらにしてもタダでは済まない事はわかっていた。

ただ、床に身を打ちつけられるかと思っていた私を、何者かが受け止めて救ったという事――これは、完全に予想外であった。

二次災害は免れたとはいえ、床に降ろされる際に足が着いただけでも痛みに顔を歪ませてしまう程の足の痛み――。

それを自分が下敷きにしてしまった“謎の男”が心配している。

きつく閉じていた目を少しずつ開けて見たその男の風貌は、ここ、エンブレミア王国ではあまり見ることがない上空から深海を見下ろした様に深い藍の髪色と、髪より明るい色合いの青く澄みきった空の様な蒼の瞳――。その瞳はどこか不思議な魔力を秘めているかの様に、内に光を放つ様に澄んでいる。

特徴的なのは、耳は長く先が尖っていること――それは、昔読んだ絵本のエルフの挿絵にそっくりだったので、おそらくエルフの一族であるのだろう。顔立ちは端整で男とは思えない程綺麗だ。

どこの何者かは全くわからない。顔を見た事がない。

但し、この者に対して気に入らない事ある。たったひとつだけ――。

……気に入らない。この私を……、

――――“お嬢ちゃん”――――

と、そう呼んだ事……。ただ、それだけのこと。

そう――。

少女が最初に気に入らないと思ったのは、
男が自分を子供扱いしたという事から始まったという――。

つづく。

【第一章】強敵現わる――!?†　ep. 0　初対面†（後書き）

プロローグの次の場面でした。
プロローグは男目線だったので、男はその後の状況整理。
一方、少女はプロローグに至る前の原因を振り返ります。
それから、目の前の男に敵意を抱き始めるきっかけとなったのは何かという回でした。次からは、その敵意を抱いてからの話が進んでいきます。

【第一章】†ｅｐ．１　少女の敵意†

――男――

先程からずっと辛そうに激しい呼吸を繰り返していた少女が、その場からなんとかして身を起こし始めた――。

そして床に座り込んだまま睨む様な視線をこちらに向けている。

――あの記憶に焼きついている澄んだ翡翠の様な緑石色の髪と瞳は同じ色をしていた。綺麗に澄み――、それは吸い込まれそうになる様な鋭い光をその奥に携えて、明らかに敵意を抱く表情を見せている。

しかし、自分に向けられるその顔の造形は、まだあどけない少女のものではあるものの美しく、また凛とした強ささえも感じる様な気品も兼ね備え、端整に整っている。

薔薇そのもののように、誇り高さや高貴さをも感じさせた視線は、その“棘”を突き刺す様に拒絶の意志を訴えているというのだろうか――…。

つい吸い込まれるように少女の視線から目を離せなくなっていた自分に、はっと気が付いた時、少女も何かを思い出したかのように時計を確認したかと思うと、驚いて目を見開いた。

かと思うと、痛む足を床に触れない様に慎重に立ち上がろうとしている。

「お、おい無理はするな、そんな足じゃまともに歩けまい――」

と、声をかけているのを見向きもせずに口を閉ざし立ち上がった少女に、男は途中で口を噤み、少女の様子を少し見守ることにした。

痛めた右足をかばうように、一歩ずつゆっくりと歩みを進めていく少女――。

腕組みをして呆れながら見守っていた男は、その後姿を見ながら考えていた。

――床に身体を打ちつけられながらも何とかかばい、助けてやったというのに…礼の言葉も心配する言葉に対する返事さえも、全く口を開こうとせず――ひたすら何か急いでいる……？

仕方がないか――とは言っても、やはり何か一言文句のひとつでも。

…いや、それは少々大人げないか…？　いやしかし…。

と、悩んだ挙句、結局一言男が口を開こうとしたその時だった。

「わ……っぁあああっ――」という少女の声とともに、倒れる音――。

呆然と立ち尽くしていた男が分析する限り、痛む足をかばいながら一歩一歩歩みを進めるのでは、少しでも地に足をつけなければならず痛むので、ならば今度は左足だけでぴょんぴょんと飛び跳ねながら――と、少女は考えた様だった。

しかし通常なら、交互に足を踏み出す際にかかる負荷は均等だが、片足にだけかけられ続けたそれは、左足に悲鳴をあげさせたとおおよそそんな所だろう。

…あ～ぁ、言わんこっちゃない。派手に転んだな…

呆れてそれを見ていたが仕方がないので少女の目の前に行き、顔を覗き込むようにしてしゃがみ込み、手を差し伸べる。

「！」

少女の苦痛に歪ませる顔は恥ずかしいものを見られてしまったと言わんばかりに、男をきっと睨み上げていた。

その端整で美しい顔立ちは相変わらずだったが、その表情には怒りと恥ずかしさが同居し、顔を紅潮させている――。

差し出された手は借りず何とか自分で起き上がったものの、その瞳は男をより強く睨み続けていた。

「…俺のせいじゃない。睨まれる謂れはない筈だぞ」

少女の謂れのない敵意に、少し困り果てた様にため息混じりで、男はこう続けた。

「……まぁいい。それより、さっきから急いでいるみたいだが、そ

んな足じゃ歩けまい？」
　少女が先程まで黙って睨み続けていたのを停止し、慌てて立ち上がろうとするのを引き止めるまでもなく、足の痛みで顔を歪ませてその場にしゃがみ込む。
　呆れてため息を吐きながら、男は少女がやはりこちらを睨むのも気にせず言った。
「――仕方ない奴だな…。最後まで聞け――…どうせそんな足じゃまともに歩けないだろう？　どこかに急ぐなら連れてってやるぞって言おうとしたんだよ、俺は」
　その後、すぐに「よし」と男は立ち上がると、少女の返事も聞かずにひょいっと持ち上げた。もちろん、少女は慌てて抵抗し「降ろせっ」と言ったが、男が「ではどうやってそこまで行くつもりなのか」と聞くと、言い返せない様子で不機嫌そうにおとなしくなった。
　しかしこれ以上、謂れもなく睨まれ続けるのは避けたいので、男はあまり少女を刺激しないように気をつけることにした。
　聞いても行き先を言わない少女を連れたまま、男は歩みを進め出した。
「あっ…、おっ、おい――、こらっ！」
　少女が先程進もうとしていた先には、左側に二つしかドアが存在していない。
　行き止まりになった廊下の先を見て男は、そのどちらかのドアが少女の行き先である事は明確だろうな――と、考えたのだった。
　――で、どっちだ？
　男は、二つのドアの中間地点まで歩みを進めてから少女に尋ねた――。
　どうやら、しばらく苦悶の表情を浮かべながら少女は何かを考えている様子であったが、不機嫌そうに前を向いたかと思うと右のドアを指を差し示したので、男はその先に足を進める事にした。
　少女は、親切にされているにも関わらず、敵に手は借りたくないとそう思っているのだろうか――。しかし、その敵意の休戦を余儀

なくさせる何か、とにかく急がねばならないその“何か”のため、仕方はないものの敵の手を借りる事にした――という事だろうか。

その判断は少女にとってはおそらく不本意なもの――。

それは後姿しか確認出来ずとも、不機嫌そうな表情が目に浮かぶ様で、男はやれやれとため息を吐いていた――。

少女が指し示したのは、左奥から二番目のドア――。

そこを進むと、さらに少し先に真正面にドアが見える以外何もない通路が広がっている。

しかし近づいていくと通路は右へとさらに続いており、ドアが二つ見えた。

男は両手が塞がっていたので、先程も行ったドアの前で少女がドアノブに届くようにするための、その場に少しかがむ動作をした。

少女がドアノブを回し、部屋のドアが開かれると、白を基調とした世界がそこに姿を現わした。部屋は、とても一人の部屋として与えられるものとは思えぬ程広く、部屋自体、とても清掃が行き届いており、綺麗に整頓されている様子だ。タンスや机、天蓋付のベッド、本棚等は、ほとんどが白で、時折黒や赤が上手く取り入れられて調和している。そしてそれらは、カスタード地に太陽の日差しが当たった様な落ち着いた地に魔法文字と幾何学模様がデザイン的に黒字で描かれた壁により、うまく引き立てられていた。

視点に止まった中央のテーブル・ソファー周り――――。

その床には、おそらく動物の毛を着色したものであろう薄いピンク色のファーで出来た大きなラグが敷かれている。その淡い色の存在は、白、黒、赤という強いまとまりの輪の中に唯一溶け込めず、異彩を放っていた。

少女の様子はというと、部屋に連れて来るなり何かを確認する様に部屋を見回している。

男も部屋中を見回してみたが、男が見る限りこの部屋の隅々にこ

れと言って、何かを感じさせるような異変は特に見当たらない――。
その事は少女にもすぐにわかったのか、安堵するように小さく息を漏らしていた。
少女の気が済んだ様なので、あの目の止まったピンクのラグが敷いてある部屋の中央に歩みを進め、少女をソファの上に降ろす。
そしてその場にしゃがみ込み、男は少女の右足に手を伸ばす。
「なっ、何をっ…」
足を咄嗟に退こうとする少女が、すぐに苦痛の声を漏らす。その後、少女がこちらを睨んでいるのがわかったが、靴下に手をかけながら男は言った。
「動くと痛いだけだぞ…わかったらおとなしくしていてください。お姫様」
「う……」
部屋に着いた瞬間、男はこの城の王女である事を確信していた。
少しだけ言葉遣いを丁寧に変えたが、今更だとも思っていた。実際、それは少女にとっては不愉快そうだった。しかし、ぷいっとそっぽを向いたかと思うと黙っていた。
男は靴下を脱がせた後、足に触れたりじっくりよく見たりして何やら頷いていた。
それを不安そうに見ていた少女にとって、突然のことだった――。
「今からちょっと足動かすから、痛むかどうか教えてくれ」
少女が嫌がる間もなく足首に手を添えた男は、少女の足を少し捻る様に動かした。
「…！」
痛むかどうか言わずとも、少女の反応は明らかに痛みを示す物だった。
少女は目の端に涙を浮かべながらソファーにもたれ掛かっている。
「…なるほどね。軽くひねって捻挫してるな」
そう呟くと男は鞄から、ゴソゴソと瓶や袋を何種類か取り出して薬を調合する作業の準備に取り掛かることにした――。

――――…

――少女――

男が鞄から何やら色んな物を出しながら微笑んだ後、さらにすり鉢とすり棒を取り出して、それらをゴリゴリとすり始め、手馴れた手つきで行われる作業を薄目で見た少女は、初めて見る物に注ぐような視線でそれを観察し始めていた。

「――なんだってそんなに急いでいた？」

「！」

突然再び話しかけられたので、少女は少しびくっとしてから慌てた様子でぷいっとそっぽを向いた。

質問には答えずに黙っていたので不思議に思ったのか、こちらに視線を向けて来た男は、呆れたように困った笑みを浮かべ、またその作業を再開し始めた様だった。

「…そんなに痛かったか？悪かったよ、――そう怒るな」

少女は、男が作業に真剣に続け始めた頃を見計らって、こっそりその様子を見ながら考え始める。それは目の前の敵の実態調査だ。

…あの時は、息切れして『無礼者』と言えなかったが、敬語も使わない。しかも何かすっごく偉そうだし…。おまけに子供だと思って私のことを『お嬢ちゃん』なんて言って来た。

――第一っっ！！　私は頼んでもいないというのにっ……――

……。

頼んで…いないと……言うのに――…

少女は、そこまで腹の立つポイントを並べかけて、途中で思考を停止した――。

改めて状況を思い起こすと、非があるのは自分であり――この男は被害者だ。

それなのに、文句の一つも言わずに、自分を心配し、無理やりとはいえ部屋に運び、おまけに手当てまでしてくれている。

…べ…別に、悪い者というわけでは――――……

!?　あ――いや、……前言撤回っ…。
だからといって、子ども扱いされていることには変わりない…っ。
――って、…大体、この者は何歳なのだ…？
せいぜい４つ位しか変わらない位であろう？
しかし、なんか偉そうなヤツ……っ…
医者…の様に作業は手馴れているが１７やそこらで医者とも思えないと、分析を進める少女はついに結論を出した。

……全くわからん。

はっきり言って、全然何者かどうかなんてわかる筈もなかった。
ただ――と少女は付け加えた。
ひとつ言えるのは――なんとなく。

只者ではない気がするのは、気のせいなんだろうか……。

「――出来た。ちょっと冷たいぞ」
少女は少しびくっとして、敵の実態調査の考察を停止させた。
考察に夢中で気がつかなかったが、男は既に作業を終えていた――。

そして何やら薄いガーゼの様な布に、先程の薬が塗られている物を手に取っていた。
「！」
少女の足首にひんやりと冷たい感触をもたらすその何かを男が貼った瞬感、少女は確かに冷たいとは思ったものの、熱を帯びた患部に貼られたそれは熱と痛みを心地よく取り去り、スーっとした清涼感とともに効いていく気がした。
少しきつく目を閉じていた少女の様子に、男は少し微笑んで包帯を鞄から取り出して巻いていく。
「こうやって包帯を巻いて５時間おとなしくしててくれれば治るか

ら大丈夫」
そう言って微笑んだ男は、道具を片付け始めている。
少女は、礼は言わなくてはならないとは思っていたのだが、つい口を噤みそっぽを向き横目でちらっと男の方を何回か見ていた。
片付けが終わった男に、照れくさそうにそっぽを向いたままで“一応”という言葉のついた礼を少女はなんとか口にした。
余計な一言が混じりつつも、一応感謝はされている礼の言葉を言われて、男は困った様に微笑んでため息を吐いた後、少し冷めた目を少女に向け憎まれ口を叩いて来た。
「一応……ねぇ…？」
その独り言の様に呟かれた一言に、少女がかっとなって何か言い返そうとした時だった――。
コンコンというノックの音――――。
音とともに男はドアの方へ向いたが、少女はすぐ返事を出来なかった。
男が不審に思ったのか、振り返って来るのが視界に入り、それにせかされる様にじっとそのドアを見つめた後、一度息を吸い、吐き出して気を落ち着かせていると、再び、来訪者によるノックの音が聞こえた。
そして、覚悟を決めて少女は口を開いた――。
……。
つづく。

【第一章】†ｅｐ．１　少女の敵意†（後書き）

男は少女が謂れのない敵意を抱いていると思っています。
良く考えてみればこの男は被害者ですね。それに気づいても、やはり少女は前エピソードでの事が許せないみたいです。それに、男は悪い者ではないと思う少女ですが、何者なのかはわからないので警戒もしているという回です。
突然の来訪者が誰なのか…焦っていた理由とは…は次回。

【第一章】†ｅｐ．２　それぞれの理由†

「どっ、どうぞっ…」

少女の返事とともにゆっくりと開かれたドアから姿を見せたその人物は、地位のある者である事を認識させる小さな称号バッチを胸につけ、枯れ葉の様に茶色いローブを身に纏った老人――、この人物の名は『レイモンド』といった。

白い髪の毛に白い眉と同様に白く長く伸びたりっぱな髭を撫で、鋭く厳しい目つきで既にターゲットである少女を捕らえていた。

エンブレミア王国宰相大臣であるレイモンドは、様々な国の抱えてきた問題の策を練ることにかけては右に出る者はいないといわれており、国王エリックはもとより先代の代より、レイモンドが若き頃より何度もエンブレミア王国の危機を救ってきた影なる英雄であるともいわれている。身は老いてもその才は衰える事を知らず、現在でも絶対的な信頼を得ている宰相である。

また、心理戦ではこの者に勝てる者はいないだろう――。

“エンブレミアの白き虎眼（こがん）”とも恐れられるその目つきで沈黙を保たれれば、相手の精神は多分長くは持たないだろう。

少女も困った様に笑顔を作り、焦っている様に見えた。

「…ほぉ、ちゃーんと約束通り９時には部屋に居られたようですな、姫様――」

“姫様”と呼ばれた目の前の少女が、困ったように笑顔を作りレイモンドに向けている。

男は何かを察した様子の後、笑いをこらえ始めていたのを少女は見逃さなかった。

意味ありげに少女に目を向けた後、すぐにレイモンドの方に向き直った。

それを少女が不穏に思わないはずもない。

…こ、こいつ…何を言うつもりなのだ…！？

「――恐れながらレイモンド様」

レイモンドの名を口にした時点で、そもそもおかしいと気付くべきだっただろう。

だがこの時の少女は、何が起きているのか理解も出来ず、男の様子を見守るしかなかった。レイモンドに頭を垂れているその男の後姿に、食い入るような視線を注いでいた少女の脳裏では、様々な考えが浮上して来ていた。

その中で恐れている事はひとつだけ――。

それだけが怖れと焦りの根源であり、それ以外は何も考えていなかった。

焦っていても作り笑顔は崩せないといった少女を他所にして、レイモンドは事もあろうか男に微笑みかけこう言った。

「おや、“リュシファー殿”もご一緒でしたか。いやいや、何ゆえ、そのように床におられるのです。・・・そんな床になどにお座りにならずに、どうぞこちらへ――」

「！」

少女は二人の様子にさらに困惑していた。

今日、自分が初めて顔を知ったこの謎の男はどうやら“リュシファー”と言うらしい。

宰相大臣であるレイモンドが知っているということは、この者は何か重要な役目を担う用があったためにこの城に来ていたのだろうか――。

様々な考えが、少女を窮地に追い込んでいく。が、実際のところ、男が『リュシファー』という名前であるという事くらいしか明確な理由などわかる筈もなかった。

少女は、焦る気持ちを抑え、しばし二人の様子を見守ることにした。

レイモンドは、「ささ、どうぞどうぞ」とリュシファーと呼ばれたこの男をソファーの方へ促した。
途中、少女の方をレイモンドは厳しい目で一瞬睨みつけた。
まるで虎が牙を剥き出しにし、いつでも襲いかかれるようその姿を茂みの陰に隠しているかの様なレイモンドの厳しい目つきには、さすがの少女もさっと目を逸らしている。
少女にはその真意は聞かなくとも、わかっていた――。
――また、それは確信に繋がった。
そのリュシファーの隣に腰掛けたレイモンドは、世間話でもする様に口を開いた。
「…どうやら姫様が礼儀も何もない様子で…申し訳のうございますじゃ」
やはり予想通りであった事に、少女は少し困った様に苦笑をしていると今度はリュシファーが口を開いた。
「――あ、いえいえ。姫様が少し足をお痛めになられた様ですので、先程診て差し上げておりましただけですから…お気遣い、感謝致します」
申し訳なさそうに謝っていたレイモンドが、少し驚いて少女の足に目を配る。
「なんと！　これはこれは、さすがはリュシファー殿。…で、姫様はその、大丈夫なのですかな…？」
と、リュシファーとレイモンドが、軽い捻挫なので大事には至らない事などを会話している――。
会話する二人のその様子に、少女にはある不安が過ぎっていた。
リュシファーという名前だけで何者かはわからないがレイモンドと会話しているこの男は、時折少女に何か意味ありげな意地悪そうな視線を送って来ていたのである。
それが何を意味するというのか――。

怪我についての話を、爺が事細かに聞いているこの話の流れだけでも、身の危険を感じているというのに・・・。

その視線が余計に少女の精神を追い詰めていた。

冷静に考えてみれば――…

この状況下において少女は、このリュシファーという男に弱みを握られているのは一目瞭然であった。

リュシファーは少女が、

“９時に部屋にいなかった事――…”

“何故、いなければならなかったか――…”

“時間通りにいなかったらどうなっていたか――…”

という事を、たった数分で全て理解しているだろう。

……まずい……

そこで、少女の脳裏をかすめるのは、

ただ１つ――。

“――反撃するつもりに違いない…！”という事だった。

“敵に背中は向けてはならない”

とはよく言ったものだ――と、少女は思っていた……。

既に少女は目の前の敵には背中を見せ、いつ斬られてもおかしくはない状況だがそれを引き伸ばしあざ笑うかの様に、リュシファーは楽しんでいる。

――そう。

たった一言言われてしまえば、全て“終わり”……。

額からは嫌な汗がにじみ出ている様な気がした。

その少女の顔からは自然と先程まで取り繕われていた笑顔が、すでにその姿を消していた――。

この――絶体絶命のピンチに立たされている少女――。
その名を“レティシア”という。
（正式名称は、レティシア＝ミールティア・オーグロンド・リーディア・マールシェスタ・オブ・エンブレミアと続くが常用はしない）

レティシアは、――エンブレミア王国国王エリックと王妃リーディアの間に生まれた第一王女で、歳は１３歳。
容姿は王女そのものといった感じの美しく可愛らしい少女だが、ちょっとばかばかり難があり、城中の者の手を焼かせている問題児で、一国の王女として生まれたにも拘らず、王女らしい振舞いをせず、その口調は男兄弟しかいなかったためか、上にいる第一王子エルト、双子ではあるが兄である第二王子ミグという兄たちが話す言葉使いをそのまま真似し、周りが注意して直そうとするも虚しく、身に染み付いてしまい現在に至る――。
更に性格は素直さにかけ、勝気でプライドが高く負けず嫌いといった誇り高さを感じさせるその性格だけは、唯一王女らしいといえば王女らしいものといえるだろうか。
特に、“自分の事を子ども扱いする”という事は、レティシアにとって最も嫌いな事だった。双子という立場でさえも一番下。ミグ王子とは同年代だというのに、レティシアの方が子供扱いされる事も多かった事が原因だった。

勉強は真面目に取り組まず、教育係が諦めて辞める者さえ何人かいた程で、おまけにこっそり城を抜け出す事もあるという――これ以上、問題を挙げれば切りはない。
そこで国王エリックは、幼い頃より問題児であるレティシアを厳しく躾けるべく、自分の側近で宰相でもあるレイモンドに、『姫の目付け役としても活躍してはくれまいか――』と話を持ちかけたのだった。

威厳を持っているレイモンドならば、レティシアも言う事を聞くだろうと考えた。

そうして、このレイモンドの存在は脅威的に、周りから“エンブレミアの白き虎眼”と恐れられながらも、その傍らでレティシアからも“目付け役”としても恐れられる存在となった事は言うまでもない。

レイモンドは何かあればその事を逐一、国王であり父上でもあるエリックに報告していたため、ついに昨晩。夕食が済み、部屋に戻ろうとしていた時――。

「――待て。レティシア」

威厳ある声が、レティシアを呼び止めた。それは、国王であり父上でもあるエリックの声だった。

そして、日頃の行いについてお説教が始まり、こう言ったのである。

『明朝、朝食後午前9時。もしお前が部屋にいなければ、一ヶ月！…いや、私が良いと言うまでお前に監視を付けさせ、行動を全て報告させる！

よいな！　レティシアッ！』

国王エリックの妻、穏やかな性格の王妃でありレティシアの母上でもあるリーディアが、おろおろとして自分をかばう様にエリックを止めていた。

だが、それでもエリックは激しくレティシアを怒鳴りつけ続け、ふてくされて部屋に戻ったレティシアの元へリーディアが来て、どうやら、今回ばかりは父エリックは本気で激怒している様子だと聞かされた…という理由で、レティシアは現在リュシファーに窮地に立たされていた。

今日という今日だけでも、部屋に9時にいなければ監禁の様な生

活を強いられ、トイレに行くにも、屋上に行くにも、全て監視付き生活の中――城下に出るなど論外である。

――…何としても、この流れを回避しなくてはならない…！

窮地を脱すべくして、レティシアは閉ざしていた口を開いた。

「――じ、爺っ。この者は忙しいんじゃないのか？　お引き止めしても悪いし、その…っ」

明らかに焦っている様子を見て、レティシアが“爺”と呼ぶレイモンドとリュシファーは目を見合わせている。

リュシファーはふっと微笑んだ気がした。もちろん、その目は意地悪く意味ありげだ。レティシアは、レイモンドの目を盗んでその自分に向けられた視線に懇願の眼差しを送ってみるのだが、困った様に笑顔を作り変えたリュシファーは、次に、とんでもない言葉を口にした。

「おや、レティシア様。お気には及びませんので、ご安心を。大事な用があって参ったので…。早めにお目にかかれてご光栄でしたよ。ねぇ？レイモンド様？」

「…えっ――…っ？」

男の言葉に、レティシアは耳を疑った――。

――は、早めに…？　お目に…かかれて？　ごっ…光…栄……！？

何かあるとは思っていたものの、その予想を遥かに上回る理由が存在する事に、レティシアは驚愕の色を隠せずにいた――。胸を騒がせる何かが渦巻くこの状況に、レティシアは痛恨の精神ダメージを受け、軽く放心状態になりかけていた。

その時――。

「おぉ、そうであった。姫――――！」

思い出したかのように、声を少し荒げたレイモンドが自分を見て次に言った言葉で、レティシアは少しの間動けなくなるほどの衝撃

を受けることとなる――。
そのレイモンドの言葉を聞いた時のレティシアの脳裏では、こう思考が浮かんでいた。
頭が真っ白になるというのは――――――――――。
――――――こういうことであったのだろうか……。
……えと…
…嘘――――――――――……
…だよね――――？
――――――……

レイモンドはレティシアにこう言ったのだ――。
「姫っ！　こちら、今日から姫様の教育係兼お目付け役を引き受けて下さったリュシファー殿ですじゃ。あの難関であるエルフィード王立学院を若くしてストレートに首席で卒業――。頭脳明晰、礼儀正しく、おまけに医学の心得も取得しており…陛下自らが候補の中から選抜された――、何とも、優れた者ですぞ！　リュシファー殿はエルフの一族の生まれでですなぁ、いやぁ、エルフと言うのは素晴らしく博学で魔法にも長けており、わが陛下が仰る様に、いい加減に女だてらに剣などと危ないものを振り回さず、これを機にっ！　魔法の習得に励み、今度こそ、今度こそ…！　一国の姫たる意識をきちんと持っていただきですなぁ――…」
――恐らくレティシアは、レイモンドの小言部分はもう半分も聞いていなかっただろう。自分の耳を疑いながら驚愕の表情のまま、レティシアは目の前のリュシファーの方をゆっくりと見た。
面白いものを見させて貰ったと言わんばかりに、リュシファーは平静を保ちながらも笑いをこらえている様子だ。
――エルフの一族であるのは見た目でわかっていたが、エルフィード王立学院といえば超難関で有名で、１年から４年までであり４年まで行けなくても超優秀と見なされるあの学院を、ストレートに首席で卒業…

これは父上も、一筋縄では行かない頭の切れる教育係を連れて来たな――…と、レティシアは思った。

そして、父エリックの「どうだっ」と言わんばかりのニヤけ顔までもが今にも目に浮かぶようなその経歴に、『どこから見つけて来たんだ』と、深いため息を吐いた。

しかも、相手には既に弱みさえ握られている――。

人生の終わりがすぐそこまで告げに来られているような気持ちになりながらレティシアは引きつっていた。

“聞き間違いであって欲しい――。これは悪夢か何かだ――。”

その言葉から始まった思考は、進んでいく――…。

こ、こんな…無礼な男が、教育係なわけないじゃないか…

そうだ。聞き間違えだ――はは…ははは……

「…えと、爺。――今、なん…て言ってたんだっけ？」

かろうじて、現実逃避まで始めていたレティシアが発した第一声が、それだった。

しばし間の抜けたような空気が漂い、二人があっけにとられている。

そのうち、レイモンドがわなわなと震え出して、白き虎がついにその牙を剥いたかの様なその怒りを爆発させた。

「姫っ！　何を寝ぼけた事をおっしゃっておられるのですっ。ですから先ほどから姫の新しい教育係兼目付け役として、任命されたリュシファー殿じゃ！　と言っておるのです！　聞いていなかったなどとふざけた事を仰られるなどと、大体、姫は一国の王女としての自覚がないのじゃ…！！　この爺、姫様のお目付け役を陛下から仰せ遣って苦節7年という年月が経っているにも拘らず――――…」

レティシアが下を俯きながらその剣幕に耐えて聞いていると、次第に牙を剥いた様な白き虎の様な声を荒げた口調は、物思いにふけるように変わり始めた――――。

「――…まだ、姫様が可愛い可愛い…子供の頃よりずっと手を焼かされ続け、やっと、やっと…！　姫の目付け役をリュシファー殿に引き受けていただいて、解放されるというのに……っ！　…その様なことではこの爺は、まだまだ大目付け役として姫が何か問題があればですな？　結局、面倒をかけさせられるのじゃっ…いつまでたっても、この爺の体の休まる日はありませんのですぞっ…！　一体、いつになったら姫は、この爺に楽をさせていただけるのですか…っ…　うぅっ……」

――レイモンドが感極まって嘆き出すというのは、ここ数年時々あることだった。話は長いのは相変わらずだが、レティシアへの怒りよりもそのせいで苦労してきたという自分の人生の方を物悲しく語ってしまうのは、歳を取っていくと、時折誰でも悲観的に感傷に浸ってしまうことも増えるのだということなのだろうか。

エンブレミア王国の白き虎眼と呼ばれた男もその点は、老いたということの様だ。

そしてその様子に、今度はレティシアとリュシファーの二人が、顔を見合わせ、あっけにとられたのか苦笑いを浮かべている。

「わ…悪かったよ……爺っ。ちゃ、ちゃんと聞いていた。…そう嘆くな…はは……」

“――現実はそう甘くなかった……”とレティシアが落胆しながら爺をなだめているその時、リュシファーがソファーから立ち上がった――。

次に再びちらっと嘆いている爺が気付かないのをいい事に、面白がっている様な嫌な笑みをレティシアに一度向けたかと思うと、口を開く。

「…そろそろ、ご挨拶させて頂きますが――。よろしいでしょうか…？　レティシア王女様、ただいまご紹介に預かりました通り、エルフィードより参りました。リュシファーです。以後、お見知りおきを。お噂は、かねがね聞き及んでおりますが、この度、教育係兼目付け役を仰せ付かった以上、厳しく――。そして、しっかりと務

めさせて頂きますから、きちんとこれから真面目に勉強してくださいね」

リュシファーが先ほど自分に話しかけていた口調ではなく、しっかりと敬語でそう言って来た事が、なんだか悔しかった。

しかも“厳しく”という部分が妙に力が入っていたので、レティシアは心に少しダメージを受けた――。

父エリックだけではなく、敵にも勝ち誇られている――と、下唇を少し噛んだ。

ただレティシアは、ここで憎まれ口を返したり気に入らないとか騒ぐわけにはいかなかった。

「…よ、よろしく……」

そうして、落胆と屈辱の色を隠せないといったレティシアはなんとか言葉を発したが、その作り笑顔は引きつっていた。

その後、レイモンドがちゃんと挨拶も仰れないのですかとか騒いでいたが…、レティシアにはどうでもよかった。

レティシアはこれが精一杯の抵抗といった感じで――、手も足も出ない――高い壁の前に成す術もなく立たされ、屈辱の眼差しでその頂を見上げている様な…そんな気分だったのであった――。

何故なら、もう――――。

いつものように逃げることも出来ないという事には気づいていた――――。

それに――。

この者には、

“切り札”があるのだから――――……

【第一章】†ｅｐ．２　それぞれの理由†（後書き）

レティシアは何故焦っていたのか。
リュシファー何故城をうろうろしていて、何者だったのか…。二つの謎を語る回でした。

ちなみに、レイモンドが話が長いのは仕様です。
すみません…。

【第一章】†ｅｐ．３　１０時０１分†

――――。

「では姫様。１０時よりさっそく勉強を開始致しますから、後ほど参りますね」

爺とともに去っていったリュシファーの微笑みは、言葉さえ丁寧なものの――…

“――逆らうわけないよなぁ？お嬢ちゃん。一応、ちゃんとおとなしく勉強さえしてくれれば、こっちも『切り札』は使わないでとっておいてやるから安心しろ。”

と、そう勝ち誇っている様に思えた。

そしてレティシアは、その高い壁の前に成す術を持っていなかった。

ずっと自分に向けられていたあの意地悪い微笑み――。

その理由も、切り札をかざされていたにすぎないという事を理解した。

一瞬、その事に気付かなければ別に恐れる必要はないとも思ったが…。

どう考えても天才的に頭のいいリュシファーが、気付かないという事はあり得ない事であることに、レティシアは落胆していた。

『現実はそう甘くない』

と、ついさっき思い知ったばかりであった。

そもそも、なんでエルフが教育係なんか引き受けたのだっ？

わからん……。ん？　…待てよ？あいつの弱味を逆に見つけれ

ば……！

――――駄目だ。

…頭脳明晰。魔法に長け、若くしてエルフィード王立学院を首席で卒業――。

おまけに医学の心得もあり。あの者を絶対信頼している父上たちの評価を思えば、私の意見など勉強を嫌がって言っている戯言と思われるのがオチか……。

色々考えては見たが何も浮かばず、弱味を握ったとしても切り札の効力は絶大で、そもそもあの者に弱味など存在するのかさえ、期待するのも馬鹿らしくなりソファーに横になった。

「はぁ……」

いつも見慣れてる天井。今日は何故か自分に重圧をかける様に低く感じられる。

「――エルフィードから来た……リュシファー…かぁ～…」

そうレティシアが呟いてリュシファーの勝ち誇った顔を思い浮かべ、次第に苛々としてソファーでじたばたとした後、ため息を吐いてレティシアは目を閉じた。

――ところで。

“エルフィード”というのは『エルフィード王立学院』の名前であるが、リュシファーがいっていた“エルフィード”というのとでは、意味が少し違っている――。

リュシファーのいうエルフィードとは、“エルフの街名”のことを指していた。

――ちなみに。エルフィード王立学院は、そのエルフの街エルフィードに存在しているというわけではない。

それでは、何故『エルフィード王立学院』などという名前であるのか――。

エルフは博学でとても頭が切れるというのは誰もが知っている。

学院の創立者でもある初代校長は、学院の目指すところとして―

―、“エルフのような博学な知識を身につけ、学び、そして生かしていって欲しい”という精神を校訓に示し、エルフの街名を学校名に起用したのであった――。

したがって、エルフの街“エルフィード”という街は、今や世界中で一番のレベルを誇るとして有名なあの学院の名前にもなった街の事なのである――。

そして――新しい教育係兼目付け役として任命されたリュシファーという男は、ましてやその出身だということ――。

事もあろうか“エルフのような”――じゃなくて、“本物のエルフ”――なのである。

父上にも頭が下がるなぁ……はぁ…。

「あ～ぁ～…」

――――……

“エルフの森から外へ出るエルフはほとんどいない。

エルフの街にたどり着ける者もほとんどいない。

それでも時々、世界のどこかにいて、今も誰かが出逢っているかもしれない。

ほら、あなたのすぐそばにも――――…”

これは――。

昔読んだ絵本――…。

大好きだった絵本の最終文だ――――。

小さい頃に森でエルフと遊んだことがある主人公が、もう一度会いたくてその森に探しにいくけど、なかなか会えないで探し続ける。

でも結局会えない。

――でも、そう思ってるのは主人公だけで気付いてないが、エルフは、森で迷ってしまった主人公のために、主人公と一緒に昔作っ

た花飾りに使った花である“月夜草”という花を、森の出口までこっそりと道に続かせて落としてあげる。
姿を見せないまま――。
結局、エルフに再会することは出来なかったけど、夜になるとキラキラと輝く月夜草のおかげで森から出られたっていうお話。主人公はエルフには会えなかったと思い、さっきの最終文でしめくくっている。・・・とかいう内容だった気がする。

それは、幼い頃に城に来訪した吟遊詩人の者に貰った、大切な絵本だった――。
起き上がって本棚を探してみるが、ほこりをかぶったその本棚には見る限り、見当たらなかった。少し考えてみたがその本の行方は思い出せず、レティシアはまたソファに横になる。
――どうしてなくした物って忘れた頃に出てくるんだろう。その時に欲しいのに…。
と、物哀しげにレティシアは天井を見上げていた。
エルフは外に出ないとか見つからないとか言ってるけど、城に今いるんだよなぁ…それも厄介なのが…。

ぼーっとしていると――、変なことばかり思い出すものである。

――――…
――――城下へ出た時の事…。
自分より小さな子供がお姫様ごっこをしていた。
「あたちがお姫さま～」「あたし～」「昨日もお姫様だったじゃないっ」「いいのーっっ」「じゃああたし女王さまー」「えーずるい」「あははは」――…お姫様役を取り合う口げんか。
それを横目に、お姫様なんてちっともいいものじゃないのにって思った。
自由はないし、外で友達を気軽に作って、そんな風に楽しく遊ぶ

事の方が羨ましいのになぁと、そう思いながら子供達を眺めていた事も思い出した。

“何故――私は、王女なんかに生まれたんだろう…？”

自分が成長する度に、一つ、また一つと――、そんな風に思わされる柵が増えていっていて、自由に憧れる気持ちが強くなっていた。

今回の事もそうである――。

きっとみっちり勉強させられて、またひとつ窮屈になっていくという事で落胆していた。

やはり城は――“煌びやかな牢獄”だな――――――…。

……これは、レティシアが書いた自由作文のタイトルだ。

何を書いていいかわからなかったレティシアに、教育係が『自由に書いていいんですよ』と言ったので、自分の思う通りに書き上げたそれは、自由に憧れていたレティシアからの目線で上手くまとめてられており、一国の王女として決して好ましい作文ではなかったが、レティシアにとっては無理もないことなのだろう――。教育係は、そう思い、『上手く書けているし発想も面白いじゃないですか？』と、褒めてしまった。

しかし、それが国王エリックの耳に入り、その教育係に解雇を命じた。その話は、解雇された教育係の代わりに臨時で翌日に来た、レイモンドにより聞かされたのだった。

――“自由のない城の生活”を牢獄に例えたこの言葉は、時折レティシアの頭に浮かぶ言葉だった。再びレティシアが大きなため息を吐いた、ちょうどその時――。

突然、ドアがノックも無しにガチャッと開く――。

「よっレティ。新しい教育係、どうだったんだ？」
慣れなれしい調子で明るく声をかけながら、レティシアのベッドに座り込む少年――。
レティシアと同じ翡翠の様な緑石色の髪と瞳で、顔立ちは瓜二つである。違うといえば、髪が肩につくかつかないか位で、毛先が揃うことなくデザイン的にカットされた髪型くらいだろうか。――レティシアの双子の兄である、第二王子、『ミグ』だった。
レティシアにとって、同年代の唯一の友達の様な位置付けのミグの来訪は、いつもノックはない――。そんな風に入ってくるのはこの人物くらいだったので、レティシアは特に動揺もせずに、あぁ来たのかとしか思わなかった。
「おい・・・なんだよ、黙っちゃって。どういう感じだった？？」
まるで犬の様にしつこくなついて来るミグの調子に、レティシアは横になったままため息を吐くと、冷めたような目線をミグに向けてこう言った。
「…ていうか、ミグは知ってたのか…今日あの者が来るの」

「ぁ……あぁ、父上に口止めされててな。悪いな。『アレには内緒にしとけ。明日、優秀～な人材を呼んである。今度こそ、真面目に勉強して貰うため、私自らが厳選した素晴らしい者だ』って父上が言っててさ、黙ってた――。悪い悪い」
ミグが自分の顔の目の前で、手で“ごめん”のジェスチャーをする。
軽くそれは見たものの、相変わらず心ない者の様に天井を見上げて、レティシアの口からは言葉がゆっくりと吐き出るように紡ぎ出された。
「――ふぅん。優秀ねぇ～…。首席だかなんだか知らないけど、なぁ～んか……。
“強敵”ぃ…って感じかなぁ～……」

一瞬、間が空いて、しぃーんと静まり返ったので、レティシアがミグに不機嫌そうな視線を送る。

「ん？　なんだ？」

「あ――…ああ、いや・・・。お前が教育係褒めるなんて珍しいなぁ…と…」

きょとんとした表情で苦笑い。そんなミグの様子に、レティシアはふと思い返す。そして起き上がり、少し顔を赤らめながら頭を振り乱して訂正の言葉を吐き出していく。

「べ、別に褒めている訳じゃないじゃないぞ！　たっ、ただ――！　…その――、ちょっと……あって――――だな…――――…」

次第に声が弱まっていくレティシアに、ミグが“ちょっとの先が気になって仕方ない”といった興味津々の眼差しを向けている。

その眼差しにうんざりとしながらも、仕方なくレティシアは今朝の経緯を掻い摘んで話して聞かせることにした。

ため息交じりで聞かされた話に、ミグは既に腹を抱えて笑い出していた。レティシアはその様子を見て、言うんじゃなかったと後悔の念も感じつつ、冷めた目でミグを見る。

「あははは…っ、ひーお腹痛いっ…そりゃ、強敵だっ観念するしかないなっ。あはは」

「わ、笑い事じゃないっ。しっ、しかも！　性格が悪いんだ。私の前では敬語なんて使わぬくせに、爺の前だとちゃっかり“レティシア王女様”だとか“お目にかかれてご光栄”だなんて猫かぶっちゃってさぁっ、とにかく嫌なやつなんだっ！」

口調を真似て怒りをあらわにするレティシアの様子に、ミグは少し引きつる。

――こりゃ相当嫌ってんなぁ…大丈夫なのか？こんな調子で…。
と、ミグは内心教育係に同情した。とはいえ、ここで何か言っても焼け石に水とも思ったが、少しだけ教育係の肩を持ってやることにした。
「まぁまぁ、まだ若いって父上が言ってたし話せば話せるヤツかもしれないだろう」
レティシアはそれを聞くなり、憎き教育係が切り札を頭上に掲げて『はっはっは、お前はもはや奴隷だ～！』と脅し続ける構図が目に浮かぶことなどまでも並べ立て始めたので、少し呆れながらミグがため息混じりに答える。
「…それはさすがにないだろ。でもまぁ、そんなに性格悪そうなヤツのか？」
「な！　何故アイツの肩を持つっ。会えばミグもわかる。悪いなんてもんじゃな――――」
そこまで言いかけたところで、軽く咳払いが聞こえる。
次に、コンコンとドアを叩く音も響き、二人は一度顔を見合わせた――。
その視線の先を辿ると、ドアがわずかに開いている。
ミグは、自分が入ってきた時に閉め忘れていたことに気づき、唖然とする――。

本能的に、こういう時はごくりと息を飲んでしまうものだ――――。

「入ってもよろしいですか？？お二人さん」
「！」
その声の主を――レティシアは知っていた――――…。
はっとして時計を見たレティシアの顔が青ざめて行く――。

時刻は、
『１０時０１分』を回っていたのだった――――…。

つづく。

【第一章】†ｅｐ．３　１０時０１分†（後書き）

１０時に切り札を握ったリュシファーが来るまでに、レティシアが絶望的に落ち込んだりして憂鬱になっている様子と、普段から持っている不満を描きました。レティシアとミグの関係についても、基本的に何でも話せる感じの友達的だけど兄弟らしいところもありみたいな感じの回です。何だかんだでミグは、いつも少しだけ兄の様に友達の様にレティシアを気にかけてくれているんです。

【第一章】†ｅｐ．４　切り札を持つ者†

愕然とドアの方向に向き直ると、その声の主が扉をゆっくりと開け意味ありげに微笑みを浮かべながら、二人の返事も待たずにスタスタと入ってきて、無言で教科書やプリント類をテーブルに置く。その間わずか5秒位だったが、変な間を作る前にミグがその口を開いた――。

「ひょ……ひょっとして、…聞こえてまし…た？」

恐る恐る途切れさせながらミグが投げかけたその質問を、待っていたかの様にリュシファーは口元だけふっと緩ませた後、あくまでも表面上だけは笑顔でこう答えた。

「はい。まぁ……全部――――。ね……」

笑顔ではあるには変わりないというのに、ものすごい威圧感――。確実にそこに存在する“怒り”という含み――。そしてそれには、見た者を精神的に追い込んでいく何かの戦慄が渦巻いている。

この二人に関してはというと、姿を見せないその威圧感と恐怖の戦慄に、脅迫でもされているかのような怖れにも似た複雑な表情を浮かべている。

漫画だったら『ひぃぃぃぃぃ』と言う文字がバックに書かれているだろう――。

特にレティシアに至っては切り札の件があるため、世界の終わりの様な逃げ出したい気持ちになっている。レティシアは頭の中で迷走し、そしてその妄想は止まらない――。

――高い山の崖で、一度既にこの悪魔の様な教育係に蹴落とされそうになっているというのに、片手だけでそれを食い止めているレティシアに一歩一歩あざ笑うかの様に近づいてしゃがみ込み、レティシアの手の指を一本、一本……。悪魔の様に地から外して行く…。それも、勝ち誇った笑みを浮かべながら――…

…というとても恐ろしい地獄絵図の様な妄想が広がっていた。既に放心状態にあるレティシアを横目に、その緊張した空気に耐えられなかったのかミグは、口を開きベッドから立ち上がった。

「あ…わ、悪い悪い。俺、失礼するかな。勉強の邪魔だし、うん。そうだ。ははは…じゃ」

そう言って足早に去っていくミグの後姿に、レティシアは脳裏で『裏切り者』と『薄情者』の二つの烙印を押していた　――――。

カチコチカチコチ……

先程までは、まだミグがいてくれたから平気だったというもの、いなくなってからの室内の空気は、張り詰めていた――。

普段はあまり耳に聞こえる事もないだろう時計の秒針の時を刻む音――…

侍女が忙しそうに廊下を掃除する音、時折聞こえる隣のミグの部屋の物音――……

続く静寂の中で微かに聞こえる物音は、普段あまり気にしない音の数々である。

しばしの沈黙が、そこにぴりぴりとした空気を醸し出していた。

先の一件といい今回の事といい、怒らせたらまずい相手を怒らせているという事は、重々レティシアにもわかっていた。

先程、リュシファーがあの恐ろしい返事を述べてからというもの、急いでソファからきちんと身を起こし姿勢を整えた後は、ほとんど下を俯き、時折リュシファーをちらちらと怯えた様子で視線を向け

るという動作以外は、口を開けずに時間だけがすぎていた。
その緊迫した空気に自分も少し疲労したのか、リュシファーがはぁー・・・と深く息を一度吐いてから、その重い口を開き出した。

「で…、なんだったっけ？
“一ヶ月監禁の様な窮屈な生活を強いられる所だった”んでしたっけ？　ねぇ？　レティシア王女様…？」

ガーーーーーーーーーーーーン…
この時の衝撃は――
――とある国の催しに呼ばれ、兄上たちと観たお笑い劇の、ある笑いをとるシーン。
“金属製の大きなたらいが上から降ってきて、ガンと頭に直撃する”というシーンの精神版の衝撃だったと、レティシアは後に言う。
だが、コレはお芝居ではない――。
それでも今の自分のシーンを一人は確実に笑ってくれるだろうと思った。
――もちろん。それはミグのことだった。

レティシアの思う通り、自分が切り札を握っている事など既に承知――。
…しかも、完璧に怒っている。
さっきはミグがいたので普通に挨拶をして取り繕ったのはわかるが、レティシアに敬語を話す事自体がおかしい。勿論それは“わざと”に違いなかった――。
レティシアはリュシファーと目を合わせる事が出来ず、俯いたままだ。
その様子に、しばらく立ったままリュシファーは、レティシアを見下ろしていたが、ついに向かい側のソファに腰を掛けたかと思うと、偉そうに足を組んだ。

「…階段から落下した所を下敷きになってまで助けて貰ったあげく、おまけにここまで運
んで貰い？　手当てもして貰った。門限どおりに部屋にいなかった事もレイモンド様に告げ口されるかと焦っていたが、秘密にして貰ったおかげで監禁生活もなんとか免れたわけだ――――全部…“俺のおかげ”で――。な……」
　両手を片方ずつ裏返していって表現しながら、つぶやくように並べられたそれらは、レティシア目線でのリュシファーへの“借り”の数々。不敵に微笑むその姿は、悪魔の様にさえ思えたが、ちゃんと借りとして認識していることに、レティシアは罰が悪そうに困った様な面持ちで俯き続けている。
　呆れ返った様にそれを見ていたリュシファーは、怒られて後ろめたい事がある時の子供の様で、レティシアのその姿は少し可愛らしいものがあると思い微笑みを浮かべた。そして反省はしている様子であるレティシアの事を、そろそろ許してやろうかとさらに言葉を続ける。
「それなのにその態度はどうかと思うが、一言謝れば許してやらん事もないんだけどなぁ」
　目の前の悪魔はじっとレティシアを見て微笑む。先程よりは穏やかなその微笑みに、少しほっとして謝罪を述べようとするが、なかなか口から出てこない。
　自分の心は謝罪を拒否していたのだ。

　しかし――、言わなければ切り札を使われかねない。

　――――それは、とても小さな声だった。
　レティシアは、俯いたまま何とか心を説得して謝罪の言葉を紡ぐ。
「ん？小さくて聞こえないなぁ～」
と、リュシファーは追い討ちをかける様に言ったが、実はその耳にはちゃんと聞こえていた。エルフというのは耳が長い分、聴力がす

ぐれていたのでちゃんと小さな声でも聞こえるのだった。また、人間ならばどの位までが聞こえるのかもちゃんと把握しており、人間レベルで考えるなら、今のレティシアの声量では、人間にはほとんど聞こえないだろうと判断したのだった。

レティシアは、きっと一瞬リュシファーを睨み付けると、下唇を少し噛んだ。

く……。なんて性格の悪い奴なんだ――。

――そう思った。

レティシアは、悔しくて泣きたくなる程だったが、くっとこらえて先程より声を少しだけ大きくして謝罪したのだった。こんな嫌な男の前で、泣く所なんか悔しくて死んでも見せてはいけないと思った。一方リュシファーにも、屈辱をを受け悔しがっているであろうということは、十分に見て取れた。一国の王女としての誇りなのか、レティシアがプライドが高いという事は、誰が見ても少し接していれば伺えた。

本当に薔薇の様な気高さだな――とも思った。

「まぁいいだろう。実際、俺も皆の前では猫もかぶるさ。王女様もそうだろう？　それに、まあまともに勉強してくれるなら告げ口なんかしない」

どういうことなのか簡単に許してくれたのでレティシアは安堵しながらも、少し緊張と落胆の色を隠せなかった。予想通りに切り札を出してきた事が、そうさせていた。

その次の瞬間、リュシファーは組んでいた足を床に降ろし、にっこり笑うとおもむろに一枚の紙を取り出した――。

「――えーと？『エンブレミア王国第一王女、レティシア。１３歳。王国始まって以来の問題児。三兄弟の末っ子で、城の者の手を焼か

せるとんでもないお姫様――。手に負えず辞めさせた教育係の数は、前回の者で5人目である』――ほぉ…。『中でも、陛下が剣術よりも魔法学を中心に学ばせよと仰られているのにも関わらず、それには相当な苦労をしいられる。だが現在は教えていないが剣術は好きな様子で長けている。…他教養に関しては、ほとんどまともに授業も受けようともしない――』…ははは。噂には聞いていたが、確かにとんでもないな。学校に行っていたら、落第確実だな…」

おそらく、事前に渡されていた資料であろう。その調書を、自分でコメントを混じえながら呆れた様子で読み上げたリュシファーは、既にこれに目を通しているだろうとレティシアは思った。わざとそう聞かせられたその調書は、誰が聞いても恥ずかしい内容。

確かにまともに授業さえ受けようともしなかったが、気に食わない奴に読み上げられたことでレティシアは殺意にも似た感情を憶える。そして今、完璧に見下されているというのに、何も言い返せないという自分の立場をレティシアは呪う。

「ぐ……」

その立場にたたされる原因となったのが、あの階段と廊下での一件…。今日はついてない一日であり、それは今朝から始まっていたのだ――とも嘆いていた。

「――じゃあまずは、簡単なテスト問題を作ってきたから、それをやってもらう。制限時間は各教科ごと40分。歴史、数学、化学、魔法学、現代文、一般教養、経済学、王室教養学…以上、八科目にて行う。まずは歴史から――」

ピシッッと手順よく突きつけられた問題用紙と解答用紙の三枚の紙に、目を向けたまま目と耳を疑い、愕然としたようにレティシアはしばらく固まっている――。

エルフィード王立学院を首席で卒業しただけの事はあり、きちんと段取りを整えて来ている様だった。初日だというのに突然学力テストなんかを用意してくるとは、思いもよらなかったのだった。

細い黒縁の眼鏡をかけたリュシファーは、『王立教養』の教科書を手に取り、開き始めた。――王室教養は、王族に関するマナーや決まりといった教養なので、一般的には学ばない。そのため、事前に知っておくことが必要なのか、レティシアが驚くのも気付かずに事もあろうかソファに横になったのだった。かと思うと、読書でも楽しむかの様に悠長に読み出したので、その姿にレティシアは少し怒りを憶えていた。

「ん？　なんだ、怖い顔して。あ…勘弁してくれ――今朝、誰かさんのせいで腰を強く打って痛むんだ。他にする事と言っても特に待つ位しかない。少し休ませてくれないか」

申し訳なさそうに苦笑するリュシファーは、レティシアに少し皮肉を混ぜて言った。

自分が下敷きにしたせいで床に身を強く打ちつけられ、腰を痛めていたという事をその時初めて知ったレティシアは、わずかながら申し訳ないと思い謝ろうとしたが、何かが邪魔をしてその言葉を留まらせる。

「あ……そうか。そ、それならいい――。えっ、えとっ…いつ始めたらいいんだ？」

本に視線を向けたままで、『１０時１５分』を告げ、リュシファーは読書に集中した。

息を呑んで裏返しになった問題用紙を見つめるレティシア――。テストは簡単な問題というのだから、カンタンに済ませてやる…っ。

こんなっ――――――…

――――――こ、……こ……んな……

――――

……レティシアは固まっていた。

…な、何これ……。超難しいじゃないか…っっ…

リュシファーが『簡単』と言ったテストはレティシアには難しく、ちらっとレティシアはリュシファーを睨みつける様に見た後、頭を

悩ませながら挑む事となった。
テストは途中、休憩を10分挟みながら進んでいった。
――撃沈…。

「――よし、終わり。では、このテストを元に、明日からの勉強メニューを考える参考にさせてもらう。今日はここまで」
そう言って問題を回収したリュシファーはそれを少し眺め、ちらっとレティシアを怪訝そうに見てからファイルに挟んだ。レティシアは、その視線が何を意味するかがおおよそわかり、視線をそらす。そして、何はともあれやっと開放されたといった感じでレティシアは、大きく伸びをしながらソファに身を委ねた。
ソファーから少し眺めたバルコニーの窓の外は、まだ沈んではいないが太陽が山間に近づいていた頃だった――。

「そういやもう5時間たったし足はもう歩けると思うが、一応新しい薬を塗りなおすか…」
新しい薬のついた物に貼り替えると、くるくると包帯を巻いているリュシファーを他所に、始終そっぽ向いて何も言わないレティシアに、リュシファーが呆れてため息をつく。
「礼くらい言えば、かわいいんだがなぁ……」
そう憎まれ口を叩かれたのを聞いてさえも、レティシアは黙っていた。
レティシアは少しすねていたのだった――。
ただ単に、あんなにスラスラ解こうとして意気込んでいたというのとは裏腹に、ほぼ解
けないままテストが終わってしまった事に落胆していたのだった。
ちらっと目を配ると、リュシファーが少し怪訝そうにこちらを見ている。
レティシアも同じ表情を向け言った。
「……なんだ？　もう私に用はないであろう…ひとりにしてくれ…」

もういい加減に開放してくれと言わんばかりに憎まれ口を叩いたレティシアに、リュシファーは少しムッとした。

しかし、どうやら落胆している様子も伺えたのでそれを抑えたが、勿論“ほんっと生意気な姫様だ…”とある意味関心もしていた。

「ま、まあ…そう言うな。終わったら少し話でもしようかと思ってたんだ」

微笑むリュシファーを追い出そうと言葉を紡ごうとした所に、ノックの音が聞こえる。

「どうぞ」

その言葉はレティシアが言うより先に何故かリュシファーが言ったので、ムッとして密かにリュシファーを睨んでいた事に、当の本人は気付いていなかった――。

「失礼します、姫様、リュシファー様。お茶をお持ち致しましたぁ…」

上品な艶のある漆黒のドレスの細部には、白いレースが装飾がされており、後ろで束ねられた茶色くて艶のある栗色の髪の毛の頭には同じレースのヘッドドレス。マールシェスタ城の紋章の入ったメイドの衣装がよく似合っている。

そして、綺麗で優しそうな面持ちの若いその女性は――名を『マリア』という。

レティシアたちを小さい時からお世話している侍女である。その性格はおっとりとしており、レティシアを叱らなければならない時も、人差し指を自分の顔の前でぴんと優しく立て、“姫様？　いけませんわっ…めっ・ですよっ？”と可愛らしく叱るのだった。本人としてはそれでもしっかりと怒っているつもりなのだが、そんな調子に狂わされるような穏やかな性格のマリアには、とても助けられていた。また、その癒し系ぶりは城内でもファンがいる程である。

とある国では、その様なマリアの様な者のことを『萌える』とい

うらしく、レティシアもそれを覚えて言ったら少し照れくさそうに必死に否定していた。そこら辺もまた、――『萌える』と言うポイントなのであろうと、レティシアは密かに思っていた。

全て統一された上品な花束のデザインの陶器のお茶のポットやティーカップとソーサー。そして皿には、色とりどりのクッキーが並んでいる。銀製のワゴンでそれらを運びながら、軽く二人に会釈する。

「姫様、しっかりお勉強なさいましたか？」

カップにお茶を注ぎ二人に差し出しながら、そのマリアの顔はリュシファーに微笑みかけている。

「いえ、今日はまずは学力テストをして頂いて、少し勉強の進行を考えることにご協力
して頂いたので、本格的にお勉強をお教え致すのは明日からなんですよ」

リュシファーは相変わらず自分以外の者には丁寧に受け答えをするその様子に、『本性はあんなに性格悪いのに……』と、レティシアは心の中でツッコミを入れた。

「まぁ、では明日から頑張らなくてはなりませんね。姫様？“ふぁいとぉっ”、ですわぁ」

流石に取り繕えなかったらしく、リュシファーが間の抜けた表情を浮かべ始めていた。

――ガッツポーズを女の子らしく可愛く出来るのは、多分マリアをおいて他にいないだろう。性格の特徴に若干の天然要素も入っており、大真面目に今みたいなよくわからないが一生懸命応援するような言葉を言って励ましてくれるので、レティシアはマリアには元気付けられることも多かった。レティシアはそんなマリアに対し、のん気でいいなぁと羨ましく思う時でさえあった。

「あ、あぁ…そうだな」

にっこりと微笑んでマリアは会釈をすると、レティシアのその返

事で満足そうにワゴンを押し、去っていった。レティシアがどこか不機嫌そうな様子だった事にも、おそらく全然気付いていないであろう。

レティシアは複雑な笑顔を浮かべ、入れて貰った紅茶にミルクと砂糖を入れる。

「――そういえば、何て呼んだら良いかな？　…姫様・王女様・レティシア様？」

リュシファーは指折り色々と並べていたが、レティシアはなんだかどれも不快に感じて嫌な顔をしてそれを聞いている。

「…お前に姫様だとか今更言われると馬鹿にされているようで腹が立つので、ミグやエルト兄様たちの様にレティシアとかレティにしてくれ。――城の者は呼ばぬが、利害が一致しているため、特別に許す」

リュシファーは、意外そうな顔をしながらも、レティシアがそう言うのであればと、遠慮なくそう呼ばせてもらう事にした。

「皆の前では取り繕って呼ばせて貰うが、それは腹が立たれても仕方ないぞ」

「…お好きに」少し冗談っぽく言ったリュシファーに、不機嫌っぽくそう返すとレティシアはお茶に口をつけた。

「レティは13だったな？」

「だ、だから何だっ――」

その時、『――すぐ無気になるこの性格こそが、子供なのだが…』と返そうとしたが、リュシファーは口を噤む――。余計な一言を言えば、余計に謂れのない敵意を抱かれてしまう事は目に見えていたからだ。

リュシファーが弁解するのも腹立たしく、レティシアは相変わらずつんとした態度を取っていた。温度差加減が絶妙な調子な二人の会話は、はたから見ると変であっただろう。

――その後、そんな調子でレティシアは、聞いてもいないのに色々な話を聞かされたが、リュシファーの話は意外と興味深く、気が

つけば自然とまともに相手をしていた――。

そして、リュシファーの驚愕の事実が明らかになったのだが、それは次の話で――。

つづく。

【第一章】†ｅｐ．４　切り札を持つ者†（後書き）

やっぱり怒られてしまいました。
しかも逆らえませんね…。
次回、リュシファーの実態について少し明らかになります。

【第一章】†ｅｐ．５　リュシファーの謎†（前書き）

あぁぁぁごめんなさい！！
文章かぶってる箇所がありました。６／１５修正しました！！
申し訳ございません！！

【第一章】†ｅｐ．５　リュシファーの謎†

リュシファーの驚愕の事実というのは、リュシファー自身のことである。

見た目は１７かそのくらいにしか見えないのに、実は２１歳であった事――。

それから、もっと驚いたのは…リュシファーが、エルフではなかったことにびっくりしたのだった――。…あ、いや――エルフではあるのには変わりないが、完全にエルフというわけではなかったといえばよいだろうか。

――父親がエルフで、母親が人間…。

という俗にいうハーフであるらしい。

エルフの一族というは人間より寿命が長く、３００年程が平均寿命であるらしい。

ただリュシファーの場合は人間の血が入っている稀な例なので、わからないんだとか。

おそらく単純なものではないだろうが、単純計算で平均寿命の半分である１５０年前後であろうと言っていた。

成長の様子はというと、１８歳くらいで成長は止まりしばらくはそのままの姿で成長し、個人差があるので一概には言えないが、大体１００歳くらいになるまではずっと見た目が変わらないという事であった。

――１００歳で少し成長した後は、人によっては４０年後――、１００年後――と、いつ成長がまたスタートするのかは不明だが、寿命の間際にはちゃんと老人の姿になっているというエルフの実態には、レティシアも度肝を抜く様な変わった歳の取り方をしている様だった。

「てことは、私がおばさんになってもリュシファーはこのまま若い

姿のまま？　でも年齢はおっさんなのかっ…！？　げー、なんか嫌だーっ…」

「ははは…。まぁ人間の血も入っているので一概にそうとも言えん。前例がないのでな……」

「え――？　じゃ、リュシファーの両親が異例ってこと？　エルフと人間が一緒になるのは禁忌にでもなってるのか？」

まさか前例がないとは思いも寄らず、不思議そうに聞いた。

「そうだな――。まぁ、禁忌といえば禁忌だろうなぁ。エルフは、あまり他の種族と関りを持つ事自体閉鎖的な考えを持ち、好ましく思わない種族でもある。だからといって特に禁忌という事でもないが、外に出ないため、出会わなかったのもあるんじゃないか？　それがまぁ出逢えば恋に落ちることもある――と、そういう事だ」

レティシアは、熱心に聞いていたのだが、リュシファーが話を変えそうになったので、レティシアの慌てて質問した。

「――待った待ったっ。じゃっ、じゃあ。どうやってリュシファーの両親は出会ったんだ？」

リュシファーは少し嫌な顔をしながら息を吐いてから言った。。

「…気になるのか――？」

もちろんレティシアは首を縦に振った。

ため息混じりでリュシファーはゆっくりと話し始めた。

「――母親と親父が出逢ったのは、母親が森で倒れていた所を親父が発見し、その時、ひとめぼれしたらしい。気を失っていたので街へ連れ帰って面倒をみていて二人は恋に落ち、族長が二人の仲を許さなかったからその街を一度出て、人間の街にも住み着いてそこで俺が生まれた。でもその後、俺がまた生後何ヶ月かの時に母親は病弱だったため亡くなってな――――…」

レティシアは申し訳ないことでも聞いた様な気がした。

そして自然とそれは表情に出ていたらしく、リュシファーは少し慌てて弁解する様にこう言った。

「…あっいや、レティ。別に気にするなっ、特に俺は何とも思ってないから大丈夫だ。生まれたばかりで実の母親の記憶もないし、今の母親はちゃんといる。続きがあるから、最後までまぁ聞け。さっき言った様に、親父は今の母親と再婚してる――。でもまぁ…、おかしな話だがその今の母親というのが、実は、俺の実の母親の妹なんだ――」

「えええええええっ!?　いっ…いもっ……妹――!?」

レティシアは驚いて声を上げた。

さらに予想通りの反応といった感じで苦笑すると、リュシファーは話を続けた。

「はは…ま、そうだよな。普通は驚く。もともとはさ…、実の母親が結婚する――と言って連れて来た親父にさ、今の母親である俺の実の母親の妹はひとめぼれしてたらしいんだ。――でも今の母親は、叶わぬ恋心を密かに胸に抱くしかなかった。実の俺の母親が亡くなるまでは…ね。自分の姉である俺の実の母親が亡くなってしまって親父は一人で赤ん坊を育てるのに、苦労しているのを心配していた今の母親は、親父の所に手伝いに通って――…ん?」

「?」

「いや、――ず、随分熱心に聞いているなと思って。――別に、つまらん話だぞ?」

途中口を噤んで一応この先も話すか確認してきたリュシファーに、レティシアは最終的には一喝してまで、続きを促した。

リュシファーは少し呆れた様に微笑み、ソファーから立ち上がり、少し窓の方へ歩いていく。そして、窓の外を眺めながら続けた。

「そんなに聞きたいなら話してやるから、そう怒るな…。――親父はさ…、実の俺の母親が亡くなって、相手のご両親からひどく怒られたらしくてな。親父のせいだとか言われ、…結婚する時もかなり反対されていたそうだから仕方ないが。でも、今の母親だけは俺の

面倒を熱心に手伝いに来てくれたりしていた――。そのうち、本当の母親みたいに俺もなついていたと聞いた。まぁ――俺は全く覚えてないけどな。結局、今の母親と親父はそんな感じで一緒にいることが多くなり、姉妹だから顔も似ていて親父も惹かれていったんだろう。――ついに再婚を考えたらしい」

「おおっ！」

レティシアは話に飲めり込んでいたため、つい身を乗り出して言っていた――。

リュシファーは相変わらずため息を吐いて、苦笑を浮かべている。

「…――とはいっても、人間の世界にも『世間体』ってものがあるだろ？　それにご両親は二人の事をあまり快く思わなかったんだよ。おまけに姉妹そろってエルフである親父に恋などと『何考えてる！』って怒鳴りつけたらしいんだ。親父に対しては『うちの娘を二人もたぶらかした』って言ってな。とにかく反対された今の母親は、押し切って家を飛び出してきたんだ。そして、二人は街を出た。…かけおち…だな。そうして、再びエルフの街に戻る事にしたらしい。ただ、前住んでいた街名までは俺は聞いてないから、よく知らないけど今でも住んでるエルフィードには、その時から住み始めたんだってわけだ」

「――え？　でも…、人間が暮らすのは許されなかったのではなかったのか？」

いい質問だ――と、偉そうに頷いてからリュシファーがそれに答えた。

「それは、他の多くの街や村の話だ――。エルフィードという街は、割とエルフの街や村の中では自由な街なんだ。結構、厳格に規則が厳しい他の街や村と違い、エルフィードの街に住んでいるエルフだけは、人間の街にもわりと自由に足を運ぶ――。最近とくに街でエルフを見かける事も増えたが、エルフィードから来ていると思って間違いはない。他の街や村の者は、閉鎖的で出て来ないのでな――」

「へぇ～…じゃあっ、エルフィードって他にも人間がいるのか？」

「――いや。逆に人間側からは、エルフに案内でもされない限り、エルフの街っていうのは自力では辿りつけず、深い森で迷ってめったに辿り着けないみたいなんだ」
「――じゃ、いないのか…」
少しがっかりしたような様子のレティシアだったが、リュシファーは更に続ける。
「ま。街の近くまでは来たが迷って怪我でもしてしまった人間が、運良く一族の者に発見されて街で手当てされるという事が稀にあるくらいだから…。全く辿り着けないという訳でもなかろう。――ただ、前例がないだけだ。まぁだからこそ親父と母親みたいに恋に落ちるというのも、人間とエルフがそうなること自体も珍しいから俺は少し特殊な血筋って事だ――。はは…。ともかく話を戻すと、エルフィードっていうのは、そんな自由な街だから、俺達が住み始める事を許してくれたらしい。――そして、二人の間にも子供が生まれ、俺にも腹違いだが弟がいる――と、そういう話だ。つまらん話をしてしまったな。悪かった――長々と」
そう詫びて微笑んだリュシファーの顔は、穏やかだった。
「い――、いや。別につまらなくはないっ…意外と興味深かった」
と、照れくさそうにレティシアは答えた。

実際に、人間が住まう街の事でさえ何度か、エンブレミア王国城下街に出た事があるくらいの知識しか持っていないレティシアにとって、エルフの世界の話というのは縁遠いが、すごく興味深かったのであった。
――自分の知ってる事というのはごく一部に過ぎず、世界は『広い』……とも思ったのであった。
「疲れただろう。少しバルコニーで外の空気でも吸わないか？　俺もちょっと――」
リュシファーは、ポケットから煙草の箱を取り出した。
煙草を一本取り出したリュシファーがバルコニーへ歩みを進める。

「あぁ、そうだな」
そう返事をして、もう冷めているお茶を最後に飲み干したレティシアは、ソファーから立ち上がりバルコニーに向かおうとしていた。
「！」
途中、レティシアは驚いて下を見ていた――。その視線の先は、自分の右足首に向けられている。驚愕の表情を浮かべたまま、『もう歩けると思うが』というリュシファーの言葉を思い出していた。それでも、全く痛みが感じられないというわけではないだろうなと思っていたレティシアの右足首は、リュシファーの言ったとおり、全く痛みがなかったのである。
――どうしても信じられずその場にジャンプしてみるが、やっぱり少しも痛くない。
自分のその恥ずかしい行動を、リュシファーが見ていないか確認してから、ふっとレティシアは一人で少し微笑んだのだった――。

外はもう日が沈みかけており、遠くの空が赤く燃え上がるようなオレンジ色を描き、遠くの山々は、黒く塗りつぶしたかの様に影となって見え始めていた。
そんな夕焼けの穏やかな風景を、レティシアの部屋のバルコニーのコンクリート製のかこい格子に肘をかけて眺めながら、リュシファーがふぅーっとタバコの白い煙を吐いていた。
深い藍色の髪がさらさらと風に舞い、揺れている。何を考えているのかわからないが、その表情はどこか物悲しげで、穏やかで遠い目をしていた。エルト兄上の様に少し大人で…、端整な顔立ちだけは敵ながら少し見ていても飽きない程綺麗――。こうして改めて見ると、なかなか悪くない……。ま、性格は気に入らないが見た目はまぁまぁよしとしてやろう。それに、どこかその姿は幻想的なのは、この者がエルフであるからなのであろうか――……。後ろから後を追い、ゆっくりとその隣に近づいていたレティシアは、リュシファーの横顔を少し黙って見ていてそんな事を思っていたのだった。

「――東塔2階か…、結構見晴らしいいんだなぁ～」
目線を遠くに向けたまま、呟かれたそれにレティシアは静かに答えた。
「……実質3階から東西の塔が建ってるからな。実際はここは5階みたいなものだ…」
「なるほど――ね…」
マールシェスタ城は、本棟・東棟・西棟と別れている――。
東棟には、レティシアとミグ、エルト王子の部屋。上位の家臣達の部屋があった。
世話係や兵士達の宿舎や訓練所などに使われているのは西棟――。
そして、東棟西棟と違い1階から建っている本棟――。上の方の階には、国王や王妃そしてレティシア達の祖母などの部屋や宝物庫――。下の方の階には、大広間や王の間。書庫、資料室、王立研究室、会議室、娯楽室、演奏室などの他、風呂や食堂、厨房――、地下には倉庫などと多彩に配置されている。
トイレは1階3階5階7階と、一階層飛ばしで配置されている。
その他、各棟に空き部屋も多く、客人が来訪した時以外、ほとんど使われていなかったのだった――。
城の構造を説明してからレティシアは、軽くジャンプすると格子に上がって外の方に体を向け座り、足をぶらつかせながら屋上が一番高くて景色がいい事も口にした。
「ただし――。今、東棟2階だろう？　東棟の屋上に行くには、途中4階で西棟への連絡通路を抜ける。そして西棟4階から7階まで行ったあと、そこから更に東棟への連絡通路を抜けて、東棟7階から10階屋上にやっと行けるんだ・・・ほんと面倒な造りだ」
そう言ってレティシアは苦笑を浮かべながら、遠い目で遠くを眺めていた。風に、澄んだ翡翠の様な緑石色の長い髪が、風にわずかに舞い揺れている。
ほぉ…と感心しながら説明を聞いていたリュシファーは、そのま

ま静かに上を見上げた。

見上げた先は果てしなく遠い様な高さである事と、先程のレティシアの説明とをその脳裏で照らし合わせていた。

レティシアの髪から漂う高貴な薔薇の香りが風に流され自分に触れていくのを感じる――。少しだけ見えるその頂から見下ろした景色は、きっと素晴らしく良い物であろうなと、想像していた。

頂の周りに見える空はもう、日が沈み、ゆっくりとその色を闇が覆うように深い青にすでに変わり始めている――。

「――あ。そういや…、リュシファーの部屋はどの階になったんだ？」

リュシファーに対し、もうすっかり戦意喪失している様子のレティシアは、格子から頂を見上げているリュシファーにこの質問を投げかけた。

「…ああ、同じ階だぞ。ここの隣の部屋の隣にある――あの階段の、さらに隣だ――。」

リュシファーはレティシアの方に向き直って答え、煙草を消している。

「ふぅん…割と、近いんだなぁ――」

と、つぶやくように言ったその時である。

「わっ！？」

リュシファーは、レティシアをひょいっと持ち上げたかと思うと床に降ろした。

一方、突然持ち上げられて悲鳴をあげたレティシアは、リュシファーに降ろされてしまい不満の声を漏らす。

「何だ突然っ、びっくりするじゃないかぁっ」

子供を注意するかの様に、リュシファーは落下でもしたらとレティシアに注意をする。

それに対しレティシアが反論を訴えるが、リュシファーは人差し指を立てて、呆れた様に微笑を浮かべながら答える。

「――だーめーだっ。落ちたら俺が全責任を問われるんだからな。俺は、レティの目付け役でもある事を忘れてもらっては困る」

リュシファーはぴしっと明確な理由もつけて答えた。

「むぅ――――」

レティシアはふてくされた様に口を尖らせると、『大丈夫なのに』とぶつぶつと呟いているがもちろんリュシファーは聞こえている。

リュシファーが目付け役でもあったことをすっかり忘れていたことに気付いたレティシアはしばらく不服そうにしていた。

…こりゃ、城の者たちも苦労する訳だ――…はぁ。

リュシファーは少しだけ目付け役を引き受けたことを後悔したのであった――。

レイモンドに頼まれた際、「ええ、別に構いませんよ」と即答してしまったのを思い出すが、その時レイモンドは何故だか物凄く感謝していたのである。

――なるほどなー…。

そんなに感謝されることもないと思ったが、今となってはそれも頷ける――。

呆れた顔で不服そうなレティシアを放っていると、レティシアはようやく諦め、くるっと後ろを振り返るとバルコニーにあるソファーになだれ込んだ様だ。

そして、はぁ～とため息まで吐いている。

“……あ～ぁ、爺みたいなのがもう一人増えたんだった～…なんか今日は災難な一日だ。階段からは落ちるし頭に辞書入ってるみたいなヤツが教育係に来るし、おまけに弱味まで握られてるから言う通りに勉強しなきゃなんないし――？　そうだ、忘れてはいけない。さらに、コイツ目付け役でもあったんだった～…　はぁ～私の人生は真っ暗だぁ～～…”

と、レティシアは思いながら落胆した様子でため息を吐いていたのだが、リュシファーも複雑な表情で、呆れた様にため息をついて

いた――。
実はこの時、レティシアが頭の中で考えていたつもりであるこの思考は、全て独り言の様に小さく口から紡がれていた――。
エルフであり聴力が優れたリュシファーにそれが聞こえないはずもなく、余すことなく聞いていたのである。苦笑を浮かべながら、リュシファーはこう言った。
「――独り言は一人で言うといいぞ…はは」
「!?」

呆れた表情を浮かべたリュシファーが格子に寄りかかりながら、
エルフが聴力が優れている事――。
従って今つぶやいていた事は全て聞こえていた事――。
そして少し場を和ませるために、別に辞書は頭に入っていないという事もレティシアに教えたのだった。

ガーン。
自分が呟いてた事は愚か、聞こえていた事さえ知らず、ショックを受けてレティシアは驚愕の表情でソファから立ち上がる。
「き…き……、聞こえてたのかっ？」
「確かに、お前にとっては人生真っ暗かもな――、…はは」
そう言って笑った後、更に『さて、疲れただろう。少し休むといい。では、失礼しよう　――またな。レティ』と挨拶を言い残してリュシファーは出て行った。

リュシファーの後姿を見送ってレティシアは部屋に戻り、ベッドに横になった。

特にリュシファーは怒っている様子もなかった――。
レティシアは色々と今日一日でリュシファーが持った切り札は大

きいことや、かと思えばそんなに悪い者でもないとか…、結局いいヤツなのか悪いヤツなのかと考えていた。
でも、ミグが言ってた事も一理あるのかもしれないな――とそう思った。

『話せばわかるやつかもしれない』――かぁ……。
確かに助けられたと言えば助けられたんだし、悪いヤツではないのかもしれんが……と、そう思いかけてベッドからがばっと起き上がり、大きく頭を振り乱すと自分の心に否定の意を唱える。
――違う違うっ……助けたのではなくて、切り札を思いっきりかざされてるんだっ。
…危ない危ない…危うく騙されるとこだった…。とはいえ、太刀打ち出来る者ではなさそうだし……？――はぁ…。
――なんか、もう今日は疲れた…
少し眠気が襲ってきたレティシアは、夕食になればマリアが起こしに来ると思い、少し眠る事にした。
バルコニーの窓を開けたままだということに気付いたが、襲ってくる睡魔にはレティシアは勝てず、布団もかけずにそのまま寝たのだった――。
――――…

つづく。

【第一章】†ｅｐ．６　ともだち†

――午後、７時３０分。

その日の夕食は大広間で取る事になっていたため、部屋にマリアが呼びに来た後すぐに着替えをさせられ、大広間へと向かった。

大広間で食事を摂る時は、重大な報告や発表がある時なので、めったに大広間で皆が集まることはない。

特に何もない時でも、日曜の夜は大広間で食事を摂るという事が決められていた。

それ以外は、部屋で食事を摂っているのである。今日は月曜日――。

二日続けて大広間で摂るというのは、少々面倒くさい気持ちでレティシアは席に着いた。

国王エリックと王妃リーディア、第一王子エルト、第二王子ミグ、第一王女レティシアの他に、レティシアの祖母である太后オルフェシアも様々な料理の並んだこのテーブルに姿を見せている。祖父である大公オーグロンドは病気で亡くなっているが、この王国では女性にも国を治める権利があり、王が亡くなれば王妃にその座が向かう事もある――。しかし、オルフェシアは女王として国を治める権利を放棄――そして、自分の息子である現国王エリックにその権利を譲ったのであった。

レティシアの正式名称に付いているのも、祖父の名前からとったものである。

それ以外にも、宰相大臣レイモンド、兵士長テヴァン、財務大臣、外務大臣など上位の家臣がその姿を見せており、違うテーブルに着席している。さらには、その大広間の入り口周り一帯を、侍女や執事、兵士たち、料理番の者までもが立ち囲んで整列させられており、城中の者勢ぞろいで何かの発表のために呼ばれている様だ。

「――ミグ…、今日は何か……重大発表でもあるのか…っ？」
隣の席のミグにひそひそと声を潜めて尋ねたレティシアに、ミグは顎で左の方を指して言った。
「…ほら、あそこ。挨拶するんだろ――皆に紹介するために…」
「ん…？　紹介……？」
そう言って見たミグの指した方向に、リュシファーの姿を見かける。
上位の位はない筈なのだが、リュシファーをレイモンドが連れており、自分達のいる席に座らせている所だった。その後ろには、もう一人エルフの若者がいた。
後ろに一つに束ねている髪の毛は下ろせば肩より少し長い程の長さ。リュシファーの髪の色よりも淡い色味だが同じ系統の藍色で、瞳は葡萄の様に紫がかって澄んだ瞳――。水色のマールシェスタ城の紋章が入った制服らしき物を着ている。
二人並んでいる所を見てもリュシファーよりは少し背が低いその若者は、優しそうな面持ちをした時のリュシファーに、どことなく似ている気がした。
でも、エルフというのはあんな風に綺麗な顔をしているものなのだなと、勝手にレティシアは判断して、考察を終わらせた。
しかし、その若者をじーっと見ていると、上位家臣たちの席に座るという事に少し緊張しながら慌てて席についている様子に、少し苦笑しながら声を潜めながら口を更に開いた。
「あれ？　じゃあ、もう一人いるあのエルフの若い者は……？」
レティシアの問いに、今度は第一王子エルトがひそひそと口を開いた。
「――レティ？　…少しおとなしく待てんのか…？　仕方ないな――ミグとレティは」
「…あ、兄上――。あはは……はぁぃ…」
エルトが少し呆れたようだが優しく諭すと、レティシアは大人しく返事をした。レティシアはエルトに対しては素直に言う事を聞く。

何故ならそれは、エルトがレティシアの思う“理想の兄三原則”に当てはまる素敵な兄だと思っているからだ。
その極意とは、『優しい』『かっこいい』『頼れる』というもので、理想の兄三原則として掲げる絶対条件であった。
それに比べてミグに対してはというと、『…もーっ、ミグのせいで兄上に怒られたじゃないかっ……』とこっそり言い、自分の足を伸ばしてミグの足を蹴るという程の扱いである。
やはり、レティシアにとってミグは双子の兄ではなく、同じ立場の関係なのであろう。

ようやく国王が皆に挨拶するために立ち上がり、それに続くようにレティシア達全員も立ち上がった。
「忙しい中集まってもらったのは、他でもない――。もう知っている者もいるかもしれんが、皆に紹介をしておかねばならぬ者達がいる――。一先ず、席についてくれ」
国王が、席に皆が着くように促したかと思うと、リュシファーとサーシャの方へ視線を向け、頷く――。
二人がその場に立ち上がると、一礼して一人ずつ自己紹介を述べていった。
リュシファーは知っているのでともかくとして、サーシャという若者は、王立研究室で研究のために勤務する事となった様である。
国王の期待を込めた二人への一言が終わった後、「報告は以上だ――」の言葉を述べると、一礼をした侍女や執事たちなどは、元の仕事に戻っていく。
レティシア達も、その声とともに肩を撫で下ろし、食事に手をつけていく――。
リュシファー達は、レイモンドを初めとする大臣たちと普通に会話をしている様子であるが、レティシアは少し疑問に思っている事があった。
そもそも、良く考えてみれば教育係というだけで、皆に紹介をす

るというのは今までに前例がなかった気がしていた。
それをエルトに聞くと、『父上自らが厳選したのだ。優秀な者として期待されておられるのであろう』と、的確な返事が返って来た。
…父上はリュシファーの事、やはり相当信頼されているということか――…はぁ。
落胆した様子で料理に手をつけるレティシアに、同席のエリックが話しかけて来た。
「レティシアよ…。ちゃんと約束は守った様だな。昨日は少し言い過ぎたかもしれんが、ちゃんとこれから勉強さえ真面目にやってくれれば、私も何も言わん。――で、どうだ？」
聞かれた途端にひきつった笑みが浮かんでしまい、視線はリュシファーの方へ自然と向かった――。リュシファーは、その視線が一瞬にして自分に向いただけというのにも拘らず、すぐにレティシアの視線に気付き、意味ありげに勝ち誇った様な表情を一瞬だけ見せた。その様子にレティシアは驚愕の色を隠し何とか作り笑顔を浮かべると、エリックに向けて口を開いた。
「――え、えぇと…、な…なかなか頭の切れる者だと――正直、少し父上には参りました……」
それを聞いたミグがレティシアを見ながら、驚愕の表情を浮かべている。
「おぉ、そうかそうか。そうであろう？　せいぜいしっかり勉強に励むのだぞ。ははは」
エリックが満足気に大笑いしている。
しかし、レティシアはそれには答えずに少し俯くようにして、冷静に料理に手を運ぶ。
――レティシアは、内心ではそう口にすることは望んではいなかった。
ここは大人しく引き下がらなければならない理由があったのだ。
レティシアの口から自然とため息がひとつ、漏れた――。

――――…

大広間での食事会は終わり、へとへとになりながらも部屋に戻り、レティシアはマリアにお茶を入れて貰っていた。

「…姫様？　お疲れになられたのですかぁ？」

「――あぁ……まぁそうかもしれん。少しぼーっとしていたい気分なのだ。…はぁ……」

「まぁ……」

マリアの視線の先には、完璧にソファーにうつ伏せになる様にしてうな垂れているレティシアの姿があり、マリアは少し困った様に苦笑を浮かべていた。

そんな折、またノックもなしに例の人物がやって来た。

「マリアさんっ。俺もお茶、貰っていいっ？」

「あらぁ、ミグ様っ、もちろん」

この時、今の自分と対照的に考えて悩みがなさそうなヤツだと、レティシアは思う。

「サンキュ。――にしてもレティ、何だ？　またゴロゴロとー」

ミグがレティシアのそのうな垂れた様子に呆れて声をかけるが、

「あぁ」しか返事はない。ミグのための新しいカップにお茶を注ぎながら、困った様な表情で代わりに説明をするためにマリアが口を開く。

「えぇ、そうなんですよ、ミグ様。大広間から戻って来てから、ずっと姫様ったらぼーっとしていらっしゃって・・・。きっと今日は新しい教育係に、お食事会にと、きっと疲れてしまったんですわ・・・。はぃ、どうぞ」

マリアがミグにお茶を渡すと、微笑んで「では、失礼します」と去っていった。

「ふぅん……」

淹れてもらったお茶に口をつけると、ミグはため息を吐きながらレティシアの様子を見ていると、レティシアがやっと重そうに体勢

を起こしてから、ちゃんとソファに座り直して口を開く。
「――うーん…。マリアの言う通り、なんか一日疲れたみたいだ。ぼーっとしてしまう…」
うつ伏せになっていたからか顔には跡が付いており、顔が少し赤くなっているのをミグが苦笑しながら『なるほどな』と思った。まさに、疲労の色が伺えたミグは、そんなボロボロの様子のレティシアに少し同情しながらも、自分が逃走した事を謝ってからその後について尋ねる。
レティシアは落胆した様子を見せ、その口からはため息も漏れ始めながらミグを見た。
「――想像通りだ。…明日からみっちり勉強させられるんだから、気が重い……。あーヤダヤダ。まだ明日じゃないのに、憂鬱だぁぁー」
落胆から嘆きに少し表情を変えるレティシアのその様子と、あのリュシファーのなんともいえない恐怖を感じる威圧感を思い返せば、大体状況が想像が出来たミグは、相変わらずの苦笑いを浮かべながら少し慰め、もう一つの質問を投げかけた。
「あはは…それはそうと、お前さっき父上にちゃんと教育係の事褒めてたろ。あれもなんかあるだろ……？」
実はミグはそれを聞きたくてそこに来たのだった。あの食事会でのレティシアの異変――これには、絶対に何かあるとずっと気になっていたのだった。
先程から質問ばかりされうんざりして、一々、全部質問されては疲れると思いレティシアは全てをミグに聞かせたのだった。
「うわー…。なるほど。……そりゃ、変なこと口に出来ないな」
「やっとあの者の恐ろしさがわかったか？…本当、これじゃおちおち城下にも出れやしない――…」
「まぁ、それにしても…こりゃ観念するしかないなぁ。さすがのお前も――」
そうミグが言っている最中に、レティシアは立ち上がってお茶を

一口飲んでからテーブルに置いたかと思うと、ドアの方に向かって歩みを進め出す。

「…ミグ、私――ちょっと兄上の所に行って来る……」

もはや満身創痍といった感じでふらふらとドアに向かうレティシアに、ミグは心配しつつも同情している様に微笑みを浮かべている。

「…エルト兄様んとこ？……お前さぁ…俺も、“一応”…お兄様だぞ？」

一瞬、立ち止まり冷めた目線をミグに向け、ふっと心ない笑みを浮かべたと思うと、レティシアはまた歩みを進めていきドアに手をかけ立ち止まった。ミグの方は向かずに、前を向いたままその言葉は発せられた――。

「ミグは――、“友達”みたいなもんだ…」

パタン……

その言葉を残し、部屋のドアを開けたレティシアは出て行った。

「――へいへい。友達ね…いってらっしゃぁい……」

ミグは『歳も同じ。時間差で早く生まれただけで、“兄／妹”という位置づけ自体がそもそも理不尽だ――』と、前からレティシアはよく言っていたのを思い出し、少し呆れた様にやれやれと言った感じで微笑んだ。

――昔から子供扱いされるのが大嫌いな奴だったからなぁ……。とはいっても？　双子の兄弟と言う位置づけでさえ、結局は自分が一番下なので仕方ないんだけどなぁ…

そして、さっきの落胆して疲れていた様子を思い出して、新しい教育係が手にした切り札がレティシアにとって大きな存在であることにもその思考を繋げていた。

目の前のお茶を揺らしながらぼーっと眺めていたミグはつぶやくように言った。

「大変だなぁ……あいつも――…」

既にレティシアはもう既にエルトの元へ着いてる頃だろう。
しばらくして、自分のお茶を飲み干すとミグは自分の部屋へと戻っていったのであった――――。
――――……

つづく。

【第一章】†ｅｐ．６　ともだち†（後書き）

第二王子ミグの回でした。
レティシアからみて、やっぱりミグは友達みたいな存在です。ミグは妹を優しく気にかけてあげているつもりなんですけど…。まぁ、そんな二人の関係もちぐはぐで面白いかなぁと。レティシアの兄はなんていったって理想の兄三原則にぴったりのエルトだけなんでしょうね。
エルトの回は次回です。

【第一章】†ｅｐ．７　胸の内†

一方、ここはエンブレミア王国マールシェスタ城、第一王子エルトの部屋――。

三兄弟の部屋は、廊下よりドアを抜け、その通路の正面にある部屋はレティシア。その右へ続いている通路を少し進んだ隣の部屋はミグ、その隣の一番奥の部屋がエルトの部屋となっていた――。部屋が近いため行き来がしやすく、レティシアは自分の部屋に先程ミグを残して、隣の隣にあるエルトの部屋まで足を運んでいた――。

しかし、エルトの部屋にはレティシアの姿は見る限り見当たらない――。

執務を手伝わされているエルトは、明日行われる会議の資料を机の上に広げて事前に見直していた。

レティシアの姿は見えないのだが、机からベッドの方に椅子を回転させてしばし様子を見た後、ゆっくりと穏やかにその口を開き始める。

「――で？お前は何をしに来たんだ……」

声をかけられたベッドの中には、実はレティシアが潜り込んでいた。

エルトの元に来て何も言わずベッドに潜り込むという行動と、いつも投げかけられるこの質問というのはいつも同じであった。

そう――、それはいつもの“決まり文句”だった――。

「別にぃ……」
すねた様子でつれない返事を返すレティシアに、エルトはため息を吐く。
――いつもこれだよ…やれやれ。困ったものだな…
と思いながらも、ベッドの中のレティシアに向けられるそのエルトの琥珀の様な金色の瞳は優しかった。
金色のその瞳と同じ髪色も、レティシアやミグと違うのは母リーディアから譲り受けたものである。顔立ちはとても端整で、レティシアがカッコイイと思うのも頷けるほど綺麗である。剣術に長け、その真剣な剣を構える時の表情は、まるで獅子の様に勇敢であり、冷淡な表情を浮かべてもいるが美しい。
その影すらなく穏やかにレティシアに向けられるそのエルトの普段の穏やかな表情は、城外にも姿を見せれば黄色い声が聞こえてくる程、街の女性達も憧れの視線を注ぐ存在であった。
レティシアはそれに嫉妬もしていたが、そんな兄を持っていることも自慢だった。

18歳とレティシア達とは歳も少し離れているせいか、しっかり兄としてミグやレティシアの面倒をよくみており、時に厳しく――、時に優しく――。とくに手のかかるこの妹の扱いも手馴れたもので、レティシアにとって適度な距離感を上手くとって近づき、レティシアをよく手懐けているようである。レティシア自身もその居心地の良さに、時々、こうやって面倒な甘え方ではあるものの、エルトの部屋に足を運んでいた。

――エルトは、自分の部屋にレティシアがこのようにやって来るという時は、何か落ち込む事でもある時というのが経験上わかっていた。だからエルトは、呆れながらもいつもどんなに忙しくとも途中で手を止め、この困った妹であるレティシアの相手をしてあげていた――。

だがレティシアはこれといって、何か理由を言うわけでもない――。

ただ、部屋に来るなりベッドに潜り込んだかと思うと、眠ってしまうというわけでもなく、いつも自分から口を開かない。しかし、エルトは何も動じずにその時の対処方法を実行するだけだった。

「――仕方ないな…また、ミグとケンカでもしたか……？」

「……別に…」

「…そうか。では――、そういえば…“新しい教育係”とやらは、頭が切れそうな者だな……？」

「……」

――こうやってそれらしき質問を並べて行くと、どれかが当たる。

レティシアが何の返事もしなくなるので、それが原因だとわかるという訳である。

そして、レティシアはその質問に対し何も言わなかったので、どうやら今回は二回目で正解の様だ。

それがわかれば、少し思考しなければならない。しかし、今回は単純なものだなと苦笑した。

エルトの中では、こう結論が出ていた――。

“新しい教育係が来た＝大嫌いな勉強をしなければならない”という事なのだろう。

エルトはこの原因を当てるのをゲームの様に楽しんでいた。

少し同情もしながら呆れた様子で微笑むと、ベッドの横に向かった――。

「やれやれ…、困った妹だな……。――あと今日は、テストだったんだろう？」

呆れたような表情を浮かべてそっと布団をめくったエルトが、レティシアやミグとは違うその金色の優しい瞳で穏やかに微笑んでいる。

「…ちっとも……出来なかった……テスト……」

「…ただの学力テストだ。気にする事はない……そう落ち込むな。それより、布団にもぐりこんでいたから顔が赤いぞ…はは」

始めはいつも照れくさくてベッドに隠れてしまうレティシアは、結局こうやって慰めてもらって気が済むと帰って行く。エルトは、そのレティシアの少々面倒な甘え方を理解していたのだった。

またそれが、レティシアにとっては安心出来て居心地が良かった。

忙しいエルトの元に常にやって来ても多分構ってはくれるだろう――しかし、エルトは言わないが仕事の邪魔になるため、よっぽど気分が晴れない時ではないと、レティシアはエルトに頼らないようにしていた。

エルトは周りからは一目置かれ、時折『冷静沈着』とも言われているのが想像がつかないくらい穏やかな微笑を浮かべて、よしよしとレティシアの頭を撫でてやろうと額に触れた時だった――。

「！？」

はっとしてエルトは自分の額をもう片方の手で触れている。

「お、おい…！　顔が赤いと思っていたら――お前っ、熱ないか…！？　た、大変だ……っ」

レティシアの額は、自分とは明らかに違い熱く感じられ、エルトはすぐにレティシアを抱えて部屋を飛び出した――。

「――だっ、誰かっ！　誰かいないかっ？　レティが大変だっっ…！」

エルトは廊下に出るなり叫んだ。

周りからも精神的な疲労だと思われていたレティシアのぼーっとした様子というのは、バルコニーの窓を開けっぱなしで布団も掛けず夕方に仮眠を取った事によることなど、誰も知らなかっただろう……。

――――…薄れゆく意識の中で、レティシアはエルトに呟いた。

「…ごめん……なさい…」と――――。

――――――…

エルトの声を聞きつけ、レティシアの部屋のお茶を下げに廊下から歩いて来ていた侍女マリア――。

自分の部屋の前で叫ぶ声がしたため、何事かとドアを開けて出てきたミグ――。

二人ともレティシアの異変に気付き、あたふたと動揺しては先程レティシアがぼーっとしていた様子だったのにも関らず、何も気付かなかった自分達の過ちを懺悔する様二人で口を揃えるように会話している。

その様子にエルトは呆れ、苛々としながら二人の間をおもむろに通り抜け、レティシアを部屋に連れて行く。そして、ベッドに寝かせたかと思うとマリアとミグに指示を出すように声を荒げた。

「二人とも状況はいいからっ！！　そんな事よりもミグはタオルとか急いで取って来い！　マリアさんは早く医者をっ！　知ってると

思うが一刻を争うかもしれん！　そうだ。リュシファーとか言ったな？　あの者を――」
「わかった…！」
「は…はい！　も、申し訳ございませんっすぐに！」

パタパタと走っていく二人の後姿を鋭く緊迫した面持ちで見送った後エルトは、熱が高いのか朦朧とした様子のレティシアの手を握り締めると、呟いた。

「……しゃれにならんぞ…また“あの時”と同じだ――……」

――――…
……

――――レティシアは熱を出すと、高熱が出てしまい城中大騒ぎになるほどで、一度、生死を彷徨った事があった。
原因はわからないが、熱が上がり始めると微熱では絶対に済まず、早めに対処せずに放っておけば熱が極限にも上がる程、危険な状態になりやすい体質だと医者は言った――。
したがって城中の皆誰もが、レティシアに対しては『体調管理は万全に気をつけるように』と注意するよう言われていたのだ。
同じようにレティシアが意味のわからない調子で部屋に来ていた時、エルトが気がついていたから良いものの、『気づくのがもう少し遅ければ、おそらく――…』と、医者が首を横に振っていた事にエルトはショックを受けたのである――。

エルトにとってレティシアは、手はかけさせられるものの、素直じゃない子供の様な所さえも可愛らしく思っており兄として、その大事な妹の面倒をよくみていたつもりだった。
しかし、それなのに自分のせいで命が脅かされた――と自分を責

めていた。

あの時、“もう二度と同じ過ちは繰り返さん”ともその心に誓っていた。

ここ最近レティシアが熱を出す様な事もなかったため、少し気を抜いていてこの惨事は起きたと――再び今も自分を責めていた。

――なんと自分は愚かなのだ……！

何故もっと早く気付いてやれなかった……!?

レティシアがあの時の様に命を脅かす事にならない様、レティシアのその手を強く握りしめて祈っていたエルトのその胸の内を知る者はいないであろう――。

“自分の事は自分が一番解っている――”

エルトは、そう全てを自分の中で解決し、その胸の内をエルト自身しか知らぬ様なところがあり、年齢も離れているせいかミグやレティシアにも弱さを明かす様な事は決してしなかった――。

しかし、それでもミグはあの時の一件でエルトが自分を責め続けていることには気付いており、レティシアもまた自分のせいでエルトが責任を感じている事もちゃんとわかっていた――。ただ、その事に関しては触れずにいたが、先程レティシアはそんなエルトに気に病まぬ様、エルトには聞こえてはいなかっただろうが詫びたのだった。

一方、ミグもいつも穏やかなエルトが尋常じゃないその剣幕を見せつけながら、指示を仰ぐのも無理はないとエルトの胸の内を思いながら、厨房に足を走らせていた――。

――――……

……

リュシファーが来て皆が寝てからも看病を続けた末、レティシアが落ち着いて来た頃には、もう1時半を過ぎていた――。

エルトが最後までレティシアの側に居続けようとしていたのだが、

明日の仕事に差し支えると思いリュシファーは寝るよう薦めた。
「…そう…だな。会議があった――レティシアが心配でつい忘れていた…あと、少しだけしたら失礼する事にしよう――すまないな…」
と、そう言ったかと思うとエルトはレティシアの掛け布団を直す。
「――すまないと言えば、他にも妹が色々世話になっているな、足の怪我も診たとか」
ぶつかった後に色々と手をかけさせられた事は、リュシファーは口にしなかった。
少し早く城に着いてしまい、レイモンドに城を少しご覧になられると宜しい――と言われ見て回っていた時に、何かはわからないが済んだ翡翠の様な緑石色の何かが突然、階段に差し掛かった頃に飛び込んで来て――それが階段から足を踏み外してしまったレティシアであった事――。そして、足を挫いた様だったので手当てをしたまでである事をリュシファーは掻い摘んで説明した。もちろん、切り札の件については何も言っていない。約束はきちんと守る男の様である。
大丈夫か声をかけた際に、レティシアとは知らずについ上から飛び込んでくる様なまだまだ子供の様な少女を、“お嬢ちゃん”と呼んでしまった辺りを正直に話した時、エルトが苦笑を浮かべた。
「お…お前、それはマズイな…コレを子供扱いすると後々面倒だぞ。たいていの者は反感を買ってな…子供扱いされるという事が一番嫌いな事だ。…まぁ、実際子供なのだがな…ははは…。まぁいいさ。紹介される前からそんな印象だ…どうせコイツはちゃんと礼もろくに言ってないだろう――代わりに私が礼を言おう――感謝する」
エルトが言った一言で、リュシファーはきょとんとしながらも苦笑した。
さすがは兄――レティシアの事をよく把握しているとリュシファーは思ったのだった。
「いえいえ、大したことなくて良かったです。それに、“一応”――とは仰ってましたが、一応、礼は言われましたしね」

その言葉に今度はエルトがきょとんとした表情の後、笑い出した。
「コイツらしいな――ははは…すまないな。『一応』は余計だが、素直に礼は言わずともコイツなりに感謝はしているのだ――。ただ、照れて言えぬのだ…困ったヤツだが、これからもよろしく頼む――お、そろそろ2時になるな…では、そろそろ私は失礼しよう」
リュシファーは微笑んでエルトに挨拶すると、エルトの後姿を見送っていた。
途中、エルトが振り返った――。

「お前とは…なんとなく気が合いそうだ。今度――機会があれば酒でも酌み交わそうじゃないか」
「ええ、是非――」
リュシファーの返事を聞き微笑んでいたエルトの表情は、とても冷静沈着とも言われているとは思えない程優しく穏やかであった――。

そして――。
この後、歳も近いエルトとリュシファーは、時折互いの部屋で語り合ったりする様な仲になったのは言うまでもない――…。

つづく。

【第一章】†ｅｐ．７　胸の内†（後書き）

第一王子エルトの回でした。
エルトの性格とレティシアとの関係性。エルトは孤独でもある様なその胸の内に過去の傷を少し持っている様です。レティシアに優しいのはそのせいもあるのかもしれません。
リュシファーとは今後腹を割って話せる仲に…というエピソードでした。

【第一章】†ｅｐ．８　おとな†

……

――――…

「……ん…」

いつものベッドから見える天井に、白いベッド――。

黒く透けた上品なレースのついたカーテン。ベッドの柱に左右束ねられたそのカーテンのついた天蓋ベッドの上で、レティシアはその目を覚ましていた――。いつもの様にランプが一つだけ灯っているが、いつ自分が眠りについたのかはわからない――。周りに視線を配ってみても誰か人のいる気配はない。しかし何となく先程まで人がいた様な気がする――…。

何故かわからないが少し重い身体をゆっくりと起こすと、目の前には濡れたタオルが額からずり落ちてきて視界を遮った。それを手に取るとタオルはまだ冷たい様だ――。ふいに自分の額にも触れると、そのタオルのひやりとした感触がまだそこに残されているが、次第に熱を帯びてくる――。

――その状況は、自分が少し熱でもあったことを告げていた。

そして、ベッドの真隣に配置してある棚を台にするように洗面器が置いてあるのを発見し、中をよく見ると水が氷が解けた状態で入って置いてあり、それはこのタオルを冷やすための物だとわかる。

「？」

さらに目を配った視線の先――。

ベッドの傍にある椅子の上に何枚かの紙と赤インクのペン、それに何冊かの本も置いてあり、こちらに移動させたと思われるベッドの高さ位の低めで手頃な大きさのテーブルの上には、見覚えのある葉や実などの入った瓶も何種類か置かれていた――。

レティシアはそれを見てすぐに、そこにいた人物におそらくではあるが誰かということに目星をつけたのだった。

――そう。天才的な経歴と医学の心得までもを持つ、レティシアの教育係兼目付け役である『リュシファー』の名前しか見当はつかなかった――。

きっと自分は熱を出し、それを看病していたのだろうとレティシアは悟った。

カチャ……と、静かにドアが開いた。

「ん？　レ、レティ……！　気がついたか？　あーこらこらっ、まだ起き上がっては駄目だ。大分落ち着いたものの、まだ熱がある――」

布団から上半身だけ起き上がっていたレティシアを慌てて寝かすリュシファーは、今日のテストの時にしていた細い黒縁の眼鏡をかけていた。その様子から、ベッド横のランプの明かりだけが灯るこのレティシアの部屋の室内で、ずっと看病しながら本でも読んで側に付いてくれていたのが伺えた。

「……ついててくれたのか？　面倒をかけたな…」

「いや…いいさ。俺は医者の様なものだ――。当然のことだ。とは言っても、薬飲ませた以外はタオル替える事くらいしか特にする事もないしな……。ほとんどの時間は、今日行ったテストの採点と、今後の勉強プランについて頭を悩ませていたさ……」

リュシファーは優しい口調ながらも、疲労の色を見せながら言う。

「ぅ……。テストの……採点…？」

先程、椅子に赤インクのペンと何枚か紙があったのを思い出したレティシアが、明らさまに嫌な顔をしている。

ため息を吐いてから、がっくりと落胆する様にリュシファーが答

える。
「――…そーぞー以上に、成績が悪かったんでね～…。まさかこれ程までとはね…」

「そ…そんなに？」
ほとんど出来なかったとは言っても、そこまでリュシファーが頭を抱える程悪い成績とは思ってなかったレティシアは、少し苦笑交じりだが、本気でため息をついているリュシファーの話題を変えるべく、レティシアはわざとらしく時間を聞く――。
そう聞かれて、あくびまじりにリュシファーは眠そうに答える。
「――４時２０分……」
「えーっ、ね、寝てないのか？　寝てもいいぞ、別に。それとも、隣に寝るかっ？」
少しリュシファーの機嫌を取るように言われたそれは、さらにリュシファーの調子を落胆させることとなる。一瞬、驚いた顔をした後、呆れたように少し微笑みながらリュシファーは首を横に振ってため息を吐いたのだった。
「…お前というヤツは……。そういう訳にはいかないことくらい…。知らんのか？　教育係と王女様が同じ布団で寝てたら、大騒ぎだろ。――　それに、いつ熱が上がるかわかんないしな。お兄さんはなー…こうして、看ていないといけないのだよ。はは…」
さりげなく今度は自分の事を“お兄さん”と呼び、レティシアを子供扱いして来た事に、かちんと来たレティシアは、否定しながら食ってかかる。熱があるというのに元気なものだと、からかう様に少し意地悪い表情を浮かべつつも疲労の色は隠せないのかリュシファーは、冷めた目でこう言った。
「――まだ十分、子供だと思うが…？」

ガーーーン。
はっきりと言われたそれに、レティシアはダメージを受け、しば

らく驚愕の表情を浮かべていたが、熱があるというのに起き上がって必死に否定した。

しかし、言葉を訂正しないリュシファーの様子に、ついには、洗面器のほとんど溶けかかった小さな氷を手にとって投げつけていく。

「こらこらっ、冷たいだろうっ…わかったわかった。もーいいから寝ろっ。子供はおとなしく寝るんだ。…ったく…お前は今、病人なんだからな？」

小言を言いながら、少し疲労した様子のレティシアを大人しく布団に寝かせて顔を覗くが、レティシアはすねた子供の様に不満そうにこちらを向き、

「――子供じゃないもん。」

と、まだ一言だけ否定の意志を述べたのだった。

そんなに嫌なものなのかと一瞬、リュシファーはかなり呆れたが、体調が悪くても気力は元気な様で安心もしたので、洗面器をレティシアの手の届かない床に降ろしてから安堵した――。

そして、リュシファーは、やれやれといった様子でため息を吐いたかと思うと、レティシアに意地悪く微笑みかけながら棚に片肘をついた――。

「――ほ～ぉ……“大人扱い”して欲しいんなら、別だけど…？」

意味ありげなそれは意地悪そうではあるものの、わざと――。

どこか色めいた様な優しい声で言われたものだった。

レティシアがきょとんとした表情の後、その意味を真剣に考えている様子で頭を抱え出していたが、だんだんその表情は困った顔をし始める。

そしてとうとう降参したのか、レティシアは答えた――。

「よ…よくはわからないが、ちゃ、ちゃんと…っ――大人扱いしろっ…」

意味が解らず恥ずかしかったのか、レティシアは珍しく可愛らしく小さな声に弱まり、少し照れくさそうに答えた。命令調であったものの大真面目に言われたその発言に、リュシファーは思わずふきだすように笑い始めてしまう。

もちろん、意味は解っていないというのも知っていたが、子供ではないと必死に否定している割に、でも実際は子供であるとはっきり表わされてしまっている今の発言は、おそらく誰もが笑ってしまうだろう――とリュシファーは笑いが止まらなくなっていた。

それに対し、突然笑い出されたレティシアは、自分が何か変な事言ったのかと少し恥ずかしくなって何なのか尋ねると、目から涙を少しリュシファー浮かべてまで笑いながら答えられた回答の言葉は、全然言葉になっていないものであった。

――なんとかして聞こえたのはここまでである。

「だからな…よ、よくわかんないのに…っ、俺以外にっ、ぷっ……ひー駄目だ。言えない――ちょ、待って。あっははは…っ」

……『よくわかんないのに』『俺以外に』…と、そこまで説明しようとして笑いがこらえられなくなったのだろうというのはわかるが、聞いたところをつなげてもよく意味が解らない――。

“よくわかんないのに俺以外に”……何なのだ？　さ、さっぱりわからん！！

と、レティシアは混乱していたが、でも気になって仕方がないので聞こうとするが、目の前の男はとても答えられる状況ではなさそうである――。

そして、少し待つのだがそのうちに怒りがわいて来て怒鳴るように言った。

「なっ…何だっ…笑ってちゃわからないっ…ちゃんと言えっ！」

その声にリュシファーは手を目の前に差し出して“待て”という様なジェスチャーをしながら、なんとか平静を取り戻しかけ、レテ

ィシアに『だから、よくわかんないのに俺以外に、大真面目に“大人扱いして欲しい”なんて言っちゃ駄目だぞ？　勘違いされても知らんからな』って言ったんだと、一応わかるような言葉で言って来たが、実際はもっと笑いが含まれていて途切れ途切れだった。

しかも、それは何故か答えなのか妖しいところだ――。

ちゃんとした答えを気になっている様子のレティシアを、リュシファーは全く相手にせずに魔法でさっと氷を洗面器に入れ、レティシアの額のタオルを水の中に入れて冷やし、レティシアの額に乗せる。そして頭をよしよしと撫でた。

「さぁて、お子様はイイコだから寝ようなぁ」

と、気持ちが悪いくらいにやにやしている――。

ものすごく侮辱された様な怒りを感じてレティシアはその手を振り払った後、しつこく聞いてみたのだが、リュシファーは面白がるように濁されてちっとも教えてはくれなかった――。

そのうちレティシアは諦め、ふて寝する事にしたのであった。

――だが、時々思い出したかのように笑いをこらえるのが聞こえて来て、なかなか寝付けなかったことをよく覚えている。

――――……

……

――なかなか寝付けないと思っていたレティシアだったが、ちゃんと眠りについていた様子で、気がつけば外はもう明るくなっていた。

時計を見ると、いつもならもうとっくに朝食が済んでいる8時を少し過ぎている――。

――もう、隣の椅子にリュシファーはいない。

多分、あれだけ朝まで看病していたのだ、さすがに今日は寝たのだろう。

しばらく、ぼーっとしていたが熱は落ち着いた様に思ったレティシアは、トイレに向かうため布団から出て、部屋を出ていく。

真正面の廊下までのドアが先に見える通路を歩き、扉を抜け、トイレまで向かうために廊下を歩いていると、前からミグがレティシアの姿を発見して駆け寄ってくる。

「――レティッ…！　おっ起きて大丈夫なのかっっ？」

パタパタと駆け寄ってくるミグに、レティシアは元気そうに笑顔で答えた。

「あ、おはよーミグ。なんか心配かけたみたいで、悪かったな。体調も別に悪くないしさ、トイレ行こうと思っ――わぁっ…！」

話をしていたミグの顔しか見ていなかったレティシアは、途中でミグのその頭上から額に向けて突然伸びた何者かの手に、少し驚いて声をあげた。

しかし、それは心配そうな面持ちでやってきた――兄、エルトの手だった。

「――いやっ、大丈夫ではないっ。昨日よりは良いかもしれんが、…まだ少し微熱がある。トイレが済んだらちゃんと寝てるんだぞっ？　――悪いがミグ、俺の代わりに送ってってやれ。じゃあ、私は用があるので行かねばならんのだ。ではまたな――」

「あ…あぁ……、――了解」

ミグがそう返事をするのも聞かずといった様子で、エルトは足早に下の階へ降りていく――。　不思議そうにあっけにとられていたレティシアは、ミグから『今日からしばらく父上の遣いで、ダムルニクス王国へ旅立たれる事に今朝決まった様で、準備で忙しいみた

いだ』とエルトの急ぐ理由を聞かされた。

ダムルニクス王国は、幼い頃レティシアも一度遊びに行った事があるとレイモンドから聞かされた事があるが、幼かったので全然覚えていない――。

ダムルニクス王国――。ルーセスト大陸の南東の端に位置するエンブレミアからは、はるか西に位置する王国である。その国を訪れた多くの者は、水や森に囲まれたその美しい緑に目を奪われるといわれ、またその王国の王族達は代々美しい声色を持ち、一声歌えば小鳥さえその音色に聞き惚れて周りを取り囲むともいわれている――。

争いを好まない平和な国でもあった。

――だがそれは、エンブレミア王国が国王エリックではなく、４代前のエンブレミア王国国王バルディアの治める時代は争いも絶えなかったことも背景にいれなければならないだろう――。

何度か行われたそのエンブレミアとの争いにより兵力の差は激減し、押され始めていたダムルニクス王国の戦況は劣勢を余儀なくされていく最中、はやり病に倒れたエンブレミア王国国王バルディアに代わり、今から3代前の女王フレイア（唯一の女性の国王）が即位してから、状況は一変した。女王フレイアは争いを望んではおらず、先代から続いていたために争いを続けていただけであった――。

兵力が残り少なくなっていたダムルニクス王国の状況を報告を受けるなり、使者を送り、当時のダムルニクス王国国王ヴァリウスに、『これ以上の争いは無駄であり、互いに同盟を結ぶこととしましょう』という盟約をダムルニクス王国に掲げ、国王ヴァリウスもそれを

承諾し、やっとこの争いは終わりを遂げたという――。
女王フレイアの慈悲により、その現在の美しい国は守られたという話が残っている――。その盟約の元に、ダムルニクス王国がエンブレミア王国と同盟国となった今でも、その血生臭い歴史は、忘れてはならないのである――。
現在のダムルニクス王国国王ノイエル様は、男性ながら女性に近いといった様な風貌で、声も女性の様に澄み、優しい物腰であるが人柄の良い人物であられると、何度か国の執務で足を運んでいるエルトに聞いた事があった。
エルトが大急ぎで駆け降りていった階段を見つめて、レティシアは「ふぅん……」と呟いていた――。

――――……

朝食を運んできたマリアが、レティシアの口におかゆを食べさせていた。
一度、マリアが心配でレティシアの様子を5時半くらいに見に来た所、リュシファーは寝ずに看病し続けており、かなり疲労していたのか椅子でうとうととしながらも　毛布を掛けたマリアにはっと気付いては、慌ててレティシアの額のタオルを取り替えたりと、一生懸命看病していたことをその時に聞かされた――。
そして、レティシアにも休養が必要だという事で、国王がリュシファーには暇を取らせ、今日は部屋で休んでいるとも言っていた。
「食事が終わったら、静かに姫様もお休みになっていてくださいね――」
「…あぁ。――わかった」
レティシアは、昨日のリュシファーの様子を思い出していた――。
確かに疲労の色を見せながらもリュシファーは側につき、看病してくれていた。
私がふて寝してからも、ずっと看病を続けてくれていたのだ。…
…無理もない。

食べ終わった後に水分を摂るようにと変わった味のフルーツティーを淹れた。特別美味しいわけではないが、悪くなかったので飲んだ後に聞いてみると、実はリュシファーが作った薬だった様だ。

額に乗せたタオルを替えると、マリアはレティシアが飲み干したそのカップを下げて、部屋を出て行った――。

……私はまた皆に心配をかけてしまったのだな――…

今日は大人しくしていよう…と、ぼーっとそのままベッドの上の天井を見つめていた。

レティシアは、少しだけ熱が上がっている様に少しずつ眠くなっていき、レティシアはまた眠りに落ちていったのであった――。

――――――…

つづく。

【第一章】†ｅｐ．８　おとな†（後書き）

気がついたレティシアに対して、相変わらずリュシファーは子供扱いしてからかってます。
ええ、レティシアは素で何もわかってないんです。
ほーーーーんのちょっとだけ大人回でした。
あと、ダムルニクス王国とエンブレミア王国の関係性についてもここらで入れました。

【第一章】†ｅｐ．９　言えぬ言葉†

ちゃぷん・・・

「レティシア様、本日はラ・ヴェンダーというリラックス効果のある花の湯でございます。いかがです？？」

底が見えない様な、濃い薄紫色をしたその浴槽には小さな紫の花が沢山浮いている。広々とした浴室中たちこめる湯気とともに、このラ・ヴェンダーという少し青臭い様な不思議な花の香りがむせ返るほど匂ってくる。

レティシアには正直、その香りにリラックス効果があるのかわからなかった。

「……悪くはないな」

しかし、いい匂いである事には変わりなかったので、レティシアはそう返事をした。

湯の温度は調度よく、昨日は熱があり入れなかった風呂のお湯に浸かりながら、手でそのお湯に浮かぶ花を湯とともに少しすくい上げては、目の前でちょろろろという音をたてながら流し落とし、手に残った小さなその花を手に取って、レティシアは見ていた――。

「――ある国では、それを香油にして髪や肌にも使うそうですよ・・・」

浴槽に一番近くに立っている侍女がふふっと笑いながら穏やかに微笑んでいる。

「へぇ・・・」

――レティシアは、幼い頃から侍女たちに髪や身体を洗って貰っていた。

シャンプーやらトリートメントから、身体の隅々まで全て侍女に

洗わせるというのが、この国の慣わしなのである。無論、王族であり成人するまでの女性に限ってという話である。

１５歳で成人が認められるこのエンブレミアでは、もちろん王女であるレティシアがその一人であった。

とはいっても、女王フレイアが治めていた3代前の時代にまで遡っても、ここ何代か何故か女の子は産まれていないのであった――。

レティシアは、この王国にて久しぶりの王女なのである――。

そして、問題児ではあったが今回ついにエリックが激怒するまで、少しは甘やかされて育てられていたというのも、そのせいという背景があったのである――。

侍女達は、既にレティシアの隅々までを洗い終わり、あとは入浴が済むのを待ち――、身なりを整えるだけなので、その内の1人は浴室に待機させ、残りは全員タオルなどをせっせと準備し始めていた。

…リュシファーにちゃんと礼を言わねばならぬなぁ……。

と、レティシアは湯に浸かりながら考えていた――。

ちゃぷんっ……

「あ、姫様もうおよろしいですか――？　ではこちらへ・・・」

湯から出ると侍女たちがレティシアの身体を拭き、髪をぱんぱんっとタオルで水気を拭き取ったら、後は髪の乾燥とセットは、風属性の応用であり身支度を整えるためなどの“簡易魔法”の一種で行うのであった。

――『簡易』とはいっても、これは一般には知られていない魔法であり、高等魔法を扱える者でもなければ知らないものが多数である。

魔法があまり上手く使うことが出来ないレティシアであっても、

応用と言えどその視点を変えれば基礎を知らずとも使えるという簡単な魔法なので、幼い時よりレティシアは教えられ、少ない中でも使える魔法の一つである――。

この簡易魔法以外はというと、基本魔法である『火』『水』『雷』といった魔法は上手く使えず、『風』に関しては攻撃するレベルではないものであれば少し使えるといった具合で、レティシアにはさっぱり魔法が使えないようなものであった――。

というよりも、それは、魔法を習い始めた頃にレティシアの使った火の魔法が、子供とは思えない程その威力を発揮してしまったことが背景にあった。その時のレティシアの魔法は、城の敷地内の木を一本全焼させてしまったのである。

そして、子供というのは無垢なものである――。

それまではミグと一緒に興味深々で魔法の勉強をしていたにも拘らず、その一件以来、レティシアは一切魔法に興味を示さなくなり、少しレイモンドに厳しく魔法の勉強をさせられた際も、集中できずに失敗に終わるといったあり様だった。

――怖くなったのである。

そのため、レティシアは魔法よりも剣術に興味を注いでおり、国王エリックは、そんなレティシアの様子に剣術は教えないようにと剣術を教育させていた兵士長テヴァンに、剣術の授業を辞めさせたのである。

しかし、どうしても剣術を習いたかったレティシアは、密かに『アレン』という一人の若くありながらも、可能性を秘めた利き腕の若い兵士に現在も時々剣を習っているが、その事は誰も知らないのであった。

もともと習っていた頃からレティシアの剣の腕はかなりのものであり、実戦経験はないものの、おそらく外に一人で出てもエンブレミア周辺に現れる弱い魔物であれば、余裕で戦えるであろうと兵士長テヴァンは教えている時に、国王に話していた。

そしてこっそり水曜の真夜中から早朝にかけてだけ、アレンはレ

ティシアに剣術を教えていただけだが、レティシアは上達が早く剣の腕はテヴァンが知る時より上がっているなと、アレンは密かにレティシアの腕を見込んでいた。

この事は、ミグにさえレティシアは話していないので誰も知らない。

――話はそれたが、簡易魔法の種類の中には、この髪や身体の乾燥と髪型を整えたり変えたりする事以外に、そんなに使う機会は多くないのだが、“髪の色を変えたり瞳の色を変える”といった『変装』のためのものまである。

実用的なものでいうと、持ち物が持ちきれない際にしまっておく異次元空間であろうか。

ゲートの様なものをその空間につなげ、その空間の範囲内ならば物をしまえるといった異次元に用意された道具箱のような役割を持つものといった魔法も存在している――。

レティシアに着替えをさせるというのも、これら簡易魔法の一種を使うのだが、着替えに関してはその者のセンスが問われるという重大な業務でもあった。

しかし、クローゼットの様に異次元空間に何着か服をしまって置き、パチンと指を鳴らしただけでさっと着たり着せる事が出来るのはセンスさえあれば楽である。今回の“王女の入浴後の着替え”という場合に関しては、レティシアやミグのお世話を任されている侍女マリアが、きちんと着替え用の服と下着を事前に用意してあり、後は侍女に任せて『着せるだけ』という作業なので、センスがなくともパチンと指を鳴らして簡易魔法を使えば済むことなので、楽なものだ。

それには、身体と髪を拭いた後は侍女が一人残れば十分なので、それ以外の者は後片付けに取り掛かるため、更衣室を退室して行けるほどあっという間である。

「ありがとう。おやすみなさい」
レティシアがそう言って浴室を出ようと扉に向かうのを、残された侍女が見送る。
「――おやすみなさいませ、姫様」
こうして、レティシアは浴室を後にしようと扉に手をかけ開けた時だった――。

「あ」
「あ」

――二つの声が、ほぼ同時に響いた。
城の浴室場の男湯と女湯の扉は向かい合わせに位置している。
偶然、レティシアが出たと同時に男湯からも人が出て来たのだ。
…それも、よく知ってる人物が――。

髪はタオルで拭いただけで、まだ濡れたまま漆黒の様な色。肌を紅潮させ、見下ろす様にレティシアを見るその人物の瞳だけは、いつもの様に明るい青空の様な色に澄んでいる。それは意外そうな表情を浮かべている。
そして、そのよく知る人物が、その白いバスローブに身を包み出てきたのだった。

「リュ…リュシファーも風呂か――」
その様子にレティシアが先に一言口を開いた――。
「あ……あぁ。レ、レティシア様…。病み上がりで風呂なんか入って大丈夫なのですか？」
周りに聞かれる可能性も考え、丁寧にそう言ってからリュシファ

ーがレティシアの額に手を当てるが、熱はない様である。
「――安心しました。でも、医学の心得のある身としては、『それはあまり好ましくないですね…』としか言葉が出ませんねぇ…」
「だ、大丈夫だ…。もう熱もない――昨日から汗もかいていたし、やっとさっぱりしたんだ。そう固い事言うな――……」
少しだけ昨晩からのリュシファーへの感謝の気持ちを言おうとしたのだが、やはりそれを口にすることは出来ず、入浴して少し紅潮していたその顔をそらし、レティシアは先に歩みを進めた。
――何を私は苛々と…。この者には昨晩の礼を言わねばならんというのに……っ。
もう言えなくなってしまったことに、レティシアは内心後悔していた。
もともとお礼を言うのが苦手で照れてしまい、つんとした態度を取ってしまう事が多かったレティシアは、今回こそはと入浴中には思っていたがもう出来なくなっていたのである。
男湯にはない香料の漂う空気の乱れがリュシファーの方へ流れてくる。
「――『ラ・ヴェンダー』、か……」
一言そう言うと、リュシファーは自分も歩みを進める。
「……！」
自分はさっき知ったのに、知っていた事が気に食わなかったレティシアは、振り向かずに一瞬、動きを止め不機嫌そうに口を開いてからまた歩みを進め出す。
「よくご存知で……っ」
少し間を開けてゆっくりと歩きながらリュシファーは、周りには聞こえないほどの声でこっそりと「……まぁな」と独り言の様に一言返事をした。
浴室のある廊下から、レティシアが自分の部屋ではない方向に歩みを進めるので見ていると、どうやらマリアに飲み物を入れて貰っている様だった。

つきあたりにあるレティシアの部屋へ繋がるドアは、自分の部屋を通り過ぎたところにあり、帰る方向は同じだったので、リュシファーは少し待つ事にした。

レティシアの足音が近づいてくる――。

その方向とは反対方向である自分の部屋の方を向き、近づいてくる足音を確認しているリュシファーの目の前に、おもむろに氷と薄紅色の飲み物が入ったコップが差し出された。

「……！？」

驚いた様にそれを差し出したレティシアを見上げながら、とても好意的に言われたものとは思えないレティシアの次に言った一言に、リュシファーはしばし唖然としていた。

「――その先のテラスで少し涼むから、暇なら――ちょ、ちょっと付き合えっ……」

予想外――。

唖然としながらリュシファーがコップを受け取るなり、レティシアは“その先”という、先程マリアに飲み物を貰った方向に向き直り、歩みを既に進めている――。

しかし、熱が下がったとはいえ体調を崩される訳にもいかないので止めようとしたが、既に自分が受け取ったそれを見つめながら、自分が買収されたというような気分になり、肩を落としてからリュシファーも歩みを進めた。

「はぁ～……しゃぁないな…」

とは言いながらも、レティシアが可愛気もない言い方ではあるものの、“一応”テラスでの湯冷ましに誘ってくれたことに、リュシファーは少し嬉しかった。

――メイドが駐留しているミニバーカウンターの前で、マリアが微笑んで『病み上がりですから』とブラウンの暖かそうなブランケットを2枚渡してくれたので、リュシファーは軽く挨拶した後それを受け取り、もう姿が大分遠くに見えるレティシアの後を追っていく――。

その最中、昨晩のエルトとの会話の言葉を思い出していた――。

『素直に礼は言えぬがコイツなりに感謝はしてる』――か。

そうその場で思い出すまま呟いたリュシファーの口元は、少し微笑んでいた――。

――――……

……

つづく。

【第一章】†ｅｐ．９　言えぬ言葉†（後書き）

素直じゃないので少しカチンと来る事があると、レティシアはつい言えなくなってしまいますが、感謝はしていた様ですね。
というのがテーマ回ですが、少々説明も入りました。
ちなみに簡易魔法…私も使いたいです。（ＢＹ月葉りんご）

【第一章】†ｅｐ．１０　保留――そして…††

テラスに着くと、活気ある街のざわめきが遠くにも聞こえていた昼間とは、うって変わり、寝静まるのにはまだ少し早いのだが外は、その静けさを取り戻そうとしていた――。

――街の灯りもほとんどなく街灯が煌々と明かりを灯しているのが、少し先の街の方に見えるという以外は、何も闇を案内してくれる道標がない様に辺りは暗黒の世界。

そして、テラスから見える城から城門へと続く道を取り囲む芝生を照らす灯は少しだけだが、それでも一人の兵の人影が城門へと移動していく姿ははっきりと見える。

…見張りの交代だな―と、レティシアは思った。

テラスには、そこに寛ぐための椅子とテーブルが用意されており、そこに腰かけてレティシアはリュシファーにもその席を薦めた――。

そして、外の空気は少し夜で冷えていたにも拘らず、暑そうに手でパタパタと顔を仰ぐレティシアのその様子にリュシファーは、一枚のブランケットを膝の上にかけてから席に腰を下ろした。

「脚だけでも掛けとけ…身体は温まってても夜に外にいれば体はすぐ冷える……」

と、そう言ったかと思うと、リュシファーは煙草に火をつける。

先程の丁寧に取り繕った口調と違い、いつもの調子に戻っているリュシファーに、やはりこうじゃないと違和感がするんだよな…と、レティシアは密かに考えていた。

「――で？　なんか俺に話でもあったんじゃないのか……？」

すぅーっと吸い、ふぅーっと白い煙を吐く間を開けて、目線は煙に向けたままでそれは言われた。

レティシアは正直何のことかと眉をしかめた。しかし、その言葉

にレティシアは、少し申し訳ない様な気持ちになりこう言った。
「…お互いに湯上りだったから涼むのに丁度いいかって思って、声かけただけだ。とくに何かあるわけではないぃ…」
あまりに素直に言われたレティシアのその言葉に、拍子抜けしたリュシファーは、そのうち可笑しくなってきて冗談ぽく言った――。
「…お、お前なぁ～俺がそんなに暇に見えるか？　……まぁ、いいけどなぁ……」
「わーっ、何だ今のっ、なんか私がすっごく暇人みたいじゃないかっ。人がせっかく誘ってやったというのに私の事暇人だと思ってたって言ったっ」
「べ……別に、そうは言ってないっ」
そう言ったリュシファーの顔は、ぎこちなく苦笑を浮かべていたので不愉快になり、レティシアは絶対にそう思っていたに違いないと思い、『思ってたっ』『だから思ってないっ』の言い合いをリュシファーとした後に、この言葉を放り投げた。
「大体っ！　目付け役なんだから――、姫様の監視をするのはお前の仕事だっっ」
「……！」
一瞬、黙ったかと思うとリュシファーの口元は、にやっと微笑みを浮かべた。
その微笑みに見覚えのあったレティシアは、空気が変わり始めている事に動揺していた――。
「な…っ、なんだ？」
何とも言えない空気が辺りを包んでいる中、リュシファーは煙草を吸いながらも、レティシアに意地悪い視線を送って来てにやにやしている。
含みを持つように意味ありげな微笑みを浮かべ、あざ笑うかのように高い山から見下ろしている様だ。そして、そんな緊迫した空気を作るという事にかけてはこの男は天才に違いないとレティシアは思った。

そしてはっとした――。

そうだ…リュシファーは、今まさに物凄い策を思いついた天才的策士そのものだとレティシアは思った。

その策士の自信ありげな表情にレティシアは、妖しい黒い煙にでも巻かれている様な緊迫した空気が、既に辺りは支配されている様な気がして焦り始めていた――。

自分は何の策も持ち合わせておらず、額に汗を滲ませながら焦りを感じつつも、風の吹き荒れる中、黙って睨み合いをするシーンがすでにレティシアの脳裏には出来上がっていたのだった。

――また、もしかしたらこの精神的にダメージを与える様な空気こそが既にしかけられたこの男の罠なのでは……！　と、馬鹿らしい事を考え始めていたその時――。

リュシファーは煙草の火を消し、こちらを見る。

“…天才策士と恐れられる男が（リュシファー）……今！

その頭上に光輝く快心の策を明るみにしようとしていたのだった……！！”

（注意）→あくまでもレティシアの妄想の中の予告の声です。

――Ｂｙ作者。

「――いや、何……。“ほぉ～ぅ…”と――、思ってなぁ～」

その言葉通りに意地悪く目を細めたリュシファーは、レティシアを見た。

ぎくっとして視線が合ったリュシファーのその顔は、一層恐ろしく感じた。

それは夜で辺りが暗いからか…何を言われるか怖かったのか…、レティシアは引きつった笑みを浮かべてしまっている事に気づいていた。

「…そ、それは、どういう…意味だ？」
レティシアがかろうじて口から紡いだその言葉も、声が上ずってしまい少し途切れてしまっていた。…額には汗も滲み、そして、より一層緊迫した空気が辺りに流れている。

「――知りたいですか…？」
と、策士はレティシアを煽るように言った。
その言葉にレティシアはごくっと息を呑んだ。
…わざとその様に物静かな物言いで、精神的に追い詰めていくのがこの男の手口。
既に天才的な策士に姿を変えているリュシファーに頷くと、最高の策に耳を傾けた。
……。

…その直後、レティシアは驚愕の表情の後に、安堵した様に息を吐く。
「なっ…なぁんだ～。そんなことかぁ。緊張して損したあ――お、脅かすなっ……もー」
そこまでレティシアが言った所で、リュシファーが呆れた様に首を横に振った――。
「ん？　レティ、それは安心するところなのか……？」
リュシファーが言う通り、想像以上はましだったもののレティシアは慌てて否定する。
「――いや、ちっ、違う…それは駄目だっ」
「――だろう？　…安心しろ、そんなに暇ではないからな……」
そう言ってリュシファーは笑い出した。

――リュシファーの答えというのは、
『大体、目付け役なんだから――』と言った私のその言葉に…
『じゃあ、俺がどこ行くにも監視してもいいんだな…？』というこ

とだったのである。
予想通り嫌がっているレティシアの反応に、リュシファーが笑い出した様子を見て、つられてレティシアも笑い出していたのだった――――。

“そんな風に、教育係である者と笑い合うなんて思っても見なかった。

その後も、性格が悪いだとか言い合いをしては夜は更けていった――――。

悪い者と思ったり、そんなに悪い者でもないと思ったり――…
でも、きっと人間なんてそんなもんなのかなとも思った――。
いい時はいいヤツ――。悪い時は嫌なヤツ――。
きっと、そういう判断でいいんだと思う――。

ただ、リュシファーへの評価はころころと変わってしまうので、よくわからない人物ではある事も確かだが――――。

そんなわけで――リュシファーへの評価は『保留』にしようと思う。

――そんなことを思った、夜だった…。”

―レティシア　日記より―

――――…

――そんな二人の様子を、遠く離れた廊下から密かに見ている者たちがあった。

「…ほぅ、レティシアはもう具合はいい様だな。あの者が側についておるのなら心配は無用か――にしても、うまくやっているようだな。今度の教育係は――」

「――はい。…おそらく勉学にお励みになられるかと――非の打ち所がない者を陛下が連れて参られたと、ミグ様に仰られていたと聞き及んでおりますじゃ……」

その言葉に二度頷いた後、陛下と呼ばれた声の主――エンブレミア王国国王エリックは厳しい目で――…。

またエンブレミアの白き虎眼と呼ばれた男レイモンドもまた同様にその目を光らせながら、その二人の様子を観察していた――。

レイモンドとエリックは、レティシアの具合の様子を部屋に見に来たのだが、マリアに湯冷ましにテラスへ来ている事を聞きつけて足をここまで運んだのである――。

とはいっても、テラスが見えるという場所ではあるが、二人には気付かれない程離れた廊下の通路を曲がったこの場に、その影を潜めていた。

そして、安堵の色もその目に浮かばせたエリックは、二人の様子をしばし無言で眺めていたのだが、途中、息を吐きながら考えていた――。

いつも怒鳴りつけているものの、我が娘が突発的に高熱に度々苛まれる事は、国務に追われる中、エリックは常に心配していたのである。

忙しく様子を見に行く事が出来ぬまま、エルトによりレティシアが回復したと報告は受けていたが、遠目からでも無事を確認しておきたいという親心であった。

レイモンドもまた、幼い頃より手を掛けさせられていたものの、

レティシアは自分を“爺”と呼び怖れはしているがその存在感というのは大きく、孫の様に思っていたのである。無事で良かったという安堵の色は、この男にも伺えたのであった――。

エリックはそんなレイモンドに気付き、肩に手を置いて首を横に振りながら言った。

「――親というのは気苦労は耐えんな……レイモンドよ」

少し眉を上げて意外そうな表情を浮かべながらも頷いたレイモンドに、苦笑してからエリックは更に口を開いた。

「――とにかく…私の目に狂いはなかったようだな。……この様子だと――。“あの件”も――――…」

既にエリックのその目は、鋭く細められていた。

レイモンドも同様に目を細め意味ありげに沈黙した後、「左様で御座いますじゃ…」と答えた。

「…レイモンドよ――。あの者に、期待しておる……と伝えよ」

そう言ってテラスからその身をひるがえす様に背を向けると、エリックは歩みを進める。

「はい…仰せの通りに――」

エリックのその背に向かってゆっくりと直り、レイモンドは答えた。

「お前ももう休むといい――――」

歩みを一度止めたかと思うと、そう一言言い残したエリックが歩みを進め、姿を消していくのを、レイモンドは黙って頷くとその後姿が見えなくなるまで目で追っていた。

全て見届けた後、今度はゆっくりとテラスの方に向き直り、息を潜めるほどの静寂にその耳を傾けていた――。

しばらくしてから、最後に重い息をゆっくりと吐き、静かにその場から立ち去っていった宰相大臣レイモンドと、エンブレミア王国

国王エリックとの――。
何やら不穏なやりとりなど、
二人は全く気付いていなかったのだった――。

――そんなレティシアに……

暗雲の影が忍び寄ろうとしていたのは――、

それから5ヶ月後の事であった――――……

――――……

……

†第二章　忍びよる暗雲の影へつづく†

【第一章】†ｅｐ．１０　保留――そして…††（後書き）

第一章がやっと完結です。
お疲れ様でした。背景とかキャラとかを色々と説明しなければ進めないので、色々と長くなってしまいました。今回は少し、おふざけ回でもあります。すみません。
なんだかんだリュシファーとは馬が合わないようですが、たまには悪くもない時もあります。新しい教育係リュシファーに対するレティシアの評価はまだ保留という感じで終わりにしました。一方で、何やら怪しい動きも最後に見えましたが、それは2章でやっと色々と展開が進みます。第一章まで読んでいただきありがとうございました。では、第二章でまたお会いしましょう。月葉りんごでした。

【第二章】忍びよる暗雲の影†ｅｐ．０　５ヵ月後†（前書き）

第二章がスタートです。
城でのはじまりが第一章だったのですが、二章はやっと少しずつ展開します。

【第二章】忍びよる暗雲の影†ｅｐ．０　５ヵ月後†

リュシファーがエンブレミア王国レティシア王女の教育係兼目付け役に任命されてから、もう５ヶ月が経過しようとしていた――。

――ここは、リュシファーの部屋…。

リュシファーは机に向かっている。黒縁の眼鏡をかけ、手に持っていた赤いペンを置き、何やら一段落した様子で息を吐いている。

「馬鹿姫…ね……」

“馬鹿姫”というのはもちろんレティシアのことだ。勉強が嫌いで切り札を手にしたから良かったものの…もし手にしていなければ、おそらく勉強などしなかっただろう。

「――兄さん！」

突然、扉が開いて振り返ると、自分と同じ日にエンブレミア王国王立研究所で勤務することになった弟のサーシャが姿を現した。

「なんだ。お前か…珍しいな。…どうした？　研究に行き詰まりでもしたか…？」

２つ違いのサーシャだが、背丈は少し低いくらいで二人は同じ歳位に見える。無論、エルフの血筋なので当たり前だが１９歳のサーシャは、リュシファーと同じく１８歳で見た目の成長が止まるためであった。

髪形や髪や瞳の色が違うせいか双子という程は似てはいないが、よく見ればどこか雰囲気が似ている。

「やだなぁ…上手くいってますよぉっ。僕の事よりもっ。…そちらの方はどうなんですか？　そろそろテストも終わって成績つけるんですよねっ？」

「…心配して来たのか？　はは、心配される事もないさ……」

「――というと…？」

リュシファーは先程まで自分が作業していた一枚の紙に目を配る。
「まだつけ途中だが、見るか？」
それを少し微笑んで差し出し、自分は煙草に火をつけた。
不思議そうに受け取ったサーシャは、それを見てしばし唖然としている。
リュシファーが教育係に任命されてからのレティシアの初めての成績表――それを見たサーシャの反応は、リュシファーの想像通りだった。サーシャは、どうやら固まったまま動けない様だ。灰皿の吸殻を一度ゴミ箱に捨てながら換気のため、窓を開けた。
風が部屋をかけぬけていくように吹き、リュシファーの髪を揺らす。
「…馬鹿姫なりにかなり頑張ったみたいだな。見ての通りだ。――今までやらなかっただけで出来ない訳ではなかった様だ…」
窓の枠に腰をかけながら煙草を一吸いして、心の中で切り札のことを思う――。
…それか、もしくは――俺に見下されるのが悔しかったのかもしれん…。
リュシファーは呆れた様に微笑んで白い煙を吐いた。
外を眺めるリュシファーに、サーシャが我に返るなり尊敬の眼差しを送る。
「すっ、凄いじゃないですかっ…でも一体…どうやって勉強させたんですっっ？」
サーシャに投げかけられたその質問に答えるわけにはいかず、誤魔化すリュシファーにサーシャは思考をあれこれめぐらせて予想を投げつける。
しかし、リュシファーは全て首を横に振ってこう言った。
「――悪いな…。いくらお前でも教えるわけにはいかない。」
「え…」
サーシャは意外そうに眉をしかめている。

「――俺と馬鹿姫の秘密…ってところだ。さ、俺は今日夕食前までにこれを仕上げて陛下に提出せねばならんのだ。お前も戻れ」
リュシファーに促されるままサーシャは、ぽかーんと唖然としながらドアの外に出されてしまったサーシャは、研究室までの帰り道も“兄さんと姫様の秘密”についてあれこれと頭を悩ませていたという……。
「偶然とはいえ、いいもの拾ったなぁ――」
ふ……と笑みをこぼしながら、リュシファーは呟いていた。
「…さてと、早くつけて陛下に報告に行かなくてはな」
リュシファーは、ふっと微笑んでそう独り言を言うと、再び赤いペンを手に取り作業を続けたのだった――。

一方――。
レティシアは授業も終わってすぐに、屋上に来ていた。
空は青く澄み渡っていた。一週間ほど、雨が降り続いていたので久しぶりの快晴だ。
「あーっこらっ。エミュ～！　駄目じゃないかぁ。頭の上でボロボロ落とすなっ――」
レティシアに“エミュ～”と呼ばれたのは、猫――の様で猫ではない…。それでは、『一体何なのか？』と聞かれても――『……猫？』としか答え様がないと知る者は言う。

白い猫の様な容姿だが、その背には羽が生えパタパタと飛び回り、「ミュ～」と鳴く。
なんともこの不思議な猫（？）は、レティシアとミグが城を抜け出し、こっそりと近くの森へ魔物退治に向かった際に、偶然、魔物に襲われている所をレティシアが魔物を倒し、怪我をしていたのでミグが回復魔法をかけてあげて二人で助けたのだった。
その後、森の魔物を退治してこの不思議な猫（？）とバイバイして、二人でレティシアの部屋に戻ると、バルコニーで鳴き声がして

見るとその生き物がいた――。
背にある羽で空から二人を追ってきたその猫（？）は、ひょっとしたら魔物の子供なのかもしれないと二人は思ったが、見た目は白くて愛くるしい顔と可愛らしい声で鳴き、おまけにちゃんと言葉が解る様子で言いつけを守るので、いつか森に返す時までは内緒で飼う事にしたというわけだった。

城の者では唯一マリアがエミュ～のことを知っている。マリアは無類の猫好きで、それが幸いしてレティシアやミグが連れて来たエミュ～に『ちゃん』付けで“エミュ～ちゃん”と呼び、世話をしてくれているのだ。
エミュ～は基本的に何でも食べ、ぽんと空中に投げたクッキーまで食べる。
パタパタとそれを器用に飛んでキャッチし、レティシアの頭の上で食べる――というこの作業を何度繰り返しただろうか。
レティシアは自分の頭に何度も溢されるクッキーのカスを払うのも面倒くさくなり、エミュ～を床に降ろして自分は屋上の塀に「えいっ」と飛びあがり座って遠くを眺めながら呟いた。
「……暇だ」
この数ヶ月、レティシアはこっそり城下に抜けたりせず、真面目に城で過ごしていた。リュシファーは毎日、レティシアに宿題をたんまり用意してきた。
必死にそれをこなすため、勉強をしなければならなかった。
“もし、宿題をやってこなかったら…わかってるよな？”
とか言ってくるのはわかりきっていたので、言われなくてもやることにしていた。
リュシファーが“人間は難しく考えすぎる”と言っていたのが今はよくわかる。
エルフの者達が博学だと言われる理由は、そこにあるのかもしれない。

エルフ族流の考察で進む授業は、レティシアにとって目からウロコのようで、すんなり頭に入ってきて勉強が苦でもなくなっていた。人間、出来るようになってくると面白くなってもくるものだ。今日はテストの返却だったが、レティシアは意外と間違った箇所も少なかったので、解説もほとんどなく、おまけに珍しく宿題もない。１時間半程で授業が終わってしまい、１１時半にお昼を食べたレティシアは、暇を持て余していたのだった。

ふと、頭にリュシファーの褒め言葉が浮かぶ。

“――よく頑張ったな…。”

レティシアは得意げに、ふふっと床にいるエミュ～に向かって微笑んでいた。

エミュ～は不思議そうにレティシアを見上げている。

遠くを眺めながら足をぶらつかせるこの姿を、リュシファーが見たら怒るだろうなぁとレティシアは思った。しかし、リュシファーはここにいない。怖いレイモンドもいない。

めったに人が来ることがないこの屋上だけは、唯一のレティシアの自由な空間かもしれない――。

しばし、暖かい陽気と心地よく吹く風に翡翠の様な緑石色の長い髪を揺らしながら、レティシアはぼーっと考えごとをしていた。

「…そうだ！」

突然、塀から床に飛び降りるとレティシアは、いい事を思いついた様に輝いた顔をしてから、申し訳なさそうにエミュ～に向かって言った。

「エミュ～、ごめん。用ができたから――またねっ」

そしてそう言いながら走って階段を駆け降りていくレティシアの

姿を、エミュ～はきょとんとして首を傾げながら不思議そうに見ていたのだった。

――――…

その頃、大広間――。

国王エリックの元に、ダムルニクス王国よりの使者2名が謁見していた。

重い口を閉ざした深刻な面持ちのレイモンドの姿もある。そして、エリックとレイモンドの傍らには、不安そうな面持ちで立っている――琥珀の様な金色の長い髪を後ろで結わえた美しい王妃リーディアが、そこに唯一の華を添えていた。髪と同じその金の瞳は不安そうにエリックに何かを訴える様に潤んでいる。

「…では――三日後とノイエル殿に伝えてくれ」

「ははっ」と跪いていた使者が後ろへと後退と一礼をし、その後ろに跪いていたもう一人も同様に後に続き、大広間の大扉は重低音を響かせながら閉じられた。

「はぁ～……」

国王エリックが大きくため息を吐いて何やら俯いて首を横に振っている。

「――あなた…」

エリックの腕に手をかけ、ずっと不安そうな面持ちだったリーディアが口を開いた。

「レティシアは――そのっ…――――！」

そう言いかけたリーディアの顔を見ずエリックは、腕にかけられた手に優しく触れた。

「…リーディア。何度もエルトにも使いを頼み、無論、書状を届けさせただけで内容は知らせてはおらぬが、既に決まっていて時を待つのみだった事だ…」

「で、ですがっ――」

そこまでリーディアが言ったところで、今まで口を開くことがな

かったレイモンドがその重々しい口を開いた。
「恐れながら王妃様、この事はレティシア様がお生まれになる前から既にお話しし、知っておられた筈でございますじゃ…」
「でっ…でもっ……っ」
その言葉にリーディアが潤ませていた瞳を、レイモンドから下へ向ける。
リーディアのその身体は小刻みに震え、きつく目を閉じたように俯いていた。
「…わ、わたくし……少し気分が優れませんので…これで失礼致しますわ……」
リーディアは力無く大扉の方へ歩みを進め、大扉は再び重低音を響かせ閉じていった。
リーディアは涙をその目に浮かべていた。おそらくエリックもレイモンドもそれに気付いていた。――が、声をかけて慰める事は出来なかった。
「――…困ったものだな……」
エリックは落胆した様に深く息を吐いた。エリック自身もリーディアと同じ気持ちが、僅かでも心の中に渦巻いているのを自覚している様子がレイモンドには伺えた。
「…陛下――」
レイモンドが心配して何かを言いかけたが、エリックは横で手をかざしそれを静止した。
「――よい、わかっておる。…国王というのは気苦労が耐えんな…レイモンド」
最近よくエリックが愚痴を溢す事に、レイモンドはふぉっ、ふぉっと笑って頷いた。
「…左様の様で御座いますな。御心労お察し致しますですじゃ……」
「アレには今夜、夕食後に伝える――。レイモンド、下がってよい」
そう言ったエリックの表情は、大きな厄介な事を抱えた様に険しいものだった――。

果たして、今夜告げられる事というのは、何なのだろうか。

暗雲の影は、すぐそこまで迫ってきている様だった――。

つづく。

【第二章】忍びよる暗雲の影†ｅｐ．０　５ヵ月後†（後書き）

各章ごとにエピソード０を作る予定です。
何かが起こり始める前兆的な感じで、まだ何もメインは起こらないけど、起こりそうな感じを少しみせておく様なものなので、そんな感じで大体把握していただければ幸いです。

【第二章】†ｅｐ．１　隠密行動†

リュシファーは出来上がったレティシアの成績表を、国王陛下に報告に向かうところだった。東塔の階段を下り本館の3階の廊下を歩き、大広間へと足を運ばせていた。

昼間の城内はわりと慌しく、侍女や兵士も廊下を行き来し、しかしそれはレティシアに授業をしている時間のリュシファーが見ていないいつもの城内の様子なのだろうと思いながら、その中をゆっくりと歩みを進めていた。

すると前に見慣れない姿が目に止まった。

髪は、くるくると巻き毛の金の髪を二つにリボンで結わえたツインテール――。服装は、紺色の魔法使いの服にとんがり帽子――。とんがり帽子を押さえながら急いでその少女は駆けていく。その後、少女は大広間へ向かう廊下の途中にある地下倉庫への階段へと、さっと消えていった。

「???」

見えたのは後姿だけだったので、顔はわからなかったが背丈はレティシアと同じ位だった。魔法使いは、この城の魔術研究室に数人いると聞いてはいるが、見た事はない。若い女の子も研究室にいるんだなとリュシファーは思い、立ち止まっていた歩みを再び進め始めた。

大広間は、廊下の突き当たりの階段を上がり、踊り場を更に折り返し階段を上がった中三階にあり、踊り場には少し外が眺める窓がついていた。

リュシファーはやはり今日は天気がいいなと、そこで少し外を眺めていると、その視界には、先程の金の髪の少女が入ってきたので思わず目で追った。

「――ん？」

少女が周りをキョロキョロしながら、裏口の柵の長い鉄の棒が外

れる筈はないのだが、一箇所だけどうやら壊れているらしく、それを外し身体を抜けさせた後それをまた元に戻し走り去ろうとしていた。

「！」

リュシファーは驚愕の表情を浮かべてしばし硬直していた。

少女がこちらに見える方向に体を向けた時、顔が見え、それは紛れも無くレティシアだった事に気づいたのだった。

「く……あの馬鹿姫……」

驚愕の表情から瞬時に呆れた表情へと一変させて息を吐くと、リュシファーは目を見開き急いで成績表を異次元空間へとしまう。

レティシアとしてはうまく変装したつもりだったが、その整った可愛らしい美少女といった顔さえ見れれば、いつも顔を合わせている者ならばすぐにわかる。

正門から抜けてどこへ行くか聞かれてもマズいので、自分も急いで地下倉庫への階段を下ると勝手口を抜ける。

先程見て知った柵の壊れた箇所を外して抜けると、それを元に戻す。

そして、このままの姿では城に関与する者だとばれると思い、パチンと指を鳴らし、髪と瞳は赤銅色、エルフの耳を人間のものへ。さらに吟遊詩人の格好に服装を変えると、急いで街の方へ走った。

エンブレミア国の城下街――。

久しぶりに出た街並を目の当たりにして、レティシアは、“人がいっぱいだぁ～”と、街行く人とすれ違いながら感激していた。

街に魔法使いが歩いていることなど珍しくもない事なので上手く変装していたと思うレティシアだったが、くるくると巻いたツインテールの金の髪と、深々と魔法使いのとんがり帽子を被っていたものの、僅かにそこから覗かせる美しく可愛らしい顔立ちに、男がす

れ違って振り返る程、何故か目立っていた。
もちろん、本人はちっとも気づいてはいない。

噴水のある広場に差し掛かった時、追って来たリュシファーがやっとレティシアを発見した。だが、『帰るぞ』と言ってもおそらく言う事を聞かなくて手間をかけさせられ、切り札をかざせば済む事ではあるが、すぐ帰すのも可哀想と言えば可哀想だとリュシファーは思った。

今回、成績をちゃんと上げてくれた事もあり、とりあえず何かあれば助けるという事で、今は少し様子を見守るという結論に達した。ちょっとした“ごほうび”である。

とかリュシファーが考えている内にレティシアの姿が消えている。慌てて少し探してみると、すぐに噴水の前で発見出来た。

「あ……なんだ噴水のとこにいるじゃない……か――!?」

発見したのはレティシアだけではなく、レティシアより少し年上くらいの男が、レティシアに飲み物を買ってきた様で、渡しているところだったのだ。

……な…ナンパ……!?

リュシファーの心配も他所に、レティシアは特に嫌そうでもなくお礼なんかを言っている。男が噴水の横にレティシアを座らせて自分も隣に座る。

――あーあ……アホか…、アイツは…。

「見かけない顔だけど、この街のコ？」

「あっ…いや、違う。た、旅をしてて。夕方になる前には宿に戻らなきゃならない――」

ほぉ～……上手い事嘘ついてるな…はは…

「そうなんだ。映画のチケットが2枚あるから、良かったらどうかなーと思って」

おいおい…断れ、断れよ……？

「エイ…ガ？　…って、何？」

がくっ……。あ……。そ、そっか。そりゃ王女様は知らんだろうな……。

「えっ…、映画知らないの？　ほら、劇みたいな感じのが映像で観れてさ、面白いぜ」

わー馬鹿っ。面白いなんてソレに言うなっ……

「ふぅん。映画というものがあるのか…面白いなら。じゃあ早く行こう」

影ながらのリュシファーの心配も虚しく、二人はすぐ側の映画の館へと足を運んでいく。

始終ツッコミを入れながら聞いていたリュシファーは、仕方がないので自分は自腹で映画の館へと入場し、二人が良く見える席へとついた。

あ～ぁ……ほんとに知らんぞ。ったく手の焼けるやつだ…。

…しかも、どうやら映画のタイトルからして思いっきりベタな感じだな。

うん。これは嫌な予感が的中しそうだ……。

『許されざる愛という名のはざまで』

リュシファーは顔をひきつらせながら映画のタイトル画面に目もくれず、二人を凝視している。

大体なぁ…。こういうセンスの奴は映画が盛り上がったシーンで大抵…あーんなことやこーんなこととか仕出かすんだよ…世間知らずもいいけど、簡単についてったお前も悪いんだぞ…？　わかってんのか？　…あーなんか苛々する……。

何も知らないレティシアは映画を真剣に見ている様子である。

…ま、馬鹿姫がわかってたらついていったりしないか……。

……。

…ばぁか。

と、心の中で呟いて二人を睨みつけるように見ていた。

しかし、リュシファーは退屈になり少し欠伸もしながら、少々映

画も鑑賞しつつその時を待つことにした。
映画は、政略結婚をさせられる公爵家の娘の話――。
でも、娘には父親の目を盗み密かに恋仲になっている者がいた。
突然の政略結婚の知らせに娘は屋敷を飛び出し、雨の中傘もささずにずぶ濡れで恋人の元へやってきて――という所まで話は進んでいた。
ありがちな悲恋の映画だな…と馬鹿にしながらも少しまともに見ていると、ついに場面は恋人が一緒に逃げようと娘に言う所まで進んでいく。
『駄目よ！　…そんなこと許されないわっ…』
『構わない…！　きっと君を守ってみせる…明日、船を頼んでおくから一緒に逃げよう』
『ああっジュリアンッ……』
と泣きながら二人はキスをして愛し合うらしき、いわゆる見せ場のシーンがやって来た時だった。リュシファーの予想通り、何やらレティシアたちの様子がおかしい。
後ろに手を回し始めた男がレティシアを引き寄せ始めている。
ほーら、言わんこっちゃない……。だが、俺が今出て行って騒ぎを起こすと、ちと面倒だな…。ま、あの性格だ。怒って逃げ出すだろう……。
そう思った時だった。
「い…嫌だって言ってるのがわかんないのかっっ！　もー帰るっ！」
……それは、全くの予想外だった――。
さすがのリュシファーもまさか静まり返った館内で、レティシアが大声で男を怒鳴りつけるとは思ってもみなかったのだ。
周りがざわついている。リュシファーも唖然とし、男も同様に唖然としている。

しかし、走り去るレティシアを追うために男が血相変えて出て行ったので、リュシファーもすぐに追う事にした。

映画の館を出ると二人の姿はどこにもなかった。少々唖然としすぎて出るのが遅くなってしまった様だ。

「仕方がない…上から探すか」

そう言ってリュシファーは呪文の詠唱もなしにその身を浮かせた。魔法を使って高く上昇した空中から見下ろすと、走って逃げるレティシアを先程の男が追うのが路地の方に見えた。

「あの馬鹿…路地なんかに入ったら男の思うツボだ…やれやれ」

街の地理もよく知らないレティシアが、人が二人何とか通れる位の細道をくねくねと走り抜けていく。それをしつこく追いかけていく男の動向を、リュシファーは悠長に高見の見物をするように腕組みをしながら眺めていた。上から見ると迷路に迷い込んだ者の動向がよくわかり、一足先にその目でレティシアの向かうゴールを辿って呟いた。

「あ～ぁ……駄目だ。もう逃げ道がない。…ったく、さて――とそろそろ出番だな。行ってやりますか…」

男はレティシアを追いかけながら、さすがに地理は良く知っている様子で、その口元に笑みを浮かべて走るのをやめた。

一歩一歩、ゆっくりと歩みをレティシアの方へと進めていく。

「！？」

振り返りながら走って進んでいたレティシアも、先が行き止まりである事にようやく気づいた時には、後ろは男が陣取っていて逃げ場がないことに愕然と立ち止まった。

男の方を向き一歩男が近づこうとする分、自分もゆっくりと一歩後退する。

「…街の地理にはさすがに詳しくないみたいだな。…ちょこまかと手間かけさせやがって……でももう後ろはないな」

男の言う通りレティシアの背中は次の瞬間、冷たいコンクリート

に当たった。
　左右を見渡しても上を見ても、レティシアが逃げられそうな道はない。
　更にはこういう時に限って、剣も異次元空間にいつもならあったが、先程、暇を持て余していた時に中を整理して部屋に出してしまっていた。
　…ひ…必要な時に～っ、私の馬鹿っっ。代わりになる様な物も落ちてないし、魔法使いの格好というだけでろくに魔法も使えないし……。ま、まともに魔法習っとけば良かった……。
　レティシアは手も足も出ずに、近づいてくる男に怯えた目を向けるだけである。

「怖いのかなぁ？　君はそんな顔も可愛いね…。ここは人があんまり来ない所だから…そこに逃げてくれるなんて、お兄さんは助かったよ…ははっ…ははははっ」
　レティシアの怯える様を楽しむかのように、男はゆっくりと近づいていく。
　しかも、さりげなくお兄さんと言いレティシアを子供扱いまでされた事で、レティシアは苛々としない筈もなく、その目で男をきっと鋭く睨みつけている。
　……万が一などと考えてもみなかった――。
　睨みつけはしているものの、恐怖心に心臓をばくばくさせながら構えていると、ついに男の手がレティシアの腕を掴む――次の瞬間だった。

ザバーーーーーーーーッッ……！

「!?」

滝の様な凄い勢いの水の柱――――。

腕を掴まれ怖くなり目をきつく閉じて悲鳴をあげようとしていたレティシアが、突然の音とともに自分に跳ね返って来た水の雫の冷たさに、目を開いた時――。

上から勢いよく落ちるそれはかなりの水圧をかけながら降り注ぎ、男はその重圧に耐え、身体を支えているのがやっとといった様子で、レティシアの視界のほとんどを大きな水柱が遮っていた。

男は後ずさりながら濡れた髪を前に垂らし、髪からは水の雫がポタ…ポタ…と雫に変わるまで、目を真ん丸にして愕然としていた。

一方、レティシアは、愕然と言うより唖然といった様子でそれをしばし見ている。

「な…なんだっ…!?」

男が我に返り、前髪を目が見えるように掻き分けてそう言った瞬間。

スッと目の前に一人の男が素早く上から降り立つ。

「!」

突然降ってきた男にレティシアは驚いて、思わずぺたんとその場に座り込んでしまった。

吟遊詩人の様な格好をしており、白い地に薄紫色の配色が綺麗な衣装を身に纏い、長い赤銅色の髪の毛は後ろで一つに束ねている。

背丈は男より少し高くスマートだ。

おそらく高位の魔法を使いこなすのか、何故か只者ではないオーラを放っている気さえする。

魔法が使えない者であっても感じることができる圧倒される様な物腰に、レティシアは声も出ない。

…な、なんかとんでもないヤツが現れた……。

どうする?

逃げる…しかし逃げ道は塞がれている！
――というくだらない事を考えて現実逃避までして二人を交互に見つめていた時、男はその謎の吟遊詩人に向かってお決まりの台詞を言った。
「…だ、誰だっ……！？」
謎の吟遊詩人は怖いほど物静かに答える。
「――悪いですね…。これ以上コレに用があるんでしたら……、今度はちょっと怪我でもして頂くことになりますが……どうしますか？」

親指を立て後ろにいるレティシアを“コレ”と指したことでレティシアは驚いていた。

そしてその口調は丁寧で穏やかなのに、言っていることは確実に脅し――。
何故かとてつもない恐怖をレティシアは感じて、脳内では自分がそう言われている様な気になり、びくっとしてしまう。
穏やかに言われる脅しの言葉が如何に人を恐怖に陥れるか、知っていた。
どこかで聞いたことのある様な声色もしたが、吟遊詩人に知り合いなどいない。
吟遊詩人の後姿を怪訝そうに見つめているしかなかったレティシアを、さっきの男がちらっと見たので、レティシアは怯えた様な目で後ずさった。視線を再び向けた吟遊詩人のその手に、パリっと小さな稲妻が発生し始めている。男は顔を青ざめさせ、口元も少し引きつった。

「雷を用意してみましたけど、炎の方がいいですか？　それとも風？　…全部混ぜる事もできますが……？」
吟遊詩人は言葉の順序通りに、何故か詠唱もなく手の中に準備す

る法術を少しずつ変化させ、小さな稲妻から炎の揺らめいたものへ…、そして小さな竜巻へと変え、更には辺りに強い風が巻き起こり始め、見た事もない小さな竜巻に炎と雷が合わさり、物凄い威力を発揮しそうな魔法を、その手で少しずつ威力を強めて生み出していく。

「！」

コ……コイツ…。…た、只者じゃない……っ

レティシアが驚愕して、後ずさる距離はないというのに後ずさろうと座り込んだままぴったりと背中を壁につけ直す。

顔色を一気に青ざめさせながら男は一歩一歩、後退してついに一気に後ろに向き直ったかと思うと、「ひーーーー」と言いながら情けなく走り去っていった。

「……逃げたか…」

やれやれとその様子を見送った後、その吟遊詩人はレティシアの方に振り返る。

びくっとしてレティシアの身体が反射的に後退する。

「ん？　何だ…後ろに下がって。…怪我はないか？　馬鹿姫」

「！？」

先程までとは全然違う口調で、しかも自分の正体がばれている上に、自分の事をよく知っているみたいに吟遊詩人はそう言った。

こちらに向いた吟遊詩人の男の端整で綺麗な顔は、呆れた様に微笑みを浮かべて手を差し伸べている。レティシアは自然に頷いてその手を借りようと手を伸ばしたが、やはり思いなおし手を引っ込めた。

「な、何者だっ……」

「……へ？」

一瞬、間が空いて少し意外そうな表情を浮かべていた吟遊詩人はゆっくりとレティシアの前に今度は微笑みながらしゃがみ込む。も

ちろん警戒してレティシアは怯えた表情をしていた。
顔を覗き込む様にレティシアを見ていたが、どうやら本気で自分の事がわかっていない様子に、仕方なくリュシファーは髪の色だけ元に戻してみせた。
「…これでもまだ――わからないか？」
レティシアが口を『あ』の状態にして、声は出ていないものの唖然と驚愕の表情で自分を指差すので、ようやく正体がわかっただろうと思いやれやれと髪の色を元に戻す。
「さてと――。帰るぞ。馬鹿姫」
少し微笑んでリュシファーは、固まっているレティシアの左手を勝手に引いて前を歩く。
レティシアはそれに引っ張られ、立ち上がるとリュシファーの後ろに続いた。

「あっ…。ちょ、ちょっとっ…」
――何も、リュシファーは聞かなかった。…ただ、『帰るぞ、馬鹿姫』と言って、ずっと無言で手を引いて歩いただけだった。危機を免れて安堵してたからか、珍しくリュシファーに“馬鹿姫”と呼ばれても、怒る気にはならなかった。
そして、心の中で呟いた――。

――ちぇ……。

後ろを振り向かずただ歩くリュシファーに繋がれていない右手で、レティシアは自分の目を擦った。
レティシアのその目から見える街並みは、

少し霞んで見えていた――…。

――――…

【第二章】†ｅｐ．１　隠密行動†（後書き）

一言で言えば正義の味方回。
いざって時に助けてくれて、聞いて欲しくない事は言わないでただ手を引いてくれるリュシファーの距離感は、なんとなくいいですね。
なんだかんだでちゃんとレティシアの性格を把握してそうしたんでしょう。
それにしても、どうやらリュシファーは実は凄かった様ですねという感じの回でした。

【第二章】†ｅｐ．２　使えない――。使わない…。†（前書き）

チェックしてないので、校正必要かもしれないですがとりあえず…

【第二章】†ｅｐ．２　使えない――。使わない…。†

『Ｃａｆｅ（カフェ）　Ｌｅｔｉｓｉｅｒ（レティシア）』

何の因果か、看板にはそう書かれていた。

二人が顔を見合わせ、少し苦笑しながら店内に入る。

「いらっしゃいませぇ～2名様ですね？　ごあんなぁ～い」

城の中にあるようなアンティーク調の壁の模様や、テーブル、椅子などがレティシアの目を冷めさせた。妙に高級感がある造りに仕上げられたそれは、レティシアにとって城下に来たというのに斬新でもお洒落でも何でもなく、面白味が感じられなかった。

その様子を横目に、リュシファーが苦笑いを浮かべる。

席を案内してくれた妙にテンションの高い店員の格好も、マリアみたいなメイドの格好が制服らしく、テーブルに両肘をついてレティシアはつまらなさそうにため息を吐いた。

「…ほら、何にするんだ？」

メニューを差し出して、未だに少し見慣れない姿のリュシファーが聞いている。

「同じのでも何でもいい…」

と窓の外を眺めていると、リュシファーが『俺、コーヒーだぞ？』と言うので慌ててレティシアはメニューを奪い取る。レティシアがコーヒーが嫌いなのを、勿論リュシファーは知っていた。

「ははは…コーヒーも飲めないなんて子供だなぁ」

馬鹿にする様に言われた言葉にレティシアは「むっ、じゃあコーヒーでいいっ」と拗ねた様に言ったが、『え、本当にいいのか？そんな所で意地を張らなくても…』と苦笑してリュシファーが言うと、レティシアは少し考えて、不機嫌そうに窓の外を見ながら「…や…やっぱり。……ミルクティー」と、どうせ聞こえると思い小さ

く呟いたのだった。
そんないつも通りのやり取りをして、レティシアの調子を戻すというリュシファーの思惑通りに、レティシアは拗ねている。微笑んで言われた通りに店員にオーダーした後、しばしリュシファーは変装したレティシアを眺めていた。

ツインテールの金の髪、魔法使いの服、とんがり帽子を被り、不機嫌そうに窓の外を見つめるレティシアは、いつもと違って違和感があるものの、その瞳はいつもの翡翠の様な澄んだ緑石色をしていて、その変装した格好もなかなかよく似合っている。
城下で見ると、レティシアは目立つな…とリュシファーは思った。あの路地からここまで歩いてきた道のりと、カフェの店内でさえ、普通の魔法使いに変装したところで、ただの魔法使いではなく、魔法使いの格好をした美少女としてレティシアは男からの視線を浴びていた。その証拠に、今いるカフェの店内でさえリュシファーが視線を辺りを見回せば、気まずそうに男性客は目を逸らした。
…城の中だと手のかかるお姫様としか思ってなかったが、……こうして外で普通の女の子としてお茶してひと時を過ごしていると思って見てみれば、見れば見る程可愛い事は確かだ……まだ子供だが。…こんなのが外をちょろちょろ一人で歩いてりゃ、そりゃ…俺も見るだろうな…やれやれ。
世間知らずのお姫様――。教育係兼目付け役の俺――。カフェ――。
普通に考えればあり得ない事だ……。
って、俺はのん気に何を考えているんだ――俺はコイツが危険な目に遭わぬ様ついて来た監視役――ま、ちょっとしたボディガードって所だ。
影ながらというのは結構疲れた……、どうせコイツは城下に時々出たがるだろうな…。
ま、時々なら付き合ってやっても良いか…一人で歩かせるのはい

くら変装していても危険だ。大した魔法も使えないし。でも少し今回で懲りてくれればいいんだが……。

なんて事をリュシファーは考えてふとある事が気になり、ため息を吐いてから口を開いた。

「…そういえばお前さ、変装の簡易魔法は使えるんだなぁ。結構、難しい魔法だぞ？　それ」

唐突に言われた言葉に、レティシアは意外そうな顔をしながらはっとした様に口を開いた。

「あ、すまないが内緒にしてくれ…。私が変装の魔法を使えるというのは、城の者たちは知らない…。覚えたのは、簡易魔法を幼い頃に習っていた時、ミグと一緒にこっそり本見て練習したら使える様になっただけだから…教えてもらった訳ではないが、城を時々抜けるのに使っていた。…変装していたのに気づいたのは、お前が初めてだ」

「ほぉ…ま、内緒にはしてやるが、それにしても今と違って研究熱心な事だな…。しかし、お前その魔法さ、最後のページの方に載ってなかったか？」

レティシアは首を傾げながら、しばし考えた後答えた。

「んー覚えてない…。ただ面白そうなのを探して二人で練習しただけだ…」

レティシアの言葉が終わった瞬間に、店員が飲み物を運んできた。

「お待たせいたしましたぁ～ん。若様、姫様っ。こちらコーヒーとミルクティーでございまぁす」

「え……」

どういうコンセプトのカフェなのかは良くわからないが、どうやら女性客には『姫様』、男性客には『若様』と言うらしい。『若様』と言われてリュシファーは引きつったが、レティシアも勿論、少し引きつっているのには少し笑えた。

城の中と全く変わらないティータイムだと多分そう思っているだろう。

レティシアはため息を吐いて、ミルクティにふぅと息をかけ、熱を冷ましている。
「…なるほどねぇ。次学期からは魔法中心に勉強するつもりだとは前にも話したけど、前に一度魔法の授業をしただろう？　少し気になってた事がある……」
途中で、一呼吸置くためコーヒーに一口口をつけ、静かに口を開いた。

「――あのさ、その時なんだけど…。お前…わざと――、力抑えていなかったか？」

はっとした顔をしてレティシアは否定の言葉を明らかに動揺した様に訴えてくる。
「……そ、そんなことない。ただ、使えないだけだ――」
それを遮って、リュシファーは冷静にこう言った。

「…俺には…何度やっても、力を抑えて失敗している様に見えたが……？」

「…なっ何を言う！　たっ…ただっ、失敗しただけだっ！！」
テーブルに両手を乱暴に叩く様についたレティシアは立ち上がり、リュシファーを無気になった様に怒鳴りつけた。それで周りがざわついているので、リュシファーは慌てて小声でレティシアに注意して席に座らせた。
目立つ行動を慎めと言われたレティシアは、大人しく座ったものの不機嫌そうにテーブルに肘をついて手に顔を乗せて、窓の外を眺めている。
先程の様子からしても伺える焦り…それが何なのか、リュシファーは考えていた。
おおよその見当がついたリュシファーは、何かを悟っている様な

真っ直ぐな視線をレティシアに向けて言った。
「――ふぅん…。それってさ、本当は…、使えない――…じゃなくて、使わない――…の間違いじゃないのか…？」
「！」
案の条、その言葉にレティシアは詰まる――。
表情は明らかに驚きと動揺を隠してはいなかった。
レティシアはリュシファーのその見通した様な瞳を見て、驚愕していた様子だった。

……。
レティシアは、その脳裏でこう考えていた。
――もともとリュシファーが只者じゃないというのは最初会った時から感じていたが、先程、魔法を少しだけ使っているのを目の当たりにし、その力量の凄さを確信した。
その力量ならば、力を抑えていた事など全てお見通しだったのかもしれない…。
……。
レティシアが魔法を使う時わざと力を抑えていた事は、今まで誰にも気づかれた事はなかった事だった――。
ただ、使えないと思わせておけば使わなくて済む――レティシアはそう考えていた。
心臓は、ばくばくとその鼓動を急ぎ走らせ、それは――焦りなのか。それとも――、リュシファーの妖しい光をその奥に携えた様な瞳が、何かを見通すように真っ直ぐに自分に向け、決して離さないからなのか――。額にも汗が滲み、動揺していた。
――幼い頃、教えられた通りにミグは普通に火の法術を放ったというのに…、私は何故かその何倍もの威力の火の火の法術を放ってしまった。一本の木が燃え、消し炭の様になった程の威力のあの火炎――。
思い出したくもない――。

――あの思い出。

それから魔法を使おうとする度に怖くなり、自然と力を抑えるよう意識が集中してしまい、失敗を繰り返し……“もう魔法なんて使えなくていい――！”と思った事――。

突然、きゅっときつく目を閉じ俯いたレティシアに、リュシファーが声をかけてくる。

「どっ、どうしたっ……？　な、なんか悪いことでも言ったか？気に障ったなら謝る。ただ、少し不思議に思っただけだ。突然どうしたんだ…」

リュシファーが心配そうに顔を覗きこんでくるが、レティシアは小さく呟いた。

「…リュ、リュシファーに何がわかる……っ」

俯いたまま顔を逸らし、しばしリュシファーは何も答えなかった。

リュシファーは沈黙の間その脳裏に、この異変が何なのか思考を巡らせているだろうなと、レティシアは思った。変な間がしばらく流れても、全て見通されている様な瞳を見るのが怖くて、顔をあげる事が出来なかったレティシアに、ついにリュシファーは口を開いた。

「……何か――事情があるのか？　お前が魔法を使わない理由」

レティシアははっとした。

思わず俯いた顔をあげてリュシファーの見通した様な瞳を見て怯えた表情をしてレティシアは、覚悟を決めて口を開いた。

「……リュ、リュシファーは怖くないのか？　初めからお前は只者ではないと思っていた。何か強く底知れない魔力を秘めている様な…でも普段は隠していて穏やかに笑ったりするし、穏やかだからいつも見えるわけではない。ただ、時々感じられるその隠している力の力量の凄さの様な物を、魔法をろくに使えぬ私でもその位感じられる…。先程も、力を抑えてはいたが本当はもっと威力を持つ魔法

を使うだろう？　…リュシファーは、そんな魔法を使える事を怖く思う事はないのか…？」

その言葉を黙って聞いていたリュシファーは、ふっと口元を微笑ませ、静かに話し始めた。

「――怖い――か…。そんな事もあったな……。でもそれは魔力を高めていけば、克服される。ちゃんと使える上で抑える能力もちゃんと身につく。使えないうちから抑えても出来ないだけだがな…」

リュシファーの言葉を聞き、意外そうにしているレティシアに、少し微笑んでリュシファーは肘をテーブルについて顔を手に乗せながら口を開いた。

「――それはそうと…、お前初めから俺が只者じゃないと感じた――と言っていたが、それはどういう感じだ？」

レティシアは一瞬怪訝そうな顔をしたが、少し考えて答えた。

「…そんなの、瞳の奥に何か不思議な魔力を秘めた妖しい光が揺らめいてるっていうか――…それとも雰囲気？　うーん。何ていうか上手く言えない…でも、初めから弱くだけど…瞳の奥にそれが大きく揺らめいていたから、『何者なんだ？』と思っていた」

「！」

驚愕したリュシファーは、つい言葉が出ない。

それを他所にレティシアは更に悩んで続けた。

「あっ後、怒った時とかそれが特に強くなって――辺りが怪しい煙にでも巻かれた様にそれは恐ろしい空気が流れて…、ぞくっとして目を見れなくなったりして…すごく怖い。…とか…そんな感じかな？　――う～ん。でも、ミグにはそういうのわからないらしくて、よくわかんないんだけど、何となくお前は只者じゃない程それが強く見えたんだ」

「……」

リュシファーが黙っているのでレティシアは、何かおかしな事を

言ったかと思い、リュシファーの顔色を伺っていたが、どうやら固まっている様子で何も答えない。
「な…なんだ？　怖い顔して黙っちゃって…な、投げっぱなしか…？」
驚愕した表情でしばし思考にふけっていたリュシファーが、はっとした様にその重い口を開き始めた。
「ま…“魔力無き者――有りき者見えず滅す”って言葉、…知ってるか？　有名な高等魔術師ルーザスという者の言葉でな。魔力が低ければ真の相手の力量も測れずに、戦っても負けるから魔力を高める修行に励めっていう言葉なんだが――」
突然、難しい言葉を聞き、レティシアが怪訝そうな顔を向けていたので、リュシファーは難しい話は止めておこうと、少し困った様に微笑んで続けた。
「――ま、要はだな…俺はさっきのは大した力を使ってはいないし、普段も力を抑え、力量がわからない様にしている。封環もしてるしな――ほら、これ」
そう言ってリュシファーは耳に着けている、古代文字の様なものが描かれていて、象牙で出来た輪の様な物を、その耳元でぴんと手に触れてみせた。
「――ふう…かん？？」
「そう――。自分だけの力では制御出来ない程の強大な力を封じるための補助の役割となる物だ。そして、そうして封じたその力を感じているならば、お前は魔力が高いという証拠。しかし、お前は資質がありながら魔法を学ばずに魔力を高める修行もしていない。よってその資質も眠っている――と、おおよそそんなところだ」
「え？」
リュシファーの目の奥に携えている様に感じる不思議な魔力を秘めた様な光――。
それが今一層強くレティシアを真っ直ぐに見つめている。
全てを見通した様なその視線が、時々怖かったのは魔力を感じて

いたからなのだろうか。確かに、ミグにそれを話した時にわからないと言っていたのを思い出す――。

レティシアはごくっと息を呑んだ。

「それでだ。そのルーザスの言葉の意味をもう少しお前には難しいかもしれないが、補足しておこう――」

そう言ってリュシファーは力量を見破る方法について話し出した。

力量を測る方法というのには色々とある。

見破り易さは第一第二第三という順番で分けられている。

【初級】第一に、雰囲気、物腰――。

・これは一般人でも感じられる者も多いが、その曖昧さは力量に寄る。

何となく嫌な予感がする時などに感じている場合が多いという。

【中級】第二に、オーラの様にその者を取り巻く波動――。

・ある程度魔法を使う者が感じる物で、測ろうとすれば色や波動の大きさで測る事が出来るという。しかし、これら第一第二のこの方法は、高等の魔術を扱う者が制御した力の力量までは見破れないという。

それを見破る事が出来るのは、次に説明する第三――――。

【上級】第三に、瞳――。

・レティシアが言う様に、魔力を秘めた光が瞳の奥に揺らめいて見えるというもの。

・大抵、高等な魔術師は、普通の魔術師程度に見える様にその優れた能力を隠し制御する。

しかし、第一第二の方法ではその場合の真の実力は見抜けず、第三の方法で測れる高等魔術を扱う者が見て、初めてその力量を見抜く事が出来るという。

したがって初級中級の魔術師が、上級の相手を高等魔術師だと見抜けず判断し、後になって力量を思い知る事も多い。
・第一第二と違い、この方法は簡単に誰でも使う事が出来ない。第三の方法で測れる者は、“高等魔術を使いこなせる資質がある者”や、よっぽど修行を積んだ者のみだろう…。
「――そして、それが――何を意味するか…お前には解かるか？」
「！？」
リュシファーが真剣な眼差しで最後に説明した言葉に、レティシアは耳を疑った。

……う、嘘――…！？

驚愕して手が震える。
それは話している途中から、リュシファーの瞳からは先程よりも強い光が揺らめき始めている気がしていたからなのだろうか……。
信じたくないからなのだろうか……。
何かに縛られている様な……この感じ……。
周りの空気も、なんか違う気がする……。
何かわからないけど、何故か…
…こ、怖い……っっ！
――レティシアには何かわからなかった。

手に汗を握りながら掴んでいたティーカップがソーサーとスプーンに擦られ、カタカタと音を鳴らす。
レティシアの身体は何故か震えが起こり、まるで自分を見えない何かが動きを封じているかの様に重い空気が辺りを包み始め、リュシファーの瞳からも目を逸らしたいのに逸らせない。

そして、レティシアは気づいた――。

呼吸がしずらくなり、過呼吸の様に息を吐き出す事が出来なくなっていた。

……っ！　う…駄目…だ。…苦……し――…

そう思った時、突然リュシファーの瞳に妖しく揺らめく光が小さくなった気がした。

途端に、震えは止まり身体も動かせるようになったレティシアの呼吸だけは、平静を取り戻そうと激しく繰り返されている。

「はぁ…はぁ……っ…な……」

何か言おうとしても呼吸をするのに精一杯だったレティシアに、リュシファーは苦笑して背中をさする。

「あぁ、悪い…す、少し強め過ぎた様だ。ちょっとだけ試させて貰った…」

「……な…！？　い、今の――」

そのレティシアの言葉を最後まで聞かずに、リュシファーは頷いていつもの様に微笑んで言った。

「――お前さ…、本格的に魔法勉強した方がいい。…何があったかは知らないがちゃんと覚えれば怖くなくなる。本当に第三の瞳で見破れるならば、今のお前では俺と魔力の差がありすぎて、自然と恐怖を感じ勝手に体が震えてしまいさえするだろう――と思って少し自分で抑えている力の抑制を解いたが、案の定お前の言っている様にそれを感じたんだろう？　瞳から目も離せない程身体が縛られて動けない様な感覚に陥った筈だ――。お前はおそらく何か資質を秘めている。　――はっきり言って、そのまま眠らせて置くにはもったいない力だ」

「！」

――その後、そんなリュシファーにレティシアは文句の嵐――。
困った様に微笑みながらリュシファーは必死に弁解したが、レティシアはずっと不服そうにしていた。
しかし、リュシファーは考えていた。
一番初めに出逢った時に、俺を真っ直ぐに鋭く睨みつけたその瞳は、何か吸い込まれそうな鋭い光を、綺麗に澄んだ翡翠の様な緑石色の瞳の奥に携えていた気がして、言葉通り何か力を吸い込まれたかの様に、俺はしばらく動けなかった――。
それは今思うと、何か魔力の様な何かを眠らせ、秘めている事を予期させていたのかもしれない。
魔法が使えない――と調書にも書いてあったので、資質がないのかもしれないなと思っていたレティシアは、初めから…俺が何者か知らない内からその瞳で力量を測り、只者ではないと感じ取っていたとは……。

レティシアは、魔法を…

“使えない――ではなく…、――使わない。”

と、今日の一件でリュシファーは確信した。

その底知れない何かをレティシアはその瞳に秘めているにも拘らず、その更に核とも言うべき奥底にある“怖れ”――。
それが自然とその才を見せぬよう、隠していたのだろう。
しかし、力は眠ったままその片鱗は少しずつ抑制から反発しようとするだろう。
それをレティシアが抑制し続けるのは、――多分無理だ。
幼い頃より何か怖れの様なもので、力を無意識に抑制し隠してきたのかもしれないが、隠されている間にも少しずつ反発し始めている。

魔法は使わなくとも、その瞳で相手の魔力の力量を感じ取ってしまう程に、その力は表に出たがり始めたのだろうか。

あいつ自身が自由に憧れる様に、おそらくその力自身も……。

――……

リュシファーは、レティシアと城に帰る間も、ずっとこのレティシアの眠った力量について考えを巡らせていたという――。

――……

つづく。

【第二章】†ｅｐ．２　使えない――。使わない…。†（後書き）

相手の力量を瞳で測る能力というのを思いつきました。それから色々考えて設定付けるために時間がかかった回でもあります。
リュシファーが投げかけた一言により、怖くて魔法なんて使わなくていいと思っていたレティシアには、すごい力が眠っているのかもしれないという片鱗を見抜く事となったという回でした。

【第二章】†ｅｐ．３　聞かれた呟き†

「……！」

リュシファーの身は固まっていた。

階段を駆けて行く音が聞こえなくなるまでの事だった――。

固まったまま、階段の壁に思わず寄りかかって座り込んでいた。

もう誰もいない階段の踊り場で、リュシファーは驚愕の表情を浮かべてしばらく動けずにいた自分に気づいた時には、自分の耳に触れていた。

少しぎこちないような笑みを浮かべながら、照れくさそうに耳元の地肌を少し掻く。

――今日は……ありがと――……

脳裏でその言葉が、たった今言われているかの様に何度も再現されていた。

更にもうひとつ最後に言われた言葉の続きを、リュシファーはその口で呟いていた。

「――ちょっと、かっこよかったぞ……か」

それはこの階段の踊り場でつい先程、レティシアが言い残した言葉だった。

リュシファーは立ち上がると自分も部屋へと歩みを進めながら、自然と少し微笑んでしまう自分に少し呆れながら、ため息をひとつ吐く。

「はぁ…珍しい事もあるもんだ……」

階段を上がり終わる直前に、そうリュシファーは呟いて言った。

……

一方――。ここはレティシアの部屋。

「はぁ…」

レティシアは部屋に戻ってドアを閉めるなり、ドアノブに手をかけたままその背をドアにぴったりとつけ、ため息を吐いていた。

ドアから真正面に見えるバルコニーの窓の外を遠くから眺めていたが、そのまま歩みを真っ直ぐと進め、バルコニーの格子に飛び上がり座った。

帰り道、レティシアとリュシファーは時々言葉を交わすものの、互いに何か考え事をしている様子でほとんど無言だった。

リュシファーは多分、私の眠っているという魔力について考えていただろう。

それは自分自身も同じだった。

リュシファーの言う通り、魔法を使おうとすれば、自分の手の中に法術の源を発生させている事は、ちゃんと感じ取れていた。しかし、発動させようとすれば幼い時のあの思い出が蘇って怖くなり、途中で抑え、発動しないようにしてしまう事の繰り返し――。

“お前には高い魔力が眠ったままになっている”とリュシファーに言われた事は、未だに信じ難い。しかし、その証拠と言われた――瞳の中に揺らめく不思議な妖しい光を自分が見れてしまうことを、ミグに話した事があるがミグには見えないと言われた事…。

――それが、瞳で力量を見抜く高等魔術師が見えるものだったとは……。

レティシアには全く思いも寄らなかった事だった。

「…次学期から、やるのかぁ……」

と、ため息を吐いた時だった。

「よっ！　レティー」

「!?」

突然聞こえた元気な声と、目の前に現れた突然の人影に驚いて後ろに倒れ落ちそうに慌てふためいていた所を、冷静にぱしっとその人物が手を掴んでくれたお陰で、レティシアは危機を免れた。

「はぁ～…た、助かったぁ…お、落ちるかと思ったじゃないかっ」

「ははははは、悪い悪い。いや今日これ覚えたから使ってみたくてさぁ～」

その姿はミグの姿だった。

部屋のドアをノックもなしに開けるだけじゃなくて、いつも現れるのは突然だ。

“コレ”と言われて不思議そうにミグを見たレティシアは、そういえば自分は外に身体を向けて格子に座っていたというのに、ミグが現れたのは前方である事に気づき、ミグの足元を見る。勿論、そこに地はない――。

ミグは宙に浮かせ、空中で腰に手を当てて得意げにしていたのだった。

驚いているレティシアの反応にうんうんと頷くと、ミグは言った。

「そーなんだよ。今日空中浮遊魔法（フリシール）ってのを覚えたんだ。お前にもかけてやろうか？」

相変わらず得意げなミグの様子に、レティシアはため息を吐く。

「…フリシールだか何だか知らないけど、かけて貰わなくてもその位なら私でも、きっと使えるから教えろ」

その言葉にミグもため息を吐いてレティシアに言った。

「…お前もさぁ、時々こうやって俺に習ってるだけじゃなくて、まともに勉強したらいいのに…。ま、フリシールは風の魔法の一種だからお前も使えなくもないと思うけどさ、ちょっとばかり扱うの難しいぞ？」

そう言って、ミグは異次元空間から本を出した。風の魔法の教本である。

「えーと…どこだっけなぁ」

ぱらぱらとページをめくって中間辺りで見つけたらしく、開いてレティシアに見せた。

「あった。これだ。まず、この呪文を覚えればいい」

「…ん？　えーと…？　…風の精霊に纏いし吹き荒れる風よ、今こ

こに我と契約の元に、その風と力を捧げ…天に近く…我が身とともに舞い踊り賜え…？」

レティシアは棒読みでそれを読み上げた。本に書いてある文字をレティシアは覚えようとじっと目で何度も追う。

ミグがその様子に、後は力を集める場所を説明し始めようとしていた時だった。

「！」

本から目を離していないレティシアの周りを、優しく小さな風が渦巻き始めていた。

そしてその風がミグの頬に微かに触れる。ミグは驚愕の表情を、その顔に浮かべてレティシアをただ見ていた。

「で？　次は何？　…え？　何？　変な顔しちゃって…」

ミグのその様子にレティシアが気づいた時には、その風はレティシアの足元に降りていき、ふわりとレティシアの身体が浮かせ始めていた。

「！？」

ミグが唖然とそれを見ていると、ふわふわと宙に浮く自分の身体に、レティシアは慌ててあたふたと暴れている。ようやく落ち着いて宙でバランスを取ったレティシアは、きょとんとした後、怪訝そうな顔でその現象に頭を悩ませている様子だ。

「――お…おい。俺、これ覚えるのに、1時間かかったんだけど…」

「へ？」

「…風の渦が巻き起こって、それを下に持っていく感覚も掴まないといけないし、宙に浮いてもバランス取るまで大変だったりしてさぁ…そ、それなのに……」

努力の過程を説明した後、ミグはへたっとバルコニーの床に座り込んでしまった。

いつも元気なミグが珍しく落ち込んだ口調で言ったので、レティシアは困った様な笑みを浮かべながらこう言った。

「あ…いや、ほらっ。か、風の魔法なら私も唯一使える魔法のひとつだし…精霊が力を貸してくれやすいのかも…っ。う、うん。きっとそうだ…ははは……はは」

ちらっとレティシアを恨めしそうな顔で見たミグが、また俯いている。

どうやら得意げに魔法を見せようとやって来たというのに、レティシアがまともに詠唱もせずに使えてしまった事で、少しいじけた様子だった。

「…もー、いつまでいじけてるんだ…いいからどうやって進むのか教えー――」

と、そう言いながらミグの方へ向かおうと思った時だった。

レティシアの身体はミグの方へと簡単に動いて進んでいったのだった。

「あ…れ？　動いた……」

レティシアがそう呟いてから、歩く時に足を前に踏み出そうとする様に、その方向に向かおうと心に思うだけで、その通りに身体が浮いたまま進める事に気がついた。

その様子を床から眺めていたミグは、もはや驚かなかった。

はぁ…とため息を吐くと、首を横に振っている。

「…頭の中で進もうとすればその通りに動く――今やってる通りだ」

「そ、…そうか。そう落ち込むな――ま、まぐれだ」

「ろくに魔法も使えないのに、簡単に使えちゃうんだもんなぁ…まともに魔法勉強すれば俺より使えるかもしれないのに、はぁ～あ…」

ミグのその一言でレティシアは複雑な気持ちになっていた。

詠唱という詠唱はしていないのに、ミグが覚えたばかりという魔法を自分が簡単に使った事――。そういえば、安全そうな魔法で自分が興味が湧いたものだけ、ミグに少し教えて貰えれば割とすぐに使える様になっていた事を、レティシアは思い出す。

さらに、リュシファーが言っていた事……。

レティシアは引きつったまま、ミグを見つめていた。

リュシファーと初めて会って警戒しながらその目を見た時――。
怒られた時などに、相手の目をじっと見た時――。
揺らめく光を見たのは、真剣に相手の目をじっくりと見つめた時である。
それはミグの瞳にも、さほど大きくない光だが、鋭く見通すように透き通ったものが、その奥に携えて存在していた。レティシアは苦笑を浮かべていた。
“お前は高い魔力を秘めている”――“その証拠”。
リュシファーの言葉が頭から離れない――。
そんな筈は、――ないのに…。
しかし、棒読みでただ呪文を覚えるために呟いていただけで発動した、フリシールの法術は確かに自分の身を浮かせている。前は、こんな事はなく、ちゃんと意識を集中して呪文を唱えないと、効果が発動する事はなかったのだった。
風の魔法は唯一、レティシアが使える魔法だった。リュシファーの使った竜巻などといった危険な魔法も存在するが、大体は大した威力を持たない風を吹かせたりする程度の物が多いためそんなに恐れずに使えるので、レティシアは何個か覚えているものがあった。
しかし、レティシアがミグに言った『精霊が力を貸してくれやすい』というのは、根拠も何もない――。
リュシファーに自分の力に気づかされる様な言葉を言われたせいで、自分の中で眠っていた魔力が目覚め始めているとでもいうのだろうか…とレティシアは考えていた。
「ん？　な、なんだ…？」
ミグが変に思って聞いたその言葉で、レティシアははっと気がついて答えた。
「あ、いや、別に…なんでもない。はは……ちょっと疲れたから夕食まで少し休む」
「そ…そうか、じゃまたな」
少し様子がおかしかったレティシアを、ミグは気にならなかった

わけではなかったが、とりあえず大人しくそれを見送ることにした。
レティシアは浮いたまま、部屋に戻っていきベッドに入っていく。
そして、既にしっかりフリシールの魔法を使いこなしている様子に、ミグはため息を吐いた。

「……変なの」

ミグはそう呟くと、屋上へと更に高く上昇していった――。

――――…

そして、今から少し前の事――。

「……っ」

リュシファーは部屋を飛び出していた。
――向かった先は屋上だった。
風が少しひんやりし、少し湿気を混ぜた様な匂いがかすかに感じる。
独り言をつぶやいたようにリュシファーは、遠くに見える灰色の雲を発見して、ため息を吐く。
「あんなに……天気良かったのにな……今夜も雨、か」
見晴らしのいい誰もいない屋上の床に、リュシファーは座り込み後ろに手をついて、真っ直ぐ空を見上げていた。

一方、その様子を影から見ていたエミュ～は、レティシアの言葉を思い出していた。
“知らない人が来たら隠れて出てこない事、いい？　特に、白髪の爺ちゃんみたいなのが来たら絶対隠れてないと駄目だぞっ”
リュシファーは一度ここに来たこともあり、知らなくはなかったのだが、血相を変えた様子で屋上に来て床に座り込んだので、最初

は少し怖い気がして警戒していた。
しかし、平静を取り戻していったリュシファーの様子に、エミュ～は少しずつ近づいていった。
「ん？」
自分の腰あたりに温かい何かの体温を感じ、後ろを振り返ってリュシファーは微笑む。エミュ～はリュシファーの後ろに丸くなって横になったのである。
「みゅぅ？」と、顔だけエミュ～はリュシファーに向けて鳴く。
「やっと出てきたか……はは。勝手に邪魔して悪いな…」
我ながら良くやるなと思いながらも、エミュ～の家に不法侵入した事を詫びたのだった。
だが、エミュ～はそれに答えるかの様に、リュシファーの腰にすりすりと顔をこすりつけて、何となく歓迎されてないわけでもない印象を持ち、それを撫でてやった。
そして、リュシファーは考え事をしていた。
完全にその場に眠りこんでしまったエミュ～を撫でる手を止めたかと思うと、リュシファーは再び空を仰いだ。
白い雲が東の空から流れて視界から消えていき、少しずつ先程遠くで見えた筈の灰色の雲が、すぐそこまで現れ始めていた。
リュシファーはそのままエミュ～を潰さない位置に仰向けに横になると、空を見上げながら、ぼーっとある事を思い出していた――。
先程からため息が出る程に、それが頭にまとわりついて離れずにいた。
――――……
――…
……
――部屋に戻ってすぐに、レティシアの城下での騒動ですっかり忘れていた成績表の報告をしに、大広間へ向かっていたリュシファ

ーは、中三階の大広間に着く前の階段の踊り場にて、少しだけ外を眺めて疲れた気分を落ち着かせていた。

「？」

その時、声がした――――。

多分、普通の人間であれば聞こえない程小さな声だった。

声は、大広間横にある本棟の上階層へ上がるための階段のある扉内から聞こえてくる様で、忍び足で階段を数歩登って扉をよく見ると、その扉がわずかに開いている。

しわがれた男の声と女の声……。

時折、女の声の方は興奮気味に通常の声量に荒げられては、また弱々しく抑えられていて、一方、男の方は常に同じトーンで静かに口を開くよう、気を配っている様子だ。

「！」

とっさにリュシファーは、踊り場の柱の影に身を隠した。

聞こえてくる声が、知っている人物の名前を口にしたのだ。

立ち聞きなどいけないこととは知りつつも、リュシファーはその声に耳を澄ましていた。

「レティシアにはいつ…？」

「……今夜、夕食後にと陛下は申されました…」

「ついに…、ここまで来てしまったのですね――」

「――まだその様なことを……。三代姫が産まれておらず、過去のダムルニクス王国との盟約は、未だ果たされてはいないのです…。やっと陛下の代になり、姫様がお産まれになられ…、１４歳になられたら婚約の儀を――、そして、成人になられる１５歳でご結婚をと、お生まれになる前からお話した筈でございますぞ…？」

「！？」

リュシファーはその言葉に驚愕していた――。

その後も二人は少し話を続け、三日後がレティシアの１４歳になる誕生日である事。

その盟約が交わされて両国が同盟国になったというのは知っていたが、密かに盟約の証として、“お互いの王国に姫を嫁がせる”という約束をしていた事。

しかも、エンブレミア王国は三代にも渡り姫が産まれず、その盟約の証としての義務は、未だに果たされていない――。そして、やっと産まれた姫というのがレティシアであるという事を、リュシファーは余す事なく聞いてしまった。

こ……ここ――……

婚約――――!?!?

――――……

……

――そうしてリュシファーは、とりあえず陛下に成績表は報告に行っては来たが、部屋に戻っても何故か心が乱れ、落ち着かずに屋上に来ていたのだった――。

婚約の儀を交わせば、それは正式なものとなる。

世間一般では婚約しても、破棄することだってあるが、国と国同士の問題が絡んでいる王室で、そんな事は許されない。

「…あの馬鹿姫が、婚約――――か……」

と、呟いた時だった。

「――ナーニやってんだっ??」

突然、足音もせずにその声は聞こえて来た。

「!?」

慌てて起き上がるとそこには、魔法で宙を浮いたミグが、その後スタッと屋上の床に着地した様子だ。

レティシアと同じ翡翠の様な澄んだ緑石色の髪が、肩につくかつかない位で風に吹かれてなびいている。それと同色の綺麗な瞳を持つ突然話しかけてきたこの少年――ミグの顔立ちは、さすが双子―

―レティシアによく似ている。
片や美少女。片や美少年といった感じで、その美少年の口元は得意気に微笑んでいた。
「何だびっくりした顔してー。もうすぐ雨降りそうだから、エミュ～を部屋に連れてってやろうと思ってさ、今日覚えたばっかの魔法使って、飛んで来たんだ」
――どうりで、物音がしないはずだ。
リュシファーはそう思い、苦笑を浮かべた。
空中浮遊の魔法を今日授業で取得したばかりだと言うミグは、続けて言った。
「まさかお前がこんな所で横になっているとはな～、いや、意外意外」
意外そうな表情を浮かべて、ミグはリュシファーのすぐ横にそのまま座り込んだ。
すると寝ていたエミュ～がミグに気付き、起き上がってミグの周りをパタパタと喜んで飛び回る。
「…あ、いや、ちょっと今日は色々あって疲れてな……少し気晴らしに来ていたんだ」
そう口を開くとリュシファーは立ち上がって、尻についた砂埃を払う。
エミュ～がミグの肩に止まる。

「……ふぅん」

辺りが暗くなりだしたのか、ミグの姿が少し影を作っているように見える。
先程からずっとリュシファーは、ミグに悟られまいと作り笑いを浮かべていたのだが、ミグのその様子から脳裏を嫌な考えがかすめていく。自分の方を向かずに呟く様にそう返事をしたまま、ミグは一点を見つめている様子だ。

「て、天気も今夜は崩れそうだし、そろそろ俺はもう行こうと思ってたとこだ。じゃあ…またな――」

そう言って、気まずい様な変な間から逃げる様にその場を立ち去ろうとするリュシファーを、ミグの声がそれを引き止めた――。

「……」

リュシファーは少し焦っていた。

立ち止まり、少し間を開けて振り返った自分に向けられるミグの瞳は、少し自分を睨む様に真っ直ぐと向けられている。

「――で…さっきお前呟いていたの…あれ、何――？」

更に少しの間を開けてミグが言った言葉だった――。

木々がざわめき、空には先程遠くに見えていた雨雲が、湿り気を帯びた強い風によって、既にこの辺りまで流れている。その時、雲に隠れて見えなかった太陽が、その全貌を完全に隠し始めたのか、辺りは一気に暗くなり始め、屋上の床には、一つ、二つ、と水玉模様が描かれ始めていた。

レティシアの様に吸い込まれそうに澄んだ翡翠の様な緑石色のミグのその瞳は、鋭くリュシファーに向けられ続け、自分が潔白ではない事を全て見通している様な突き刺す程のその視線は、捕らえて離してはくれない――。

誰もいないと思い呟いた言葉を、ミグは聞き逃していなかった――。

答えないリュシファーに、再びミグは口を開いた。

「…いいから言えよ。……もう遅い。聞こえたから――」

「……っ」

その言葉にリュシファーは、沈黙を保ったままその場にがくっと座り込んだ。

一瞬、目がちかっとする程の白い光が辺りを照らし、轟音が鳴り響いた。

床に静かに水玉模様を描いていた雨は、ザアっと音色を変え激しく降り注ぎ、二人を濡らしていく。それでも、二人はその場から動かなかったのだった――。

――――……

……

つづく。

【第二章】†ｅｐ．３　聞かれた呟き†（後書き）

レティシアの力が少し目覚め始めているのを少しずつ自覚し、一方で第一章の終わりで何かが密かに動き始めていましたが、それが明るみになろうとしていました。聞いてしまったリュシファーがふと呟いた一言を、偶然聞いた双子の兄ミグ……さて、一体どうなっていくんでしょうか。という回でした。

【第二章】†ｅｐ．４　……ごめん。†

「レティっ、エミュ～連れて来たっ」
そう――ノックもなしにドアが開かれたかと思うと、エミュ～は真っ直ぐにレティシアの元へ飛んで来た。

ベッドの上のレティシアは、仮眠を取っていて寝ぼけて何か返事をしていたが、やって来たエミュ～が首元に来た瞬間に驚いて声をあげた。
「ん！？　つ、冷たっ…！」
そう言ってがばっと起き上がったレティシアは、エミュ～をびしょびしょに濡れたまま連れて来たミグに、文句のひとつでも言ってやろうと思って口を開く。

「こらー！　ミ――――」
ドアの方へと声を荒げていたレティシアは、途中で口を噤み、きょとんとして誰もいない自分の部屋を見回していた。
「――あ…れ……？　ミグの声がしたと思っ…たんだけどなぁ。……変なの」

何だかよくわからないといった様子で首を傾げたレティシアは、外が雨の音を鳴らしているのに気づいた。
雨の日はエミュ～を部屋に連れて来て、ミグと交代で世話をしていた。
今日は自分の日だという事と、屋上まで自分が行かなくても済んで丁度良かったという事を考え、レティシアはミグのことを忘れてエミュ～に簡易魔法かけて乾かす。
エミュ～は一度感謝する様に『みゅ～』と鳴いて、布団の中に潜り込んでいった。

部屋に突然レイモンドが来たりするとマズイので部屋に来た時は、夜中以外、布団に潜ったりどこかに隠れる様にエミュ～には言いつけてあったのだが、しっかり解っている様子で相変わらずかしこい猫（？）である。

ふと時計に目を向けると、先程仮眠をとってから1時間ちょっとしか経っていない事に気づき、ため息を吐いて呟いた。

まだ夕食まで2時間半もある時刻だったので、また寝ようかと思ったがもう眠りにつけない程、レティシアは目が覚めてしまっている。

――はぁ～、起きるか……。

レティシアは仕方なくベッドから出る。

窓の外はもうすっかり暗くなっており、雨が降っていた。時折、瞬時に空が白く光っては轟音を響かせる雷まで混ざったその大雨は、簡単に止みそうもない。

「また雨かぁ～」

ぼーっとして窓に突如当たっては線となって流れ落ちて来る雨の模様を眺めている時、ふと、先程ミグに教わったフリシールの魔法の呪文が浮かんで来た。

そのままレティシアは頭の中だけで復習する様に、静かに唱えていた。

ちゃんと全部覚えていた事に安堵したその時だった――目の前を空気の膜がうっすらと横切っていく様に見え、レティシアの周りを渦を巻くように取り巻き始めた。

「！？」

困惑する中でその渦はだんだん下へ降りていき、レティシアはそれに案内されるまま視線を下に向けていくと、ついに足元まで来た時に瞬時にまとまる様に集まり、自分の身体が宙に浮いていくのを感じる。

バランスの取り方はもう把握していたので暴れはしなかったが、ふわりと確かに自分

が浮いている事に驚愕していた。
い、いやぁ…フリシールっていう魔法は詠唱もなしに感覚で使える魔法なのだな…。
――そんなことあるのは簡易魔法くらいだ。
リュシファーが私に何か変な魔法をかけて、魔力を増幅させたなんて事は……。
――それもないだろう。
じゃあ変な物食べてちょっと身体がおかしいとか…。
――別に変な食べ物を城下で食べた覚えはない。

自分の心の中で自問自答をしながら、レティシアは冷静にその考察を進めているつもりだったが、確実にそれは現実逃避したかっただけという事は、よくわかっていた。

「あ～どうしよ～。うーんどうしよ～っ。嘘だぁ～っ」
と浮いたまま左右に移動しながら、独りでしばらく騒いで焦りっていた。
――これはやはり嘘ではない。紛れもなく現実のことである。
最後にそう、結論を出した時だった――。
唐突にドアを開ける音がして、レティシアはぴたっと動きを止めた。
その方向に向くと、ドアの前には予想通りのいつもの人物――ミグが立っている。
「ミグ～ッ。エミュ～がずぶ濡れだったじゃ――ない…か？」
レティシアは途中で口を噤む様に、その異変に気付いた――。

――いつもの調子とは全然違う。声だけしか聞かなかったが、先程も元気な声でエミュ～を置いていった筈だ。そういえばエミュ～を届けに来た後、急いでどこかに行ったのかミグの姿はなかった。
多分、それから15分程しか経っていないと思うが、その間に何か

あったのだろうか…？　しかも、髪や服も濡れたまま……。
「――レティ……」
冷静な声でそう口を開いたミグは、何やら深刻な表情をして、顔を俯かせていた。
やはり何か様子がおかしいといったその様子に、レティシアは浮いた身体を移動させてミグの元へ向かう。
「――ミグ…？　ど、どうした…？　お前らしくないぞ…？？」
そう声をかけているにも拘らず、ミグはこちらを見ない。
黙って俯いたまま、聞こえないが何かをささやくように小さく呟いている様にも見えたが、ごくっと息を呑んでやっと顔を見上げると、そのままミグはレティシアを抱きしめた。
「――？　な…なんだどうしたっ――お、お前何か…あったのか…？」
しかし、質問にミグは、全然答えてはくれなかった――。ただ、先程顔を見上げた時、落ち込んでいる様な辛そうな顔をしていて、小刻みに身体も震えていた。
「さ、寒いのか……？」
ミグを横目でちらっと見るが、首を横に振るだけ。
その時、冷たく濡れた髪が頬に当たり、風邪を引くと思い簡易魔法をかけてミグの髪や服を乾かしてみたが、ミグの反応はない。こんな深刻な表情で部屋に来る事がめったにないミグの頭を、ただ慰める様によしよしと撫でるしかなかった。
「…何があったかは知らないが、…お姉さんがよしよししてあげるから…元気だせ…」
慰めるつもりがからかってまでみてしまう自分に、呆れ始めていたその時だった。
「――レティ……あのさ…」
「…ん？」
ミグが口を開いた事にレティシアは、少し安堵して穏やかにそう

聞き返した。
抱きしめられたミグの腕がより強く、ぎゅっとレティシアを抱きしめて、ミグの息を吸う音が、微かに耳元で聞こえた次の瞬間――。

「……ごめん。」

そう言って自分にもたれ掛かったレティシアを、ミグはその手に抱きかかえていた――。

――遠のいていく意識の中で、

微かに覚えている……

静かに紡がれたミグの言葉は――…

――謝罪の言葉だった。

つづく。

【第二章】†ｅｐ．４　……ごめん。†（後書き）

今回は少し短いエピソードでした。
というわけで、次回お楽しみに。
多分、次回は【第二章最終回】です。
いよいよ第三章へ向かえます。

【第二章】†ｅｐ．５　暗雲に吹く風††

――……

リュシファーは、部屋でティーカップに入った紅茶を眺めていた。
それには一口もまだ口をつけずに、手の中でゆらゆらと揺らしながらぼーっと眺めているだけだった。テーブルの上にはもう一つティーカップがあるが、それは空になっている。
あの屋上でのあの呟きのせいで、ミグにそれを話さなければならなくなったため、雨が激しく降り出す中話すわけにはいかず、場所を変え、ここで話をしていたのだった。
レティシアの事を全て話す必要はなかったかもしれない――。
だが、あのレティシアと同じ吸い込まれる様な鋭い光を奥に秘めたミグの瞳で見つめられれば、何か隠しても見破られてしまいそうで怖いと思った。
全てを明かした後少し会話したが、ミグはやはりショックを隠せない様子で、最後に一言言い残し、つい先程去って行った――。

――……

「――それは多分“箝口令（かんこう）”が出ているから、上位家臣たち以外知らされてなかったのだろうな。密かにこの“盟約の証”とやらを示すため、レティシアが産まれるのを三代にも渡り、この王国は待ちわびていたというわけだ。そして極秘に…暗下で話は進められて来たのだろう」
「……レティに漏れる可能性のある人物には、知らせないようにしてきた……」
「ああ……そうだな。――俺が聞いた話はそこまでだ。後は、三日後のレティの誕生日。その日が婚約の儀で、今夜――。夕食後にアイツに話すと陛下が仰られたようだ」
ミグはずっと深刻な表情で何か考えている様子だった。

リュシファーが煙草に火をつけ、白い煙を吐き出す。
「――アイツが、はいそうですかと承諾するとは…とても思えんがな…はは。『城を出るっ』だとか言い出しかねんな…ははは…」
無理にリュシファーは冗談を言った。
ミグの動きが一瞬止まったように見えたが、落胆の色を見せるとこう言った。
「…む、無理に決まってるだろ？　アイツも説得すれば納得するさ。国と国との問題だ。こればっかりは何とも――出来ないさ…」
あり得ない事を承知で言ってみたという様子だったが、やはり肩を落としてため息を吐いていた。
リュシファーも、無理があるその言葉に苦笑いを浮かべていた。
ミグはお茶を飲み干すと、立ち上がった。そしていつもの調子に戻っている様子だが、少し面倒くさそうな微笑みも浮かべながら言った。
「ま、考えてもしゃーないから、俺もう行くわ。あ…邪魔したなっ――じゃ」
そして、背を向けながらリュシファーに向けて手を振り、ミグは部屋を出て行った。

そうは言っていたが、ミグの気持ちは痛いほどわかっていた。
何とかしてやりたいと思うのが兄弟心というヤツだろう。しかし、さすがに国と国での盟約に逆らう事など、誰にも出来る筈はないという落胆の色が伺えて、リュシファーはミグの後姿を見送りながら、やはり知らせない方が良かったかと、話してしまった事を少し後悔し、心も痛んでいた。
――――…
『考えてもしゃーないから――』か――――……
そうミグの一言を思い出して、リュシファーは時計を見て呟いた。

「…あと、２時間――――」

――――……

そして――。午後１９時半――。

「姫様～？　夕食のお時間ですので大広間へ向かいますよ～」

レティシアの世話役の侍女マリアが夕食のためにレティシアを迎えに来た。

部屋はしぃんと静まり返り、見回してみたがその姿はない。ベッドに少し膨らみがあったため、今日は雨で少し冷えるから布団に潜り込んで寝ているのかと思い、微笑んでめくりあげてみたが、――いない。

「あ…ら――？　ここにもいないわ。毛布が丸まってたのね…ふふっ、姫様ったら相変わらず寝相が悪いんだから。――それにしても変ねぇ……トイレかしら？」

マリアはトイレへとのん気に足を運んで行った。

しぃーんと静まり返った誰もいないレティシアの部屋――。

誰も入っていないトイレ――。

おまけにミグの部屋にいるのかとも思ったが、そこにはミグの姿さえない――。

では、エルトの部屋に…？　とも思ったがそこにはエルトしかいない。

エルトも何をそんなにマリアが困っているのかと話を聞いて、騒ぎになる前に探した方がいいと気を回して、マリアと一緒に探したのだが、ミグとレティシアの姿は屋上にすらいなかった――。

どこにもいない二人は、一体どこへ行ったのか――。
マリアとエルト以外にも世話役の侍女、執事も総出でバタバタと二人を探し、結局、騒ぎになった頃には、既に時刻は２０時半を過ぎていたという――。
騒ぎになってからは、夕食を食べていた兵士達も城下に駆り出され、二人を探すよう指示が出され、大騒ぎになっていた。
国王エリックはそれに憤慨し、世話役であるマリア、目付け役であるリュシファー、大目付役レイモンドも呼ばれ、三人を怒鳴りつけ、その後ろでは王妃リーディアがおろおろと困った顔でエリックを止め、少し落ち着いた国王エリックはリュシファーも二人を探すよう命じたのだった。

「は……」
リュシファーは勿論、その原因が自分にある事を知っていた。
しかし、立ち聞きしてそれを言ってしまった事などと、言うわけにはいかなかった。
申し訳ない気持ちになりながらそう返事をして、大広間を後にした。

一通り指示を出し終わった国王エリックは、席に座ると呆れ返った様に額に手を当ててため息を吐いた。
厳しい表情をその顔に浮かべ、そのまま頭を横に振ったかと思うと、こう呟いた。
「…この役…もう嫌だ……」
・・・・・・
少し変な空気が流れ、それを聞いていたリーディアがきょとんとしてエリックに顔を向けている。それに気付いたエリックは少しはっとして穏やかに言った。
「あぁ…リーディア、仕様だ――気にするな…あっちの話だ」
「？？」

リーディアは何の事かと、最後まで困った顔をしながら微笑んでいた。

――――という作者のおふざけはともかくとして。

エリックは、二人を見つけるまで城には戻って来るなとまでリュシファーその他、大勢の兵士たちに告げていた。したがって、レティシアとミグを探す旅に出なくてはならなくなり、一部の者は旅支度に取り掛かってから後で合流するために遅れて向かい、ほとんどの兵は既に出払っていた。

また、レティシアとミグの姿が消えたという事は、あまり城以外の他の者に知られない様に、最善の注意を払い探すよう言われており、おまけに探さなければならない猶予は三日しかないため、事態は緊急を要していた。

リュシファーも、急いで部屋に戻り旅支度を整えるとすぐに城を出て行ったのだが、どこに逃げていったのかは見当もつかなかったのだった――。

――この、エンブレミア王国の双子、レティシア王女とミグ王子の失踪騒ぎ――。

暗雲の雲は、この風の抵抗を受け――、

流れを変えざるを得なくなろうとしていたのだった。

そして――――。

当の本人達は、一体どこに消えたのか……。

――それは、本人達以外…

まだ誰も知らないのであった。

第三章へつづく。

【第二章】†ｅｐ．５　暗雲に吹く風††（後書き）

第一章は長かったですが、第二章はそんなに長くありませんでした。
第二章まで読んでいただきありがとうございました。
今回はレティシアたちが出てきませんでした。
そして、少しエリックにふざけた台詞を言わせてしまいました。すみません。どうしてもやりたかったんです…。
では、第三章でお会いしましょう。

【第三章】Ｔｉａｒａ　＆ａｍｐ；　Ｅｌｆｆｉｎ†ｅｐ．０　いつもの二人†

エンブレミア王国マールシェスタ城――。
第二王子ミグ。
第一王女レティシア。
二人の行方がわからなくなってから、２時間が経過していた。
外は、雷鳴の響く土砂降りの雨――。
エンブレミア王国城下街――。
そんなに遠くに行っている筈はないのだが、雨と暗闇により視界も悪く、二人の行方は全く気配さえ見つからずに時は過ぎていた。
――街の人々も、城の兵士達が総動員で街を走り回っているので、何か不穏な気配でもあるのかと警戒をして、そそくさと家に帰る者も多かった。

「…どこ行ったんだ……この雨ではさすがに空から見ても、何も見えないだろうな…」
と、リュシファーもこの天候ではお手上げ状態であった。

そんな中――。
エンブレミア王国城下街の街中を探しても見つからない二人の姿は、既にそこにはなかった――。
旅用の地味な枯葉色のフード付のマントで雨風を凌ぎながら、一人の旅人が雨風の中、魔法で稲妻を発生させて一匹の魔物を倒したようである。
「はぁ～…疲れた。雨の中ご苦労だなぁ…休めばいいのに。――こいつもそろそろ目覚ますだろうし、休憩するか……よし」
その愚痴を溢した旅人――ミグは、地に結界印を描いた。そして、トンッと杖を突き立てた瞬間、その結界印がぼんやりと水色に光ったかと思うと、静かに消えて元の文字だけになった。

結界印――魔物がいる外で休息をとる際に、魔物が踏み込めぬ様にしたい範囲をこの結果印を描き囲むと、聖なる力で守られた聖域を作ることが出来る。また、そのために描く魔方文字の羅列自体のことを指す言葉でもある。

最後に、聖なる力で守りを得るための呪文を唱え、杖をトンッと突き立てれば、あっという間に安全な地の出来上がりだ。

「これでよし――。一応、目立たない森の入り口の木の下だし、そう簡単には見つからないだろうし、雨も少し凌げるだろう。…後は、テントだな」

そう言って、異次元空間から丸い緑の小さな玉を取り出すと、結界を張った地に思いっきり叩きつけるように投げつけた。

ボフッと雨雲の様な色の煙が、鼻と口を押えていないといけない程にその場に発ち上がり数秒で消え去ると、そこには緑色のテントが姿を現していた。

テントのファスナーを開けると、自分の服の胸元のポケットからそっと女の子の人形の様な物を取り出すと、そこに静かに置いた。

ミグはその横に座ると、深く被っていたフードつきのマントのフードを脱いだ。

そこから現わしたミグの髪の毛は、レティシアの様に澄んだ翡翠の様な緑石色をしたいつもの色をしていない――。瞳の色もそれは同じである。

髪の色は、淡いピンク色に変えられており、瞳は紫水晶の様な紫色――。髪型はいつもより少し長く、ゆるく巻いてある。勿論、それは変装のためであるが、レティシアと同じ顔立ちをしたミグのその風貌は、まさに――女の子そのものである。万全を期して男の姿ではバレると思い、そうしたのだった。

先程取り出した女の子の人形の様な物――これは、ミグが魔法で小さくしたレティシアだった。眠っている様子で目を閉じたままのレティシアに向かって、ミグはそれを解く呪文を唱え出す。

「――その地より見えし理小さき物(ことわり)…真の理の姿見えぬそこより…

我と今ここに在るべき姿に力を解き放て……」
その言葉が紡ぎ出された直後、レティシアの体の周りから青白い煙がぽんっと発生してテント内を立ち込め、何も見えなくなる。
「ごほっ…ごほっ…」
ミグが咳払いをして袖で鼻と口を覆いながら、テントのファスナーを上げて煙を外に追いやるように手で扇いだ。
煙はテントの入り口から少しずつ出て行き、視界が元に戻る頃にはレティシアの姿は元の大きさへと戻っていた。
「…ったく、煙いのが厄介だな～こういう魔法は。…まぁ、テント内じゃ仕方ないか…」
そう文句を言いながらレティシアの横に横になったかと思うと、テント内にある毛布をレティシアと自分にかけ、少しだけ考え事をしていた。
――目、覚ましたら何て言おうかな……。とりあえず、怒られる事は覚悟してるだろ～？
あんな落ち込む様な演技して俯いて、おまけに？　一応謝ってはおいたけど、こっそり呪文詠唱してタイミング見計らって、眠らせたーなんて……普通怒る。
いや、それはまぁいいか。仕方なかったことだ――。

それよりここはどこ？　私は何故ここに？　なんて所から始まるか……。
――い、いやぁ～レティ。ちょーっと城抜け出してみたんだよー。あっはっは。
…なーんて簡単に言えないよなぁ…。
一番厄介なのが、何でこんなことしたんだ――？　とか聞かれたら…何て説明しようかなぁ。衝撃的すぎるから少し黙ってようかなぁ……でもなぁ～…。
――俺も今思うとよくわかんないけど、リュシファーの言葉でちょっと思いついただけって言うか……なんていうか――、…つい…

…？

…確実に怒るだろうなぁ。やっぱその前に事情話すしかないな。

そしたら、俺がこうしたのもアイツも納得するよ。ははっ。

――あ、後先は考えてないけど、少し逃亡生活しようじゃないかっ。はは…

…ってことで。…そういえば、ほんとに後先は考えないで出てきちゃったわけだけど。

――ま、いっか。考えてても仕方ない。なるようになるってね。

うん…そうだ。

……本当にお気楽なものである。

短所でもあり長所でもあるのだが、調子に乗りやすくのん気でお気楽主義。後先を考えないこの性格は、――長所というか短所というべきか…としか言いようがない。

とにかく――。

そんな調子で思考を巡らせていたミグは、それでも時々ちゃっかり考える時もあり、追っ手が出始めただろう時刻――、自分たちが城を出た時刻――、追っ手の状況の整理――、追っ手の探し順――…これらを考えるとレティシアが目が覚めたら、早めに移動した方が良さそうだと割り出していた。

レティシアが隣ですやすやと寝る中、地図を広げ少し頭を悩ませていたミグは、行き先の正しさを確かめていた。

ミグが目指していたのはサユラナという街――。ルーセスト大陸の南東に位置するエンブレミア王国から、北西に来た大陸の上部に位置する割と大きな港街である。他の大陸からの人々も行き来し、観光なども盛んで人通りも多いため、変装でもしていれば簡単にバレる様なことはないとミグは考えていた。……よし、まぁなんとかなるか。

そう思った時だった――。

「ん――――……？」

と小さく呟いてぼんやりとレティシアが目を開けた。
「レ、レティ！　目覚ましたかっ？」
レティシアは隣を見て、ぎくっと顔を硬直させていた――。
「っ……。ミ、ミ…グ……？」
声を思い返して気付いたのかレティシアは、そう言ったかと思うと次に笑い出した。
「ぷっ…ミグ何だ、その格好は…っあははは。寝起きで笑わせるな…っ」
「――あぁ、これかっ。いや、変装しなきゃなんないからさ」
ミグがそう言うと、レティシアはきょとんとして言った。
「へ？…何で？？」
そして、ミグが困った様に作り笑顔を作って目線だけ、テントを一回りさせてレティシアに気付かせようとすると、同じ様に目で辺りを見回したレティシアは、驚愕の表情の後、こう言った。
「う……、ぇ……えっ？　…ま、まさか――――」
ようやく気付いた様子のレティシアに、ミグは頷いて言った。
「ん？　ああ、そのまさかだ――。城抜けてみちゃったりして～。――ま、まぁ…色々と…」
目を見開いたまま青ざめていくよう様なレティシアの表情は、予想通りだったがおそらくいつもの通り、現実逃避している様子だ。
「――悪夢でも何でもないぞ…言っておくけど」
「！」
その一言に何とか現実に戻ってきた様子のレティシアは、次の瞬間、慌てて起き上がり、テントのファスナーを下げている。外をきょろきょろと見回して、現実をちゃんと理解したのかゆっくりと振り返って言った。
「……ミグ、あのさぁ……。ミグって――馬鹿？」

――そう言ったレティシアの表情は、もはや怒りとか驚きを通り越して呆れ返った微笑みを、その顔に浮かべていた――。

「いーや…俺は大真面目だよ……、――レティ」

――ミグはその一方で、何も知らないレティシアにふっと少し微笑んでから、静かにそう言った。

時刻は午後２３時近く――。

その後全て聞かせた盟約の話に
勿論、納得しないレティシア――。
しかし、追っ手に追われる自分達は
少しカッコイイかもとのん気な事を言うミグ――。

――いつもの会話風景と同じに見えるが
ひとつだけ違うのは……

ここが、城ではないことだった――――。

そして――。
二人の行く先は、何故かとっても不安である……。

つづく。

【第三章】Tiara & Elfffin†ep. 0 いつもの二人†

ミグがレティシアが目を覚ますまでに考えていたことなど、ミグ目線で展開しています。こうして、第三章は始まっていきます。というプロローグ回でした。

【第三章】†ｅｐ．１　ルクチェ†

そうして、その後なんとか夜中にサユラナの街に到着した二人は、やっと宿屋にて疲れた身体を休めるため、二人して部屋のベッドになだれ込んでいた。

「はぁ～…ねぇー、ミ――じゃない、エルフィン」

先に声をかけたのはレティシアだったが、ミグと言いかけて別の名前を呼んだ様子だ。

「ん…？」

ミグはもう眠くて死にそうな表情を、その顔に浮かべながら返事をした。

「部屋…狭いね」

そう言ったレティシアに、呆れた様に笑うとミグは言った。

「ったり前だ……普通はこんなもんなんだよ。レ――じゃない、ティアラ」

どうやら偽名でお互いを呼ぶ事にした様子の二人だが、ついいつもの調子で名前を呼びそうになってしまう様子であった。

無論、偽装のためだ――。

レティシアの偽名は、――ティアラ。

髪の毛は、紫水晶の様な紫色――。瞳は淡いピンク色。

少し驚くのは、髪の毛の長さである。レティシアは、盟約の話を聞き何かを決意したように剣を取り出したかと思うと、ミグが止めるのも聞かずに思い切って剣でバサッと切り落としてしまったのだった。それに唖然として見ていたミグは、実は、髪の毛を自分で好きな様に切るのが得意で、いつも自分でやっていた。したがって、いつもレティシアの髪の毛も切ってあげており、自分が作り上げたカットラインが、崩されて台無しになって許せなかったのもあるのかもしれないが、剣で切り落として短くなったレティシアの髪の毛

を、無造作に整える様に切り整えてあげたのだった。

ミグの偽名は、――エルフィン。

レティシアと正反対で髪の毛は、淡いピンク色。瞳は紫水晶の様な紫色――。

レティシアの髪形は、前のミグの様に肩につくかつかない位でデザイン的にカットされ、真っ直ぐだが、ミグはゆるく巻いてあるので、より女の子らしくカモフラージュされている。

二人はどこから見ても双子である事はよくわかるが、女の子二人であれば簡単に追っ手に見つからないだろうとそう考えた。

「――ティアラ。お前さ、風呂ひとりで入れる？」

「えー？　なんで？　入れるよ」

「…ふぅん。じゃ、先どうぞ」

「うん。行って来る」

そう言って走り去っていくレティシアを、ミグはベッドにうつ伏せたままで手を振って見送った。しかし、その後数分後、レティシアがミグを呼ぶ声がする。

「……はぁ、やっぱりな」

そうである。レティシアは侍女にいつも洗って貰ったりしていたため、洗い方など何も知らず、洗ったことなどなかったのであった。そんなレティシアがミグを呼ぶのは想定内だったのだろう。ミグはそうため息を吐きながら面倒くさそうに、バスルームへと向かっていった。

――――…

一緒に風呂に入って面倒を見てくれたミグは、レティシアにシャンプーなどの役割などを説明して洗い方も教えてくれたが、結局、目に入ったりして上手く洗えないレティシアの頭を、仕方がなさそうに洗ってくれた。バスルームを上がるなりバスタオルを渡してミ

グは言った。
「これで拭くくらいは出来るだろ？」
「？」
「す…少しは侍女達の様子見て覚えろよ……ったく、はい。これでよし…」
「はーい」
先程からレティシアは少し楽しくなっていた。
狭い風呂場――。侍女達がいなくて少しミグに教えて貰いながらも、大体はやってもらったが、本当は自分で洗髪をしたりしなければならないというその行動――。それらが、なんだか城を出たことを実感して、嬉しい気分だったのである。

「で、ここからどうするかだなぁ…」
「ん？　何が？」
「何がって…お前、逃げ続けるためにどう動くかだよ。追っ手と時間の差は多分、２時間半ってとこだ。俺らは１７時半くらいに出たが、多分１９時半の夕食時にいなくてマリアたちが城を探して、早くても２０時には騒ぎになっているだろうから…多分ルーセスト大陸の西とか北とか北西とか南西とかさ…兵士が分配されて探しに動くと思うんだ」
「ふむふむ…」
意外とミグがしっかりと冷静に状況と対策を考えていることに、感心しながらレティシアは聞いていた。ちなみにマリアがのんびりしていたので、結局騒ぎになったのは２０時半で、実際は、３時間追っ手より先に行動しているのだが、二人は知らないことであった。
「――で、多分、逃げるためにどこを目指すかって考えた時に、探す側もこのサユラナの街を重点的に探そうとすると思うんだ」
「え…何で？」
レティシアのその言葉に、ミグは頭を横に振りながらため息を吐いた。

ミグが言うには、逃げるなら出来るだけ遠くへ逃げたいという発想になる。
サユラナの街には船が出ている。だから、自分達がここサユラナで船に乗ろうとする事は、簡単に予測出来ると思う――ということだった。
「ミグ、頭いいっっ――あ…じゃない、エルフィン。でも、じゃあ何でサユラナに来たの？」
その言葉に、ミグは得意げな顔をして言った。
「他の街へ逃げても、多分捕まるのは時間の問題だからだよ。遠くに逃げられる可能性が少しでもあるなら、少しでも挑む――婆ちゃんだって言ってただろぉ？」
「オルフェシアお婆様～？」
「……婆ちゃんさ、『…色々なことがこれからあっても、少しでも可能性があるなら少しでも挑むのよ…そうすれば何かが変わるわ…』って言った後に、それは俺らが産まれる前に死んだ、あなた達のお爺様がよく言っていた言葉なのよって言ってたっけなぁ…オーグロンドお爺様。肖像画しか見た事ないけど、どんな人だったのかなぁ～」
ミグがそう言ってベッドに横になったので、レティシアも隣へ潜り込む。
二人はお互いに背中合わせにそっぽを向くように並んだまま、しばらく黙っていた。
「…ミグ…ううん、エルフィン……。――逃亡に付き合ってくれて」
そうレティシアが口にすると、ミグが少しふっと微笑んだように息を吐いたのが聞こえて、その後に静かにこう聞こえて来た。
「いや――俺が勝手に連れて来ただけだ…気にするな」
「……」

ミグのその返事を最後に、二人は眠りに堕ちていった。
――――…

明朝――。
午前5時――。
ミグに魔法をかけられて少し仮眠もとっていたレティシアは、少し早く目が覚めた。
窓の外を見ると、すっかり雨も止んではおり、雲行きは快晴とまではいかないが、どうやら天候の悪さが過ぎ去った様子に安堵していた。
船の出港は、確か7時が一番早いとミグが事前に調べていたため、そろそろミグを起こそうとミグに声をかけた。
どうせ、船の中で寝ればいいのである。
そう思ったミグは何とか目を擦って起き上がった。
サユラナの街は観光が盛んなだけではなく、漁業も盛んで朝早くから漁をして、採れた新鮮な魚を朝早くから振舞う店も多い。そう、街の人に聞いていた二人は出港の時間までに、朝ごはんを食べるため、準備をして宿を出る事にした。
「そういえばお前さ、…ぁ、いやティアラさ、昨日思ったけど実戦経験は少ないのに、前より剣の腕上がったなぁと思って」
「えっ、そ…そぉ？　き、気のせいじゃないか？」
「ふーん。まぁいいけど、思ったより当てに出来そうだと思っただけだ。まぁ、でも至近距離に近づくわけだから怪我だけはしないように、お兄ちゃんは心配なのだよ、ティアラちゃん」
「…なんだそれ。ちなみに今は、お姉ちゃん――だろ？」
「……」
魚のムニエルとパンと魚貝のスープ、サラダなどの朝食セットを二人で食べながら、仲良

く会話する美少女二人。その店にいた誰もが、その双子に目を奪われていた。

そこに良からぬ思惑で二人に声をかけようと、四人連れの男達の中の一人が席を立ったのを見ていた一人の女性が、その男性より先に、素早くレティシア達の前にしゃがみ込んだ――。

突然、自分達のテーブルに手をかけてしゃがみ込んで、同じ顔の二人を交互に見ているその女性に、レティシア達は声も出せずに困惑の表情で見つめていた。

「ねぇ、お嬢さん達。これから船に乗るのかなぁ？」

レティシア達は二人揃って一度、顔を見合わせた。

歳はレティシア達よりも年上の２５～２７歳くらいの女性で、レティシア達の返事を待つように、その視線を漆黒の様に黒い瞳で向けている。同じ様に黒の髪を三つ編みを所々に混ぜ、片側だけに高くまとめて結び、服装は少し独特で踊り子の様な服を着ているが、そのスカートの下には、裾の膨らんだズボンの様な物を穿いている。気が強そうでもあるが、優しく面倒見が良さそうな女性だった。

にっこりと微笑んで言われた言葉に二人は、女性の方を向き黙って頷いた。

「そう。私もそうなんだけど…一人で船旅は長いし…、良かったら混ぜてくれないかなぁと思って」

今度はミグとレティシアは、少しも悩まずに口を揃えて言った。

「いいですよ」

先程頷いた時に、二人より三人の方がバレにくいし、確かに二人より三人の方が長い船旅は楽しいと思ったことを、なんとなくお互いに目で伝え合っていたのだった。

――これは、双子の成せる技なのかもしれない。

「わぁ…ありがとぉっ。それにね、お嬢ちゃん達ちょっと目立つのよ。周りの男達が皆見ているのには、全然気がついていないみたいだけど、まだ若いみたいだし？　二人じゃ危険かなぁと思ってねぇ、ふふっ」

と、そう言いながら女性が周りを見渡した先を一緒に二人も辿ると、店の客達がぱっと目を逸らすのが、明からさまに解かった。

そしてミグも女の子として見られている事に、レティシアは密かににやにやと笑みを溢す。

レティシアのその意地悪い笑みに気付き、何とでも言ってくれと言わんばかりに呆れた様な表情をしてから、作り笑顔にその表情を作り変えるとミグは、その女性に口を開く。

「あ…ははは……。えと…」

「？」

「…あの、お名前は――？」

「あぁ、名前ね。私は――ルクチェ。あなたたちは――？」

「私達は――――」

――――…

そうして、ルクチェという優しいそうな女性と出会い、船に乗り込んだレティシア達三人は、ルクチェと部屋を隣にした。

部屋に入ってすぐに船の甲板に上がってみたいというミグと一緒に、ルクチェも誘って三人で甲板に来ていた。

港を出て少ししかたっていないというのに、もう大分遠くに見えるルーセスト大陸のサユラナの街並が、レティシアの目には少し霞んで見えるような気がする。

行く当てもないレティシア達は、ルクチェが向かうという大陸行きのチケットと、同じチケットを買った。そうして、とりあえずの行き先が決まって向かう大陸は、イオネ大陸――。

イオネ大陸はルーセスト大陸の少し北に位置していて、少し小さい大陸でもある。
ルクチェが、船は途中で燃料補給などをそれぞれの大陸の港で行い、途中で乗客を乗り降りさせながら何大陸かを各船が回っていて、イオネ大陸に着くまでにも一箇所中継地点を通り、大体1日ほどで着くと言っていた。
ルクチェはそのイオネ大陸のはるか北の町から来たそうで、町長の娘なんだとか。
町長より少し使いを頼まれて、戻る途中なんだと言っていた。
「ところで、ティアラ達は当てもなしにどうして旅に出たの？」
ルクチェに一番聞かれたくない質問をされ、レティシアは困った様な表情を浮かべて慌てていると、ルクチェが何かを察したように甲板の手すりに手をかけると微笑んだ。
「ひょっとして、家出とか――？」
ぎくぅっっ…
レティシアは、思わずしどろもどろに訂正しようかと思ったが何も浮かばずに、ため息を吐いた。
「あはは…当たりでしょう？　で？　どうして？」
「い…いや……それは、その――」
と困っていると船の甲板を見回っていたミグが戻って来て横にいた様で、話に割って入って来た。
「――ルクチェさんっ」
「――あら、エルフィン。どうしたの？　もう色々見て来たのかしら？」
「あ、うん。あの、そういえばルクチェさんって、町長の娘さんひとりで使いを頼まれて、かなり北なのに危険じゃないの？　魔物だっているでしょ？」
かなり自然にミグは、レティシアの危機を回避した様だった。
ルクチェは振り返って微笑んだ。
「あぁ、そりゃ私たちの町は代々精霊が宿る町と言われていて、精

霊使いの町なのよ。こう見えても、ちょっとやそっとじゃやられたりしないわ。町長である私の父は、精霊のお告げも聞く程の力を持っていて、それを私も受け継いでいるからね――」

レティシアは顔をしかめながら黙って聞いていたが、ミグは驚愕した様に口を開いた。

「――えっ！　精霊使い…って精霊召喚士でしょ？そこって…ミールティアの町…とか？」

ミグは、何故か精霊使いのいる町がどこか知っていた。

「あらー良く知ってるわね。そう、精霊召喚士…のいるミールティアの町。そして――、私はミールティアの神殿の巫女なのよ。まだまだだけどね」

そう言ったルクチェとミグの話で聞き覚えがある町の名前について、考えていたレティシアは、ふと思いついて口を開いた。

「あっ。そうか、ミールティアって…あれ？　名前に入っ――――んぐぐっ」

そうレティシアが言っている途中で、ミグは慌ててレティシアの口を押さえ、少しルクチェからざっと離れると、聞こえないように小声だが怒鳴りつけるように言った。

「お、お前馬鹿かっ…？　そんな事言ったら素性がバレるだろうがっ……俺達の名前に入ってるそれは、生まれた時に洗礼に来た者が、どこの神殿から来たのかって事で名をつけてるんだよっ。それも、一般人には神殿名を名前につける習慣はない。もう一つ言っておくと、ミールティアは王族に頼まれた時しか、洗礼に訪れることはない。ってことは、簡単に俺らがどういう素性かわかっちゃうんだぞっ、簡単に言ってどうするっ…！」

レティシアの名前は――レティシア＝ミールティア　オーグロンド・リーディア・マールシェスタ　オブ　エンブレミアである。エンブレミア王国では、名前の次から順に、洗礼を受けた神殿名・祖父の名前・母の名前・国と城名――とこの様に名を付ける習慣になっており、しかしこれはいつも使用するわけじゃなく、正式な儀の

時にしか呼ぶ事はないので、レティシアはすっかり忘れていたのであった。

ちなみに、結婚をするとそれにさらに相手が王族ならば、相手が洗礼を受けた神殿名。貴族ならば、家名などが付くのでより一層長くなり、混乱しそうである。

「……ぁ、そ…そぉか……そぉだったっけ。あんまり使わないから忘れてた」

「もー…しっかりしろよ。俺達は逃亡者なんだぞぉ？」

とルクチェに背を向けて話していたミグの後ろで、ルクチェの声がする。

「……なるほどね。そういうことか…ふぅーん」

「！？」

「！」

ばっと振り返ったミグのすぐ後ろには、ルクチェが腕組みしながらうんうんと頷いている事を、レティシアはミグより先に目で追い、既に知っていた。とっくのとうに、現実逃避していた。

「ル…ルクチェ……さん。い、いつの間に……」

そうミグが口を開いた時には、ルクチェはにっこりと微笑みながらもしっかりと二人の腕を掴んで、部屋へと連れられ始めていた。その間、二人は『お前が変な事言うからこうなったんだぞ』『違うっお前がっ』と小声でこっそりと言い合い、ルクチェの部屋に連れて来られてベッドに二人座らされた時には、既にお互いに不機嫌そうにそっぽを向いていた。

ルクチェがその様子に、ハァ…とため息を吐きながら言った。

「――ここなら誰かに聞かれる心配はないわ。さ、どういうことな

のか…説明してくれる？」
ルクチェはそう言いながらも、穏やかな微笑を二人に向けている。
そっぽを向いたまま答えない二人に、ルクチェは言った。
「別に怒ってるわけじゃないのよ？　ただ、ちょっと教えて欲しいだけ。さっき言ってた様に、ミールティアは王族の元にしか洗礼の依頼を受けても伺うことはないわ。実際に洗礼に来た者にしか基本的に洗礼しないわけ。名前にミールティアを名乗っているならば、何カ国かあるけど…その内のどれかの王族ってことになるわね…。でも、その中にティアラ王女とエルフィン王女…いや、女の子だと思ってたけど王子はいない。よって偽名である。まぁ、身分を隠さなければいけないだろうから、仕方ないけどまぁ、そういうことよね？」
――な、なんという頭の整理された的確な憶測……。
リュシファーほどは怖くなく穏やかに微笑んでいるというのに、目の奥にある光は見通す様に揺らめいていて、でも何か暖かい様な優しい光を携えているし…ルクチェ、…侮れない。
……ここは、ミグに任せよう。…どうするんだ――ミグ……。
レティシアはちらっと横目でミグを見ると、ミグはぎこちなく微笑みを浮かべて考えている様子で、その瞳は同じ様にレティシアの方にちらっと向けられては、何も策がない様に首を横に振った。
レティシアは、ミグにも手がないのなら…、もうどうしようもないことを悟っていた――。
ミールティアの神殿の巫女――ルクチェ。
――実に侮れない者の様である――。

――――……

――――……

つづく。

【第三章】†ｅｐ．１　ルクチェ†（後書き）

ルクチェという女性との出逢いの回です。
しかも、大変なことになりました。
二人はわりとろくなことしませんが…そこはまぁ見ていて微笑ましい様な感じで今のところ書いてます。今回は二つ続けて書きました。

【第三章】†ｅｐ．２　海と陸†

２時間前――…

ルクチェは、思いついたかの様にこう言った――。

『エンブレミア王国には確か双子がいたわね～』――と。

的確に――そして、最初からその思惑が脳裏にあったかの様にそう言った――。

今思うと、ルクチェは自分の部屋に私達を連れて来た時にはもう既に、私達がエンブレミア王国の王女と王子であることを、見当付けていたのかもしれない――と、そう思う。

――――…

「ねぇ…エルフィン」

「ん…？」

「――抜け出してきた理由は言わなかったけど、『あらそう…まぁ色々あるわよね』――って言ってたな…」

「あぁ…ルクチェさんか――。…俺はまだ信用はしてないけど、まぁ…城に戻されるかと思ったら、『別にそういう気はないから、安心してちょうだい』とも言ってたな。つっても…、わかんないぞぉ？　大人って言うのはそう言っておきながら、結構なんだかんだで言いつけたりするからなぁ～」

そう言ってミグはベッドから起き上がり、微笑みながら隣で横になっているレティシアの頭をくしゃくしゃと撫でた。突然、くしゃくしゃと髪の毛をかき乱されたレティシアは、もちろん怒って文句を言う。

「はは…っ。“短いなぁ～”と思ってさ」

「に、似合わないか？　…これ」

とレティシアは少し不安そうにミグに聞いた。

少しの間の後に、ぷっと吹き出したように笑ってから言った。

「――その髪型の時の俺は似合わなかったって言ってるの？　それ」
言われてレティシアは思い出したかの様に納得すると、嬉しそうに言った。
「うんう、――似合ってた」
二人は、ルクチェに問い詰められて素性を話すことになり、止む終えなく明かしたのだったが、ルクチェは少し驚いただけで別に城に戻るよう説得されるわけでもなく、『行く当てもないのなら、じゃあ少し一緒にミールティアの街へ来てみない？』と言っただけだった――。
その後ルクチェは、ミグの顔をまじまじと見ては『いや、本当よく似てるわねぇ～女の子にしか見えないわね、ふふっ。エルフィン』と言って微笑んでいた。
ルクチェに昨晩はあまり睡眠をとっていない事を告げ、昼寝をすると言ってルクチェの部屋を後にしたのだったが、なかなか二人は眠れずに、話しながら起きていたのであった。
レティシアはベッドの上に座っているミグに言った。
「ねぇ――。リュシファー…私達を探しに出されてたりする…と思う？」
「あぁ…――目付け役だからなぁ…父上なら、見つけるまで帰らなくてよいっ――なーんて城の兵士にもリュシファーにも、怒鳴りつけてるんじゃないか？」
「……」
その時、レティシアに返事をしたミグがベッドから立ち上がった。
「俺、ちょっとトイレ行って来る――」
ドアへ向かうミグに、レティシアは慌てて自分もばっとベッドから起き上がると言った。

「あっ、私も行くっっ――」
パタパタと部屋のスリッパを鳴らし、レティシアはミグの後に続いたのであった――。

――ミグには言っていないから知らないだろう……。

確かに、リュシファーはエルフの一族なので魔力は高いかもしれない。
きっと私があの時見た魔力も――、ほんの片鱗に過ぎない……。
仮に力ずくで連れ戻しにやって来られたら、今の私達ではかなう筈がない――。
――こうしていつもと同じ様にミグとケンカをしながらも行動を共にして――……
……ひとりにならないようにしていた。
ミグと笑い合っている時も、心のどこかで怖れていた――……
……ずっと――――離れ離れになるみたいに、……怖かった。
一方で、自分に眠っているという魔力のことも、よくわからなくて何だか不安だった――。
――――……

――トイレが済んだ後、二人は再び甲板に来ていた。
潮の匂いのする少し湿気を帯びた海の風――。きらきらと太陽に輝いて深い蒼の海の色――。周りを見回しても、遠くに目を凝らしても――どこにも大陸はもう見えない。
空は太陽が真上に輝いて、昨日までの悪天候が嘘のように海を照らす。
レティシアは、甲板の手すりに腕をかけながら、後ろのベンチに座るミグを振り返って聞いた。
“詠唱もなしに魔法を使うとは、どういう原理なのか”――と。

――精霊は、魔法の呪文の呼びかけに応え、魔法の力を貸してくれる――。

それが魔法という物が発動される原理である――。

精霊は使う者の意志を読み取り――、呪文を唱えると同時に力を貸してくれる。

どんな者が魔法を使おうと思った時でも――、精霊はいち早くそれを察知し、その者の側に来て、――まだかまだかと呪文の言葉が口から紡がれるのを、待っているのである。

高等魔術師ならば呪文の言葉を紡がなくとも、精霊の方が自らいち早くその意思を感じ取り同調し、呼びかけに応えてくれるだろう――。

しかし我々の場合は相性により、応えてくれる場合が稀にあるかもしれないが、精霊は気まぐれでもあるので修行を怠ってはならない――。魔力が低ければ、いくら呼ぼうとする精霊と相性が良くても、その様なことも起こり得ないことである。したがって魔力を高めるということは、魔法を使いこなす上で必須条件なのである。またこれは、高等魔術師ルーザスも言っている――。

“魔力無き者――…”と、ミグがその名言の部分を教本から読み上げようとした時、レティシアは勿論知っていて、続きを思わずその口から紡いだ。

「“――有りき者見えず滅す”…」

ミグが信じられない様な顔をしている。

「あ、いや。ちょっと――」

「…なんだ。まともに魔法の勉強してないくせに、それは知ってるなんて――変なの。まぁいいけど、ってなわけで…まぁ、魔力が高くないと詠唱なしで魔法使ったりなんて出来ないってことだ」

そう言いながら、ミグは教本を閉じて異次元空間にしまったかと思うと、風に吹かれて揺れる淡いピンクの髪の乱れを直して続けた。

「――だから、高等魔術師っていうのは凄いんだ。修行だけじゃなくて、資質みたいなのも多分あるんだってさ…本には書いてないけど、高等魔術師の多くは幼い時からその魔力の資質に気付いていたとか言うしな……」

「……」

隣にミグが同じ様に手すりに手をかけて、海を眺めている。

レティシアは、ミグにはやはり言えないとそう思った。

詠唱もなしに自分が魔法を使ったこと――。

リュシファーに何か資質を秘め、眠っていると言われたこと――。

そして、いつもは同じ歳の友達みたいに思っていたミグだったが、逃亡してからはいつのまにか少しだけ――、兄の様に自分が少し頼りにする存在になっていた事――。

……言えない――と、そう思っていた。

フリシールは風の魔法――。風の精霊とは相性がいいのだろうか……。

…他の魔法を使えないから他は知らないけど、やっぱり怖い。

呪文だけは知っているけど、使う事はない。

とくに炎は――嫌だ……。

「あらぁ～二人ともぉ～寝たんじゃなかったのぉ？」

声のする方向に二人一緒に振り返った。――ルクチェだ。

ルクチェに向けて二人して微笑んで、ミグが手を振って答えた。

「…あはは、なんか眠れなくなっちゃって、ルクチェさんは？」

「天気いいしねぇ。二人が寝るって言うから少し風に当たりに来たの」

ミグが元気に答える中、レティシアは黙っていた。

それに気付き、ルクチェは声をかける。

「あらティアラちゃん、どうしたの？」

ルクチェは優しい光を揺らすその瞳で、レティシアをじっと顔を覗きこんで見ている。

奥に奥に、レティシアは吸い込まれる様にそれを見ている。
「優しい…光――」
「え？」
ルクチェが不思議そうな顔でそう聞いたが、レティシアははっとしてぎこちなく微笑むと笑った。
「あぁ、いや。目が綺麗だなぁと思って、あははは……は」
「……あ、あら…そ、そぉかしら。ティアラちゃんも綺麗な目をして――」
そう口にしたルクチェの表情が少し驚愕した様に作られていた。
その優しい光を携えた瞳は、レティシアの瞳をじっと見つめている。
レティシアが困惑して声を漏らすと、ルクチェははっと気がついた様にぎこちなく微笑んだ。
「あ…あの――？」
「あ――いえ、ごめんなさい。あ、あんまり綺麗だったからつい見とれてしまって…あはは。噂には聞いてたけど、近くで見ると本当に綺麗な顔立ちねぇ～さすがは――おっと、危ない…素性がばれる事を口にするところだったぁ…あ――えと。私、これからお風呂に行こうかなぁと思ってもいたんだけど、良かったらティアラちゃんも、一緒に行かない？」
取り繕ったようにルクチェは見えたのだが、自然にお風呂に行くと言ってレティシアを誘ってきた。それを聞いて、ミグが何かをルクチェにこそこそと耳元で囁いている。その次の瞬間、ルクチェは吹き出しては笑いをこらえた様にレティシアを見ていた。
その横でぎこちなく微笑むミグに、レティシアは何を言ったのか問い詰めた。
「い…いや、そりゃ言っておかないとと思ってな」
次にルクチェが言った。
「あはは、いいわいいわ。――大丈夫よ。ティアラちゃん。頭くらい洗ってあ・げ・る・か・ら」
「！」

ミグはレティシアが体はちゃんと自分で洗えると思うけど、頭洗うのがまだ出来ないということと、エンブレミアの慣わしのことをルクチェに話していた様だった。

なんだか恥ずかしくなったレティシアは、ぷいっとそっぽを向いた。

それでも、結局ミグがルクチェによろしく頼み、風呂に連れて来られたのだった――。

「わぁ……」

海の上の船の中にある大浴場――。レティシアは、なんとか体は自分で洗い、後はルクチェに頭を洗って貰って、浴槽に浸かる。城の中の様に広い風呂だったが、違うのは知らない人たちも何人か入浴していた事。お年寄りや子供など、数人の人たちが湯に浸かっている。レティシアはそれが珍しかったので、浴槽に浸かる人たちを目で追っていた。

「――そんなに珍しい目で見てたら変に思われるわよ?」

ルクチェが上に上げた黒く長い髪を、タオルで巻いた後れ毛を艶やかに垂らし、微笑ましいものでも見るかの様にくすっと微笑んではその目をレティシアに向けて言った。

「あ…いや……つい…」

恥ずかしそうに肌を紅潮させながら、レティシアはさらにその身体を湯に沈めた。

と、突然、海の波に揉まれたかの様に、ふわっと体が浮き上がるような感覚に包まれて、レティシアは驚いて声を漏らす。

「くすっ…ここは海の上だから、海の波で船が揺れるとお風呂のお湯も揺れるのよ」

「へぇ〜なるほどぉ…びっくりしたぁ」

「船――乗ったことないの?」

乗った事ある筈はなかったので、レティシアは頷いた。

「そう――よね…。何があったかは知らないけど、今頃大騒ぎにな

っているんじゃなぁい？」
　ルクチェはそう言った。レティシアは黙って俯いた。
「――でも、これは私の独り言。いい？　独り言よぉ？　――私はね…いいと思うのよ。ずっと言いつけられるままにおしとやかにさせられて？　自分のやりたいことも叶わないなんて、もったいない。それに――あ…ううん。何でもない――独り言終わりっ…ふふっ…」
　ルクチェは独り言といって、レティシアにそう言った。レティシアは少し嬉しかった。でも、何かを言いかけて口を噤んだ様子だったのは気になったが、何となく聞き返せなかった。
　そして、レティシアはルクチェに聞いた。
「――ありがとう…ルクチェ。あの…精霊使いって言ってたけど、…それって何だ？」
　一瞬、きょとんとしながらルクチェは静かに話し始めた。
「…精霊の声を聞き、精霊の呼びかけに応えよ――…これが精霊使いなの。普通は、精霊に呼びかけるでしょ？　でも精霊使いは違う。使うべく時に精霊の方から力を貸してくれようと語りかけてくれるのよ。だから、ミールティアは精霊に守られし町とも言われる由縁なの」
「ふぅん……。じゃあ、ルクチェも精霊の声を聞くの――？？」
　レティシアの質問に、ルクチェは浴槽から出て言った。
「――まぁね。でもね、お告げをしに来る時もあるんだけど、時々しか来てくれないわ。お父様の様には、まだまだ私も修行が足りないみたいでね…。ふふっ…そろそろ出ましょう」
「あ――あぁ」
　そう言ってレティシアは、ルクチェと一緒に部屋へ戻って行ったのだった。
――――――…
　そして、翌朝――午前7時。
　イオネ大陸クトレス港に船は入港し、レティシア達一行はクレト

スの港町のカフェに入っていた。何故なら、ルーセスト大陸の北にあるイオネ大陸は気候が少し寒く、港に着くなり冷え切った空気にレティシアとミグは寒くて死にそうと騒ぎ、ルクチェがやれやれと温かい飲み物でもとここへ連れて来たのだった。

「もぉ、こんなんで寒いと言っていたら、ミールティアまでは持たないわよぉ？　ミールティアは雪が降ってるのよ？」

ルクチェが飲み物を片手にそう言った。

「こ…こんなに寒いとは――冬服なんて持ってきてない…後で何か買おう」

「そ、そぉだな…でも寒くて外出られないぃぃ。エルフィン、行って来て」

「何言ってるんだよ、お前も来るのっ」

「えぇぇ～」

と、相変わらず目の前の同じ顔をした二人は息が合っているかの様に、言い合いをしているのを見て、ルクチェが少しくすっと微笑んだ。

「私が適当に見立てて買って来ましょうか？　お金さえ渡してくれれば適当に買ってくるわよ」

「ほんとにぃっ？　はい、じゃあこれで。とりあえず適当に何か暖かい格好になる物をお願いっっ」

そう言って渡されたお金を受け取ったはいいものの、ルクチェはため息を吐いた。

ルクチェの様子に、レティシアとミグは顔を見合わせて不思議そうにしている。

――ミグが渡した額は１０万レクス。それは二人に１０着ずつは買える額だったのだ。

「あ、あのね……こんな額――」

――貰っても、そんなに一着高い服どこで買ってくればいいのよっ――とルクチェが言いかけたのを途中で聞かずに、レティシアがミグに呆れた様に言った。

「――ほら～、足りないと思ったんだ。まぁ、エルフィンには宿代も船代も出して貰ってるから私が残り出す――で、いくら足りないんだ？」

ミグにそう言ってからルクチェに聞くが、ルクチェはもはや唖然とした表情をその顔に浮かべていたかと思うと、再びため息を吐いて呟いた。

「――はぁ…これは先が思いやられるわね……」

「？」

「？」

もちろん何のことを言われているかわかってなさそうな二人に、ルクチェは席を立って言った。

「あ…えと、まぁいいわ、後で。とりあえず額は足りるからここで待ってて。いい？　勝手に動いちゃだめよ？」

とルクチェは二人にそう言い残して、服を調達しにカフェを出て行った。

残されたレティシアとミグは、きょとんとしてその後姿を見送った。

ルクチェが買ってきた服をレティシア達がトイレで着替えると、先程までものすごく寒く感じた外の空気も少し平気になり、三人はやっとその歩みを進めていた。

レティシアには、剣を扱うのに動きやすい“シヴァの羽衣”と呼ばれる防寒素材で出来ている精霊のミニローブ。

ニーハイソックスと、ふわふわとした動物の毛素材で、ウサギの耳まで付いた可愛らしいフード付のピンクブリザードケープに雪ウサギの手袋――。

ミグには魔力を高める精霊石のチャーム付で、レティシアと同じ防寒素材で出来た精霊のドレスと、雪飾りの帽子という可愛らしいデザインの動物の毛で出来た帽子。レティシアと同じ手袋などを買ってきた。そして、雪道を歩くためこの大陸で誰もが履く“精霊守

りのブーツ”を二人に買った。
もちろん、大量にお釣りが発生したため二人にため息を吐きながら、金銭感覚の違いを説明しながら返したルクチェは、ひとまず寒がっていた二人もこれでやっと満足そうにしているので安堵していた。

「はぁ……疲れたぁ～」
レティシアが歩きながらそう言った。
ミールティアはまだまだ先だ――。
おまけに、先程町を出たばっかりである。レティシアは、その場に立ち止まり疲れた様に言った。ミールティアに着く途中には、カザフールの村が中間辺りにあるが、それまではかなりの距離がある。それを思うと出たばかりだと言うのに億劫になって来たのである。
「まだ先だぞ～？　今からそんなこと言ってどうするんだ。お前より俺のが歩いてるんだぞぉ～」
「はは…そうだったなぁ。――フリシールでも使おうかなぁ…歩かなくていいように」
「ったく…しょーがないなぁ。じゃあかけてやるよ――」
ミグがそう言って詠唱し始めていたが、途中でぴたっとその詠唱を止めた。
不思議に思って、レティシアがミグの驚愕した視線を怪訝そうに見た。
「――え？…なんだ？？」
そう言った自分の視界の前に、以前見た透き通った様な風の渦が目の前に横切った。
レティシアの表情もミグと同じに驚愕のものへと変わる。
「お……おい――――、レティ…お前――――」
ミグがそう言った時、先を歩いていたルクチェが、なかなか来ない二人に遠くから声をかけてきた。
「二人ともーっ、ほら早く～夜になっちゃうわよぉ～っ」

その言葉にはっとしてミグがルクチェに返事をする――。
「――あっ…はいっ、い、今すぐーっっ」
レティシアはミグに見られてはいけないものを見られてしまった気分だった――。
そして向き直るミグの顔を凝視した後、今度は心の中で詠唱したわけでもなく、使おうかなと思っただけで発動したことも怖れ、レティシアは教本の文章を思い出していた――。

――高等魔術師の資質を秘めている魔力の高い者は、精霊がその意志を感じ取り、精霊自らが呪文の詠唱をしなくとも、呼びかけに応える――……

その時、レティシアの身体は――、既にふわふわと宙に浮いていたのだった――。

――――……

つづく。

【第三章】†ｅｐ．２　海と陸†（後書き）

ピンチかと思われたがなんとかルクチェの理解により、ミールティアへ向かうこととなったレティシア達。
自分でも得体の知れずに目覚め始める自分の魔力を怖れて、はっきりと何かがわかるまではミグには知られないようにしていたレティシア。
しかし、その片鱗はどんどんと力を目覚めさせていくのを感じて…？
という回でした。船旅を終えて陸での話に入ったので、海と陸ということでタイトルをつけました。では、また。

【第三章】†ｅｐ．３　視界†

「はぁぁぁぁぁぁっ！」

片手で剣を身構えたレティシアは、魔物の動向に神経を集中させつつ魔物の腹部を目指して踏み込んだ。

――よし……！

レティシアはもう片方の手を剣の柄に添え、一気に刃を魔物の腹部に突き刺す側で魔物は暴れ、爪がその頬をかすめ薄っすらと血が滲んでいる。

だがそれにも動じず魔物の身から勢いよく剣を抜いたレティシアは、その場から少し後退する様に飛び上がり宙で身をひるがえす。そして重力に任せ地に足をつけた瞬間に素早く相手の懐へと再度踏み込んだ。

魔物は怯む様子もなく襲い掛かって来るが、レティシアの剣の放物線は既にいち速く直線を描くように横に斬りつけていた。

少し遠目でルクチェが見たレティシアのその表情には、とてもいつものレティシアとは思えないほど口元には僅かに冷淡な笑みを浮かべている。

戦闘になるとその様に残忍ささえも感じられる表情に変える、そのレティシアの真っ直ぐな鋭い光を放つ眼力と勢いのいい剣舞に圧倒されていた。

レティシアの後ろではすでに魔物は真っ二つになり、さら……っと黒い砂のように灰になったそれは虚空へと風に飲まれ消えゆき――、レティシアは剣を鞘にしまっている。

「……ふふっ」

そこに残った魔石――。……深い闇の様な漆黒にも見えるその石は、太陽の光にかざせばうっすらとした紫色も浮かばせている。見る者をまるで闇をさらに深いものへと染める様に妖しく禍々しい独特な印象を与えていた。それを手に取ってレティシアは口元に笑み

を浮かべる。

「――エ、エルフィンちゃん。……ティアラちゃんって、剣を振るう時……ず、随分楽しそうね……」

「――あぁ……、あいつ魔法嫌いだから剣のが好きなんだよ」

ミグとルクチェは、魔物が増え出すカザフールの村付近になり、次々と魔物を倒して行くレティシアを、先程からずっとただ見守っているだけだった――。

“魔法が嫌い”と口にしたミグは、ため息を吐きながら何かを考えている様子も伺わせたが、ゆっくりとレティシアの元へと歩いていった。

「お前な……ほら顔。傷ついてる――」

「……え？　傷？」

レティシアは自分が傷を負わせられたと思っていなかったので、顔に触れて手を見て血がついている事を知り、ぎこちない微笑みを浮かべた。

「癒しの風吹く大地の糧よ、その地に眠りし聖なる力の理となり傷つきし者に今ここに与えん」

レティシアの元に優しい白い光が集まり、傷をスッと修復してその光はぼんやりと消えていく。

「あ、ありが――」

と、レティシアが礼を言おうとしたのだが、ミグはもう既に先に歩みを進めていた。

「…っ……ミグ……」

レティシアはその後姿を悲しそうに見ながら呟いたのだった。

ミグは、レティシアが詠唱なしに使ったフリシールの魔法を目撃してから、レティシアにそっけなくなった。何故かいつも元気なミグは、口数も少なくて黙っていることも多かったのだ。

あの時ミグにそれを問われた時、何故そんなことが突然出来る様になり始めたのか、自分自身でもわからない事だというのに、どう

説明していいかなんてわかる筈がなく、戸惑った様に慌てて言い訳のようなことを色々と並べ立てることくらいしか出来なかった――。

そして、ミグは『……ふぅん』と突然声を静かにレティシアに言ったかと思うと、くるっと背を向けて、呼んでいるルクチェの元へと静かに歩みを進めていったのだった。

それからというもの、何か話しかけても「……ふぅん」とか「……そうだな」とか、ミグらしくないそっけない返事ばかりで、レティシアは少し困惑していた――。

今も、傷を治してはくれたものの――やはりレティシアとあまり話したくない様子のミグに、レティシアはため息を吐いていた。

ルクチェは二人の様子がおかしいことも気付いていただろう――。

でも、黙って見守ってくれている様子だった。

「ティアラちゃんって剣の腕はかなりのものねぇ。この辺の魔物は結構強いのよ？　ルーセスト大陸の魔物よりは手強い筈なんだけど、習ってたの？」

「あ…あぁ……少しだけ……途中で魔法を勉強しろって言われて教えてもらえなくなったけど、一応それでも密かに練習だけしていただけ。…でも、実戦はあまりしたことがない」

「……ふぅん。もう少しでカザフールの村よ。少し休んでから夕方にはミールティアへ着けるわ――」

ルクチェがそう言った時だった――。ミグの横の木の陰から突然、虎の様な魔物の前足がミグに飛び掛かって来ていた。ミグは杖でそれを食い止めるが、魔物の強い力との攻防により、ミグはついに後ろに押し倒され、そして次にミグの口からは苦痛を訴える声が漏れる。

「ミグ！！」

魔物の爪は杖で受けきれずに、ミグの肩をえぐるように食い込んでいる――。

瞬時にレティシアは剣を取り、急ぎ走ろうとするのをルクチェが止めた。

「！？」

ルクチェがレティシアに微笑むと立ち上がり、ただ黙っていただけだった。

しかし、ミグに襲い掛かって来た魔物の回りに、ぼんやりとした緑色の光の玉が現れ始め、それは弧を描く様に周り、勢いは鋭くなっていき、魔物を真空の刃で切り裂くように強くかすめていった。ルクチェの右手が高々と上げられて、思い切り振り下ろされたかと思うと、魔物は吹っ飛んで何回か地に体を打ちつけた後、黒き灰となって虚空へと流れて消えてゆく。その間、たったの数秒の事だっただろう。あっけなくルクチェの手により魔物が倒されたので、レティシアは唖然としていたが、はっとしてミグに駆け寄る。

「――ミ、ミグッッ！」

痛みに顔を歪ませながら肩を押さえ、苦痛の声を漏らして激しく呼吸を繰り返している。

その後すぐにルクチェがやって来て、ミグの肩に手をかざす――。辺りをぽっ…ぽっ…と水色でぼんやりとした光の玉の様な物が現れ始めると、一気にミグの傷に集まって、強い光を放ったかと思うと一瞬にして消えた。

「大丈夫か？　ミグ」

レティシアが言うと、ミグはゆっくりと起き上がって言った。

「あぁ～死ぬかと思ったぁ……突然出てきてびっくりしたぁー…」

「ひとりで歩いて行っちゃ駄目よ。北に行くほど魔物は強くなるわ。でも、サーベルタイガーが出るなんて、この辺も魔物が強くなってきたのねぇ――…」

そう言って、ルクチェは下を向きながら頭を横に振りながら、ため息を吐いた。

「そ、それにしてもルクチェは凄い魔法を使うのだな…何も詠唱もしてないのに、何か光の玉の様な物が空に浮かんでさぁ…。――初めて見た」

レティシアがそう言ったのに、ルクチェは顔を上げない。黙って

いる。何かを考えている様子だったが、ミグが口を開いた。
「え？　俺、痛みで目を瞑ってたから何にも見なかったぁ。でも少し魔物を倒すところは見たけど、光の玉なんて見えなかったけど？」
「……え？　気のせいかな……まぁいいや」
レティシアがそう言って立ち上がると、魔石を拾いに歩いていく。
魔石は二つ落ちており、先程の自分が倒してきた魔物よりも強い魔物である事を知り、魔石を二つ軽く叩き合わせて機嫌よく戻って来た時には、ミグは立ち上がっていた。
少し歩くとカザフールの村が見えて来て、レティシアは機嫌良くミグたちより先に歩みを進めていた。カザフールの村は、古い木で出来た家が立ち並び、それぞれ畑にはそれぞれの野菜を育てているらしく、それはまさに田舎といった風景だ。
その村には何故か老人しかいなかった――。はしゃぎ回って歩みを進めていたレティシアは、どんなに見回しても老人しかいないその村を見ても、変わり映えのしない光景に、テンションが少しずつ下がって行き、先頭からルクチェやミグの一番後ろに回り、中間を越えた辺りまで歩みを進めて来た。しかし、やっぱり老人しかいない――。
その様子に飽き飽きとしてレティシアは、怪訝そうな表情で後ろに続いていたのだった。
――村長も、やっぱり年老いたお爺さん。こっそりと村長を観察すると、優しそうな面持ちでルクチェに挨拶をした後、世間話に花を咲かせている様子だったが、少々話が長い。
ミグの方を見ると、多分ミグも同じ気持ちだろう。つまらなさそうだったがぎこちなく笑顔も作りながら、話に耳を傾けていた。
レミーナ婆さんというお婆さんが、ご飯を作ってくれた。
たくさんの料理があり、多分5人くらいは食べれそうな量だった。
レティシアは、何もない田舎という感じの印象を始めに受けたが、村長さんや村の人々は皆優しく、オルフェシアお婆様もとても優しいが、この村の人たちもとても優しくて、本当のお婆様やお爺様が

増えた様な気分で嬉しくなったこの村を出る頃には、この村にまたいつか来ようと思ったのだった。
村長に礼を言ってカザフールの村を後にすると、ミールティアまで歩みを進め、着いたのは夕方でもうすぐ日が沈みそうな頃だったのであった――。

「やっと着いたぁ～」

レティシアはミールティアの町の入り口で、看板を眺めてそう言った。
“Ｍｅｒｌｔｉａｚ”と書かれたその看板が、『偉い』『よく頑張った』と書かれているように見えた。
後ろから来た二人がそれを通り越し、途中、ミグが後ろを振り返りながら静かに言った。
「……のんびりしてるとはぐれるぞ」
ミグの態度は少しまだおかしいが、それでもちゃんと気にかけてくれる事が嬉しかった。
微笑んで頷くと、ミグたちの後姿を少し眺めてから向かおうとした。

――奥に見える神殿の様な水色に透き通った綺麗な建物。
その周りを何か玉の様な丸い光が、ふわふわと浮いていたのが見え、思わず足を止め、ぼんやりとしたその薄い緑やピンク、黄色に水色…白などといった玉の様な丸い光は、たくさん周りを浮遊している。その様子に驚愕しながらも輝いた表情を浮かべ、ぼーっと立ち尽くして見ていたレティシアは、歩みを進め出そうとしたのだが、気がつけば二人の姿がない。
慌てて二人を探して走り回ったが、町中どこを見ても二人の姿は見つからない。
――ガーン。――え…えと、…私っ、知らない町で迷子っ…？

ど、どうしようっ…

少しきょろきょろとしながらも、気になる光の玉が浮いている神殿の方へと、気がつけばその足を進めていたレティシアは、神殿への入り口にある門を通り過ぎ、庭の様な木々や芝生が広がっている場所に来ていた。

浮遊している光の玉はレティシアの周りに優しい光をぼんやりと携えながら遊ぶように回っている。光がたくさん集まっている方向に進むと、そこには小さな泉が湧いていて、その泉のすぐ側に、石で出来た女神の様な像があった――。

「ん？　何か書いてある…“精霊神の名の下に、清め――捧げよ、祈りと魔力の杯を…”　あれ？　かすれて下の文字は読みずらいなぁ…現れ…し？　精…霊の魂…えーと、宿――りし…者…混沌の闇から…世界は…、…あーもうっかすれてて読めないっ。まぁいいか」

擦れた文字を読解するのを諦めたレティシアは、その女神像をもう一度眺めた時――。

女神像の元へと浮遊していた光の玉が全て集まる様に、ぼんやりとした光の集まりは眩しいばかりの光を放ち始めたのである――。

「！？」

レティシアが目を開けていられない程のその光を防ぐため、目の前を腕で覆っていたが、足元がよろけ始めていた。しかし、光はなおも眩い光を放ち、ついにかかとの地の感触が、芝生から硬い物へと変わっていた時――それが何であるかレティシアは気付き、ひやっとした。

……いっ、泉の周りにあった――石だっ…や、やば…ぃっ！　落ち……っ

ついにかかとに石の感触がしなくなり、次の瞬間には冷たい水の感触――。そのままそれは、全身へと包み込むようにやって来る。そして、ぼこぼこと小さな泡が辺りに見え、慌てて口を開けない様閉じるが、息苦しさにあたふたと暴れ回る。視界はぼやけて何も見

えず、小さな泉だと思っていた筈なのに、手を伸ばしても何も触れる物がないだけではなく、泉の底さえも足が触れることが出来なかった。

――な……！？　こんなに深かったとはっ…待てっ。私、泳げな――…っ…

何としてでも上に上がらなければと上を見上げたが、先程の光が揺らめいているのがもう結構遠くに見え、無限に落ちて行く様なこの泉の水の中で、ただ落ちていくレティシアは、ついに息苦しさから口からごぼっと空気の泡を吐いてしまっていた。

――も…もぉっ…駄目っ……苦……し……

意識が遠のく中で、レティシアは…苦しくなくなっていく事に気がついた。

あ、あれ――？……空気全部吐いたら、苦しくなくなった――？

……

し、死ぬ寸前ってこんなのなのかな……？

レティシアは何となくもう暴れる気にはならずに、ひたすら落ちていく泉の水の中で――、声を聞いた。

……

――シア…

――レティシア……

女の人――。綺麗で、神様みたいに澄んだ声――。

…あぁ、そっか――私、…さっき泉に落ちてもう死ぬから迎えに来たのか……。

あ～ぁ、ミールティアの洗礼を受けたのに、ミールティアで死すなんて

嫌な運命だなぁ。

“――いいえ、死にませんよ。”

…え…？　誰…？

“――…私は精霊の女神…レティシア……”

…へ？　せ、精霊の女神…？　しかも、同じ名前？

“――えぇ。レティシア…よくお聞きなさい…。あなたにとって、重要な事です。”

…わ、私にとって重要な事？

“――はい。私達の世界…精霊界は、この人間の世界のあるところに存在していました。

誰も人間は足を踏み入れた事はありません。見える者もそういないでしょう。

しかし、精霊界は、あなたが生まれた少し前、１４年近く前に滅びました――。

滅びましたが、現世に精霊の魂は残ります。

生きとし生ける者全てに、今でも僅かに力を貸し続けることが出来るのです――。

私達の精霊界が滅んだのは、魔族の侵入によるものです。

大昔、といってもたった今から２００年程前のこと――…

レティシアは、“ザロクサス”という名前を聞いたことがありますか？”

…へ？　誰そのザロクサスって。

“――……はぁ……あなたという人は、何という無知なのでしょう。”

…う、うるさいなぁ……知らないものは知らないんだ。もったいぶるなら帰るっ

“――泳げないのにどうやって帰るんですか？　くす…”

…な、何かムカつくなぁもぉ。精霊の女神っていうのは、結構言う事がきつ――

“――ザロクサスというのは、大魔神（だいましん）ザロクサスの事――。”

…む、無視するなっ！…まだ言いかけてる途中だっ。…まぁいいや、で？

“２００年前に倒されたのですが…知っていますか？”

…うーん。聞いた事あるようなないような……。

“――……はぁ……。”

…だからっ。た、ため息とか吐くなぁっ…知らないものは知らないのっ。

“――…仕方がありませんね。いいでしょう……よく、お聞きなさい――。

ただ、封印の方法が一つ欠け、たったの１００年しか持ちませんでした。

一度倒された大魔神ザロクサスは、

『力を貸す精霊さえいなければ負ける事はなかった』

と考えました――。

復活して、一番初めに全勢力を精霊界に攻め入り……そして封印しました。

それにより、あなたたちが現在使っている魔法も――本来の力を失っています。

何故なら――、精霊界が封印され、滅んだということは…、精霊が精霊としてではなく…、

精霊の魂となって存在することとななったために…

その分貸すことの出来る力も弱くなったというわけです。”

…ふぅん。でも、精霊に力を借りてるのに精霊が滅んでるなら、もう誰も倒せないじゃん。

“――だから、あなたに関係があるのです。”

…え？　わ、私――？

“――精霊の力を強く借りる事の出来る資質を秘めたる者が、２００年前に倒した筈の大魔神ザロクサスは、精霊界を滅ぼすために、

精霊界のある場所四方を“魔石鏡の塔”で囲みました――。”

…何それ…？　囲まれると力が弱くなるとか？
“――そうです。圧倒的に差は歴然となり、封印され…、幽閉されました。
しかし――。全て封印されて滅ぶのならば、
滅ぶ前にひとつだけでも救う手立てを残そうとしました。
大魔神ザロクサスを倒す真の精霊の力を残し――、
大魔神ザロクサスの手によって死した精霊の魂と、
それ以外の封印されて幽閉された精霊達を救って貰うため――。
――それは最後の望みでした。
私達は、とある生命の誕生を凍結し、違う種族に転生させようと考えました。
この精霊の世界が滅ぶほんの寸前の判断――…
刻一刻と魔族の侵入を許す中、
――生命樹の下でその木に語りかけ、転生先を探し……、
上手く適合する者がいなければそれも叶わなかったでしょう――。
――適合する者は――同じ様にまだ誕生していませんが、
人間のとある生命のかけらに見つかったのです。”

…？

“――レティシア…それが、――“あなた”なのです……。”

…――――――え――――――――……？

――――…

……。

視界が眩しい光に奪われたかと思うと、次に目をうっすらと開けた時には――。

淡いピンク色の髪の毛のミグの後ろ頭が見えた――。

――変な夢を見ていたみたいな気がするけど、イマイチ覚えていない。

ぼんやりとして、何だか意識がはっきりとしない。

上を見上げてゆっくりと起き上がっても、そこには、――知らない天上、知らない部屋。

思い出そうとするけど、泉に落ちたということしか何も覚えていない。

それも夢だった――？　じゃあどうやってここまで来たのか…全く解からなかった。

途方にくれながらトイレにでも行こうかと思い、足をベッドから降ろそうとして勢いをつけて踏み出したが、いつも足が地に着くタイミングどころの騒ぎではなくバランスを崩し、私は落ちる様にベッドから降りた――。

「わぁぁあぁっっ！」

実際、かっこ悪いので書きたくはなかっただけだが、私はドシンという低い衝撃音を立てて派手に落ちた。おまけに、床にうつ伏せに倒れてしまった私にミグが気付いた様で、慌てて飛び起きて声をかけてきた。

「び、びっくりしたぁ…って、お前やっと目覚ましたのかっ？ったく心配かけやがっ――――」

言いかけて途中で口を紡いだミグに、床から視線だけ送っていた私は、ミグのその表情を見てゆっくりと起き上がり立ち上がってみると、いつもと視界が違うことに気付いた。

何ていうか、ミグが少し大きいというか、ベッドの高さもいつもより少し高いような…。

というより、いつもの視界より自分の見る物全て高かったのだっ

た――。

ミグがゆっくりと恐る恐るベッドの脇に近づいて来て、珍しいものでも見るかの様に私をじろじろと見ている。

「…いや、俺……、寝ぼけてるみたいだ。――寝る…かなぁ…ははは」

そう言ってミグは後ろを向いて横になったが、すぐにばっとベッドから起き上がり床に足をつけて並んで立った。

異変に私はその時気付いたが、確信したのは次の行動だったと思う。

次にミグは薄ら笑いを浮かべながら、上から私の頭をよしよしと撫でたのだった――。

……

――――…

つづく。

【第三章】†ｅｐ．３　視界†（後書き）

ふぅ…今回はかなり時間がかかりました。
一体何なんでしょうかねぇ。
不思議な事もあるもんですね。
でぁ次をお楽しみに。

【第三章】†ｅｐ．４　精霊の宿りし者†

「――ほんとに何にも覚えてないのか？」
ミグが言った。
「かわいい～」
ルクチェが言った。ていうより、ずっとそればっかりだ。
――そして、そんな二人に私はこう言った。
「…さっきから二人して立ったまま見下ろさないでくれっ」
――そう。あの時気づいた時には何故か……、
私の姿は、５～６歳の子供の頃の姿へと変わっていたのだった――。

「だーからっ、泉に落ちてしまって泳げなくて上に上がれなくなって、その内意識を失っていて、その後気がついたらここに寝てたんだって、さっきから言ってるんだっっ」
レティシアはそう言って、ベッドに両手をついて腕の力でなんとか上がり座ると、不機嫌そうに腕組みした。
ミグはその隣に座ると、顔を覗き込む様に前のめりになって微笑んで言った。
「じゃ、誰が助けたんだと思うのかなぁ？　レティシアちゃん」
「ばっ馬鹿にしてるのかっ？　子供扱いするなっ…あ、いや。今は子供の姿だった……」
「かわいい…」
「……」
ルクチェは相変わらずレティシアを見て目をきらきらと輝かせ、

レティシアは冷めた目でルクチェを見ていたが、どうも二人して完全に自分の事を子供扱いするので（実際今は子供であるが）苛々としていたレティシアに、よしよしと更に頭を撫でてミグは追い討ちをかけてくる。

「こーんな小さい時もあったなぁ～ははっ。大体5～6歳ってとこかなぁ？　見る限り」

「――もー知らんっ。ちょっと散歩に行って来るっ」

そう言ってレティシアは外に出ようとジャンプしてベッドを降りた。

ミグも仕方ないといった様子で、後をついて来たが離れた所からついて来ていた。

振り返ると、ミグは子供を微笑ましく見守るようについて来る。

レティシアはため息を吐いて立ち止まると、ミグの歩みを少し待った。

そして、誰もいない時計塔の前まで一緒にただ黙って歩いた。

時計塔は古く、そして高い――。町全体を見渡せるそれは、多分城と同じくらいであるだろうが、上に上がるには相当な段数の階段を登らなくてはいけないだろう。

上を見上げるレティシアに、ミグは飛んで行ってみるかと聞いた。

「――フリ…シールか？」

「……うん、そうだ」

こくっと頷いたが、レティシアはミグの視線に気付き、首を横に振った。

「――や、やっぱりいい。ここに座ろう」

と言って、時計塔の入り口の階段の上に座った――。

ミグは多分、詠唱なしで魔法を使うのかを見たかったに違いなかった。

ミグは、いつも何も悩みもなさそうだったが、魔法は一生懸命勉強している。何の苦労もなしに突然詠唱なしに魔法が使えるように

なっていたなどと――ミグのその努力を思うと、フリシールを使った後に説明するわけにはいかないと思った――。
「――なぁ…ミグ。小さい時に言ってたこと覚えてるか？」
「……ん？　何だ？」
「――こうやって二人で城を抜け出して、いつか冒険の旅に出たいなって言ってたの」
レティシアのその言葉に、ミグはレティシアの前にしゃがみ込んで言った。
「――そんなこともあったなぁ…。まさか、こんな形で旅に出るとは思いも寄らなかったけどな……。まぁ――、それでも一応叶ったか……はは。どうした急に」
ミグが穏やかで遠い目で、その頃を思い出すように満月を見ながら言った。
「ううん……。別に…なんとなく思い出しただけだ…」
「――今頃どうしてるかなぁ…皆。お前が今こんな姿になってるって知ったら――…。どちらにしても簡単に帰るわけにもいかないな……」
立ち上がるとミグは少し離れた所までゆっくりと歩いていった。
人通りの全くない静寂の支配する町の広場――。
街頭の灯りがミグの影を地に映し、その上には大きな満月が、小さな無数の星達が散りばめられた闇に、その姿をはっきりと浮かばせている。
どこかまだよそよそしい感じのするミグの後姿を、ただレティシアは見ていた――。
「――それよりお前さ、ひょっとして今まで、俺に遠慮して言わなかった…とか？」
振り返ったミグが突然言ったその一言は、穏やかに言ったけど少し寂しそうだった。
少し迷った――と思ったけど、少しのつもりが俯いて何も言葉が出てこない。

私が子供の姿だからなのか、それでもミグは相変わらず穏やかに微笑んでいる。

さっきの自分の思惑も、ミグはきっと気付いてたんだ――。それに、ミグは今ちょっと魔法を使ってみろとか言う――。理由も聞かず、何の魔法を使えばいいのかとミグに聞いた。

しかし、穏やかな微笑とは裏腹な答えを、ミグはその口で紡いだ――。

「――そんなの決まってる。――炎――だ」

「!?」

よりによって“炎”――。レティシアは体が震えた。拒絶反応だった――。

「やっぱり――嫌みたいだな。…その歳くらいだったっけなぁ、あの時のことは」

「……」

ミグは穏やかな表情をしながらも、何かを決意したように下を一度向き顔を上げた。

「――もったいないんだよ。――あんな、小さい頃の思い出に縛られてさ…。詠唱なしで魔法使うのは、魔力が高い資質を秘めている証拠なんだぜ？　俺思ったんだ――幼い頃のあの炎…あれも資質の一つだったんだろうなって、今日という一日、ずっと――考えてた」

――“もったいない”――と、そうリュシファーと同じ事をミグは口にした。

…例えそうだとしても、……私には出来ないっ……怖いんだ、―

―ミグッ…。

ミグはその場所より更に少し離れると、レティシアの方を向いて呪文を詠唱した――。

「――小さき理から生まれし炎よ、今舞い踊り我が意志に応え、飛竜の如く火柱となれ…」

ミグが返している手のひらの上に火炎の火柱が、ゴォッと音を立てて竜が舞い上がるように激しく巻き起こり、そして次第に炎の揺らめきと化しミグのその手のひらの上に、煌々とただ燃え上がり続けるように落ち着いていった。

「…これさ――、炎の中位魔法だけど…基本の呪文くらいは覚えてる筈だ――使ってみろ」

「……ミグ……私には、…無理だ――――」

「……ったく…仕方がない…じゃ、氷でも何でもいいから風以外でなんか使えっ」

ミグはそう言ったが、レティシアはやはり出来ないと首を横に振った時だった――。

「――あ、そ……じゃ、これ――お前にやるよっ」

「!?」

瞬時にして、ミグは手の内の炎をこちらへと放っていた――。

放たれた火炎は、竜が獲物を食いちぎりに来るかの様に凄い勢いで渦を巻きながらやって来る。幼い時に使ったレティシアの火炎くらいある炎に、レティシアは驚愕した。

炎の中位魔法を、そんないきなり放つなんて……ッ!!

レティシアは慌てて現実逃避する間もなく、咄嗟に氷の呪文が頭に過ぎっていく。

つ、使いたくないけど……っ――――こんなの避けきれるわけない……っっ!

そう思った瞬間、レティシアの周りから冷たい風の渦が巻き起こり、向かってくる炎目指して巨大な氷柱が鋭く冷気とともに連続し

て突き刺さっていく。炎の周りには、寒そうな色の光が既に取り囲み炎を凍結していき、空気中をきらきらと細かい光の砂が舞い落ちていくのを見た時、それが炎が凍らされ砕け散って消滅した物だとレティシアは知った――。辺りは少し冷気を感じる程寒く冷え切っていたが、しばしの静寂の後――、元の気温を取り戻していく。

「はぁっ…はぁっ……」

ミグが手加減もなしで突然、中位魔法を自分に放つなどと、考えもしなかった……。

…それに、――また。

レティシアは気が抜け安堵しその場に膝をついた。額には汗、目には涙も浮かんでいる。

激しく呼吸を整えているレティシアの前に、影が見える。

はっとしてレティシアは怯えた目でそれを見上げた。途端、頭をよしよしと撫でるミグ。

「――上出来上出来。はは、悪かったな、突然放って」

ミグが困った様に微笑んでそう言った。

「あっ危ないじゃないか！　と、突然放つなんて反則っていうんだっ。そういうの…！　こ、怖かったじゃ――な…いか…っ」

ミグはしゃがみ込んでレティシアを抱きしめると、頭をぽんぽんと優しく撫でる。

慰められる様にミグによしよしと撫でられ、ついに泣きたくなって来てレティシアは泣いた――。

「――悪かった…。でも人間さ、突然ピンチになった時って意外と何でも出来るんだぜ？　今みたいに怖いとかなんだとか、言ってられなくなるんだよ――使わない様にしてても、使わねばならない時には、つい使っちゃったりするんじゃないかなーと思ってさ……。――お前も、ちゃんと氷使えたじゃないか…それにしても凄い威力の魔法だったぞ…よく出来た」

レティシアはその時ミグの思惑を知り、余計に涙が溢れて泣き声で言った。

「……ミグ、私っ…な？　わからな――…くて…っ…怖いんだ…」
「――怖い？　あの時の…こと？」
「違う…それも…怖いけどっ…、リュシファーに…っ、言われたこと――」
もう詠唱なしで魔法が発動することをミグに知られたレティシアは、リュシファーに言われたこと――。その力が目覚め始めた様な気がすること――。そして、自分でもわからなくてそれが怖いということ――。だから、はっきりわかるまでは人に説明できなくてミグにも言えなかったことを、やっと打ち明けた――。
聞き取りずらかっただろうレティシアの言葉に、ミグはずっと優しく頷いて聞いてくれた。
「――なるほどね……そっか。――よし、じゃ今日はもう休もう…疲れたろ」
「……うん」
そうして、ミグはレティシアを抱き上げると、抱っこして屋敷まで帰ってくれたのだった。

――その帰り道…。
万が一、私が魔法をとっさに使えなくて炎が直撃していたらどうしてたんだと聞いた。
するとミグは――、“そん時はそん時だ――”と、相変わらず悪びれた様子もなく微笑んで言った――。もちろん怒って文句を言ったが本当は心の中で、私はそんなミグに感謝していた――。
――――…

次の日――。
ルクチェが二人を呼びに来た。
今日は、祭りがあるという。“精霊の祈り祭”というお祭りだ。
精霊のお告げを一年に一度だけ、町の皆にその場で執り行い聞かせるのだという。

そして、守ってくれている精霊に感謝を捧げるため、精霊に見立てた子供たちは皆精霊の羽衣という衣装を着て参加させるというのだ。

当然――――。

「え…子供が精霊の役をするのに何で私が？　子供扱いするのも大概にしてくれっ」

「い、いや。そうだけど、今のティアラちゃんは子供っじゃな・ぁ・い？　まぁ、決まりなのよ」

結局、ルクチェに連れられ丸い光の玉が浮遊する神殿に連れて来られたレティシアは、

神殿の奥にある温泉の湧く大きな泉――『精霊の祈り泉』に来ていた。

既にルクチェの屋敷で入浴は済ませてあったのだが、巫女であるルクチェは身を清めるためにここにも入浴をするらしく、一般の者は別に入浴しなくても良いが、ついでなので一緒にと連れて来られたのだった。

「――ティアラちゃん、少し聞いて…いい？」

何か改まってルクチェがそう言うので、レティシアは首を傾げながら黙って頷いた。

「今――この神殿の周りに浮いている物見える？」

「い、色んな色のぼんやりした光の玉のこと？」

「…やっぱり見えるのね。これは精霊使いにしか見えない筈なんだけど、どういうわけか見えているのが引っかかってたのよ。それに、精霊召喚術も同じ。普通の人には丸い玉が発生しているところは見えてないの」

「え！？　普通の人に見えてないものなのっっ？」

レティシアが驚いて言うと、ルクチェは困った顔をして頷いた。

「――精霊の魂なのよ、この光の玉。たくさんあるけど、この神殿は、私達精霊使いの間では、“精霊の墓場”とも言っているのよ…死した精霊の魂が集まる場所――……私ね、ティアラちゃん達に会

った時、実は精霊のお告げを受けたの――。“行く当てもなく旅をする可愛らしい双子について行動を共にして保護しなさい。それがあなたたちの世界の糧となり希望となる手助けとなるでしょう――。また、それは定めでもあり、私達の願い――。ただし、これは時が来るまでは他の者に言ってはなりません”ってね」

「!?」

ルクチェは静かにもう一言こう言った。

「――そして、おそらくそれはティアラちゃんに何か関係があるわ」

「!」

その時だった――。

レティシアははっとして、何故かずっと忘れていた夢を思い出した。

慌ててレティシアは泉から出た。服も着ずに、――そのまま走っていた。

レティシアが来たのはレティシアが落ちた小さな泉の女神像の前――。

像の台座の石碑の文字をもう一度ちゃんとよく見ると、そこの下には擦れながらも見落としていた文字があり、――“精霊の女神　Ｌａｔｉｓｉｅｒ”――と、そう書かれていた。

ルクチェが服を着て急いで追いかけてきて、バスタオルをレティシアにかける。

「ど、どうしたのっ？　ティ…ティアラちゃん？　と、突然びっくりしちゃったじゃない」

「――この…女神像、レティシアって言うの……？」

「――え？　…あ、えぇ。そうよ。同じ名前ね――」

もう一度レティシアは、擦れた文字を一生懸命読もうとしていた。

しかし、読めなかった以前と同じ部分が、やはり擦れていてとても読めそうにない。

その時、ルクチェは言った。

「――精霊神の名の下に、清め――捧げよ、祈りと魔力の杯を。…

現れし精霊の魂宿りし者より…混沌の闇から…世界は救われん。…我らひとつの願いを聞き、声を知り、声に動け。こう書かれているのよ。これは精霊使いの役目を記してあるのよ」

「！」

レティシアは驚愕してルクチェを振り返っていた。

ルクチェもそのレティシアの表情を見て、困惑した表情を浮かべている。

泉の中に落ちた時のあの声の言っていた精霊の滅んだ歴史――そして、残したというひとつの願い……。

石碑に刻まれていることは、女神レティシアの言っていたことと明らかに一致する。

精霊の魂――宿りし者とは……ま、まさか…本当に……？

――――……私……――なのか……？

――――……

精霊の祈り祭は、町の中に夕方から出店が立ち並び、賑わう町が活気に溢れていた。

旅の者もその活気に笑顔で酒を飲み、上機嫌で広場へと集まって来た。

広場の真ん中では、噴水が止められてそこには代わりに炎が舞い上がっており、その周りを子供達が囲む。レティシアもその中に混じり、精霊の羽衣と、精霊の髪飾りを身につけ、精霊の杖を持たされていた。

横目でミグをチラッと見ると、にやにやしながら小さい子供を見守る様にレティシアを見ていた。恥ずかしい様なんとも言えない気持ちで、レティシアは時が来るのを待っていた。

「えー皆さん。精霊様もきっと今日のこの集まりをお喜びになられていると思います――精霊に感謝と労いを込め、本日は盛大にパー

ッと騒いで盛り上がって頂ければと思います――。えーではですね、さっそくですが、精霊の祈り儀を始めたいと思います……」

そう言って町長は、巫女のルクチェを側に呼び、精霊の祈り木という木の枝を渡すと、精霊役の子供達の周りを歩いてゆく。

精霊の祈り儀での子供の役割は、精霊使いに指名された子供が祈り木を受け取ると、決められた祈りの言葉を言った後、炎の中に投げ込む――役目はそれだけである。しかし、その後、炎の色が七色に変わり、町長の元には精霊がやって来て、お告げを受けるという話をルクチェから聞いていた。

嫌な予感がしたものの、予想通りルクチェはレティシアに精霊の祈り木を渡して来た。

……ハァ……やっぱりな。どうりで清めに付き合わされたりしたわけだ――。

本当は子供じゃないのに…。

レティシアはそう思いながら、子供達が炎のある噴水のスペースから去ってから、一人で前に立つと、祈りの言葉を口にする。

「――ここに捧げる祈り木のもと、その糧を我らに告げたまえ――」

ルクチェが頷いているのを確認して、レティシアは炎の中に祈り木を放る。

祈り木を捧げた瞬間、炎はボッっと燃え上がり、神殿から浮遊している精霊の魂という光の玉が一色ずつ一斉に炎の中へ集まって来て、その炎の色はその色を次々と変えていく。

レティシアが驚愕していると、その炎の中で大きな黄色い光がぼんやりと光を放ち、浮遊している。

その時だった――。

「こ……これは…なんと――」

町長が驚愕したような表情で炎の中の光を見ている――。

炎の中の光はスッと消え、炎は元の勢いを取り戻し、穏やかにその火を讃えている。

ルクチェが町長に声をかけている。町の者もざわめき、ミグも怪訝そうな顔で町長を注目している。町長が服のポケットからハンカチを取り出して額の汗を拭いている。

「え、えー皆さん、精霊は感謝を述べておりました。他には何も――。…ま、ささ、これで堅苦しい儀は終わりです。皆さんぱーっと盛り上がってくださいっははははは」

町長の発言に少しあっけに取られながら、町の人々は広場から出店の方へと去っていく。

レティシアがミグの元へ戻ると、ルクチェがやって来てレティシア達に屋敷へ少し戻りましょうと声をかけられ、ミグとレティシアは怪訝そうな顔を見合わせていた。

通された町長の部屋――。町長はレティシアを、しばし微笑んで見つめると口を開いた。

「――実は、精霊はお告げをしなかったわけじゃない。…皆には言わない方が良いと思いましてね――。あまり、騒ぎになってもお困りになられるでしょう」

レティシア達の身分の事を言っているのだとはわかるが、騒ぎになるという発言を聞いて、何かレティシアは嫌な予感がした。――そして、それは的中した。

「精霊は、“まだ時ではありません”と言っていた前回までとは違い、今回は“時は来ました――汝の子が連れ来た我々の魂宿る双の子祈り木を持ち、我らの元へと現れました。――今は目覚めの時を待つばかり。そして全てを委ね、後は祈らん”と申されました――」

「！」

長老の言葉を聞いた時、レティシアは重なり合うパズルのピースが、レティシアの意志とは関係なく勝手にひとつずつはまっていく様で、意識が遠のくような感覚に襲われていた。

頭の中に響いた女神レティシアの言葉――、石碑の文字――、長

老の言葉――――…。
――――それらはずっと自分が不思議に思っていたし怖れさえも抱いていた――自分に眠っているという高い魔力の存在理由として、しっかりと脳裏で結びつき、刻まれていく……。
浮遊する精霊の魂たちの願いのかけらの数々――――。
精霊界を全勢力を用いて封印し、滅ぼしたという“大魔神ザロクサス”の事――――…
――どうやら精霊の魂が宿るという自分の異変――――……そして……、
全てが急激な目眩の様に視界をぐらつかせ、レティシアはその場に膝をついた。
「――ちょ、ちょっとティアラちゃん……ッッ!?」
「レティッッ!!　大丈夫かッ!?　お、おいッ、しっかりしろっ……ッ」
ミグとルクチェがレティシアを心配してしゃがみ込むが、その時レティシアは声を聞いた。
泉で聞いた声と同じ声だった――――。
「!?」
――レティシア…やっと、わかりましたか？
…な…何が…？……
――あなたは精霊の魂宿りし者…私達は１４年もの間、あなたがここへ来るのを待ちわびていました。
１４歳になった今日この日より、あなたの力は完全に目覚めていくでしょう……。
――しかし、あなたは少し怖れを抱いていますか――――…。
……こ、怖くなんかないっ。ただ、突然精霊だとか大魔神だとか世界だとか…っ。
おまけに小さくなっちゃうし……これもそのせいだとか言うんじゃないだろうな？
――そう…と言ったらどうします？

……ぐ、…そんなはっきりと――…だ、だったらは、早く元に戻せっっ

――あなたが怖れを消さない限り、無理です。

…はぁっ!?　ちょっちょっと待てっ。怖れを消すってどういうことなんだっ

――それはあなた自身が一番よくわかっているはずですよ…

……

――……はぁ……

止む終えませんね…私はミールティアに存在する理由はもうありません。

……あなたの元へと参りましょう……導かねばならないでしょう……。

……へ……？

「――おい、レティッ…ってばっ」

「！」

はっと気がつくとルクチェとミグが心配そうに自分を見下ろしていた。

いつの間にかレティシアは、床に寝ていたのだ。

「あ…あれ？　私……」

状況が理解できずにゆっくりと起き上がると、頭がぼんやりとしている。

ミグに話を聞くとどうやら気絶していた様だった。

しかもその間、『戻せ』とか『馬鹿』とか言っていたらしい。

「あは、あははは…実はよくわかんないんだけどちょ、ちょっと気が遠くなってさ…だって、突然精霊の魂宿りし者とか言われても…よくわかんないし。色んな事がぐるぐると……」

レティシアはそう言った時だった。

――まぁ、なんてこと…

そんなことではこれから先が思いやられますよ…レティシア…

「！」

――自分の心を疑う様な、信じられないことが起こっている様だった。

私はそのまま気絶していて――気がついた時には、祭りも終わり町は静けさを取り戻している夜中だった。

夢の中で精霊の女神レティシアは言った。

“これからよろしくお願いしますね”と――――…

つづく

【第三章】†ｅｐ．４　精霊の宿りし者†（後書き）

急展開で進んでおります。
個人的にミグとの魔法のシーンが好きです。
少し嫉妬もあったけど、多分ミグの方が大人です。
他の魔法を使えるよう強硬手段ではありますが、気にかけてあげたというエピソードのひとつでした。ではまた。次で。

【第三章】†ｅｐ．５　再会†††（前書き）

第三章最終章です。一応タイトルの†が一つではなく、†††となっているエピソードはその章のエピソード最終章です（かなり今更ですが…）。

【第三章】†ｅｐ．５　再会††

「お父様――では、行って参ります」
「気をつけるんだぞ…ティアラ様もエルフィン様もお気をつけて…」
レティシアとミグは町長に頷いた。
ミールティアの神殿の巫女ルクチェと、レティシアとミグはこうして
――この町を後にした。
「それにしても、凄い雪だなぁ…来る時は寒かったけど雪なんて降ってなかったのに……」
外は一面の雪景色――。雪は太陽の光が反射して、突き刺さるような照り返しに目がちかちかする程真っ白だ。
そんな時、精霊の女神レティシアが語りかけてきた。
“――この辺は降る季節ではないのですが…やはり魔物の影響でしょうね…”
…え…今から行く森の奥にいるっていう魔物の影響なのか？
“――そうです。魔物は少しずつ支配をするために動き始めています。この地でもその支配を魔物が進めようとしているのかもしれません。邪悪な気を感じます…”
「……はぁ、そうか――」
精霊の女神レティシアは、ミグが会話した内容に説明を加えて私の中で語りかける。私はそれをミグたちに教えてやらねばならない。ちょっとした通訳だ。
現実逃避しようものなら“夢でもなんでもありませんよ。レティ”と言ってくる。
『はぁ～何でこんなことに…』とか考えようものなら、“あなたが生まれてきた時から定めなのですよ…ふふっ”とか、思考・会話に時折答えを返してくる。
おまけに、お互いレティシアという名前では紛らわしいので、“

レティ”と呼ぶといったら、“私はレティシアですっ”と言って、頑固として名前の変更を譲らない。
口喧嘩のあげくに面倒くさくなり、私がレティと呼ばれるということで納得してあげた。
私はそんな大人な自分を褒めた。そして、この女神も少し子供だなと思ったがそう頭の中で考えたら怒られた。
どうやら少々面倒くさいものが私の心に入居した様だ――。

「――だってさ。あと、ミグは見えないかもしれないけど、上に紫色の靄がかかってるだろう？　それが見え出すと、魔物が活動し始めたということで、近くの町や村が危ないんだって」
ため息を吐きながらレティシアはその歩みを進めていた。
森までの道のりは雪景色だけが延々と広がっているだけの荒野で、町や村はない――。
紫色の靄がかかったはるか遠くのその森まで、三人はただ一直線に目指すのみだ。
そしてその途中、どうやら魔物のお出ましらしい――。
私は子供の姿では剣は重く危険なので、後ろに下がっている様にと言われている。
子供とはいっても、昨夜夜中に一度起きた時には気付かなかったが、朝起きると私は何故か少しだけ成長してはいた。
女神レティシアの言った怖れを取り払うまで無理という意味が、少し解かったような気もしていたが、憂鬱でもあった。

――“風以外の魔法の解放”――

思いつく限りそれしかなかったからだ。
昨日は氷の魔法を使ったので一つ解放され、そのおかげで少しだけ成長したのかもしれない。
しかし、まだよくわからないことも事実であった。何も変化をつ

けずに一晩明かした事がまだないため、それは何とも言えないだろう。

――――…

休憩するために結界印を地に描き結界を張ったミグが、テントと同じ様に白い玉に入っているアイテムを地に投げつけてコテージを出す。それはちゃんと三人分の寝室付きだ。

やっと森まで辿りついた時には夜だったので、森の入り口で一晩休んで明日朝森へ入ることにしたのだった。

森の入り口辺りに落ちている木の枝を集め火を燃やし、異次元空間から旅支度用に備えた簡易皿と調理器具を出し、レティシアはルクチェに教わりながら料理もした。

ルクチェが止めるのも聞かずに『スープくらい自分で作れる』と言ってレティシアは野菜を刻んだが、大きさはバラバラ。見た目が悪くとも味は――と思ったが……

「――これ、ルクチェさんが作ったんじゃ……ないよな？」

「あ……それは、……もちろん……ティアラちゃんよ」

とミグがスプーンを持ったまま不味そうな顔をしている。ルクチェはまだ手をつけていない。そして多分、そおまま手はつけないだろうなと思った。

“――だから言ったのですっあんなにお塩を入れては駄目ですって。”

……それはっ、ちょっと手が滑っただけだっ。

“――くすっ…”

……料理したことないんだから仕方ないだろ。……うるさいなぁ、もーっ

「……やったことないんだ。大目に見てくれ……っ」

と拗ねた様に呟いてルクチェが作った美味しい料理を食べ終わり、炎に当たっていたレティシアにミグは言った。

「ティアラ……ちょっといいか？」

「――ん？　どこ行くんだ？」
「……」
何も言わないことを不信に思いながらも言われた通りについて行くと、ミグは少しだけ森へ入っていく。
森を少し入った先に広場があった。その看板には、“妖雪の森”と書いてある。
ミグは立ち止まると、おもむろに異次元空間から本をドサッと地面に出した。
それは教本だった。――雷、炎、聖、地の４種類の教本を、嫌な顔で見ていたレティシアにミグは一冊の教本を差し出した。
「――こんなとこに連れて来たかと思ったら、そんな本出してまた魔法使えとか言うのか？」
「……あれ～？　そういえば今日一日休んでた人がいたなぁ～……剣もその体じゃ扱いずらいだろうし？」
む……昨日の今日で、まさかまた魔法を特訓でもさせられるっていうのか？　お、鬼だ……。
困った顔で微笑んでレティシアが誤魔化すも、ミグの顔は真剣そのものであった。
……ミグ、最近何かおかしいぞ――私にまた魔法を無理に……。
はぁ……。
仕方なく教本を手に取ってみるとそれは、レティシアが手に取ったこともない雷魔法。
炎ではないものの新しい魔法というのは少し怖かったが、ぱらぱらとめくったページの一つに雷神イシュタリスと書いてあるのがなんとなく気になって少し見ていた。
そこに書かれていた呪文――……
“天の上に遍く無数の雲よ　空よりイシュタリスの名の下に　今ここにその刃を突きつけん”――。
目でなぞるように追った瞬間、詠唱もしていないのに発動するフリシールの事が脳裏を過ぎる。

そしてもし仮に発動した場合、自分の目の前にいるのは――……！

「――ミッ、ミグッッ！！」

瞬時にレティシアは思い切りミグに突進した。ミグは突然のレティシアの行動に驚愕の表情を浮かべ、共に離れた地へと重力に任せて倒れていく。

「！！」

――っ……とっさに避けた……筈っ……なのに……ッッ！

レティシア達が間一髪でその身をかわした筈の稲妻は、踏み込むために重心をかけていた時その足に触れ、熱く痺れる様な感覚が一瞬にしてレティシアの全身を支配していた。

激痛に目を見開いた時、目の前を蒼い稲妻の線が音を立てて視界にちらつき、それは頬に触れるだけでその肌を切り裂くが、その痛みは感じない。既に全身が声も出せない程の苦痛で、痙攣していた。

「――レ……ッレティ……ッッ！」

同じ様に驚愕した様に目を見開いていたミグが、起き上がって自分の胸元に倒れこんでいるレティシアの腕に触れたが、ピシッと音を立ててミグの指を軽く痺れさせる様に、小さな稲妻が発生して思わず手を離す。

――くっ……、避け遅れた……発動したところは見てないが……凄い威力……。

倒れたまま薄目を開けると青白い優しい光が自分を包んでいた。そしてなんとか痛みも消え、自分にかざされた手に視線を配ると、ミグが回復魔法を使ったらしい。

レティシアはただ、それを見ていた――。

――ミグ……。手が小刻みに震えているのに、私……気付いていたよ？――

「――ご、ごめん。ぶ…無事か……？」

レティシアはその体にはまだ少し痺れを感じていたが、なんとか

平静を装って微笑んだ。
心配そうに覗き込むミグの顔には、明らかにそれとは違う表情も垣間見えていた。
「……あ、危ないじゃないかっ。す、少し考えて使えって」
ミグはその時ひきつったように無理して笑顔を作って口を紡いでいたと思う。
レティシアはそれを垣間見て思わず立ち上がって言った。
「……ミグ……ごめん。私……先戻るな……」
後ろを振り返らずにレティシアは走った。
疑問と驚愕――自分に対するミグの感情を表わすそれらは、確かな“怖れ”だった。
そしてそこから自分にも襲い来る――更なる怖れと言いようのない悲しみ。
それらは心の中を支配するようにレティシアに押し迫って来て、目から零れ落ちる涙を袖が拭う。
ミグのその目を見た時にすぐに泣きたかった。しかし、それをミグに知られたくはなかった――。
――――……

残されたミグは一人、地に落ちている白き灰をその手に取り、目の前でそれをさらさらと風に舞わせて呟いた。

「……燃えカスの――教本……か……」

走り去る足音が聞こえなくなった妖雪の森の深い静寂の中、しばし黙って風に舞う灰を見つめたミグの耳には、一本の木の上の雪が地に落ちるその音がただ響いていた。

レティシアはコテージに戻らず途中森を斜めに横断し、ひたすら荒野をどこか遠くへ行く様にその足を走らせる。ルクチェにも、こ

んな所を見られて心配されたくなかった。
その時、自分なんて魔物の餌にでもなればいいとさえレティシアは思っていた。
止まらない涙を拭うため、袖で目を覆いながら走っていたその時だった。
突然の衝撃とともに何者かにしっかりと受け止められる感触。
はっと目を見開くと、そこには謎の人物がしゃがみ込んでレティシアを受け止めている。
「――お、おいおい。こんな遅くにひとりで走ってたら危ないだろうっ。一人か……？　ど――……どうした……泣いているのか？」
「！」
聞き覚えのある声――。琥珀の様な金の髪と金の瞳――。旅用のフード付のマントをしていて、顔立ちは髪や瞳の色のせいかエルトに似ているが、違う――。しかし聞き覚えがあるその声にレティシアは視界が滲むその目を袖で拭って、しゃがみ込んだその男の目線と同じによく見て、――レティシアはある人物像が頭に浮かんだ。
もし違ってももう誰でもよかった。ただひたすら男に慰められるままにその胸で泣いた。
「お…どうした。仕方ないな…危ないから結界張っておこうな…はは」
そう言って結界印を地に杖で書いたわけでもないのに、サッと手を下に向けると既に文字は水色の光をぼんやりと放っていた。男の肩越しから下を見たレティシアは、はっとした。
やはり、リュシファーだ――とそう思った。でも、きっと私には気付かないだろう。
――と思っていたが、少し落ち着いた頃にリュシファーはこう口を開いた。
「――やっと見つけたと思ったら大泣きしているとは、俺も怒るに怒れなくなっただろう？」

「!?」

レティシアはばっと男から身を引いた。リュシファーはいつもの呆れた様な表情で微笑んでいた。そして怒りと羞恥の表情を男に向けながらレティシアは言った。

「き、気付いてたんならは、早く言えっ…てっきり気付いてないのかと思って…あ、いや、その…と、とにかくっ、何故私とわかってたならすぐに言わないんだ、リュシファー」

「――悪いな…さすがに泣かれていれば言える筈はないだろう……？」

いつもの自分ならここで文句を言い返す筈なのに、私は何故か不思議と安堵してまた涙が溢れ、気がつけば泣きながらリュシファーに全て話していた。その間ずっとリュシファーは優しい目を向けて黙って聞いていた。

リュシファーはレティシアの涙を自分の人差し指で拭うと、優しく微笑んで言った。

「泣くな……ほら、らしくないぞ……？　可愛い顔が台無しだぞぉ？」

「なっ……馬鹿にしてるのかっ……い、今だけだっ。すぐ止まるっ……っ」

「はは……、悪かった悪かった……褒めてるのに相変わらずすぐ怒るんだな、お前は」

「う、うるさいっ」

子供だと思い知らされているみたいでしゃくに障ったが、今は子供なので言い返せない。

そう思っているとリュシファーは立ち上がり、その手に持つ煙草に火をつけた。

「――まぁ……俺も昔あった。同じ様に思っていた頃がな――。エルフの一族は確かに高等魔術師の才を持つ者も珍しくない。しかし、

俺はおそらくその段を抜いて魔力が高かった……。おまけに人間とエルフとの特殊な血――。周りの見る目はそれだけでも違う――。……でもな、レティ。それでも、いずれはちゃんと変わっていく。おまえ自身も怖れを持っているのはよくわかるが、それに打ち勝つ勇気も持たねばならない――と俺はそう思うぞ？」

私は黙ったまま俯いていた。涙はもう止まっていた――。

「……それに？　ミグはお前の怖れを取り除こうと、風以外の魔法を使わせようとしているんだろう…お前のためにやったことだ。……どのみち、城を抜け出さなければ次学期から俺がやってることだぞ。まぁさっき言った様にお前の気持ちもわからんでもないがな……ミグは、その威力を見て少し驚いただけだ……気にするな　――」

リュシファーの一言一言が、不安を取り除いていった気がした。

「あ……それはそうと重大な報告があったんだ。ダムルニクス王国との盟約の証――そんなものなくとも、立派に両国は深い絆があると仰って頂けた様でな――過去の先々先代の王達の約束はなしになった。だから、家出……いや城出する必要はなくなったぞ」

「――え……ほんと……？」

「――ああ。だが……、お前は帰らないだろう？――町長に事情は全部聞いた……。その姿のこともあるし、どうやらすぐ連れ帰るわけにはいかないみたいだな」

自分の中ではこの状況に置かれていることの方がすでに存在感が大きかった様だった。レティシアは盟約の証がなくなったことをほんの少し驚いたものの、何故か安堵は出来なかった。

リュシファーは、エンブレミア王国から二人を探すよう命じられ、やっと双子が船に乗りミールルティアに向かったことを聞きつけやって来て、町長に精霊の宿りし者がレティシアであったこと、何故か子供の姿になってしまっていること、そして妖雪の森へ向かったこ

となどを全て聞きつけて探しに来たのだという。
――ミグと二人で城を出て逃亡するだけの４日間、本当は心のどこかで心細かったのかもしれないと後で思った。煙草を吸い終わり再びしゃがみ込んだリュシファーの顔を見たら、また私は泣いてしまった。
リュシファーは、突然泣き出した私に慌てて『わっ突然どうしたっ……らしくないぞ』だとか言って困っていた。もちろん『うるさいっ』と言って言い合いした。
そんなやり取りをするのも、たった４日ぶりだっただけなのに――なんだか嬉しかった。

翌朝――。
レティシアはうっすらと目を開けようとするが、泣きすぎて目がすぐに開かない。
「……んー……駄目だ。まだ眠い……」
そう言ったがレティシアははっとしてなんとか目を見開いた。
そして一気に顔を青ざめさせていた。
首の後ろにある枕ではない何かと、自分を包み込む様なその腕の感触――。琥珀の様な金の長い髪を垂らしながら目を閉じて寝ているリュシファーの顔。
自分はその中で向かい合って寝ていたという紛れもない事実の存在に、レティシアは驚愕しながらも何とか言葉を紡ぐ。
「……な……リュ、リュシファー起きろ……ッッ」
レティシアが言うなり、何故かリュシファーはすぐに目を開いて言った。
「――あー耳が痛い。大きい声出さなくてもさっきから起きてる……」
「だっ、だったら何故、腕をすぐにどかさないっ？」
「――起こすと悪いから、そのままにしてただけだ…そう騒ぐ事もあるまい……」

「……一応聞いておくが――、いつから起きてた？」
「……んー確か1時間前くらいかな？　それよりお前昨日より少しおっきくなったんじゃないか？　ちょっとびっくりしたけど、ま・まだ子供だなぁ。せいぜい１０歳くらいか？」
　レティシアはかっとなって言い返したが、悪びれた様子もないリュシファーに掴みかかり攻防をし始める。
「ティアラちゃん朝よ～おは――……よ……？」
　少ししてやってきたルクチェは何故かそう言った後に、慌てた様にドアを閉める。
「あ～あ……」
　リュシファーが上から見下ろして言った。
「？」
　それは――。
　リュシファーの頭をくしゃくしゃにしようとしていたレティシアの両腕を、リュシファーが攻撃出来ぬよう掴み、上から勝者の台詞をリュシファーが見下した様を吐いていた際の出来事であった。無論、リュシファーは気付いているが、子供の姿とはいえど、それは在らぬ誤解をかけられてもおかしくない構図であった。
　その後リュシファーは手を離して座った隙をみてレティシアは頭をくしゃくしゃにするが、ちっとも動じずにため息を吐いている。
　その後に少ししてミグがバンっと乱暴にドアを開けて訪れた。
「……おいっ……ティアッ……って、な……何やってるんだ？」
　リュシファーがミグを見る。
　はぁ……とため息を相変わらず吐いて、ミグに言った。
「外見は女の子二人と言っていたが、本当に女の子の格好してるとは…驚きだな。ミグ」
「！？　その声……リュシファーか……！？」
　ミグが近寄ってきて顔をよく見る。そして次に嫌そうな顔をして後ずさりしていく。
「あ…ははは……連れ戻しに来たのか？　やっぱり…」

それに答えるリュシファーは頭ボサボサだったが、相変わらずため息を吐いて言った。
「しばらくは予定変更だ。話は聞いている。同行してやるから…さっさと済ませて帰るぞ」
「…怒ってる？」
「…いや…」
ミグが安堵しているいいタイミングでリュシファーは付け加えた。
「――激怒といった方が正しいかもしれんなぁ」
「…や、やっぱり」
「しばらくは保留にして置いてやるさ――相変わらず問題児のコイツの面倒を見ないといけないからな……」
そう言ってリュシファーは部屋の外に出て行く。
レティシアは少し気まずくてミグと目を見合わせずに俯いて出て行こうと、その横を通り過ぎようと思った時だった。
「レティっ…昨日は――その…」
「――ミグ、いいよ別に。……怖いよ。私も怖いもん…」
レティシアはミグに後ろ向きで立ち止まり静かに言うと、ドアを出た。
リュシファーがルクチェに挨拶をして事情を説明している。
そういえばミグとの一件があってから精霊の女神レティシアの声がしない――。
心の中で呼んでみるが、返事はない――。
不思議に思ったが気まぐれなんだろうと思って気にしない事にし

た。

――こうして、

数奇な運命に一緒に立ち向かってくれる力強い仲間が一人増え、

精霊の女神レティシアに導かれるまま四人は、

その足を妖雪の森へと進ませようとしていたのだった。

第四章　精霊の導き　へとつづく…

【第三章】†ｅｐ．５　再会††（後書き）

三章は数奇な運命を知り、謎が解ける。再会。
というような章でした。迷いや何やらあるけど、一つ問題も解決したし、いっちょじゃあやるしかないみたいだからやろうかみたいな感じです。お疲れ様でした。読んでくれてありがとうございます。
ではっまたお会いしましょう。りんごでした。

【第四章】精霊の導き†ｅｐ．０　犠牲†

…少しの間だったけど、僕お姉ちゃんのこと好きだった…
ミュイエ……レティをお願い――
後で僕も――…

「――――――ッッ……！」

ミュイエに抱きかかえられた私は、視界を奪われて目を閉じたまま叫んでいた。
眩しい光だった――。
振り返って言われた言葉を遮って光で目の前が真っ白になり、最後になんとか目を見開いて見た一人の少年がかざした手と微笑み――。

目を開けたそこには、妖雪の森の奥深くにあるという妖精の泉があった。
私とミュイエは少年の手により、この妖精の泉にあるという空間の歪みの外へと出され、ミュイエは黙って俯いたまま泉に背を向け、歩みを進めようとする。
「――ミュ、ミュイエ…？　駄目だっ…。――ノヴァがっ、…まだだ……ろ？」
そう聞きながらも、本当はちゃんとわかっていた。
――でも、信じたくなかった。
「――……レティシア…貴方にはわからないかもしれません。…ノヴァは僕達をここに出し、魔物たちと自分達を一緒に封印した様です……泉はもう光を失い空間の歪みが感じられない――。行きましょう…。離れた所に結界を張って、少し休んだほうがいい。抱きかかえていても痛むでしょう？」
ミュイエが言ったのはレティシアの怪我のことだった。

黙って歩き泉から大分離れた場所の木にそっと持たれかからせる様にレティシアを降ろし、ミュイエは結界を張りテントを出した。
そして木の枝を拾い集め、ポケットから出した赤く小さな四角い石。これをその木の枝の上に乗せた。
するとそこからボッと炎が上がり暖が出来たのを、レティシアは始終黙って見ていた。
浮かぶ月は細く、その闇に浮かぶ雲は穏やかにゆっくりと白く小さな雪を降らし、外は寂しさを増すような冷たい静寂が立ち込めている。
ミュイエはそっとレティシアを抱きかかえ、落ちていた木こりが切ったと思われる短い木を火の前に置き、椅子にして座らせた後しばし黙って火を見つめていた。
「レティシア…寒くないですか？」
「……少し」
「じゃあ、これを」
「…これは……？」
その白いストールには黄緑色の模様が入っている。
レティシアは涙を潤ませながらそれを手に取った。
「――…えぇ、これはノヴァの物でこれを羽織って外に出たものの、部屋に貴方を連れ帰った時に暑いと言って僕に渡したのです。あの子も貴方に使って貰えれば喜ぶでしょう…そうとうご執心でしたからね…貴方が目を覚ますまで『このお姉ちゃん綺麗だねぇ』と言ってずっと側で見ていました…ふふ…ですから、きっと僕が持っているより貴方が持っていた方がいいんですよ、レティシア」
ノヴァ……
皆で入ったこの妖雪の森に足を踏み入れ、奥に進むにつれて魔物は増えていった。少し数の多い魔物と戦っていて森の崖から足を踏み外し、転がるように落ちて気絶して皆とはぐれてしまった私を、二人が発見し助けてくれた。そしてそれを最初に発見したのはノヴァだったともミュイエはその後言っていた。

レティシアはじっとそのストールを見つめて、片手で握り締めながら頷いた。

ミュイエとノヴァは妖精族の王族で従兄弟だ。

ミュイエは白銀のような銀色の髪をしている。多分リュシファーよりも少し大人だと思う。落ち着いているが、リュシファーの様に偉そうではない。白銀の様に白い色をした猫みたいな耳を頭の上に立て、その奥にあるグレーの瞳は、遠くを見るように目の前の炎に向けられている。

ノヴァは茶色い髪とオレンジ色の瞳とミュイエと同じ色の耳をしていて、１０歳くらいの外見の今のレティシアよりも――幼かった。レティシアは、下に弟が出来たみたい可愛いと思った。

――そして、…嬉しかったんだよ…？　ノヴァ……

「……ありがとう…ミュイエ……大事に使わせてもらう…」

ノヴァのストールを羽織ろうとして、レティシアは肩の痛みに顔を歪ませる。

ミュイエが慌ててなんて気が利かないと詫びてストールをレティシアに巻いてくれた。

そして見つめたミュイエの顔は、少し哀しげに微笑んでいる。

本当は泣きたいのに、涙を見せない様にしているんだとレティシアはそう思った。

目に涙は零れていなくとも、その頬に涙が伝っている様にレティシアには見えた。

左手でミュイエの頬に触れる。少し意外そうな表情を浮かべるミュイエにこう言った。

「…ごめ…ん。魔物退治に来たのに崖から落ちて二人に助けられたというのに、私は骨折して剣も振るえず何の……っ。…なんの…役にも立たなくて、それに、魔物を退治したのは私じゃなくノヴァだ…。自分も一緒に封印して――…そんな……そんなことって――」

「――…この森の奥に住まう魔物は元々この森を完全に陣地にしようと、空間の歪みを探していました。遅かれ早かれ対処しなければ

なりませんでしたが、森は火を嫌い水を好む――氷の魔物が住み着いたとあれば、どの道どうすることも出来なかったんです。我々は“炎”の魔法を知らぬ水の種族。ノヴァは時空を操る術も使えましたが…基本的に氷の術しか使えない」

「！」

もし自分が炎の魔法を使っていればこんなことにはならなかった――。

レティシアは魔法を使うことなど、思いもしなかったことだった。

骨折して利き腕で剣を振るえない――と狭い視野でしか考えていなかった。

体を小刻みに震わせて涙が零れる。

ミュイエが頭を撫でて自分の胸に引き寄せた。

しばらくそうして泣いていたレティシアに、ミュイエはこう言った。

「…少し落ち着きましたか？　レティシア…そろそろテントで休み、明日明るくなってから貴方の仲間を探しましょう。きっと心配しています…」

ミュイエがレティシアを抱きかかえ、テントへと連れて行った。

レティシアは寝袋で横になってずっと考えていた。

いつも私は現実逃避をして逃げてばかりだ……自分の魔力からも逃げ、

宿命からも皆を頼りにして逃げ――怖れてばかりで何もしない。

今まで、炎の魔法から逃げ続けているのは当たり前だった。

でも私が……逃げていなければ助けられたのに…

――私、何しに来たんだ――？

何が精霊の宿りし者だ、何が高い魔力だっ…？

外で聞こえていた断末魔の叫び声――…

あれは、私が救えた者達の声――。

そして――私が、無残にも見捨てた……。

ノヴァを犠牲にしたのは私だ――。

私がやっている事は、ただのわがままじゃないか……。

「ミュイエ…起きてるか……？」

レティシアは言ったが、ミュイエの声はしない。

それでも言った。

上を見上げてただ静かに――。

「――本当に、すまない……」

この悲劇から、話は始まった――――。

つづく。

【第四章】精霊の導き†ｅｐ．０　犠牲†（後書き）

少々欝回で第四章が始まりました。しかも、突然知らない人が知ってるみたいに登場してきたのでびっくりされた方もいるかと思いますが、エピソード０なので背景だけ描かせていただきました。回想的な話になりますね。
エピソード１から皆出てきますから安心してくださいね（笑）

【第四章】†ｅｐ．１　教えてくれたこと†（前書き）

すみませんねぇ。今回も…欝回です（汗）
あと、校正もしたつもりで載せてから「あぁぁぁ（泣）」と気付く事もすっごく多くてですね、変な部分があるかもしれませんが後で一応チェックして直してますが何かあれば感想欄でもメッセージでもなんでもいただければ直しますので…すみません。ではどうぞ。

【第四章】†ｅｐ．１　教えてくれたこと†

レティシアは宙に浮かんで、ミュイエの後を続く。
昨日までは凍りつくような空気も、深い森が心地よい湿気を含む気温に変わっていた。
「――あ、レティシア…あそこに何人か人がいますよ？　あの方たちがそうですか？」
一人走って来る少年が遠目に見えて、その後を背丈が少し高い二人が続く。
「レティ！！　無事だったかっ、すっごく探したんだぞっ」
ミグが肩を掴んで来たので、レティシアは顔を歪めて声を上げた。
驚いてぱっと手を離したミグが右の肩を押さえて宙で蹲っているレティシアに声をかけるより先に、後ろから到着したルクチェとリュシファーが駆け寄る。
「だ、大丈夫かッ？　怪我はないかッッ？　崖から落ちたからただじゃ済まないと思って心配していたんだ」
「――レティシアは右肩と左足を骨折しています。怪我もしていましたが、それは治しましたから心配はいりません…」
「あ…えと…」
レティシアの顔を覗きこんでいたリュシファーが困惑しているので、レティシアはようやく落ち着いた身体を宙で起こし静かに口を開く。
「――落ちたところを助けて貰った……ミュイエだ。魔物ももういない…心配かけてすまなかった……」
ミグがレティシアを怪訝そうに見ている。
「魔物倒したのか…？」
「……」
レティシアは黙って俯いてしまった。
それをミュイエがみかねて事情を説明していた。

レティシアは説明が終わるなり、魔物もいない森の出口へと先に進んでいく。

――私が、倒してたら…よかったのに……

後ろから皆が走って来る。

「こら、レティ…一人で歩くと危険だ。いくら魔物が封印されたからって、少しはまだいるかもしれないだろう？」

リュシファーがレティシアの左手を取り、宙で犬を散歩させるかの様に引いて歩く。

レティシアはずっと俯いていたし、何も返事をしなかった。

後ろでミグがルクチェとどうでもいい話をしているとレティシアは思っていた。

魔物が消えた報告をしにいくために、一度ミールティアに戻るという。

ミュイエが知っている森への出口までの近道を通り、レティシア達は夕方前にはミールティアへと到着していた。それまでレティシアは色々と考えていた。

屋敷に着いた時、ふとノヴァの声を思い出した。

――レティお姉ちゃんって魔法使える？

そして、その時の自分の返事も……。

ミグとミュイエとルクチェは町長に報告に行き、リュシファーは薬を調合してくれている。

レティシアはベッドから窓の外を静かに眺めて気分は重苦しくため息が出る。

「――らしくないな…ずっと黙って大人しくしてるなんて」

「……放っておいてくれ」

レティシアはリュシファーは自分が何故落ち込んでいるかとっくに知っているだろう。

多分ミグも――と考えていた。

当たり障りない会話から始めて、言われたくない言葉を言いたいのだ…きっと。

「不機嫌そうなところはいつも通りか……さ、出来た。少し服脱がせて貰うぞ」

「……好きにしろ」

右肩の患部に薬を塗るため、少しだけ服をずらして患部にリュシファーは薬を塗る。

少し焼ける様な痛みにレティシアは顔を歪めて耐えた。

「なんせ骨折なんて重体じゃ、確かに捻挫の薬の様に心地いいもんじゃないかもしれないが、ちゃんと即効性があるように作ってある。少し我慢してくれ」

「べ、別にっ…痛むなんて一言も言ってないじゃないか」

レティシアが無気になって言った一言に、リュシファーはくすっと微笑んだ。

それにレティシアは更に口を開こうと思った。が、リュシファーはくるっと背を向ける。

「…ひとりになりたいならここでじっとしているといい。俺は足にも薬塗ったし、下に消えよう…では、またな――」

――何か言われると思っていたのに何も言われなかった。レティシアは少し意外だったが、よく思い出してみればリュシファーとはそういう者だったと思い返した。

――気付いているのかいつも聞いて欲しくないという時、何故か何も聞かない……。

リュシファーが出て行ったドアを見つめながら、開けられている窓から聞こえる物音や人々の声に耳を澄ましていた。

「――“私は……魔法という魔法は……使えないんだ”……」

レティシアが静かに呟いたそれは、自分がノヴァに答えた言葉だ

った。
本当は使えるのに――私、
――――嘘つき……
一方、下の階では――。
ルクチェ達3人がそれぞれ散らばっている。
ミグは窓の側。リュシファーは壁に背をつけ立ち、ミュイエは席に座り、ルクチェはお茶を入れ台所から戻って来るなり、立ち止まり苦笑いを浮かべる。
「――皆どうしたのぉ？　席につけばいいじゃないの。お茶入ったわ」
三者三様に何か考え事をしていたらしく、はっとしてテーブルへ集まった。
ルクチェはそのままレティシアのいる2階へとお茶を持ち向かおうとした。
「――ルクチェ、…今はそっとしておいた方が…多分あいつご飯も食べないぜ…こういう時」
ミグに止められてルクチェは困った表情を浮かべて、二階のレティシアのいる部屋の方向へと視線を向けた。
「…あら…、そ、そう…でも、心配だわ……」
心配するルクチェを見てミュイエは言った。
「……子供にはショックが大きいでしょうね…城の者が魔物に次々と殺されていく様を見たのですから…ノヴァとのことも気に病んでいるのでしょう…心配ですね」
ミュイエが言った一言に、ミグが苦笑いを浮かべて口を開いた。
「――何も聞いてないのか。あいつ10歳くらいに見えるけど、本当は俺とは双子で14だ」
「っ…よ、よくわからないんですが…。何故、双子なのにレティシアは成長が遅いんでしょう…？」

ミュイエは怪訝そうな顔で思考しているのをミグが唖然として言う。
「あ…よくわかんないんだけど、突然小さくなったんだ。最初五歳くらいだったんだ」
「!?　な…何とも不可思議な――どういうことなのです？」
三人顔を見合わせて、苦笑を浮かべるとリュシファーが首を振って事情を説明した。

「――そう…だったのですか……だから昨日――」
「昨日…？」
「あ、いえ…泣きながらずっと謝っていたんです。それから思いつめたように塞ぎこんでしまったのは、ショックが大きかったからだと…思っていました。いえ…しかしこれもまたショックでしょうね。多分、自分のせいだと余計に気に病んでいるのでは…」
「……おそらくな」
――誰もがそれには気付いていたことだった。しかし、今は声をかけることは出来ないと誰もがそう思っていた。
「――少し…レティシアの元へ行ってきます…」
「や、やめといた方がいい……」
リュシファーが止めるのも聞かずに、ミュイエはその手に触れると首を横に振って2階へと上がっていく。
ミグがため息を吐いて呟いた。
「――やめといた方が…いいのになぁ」
――――…
2階――レティシアのいる客室。
コンコンと言うノックの音。
返事がない――。
ミュイエはノブに手をかけるが、鍵はかかっていない。
ゆっくりと開けると、強い風が窓とドアに通り吹き抜けた。
「レティシ――――…ア？」

しかし見渡した部屋に、レティシアの姿はない。
開かれた窓にかけてあるピンクのカーテンが風に揺れている。
はっと慌ててミュイエは声を上げながら階段を駆け降りていく。

――レティシアがいない事を3人が知ったのは、レティシアが窓から部屋を出て30分後のことだった。

レティシアが向かったのは時計塔。
屋根の上で、もう暗くなった町並みをただ眺めていた。
左足には包帯が巻かれ右足も裸足である。
町並みに飽きたレティシアは妖雪の森の方角へと向き、目を潤ませる様に遠く哀しい目で見つめる。
その時はっとする。
隣に座る人の気配。誰かというのはわかっていた。レティシアは視線を森からずらさずに言った。
「――……なんだ、もう見つかったのか」
その言葉に隣の人物はふっと微笑んだ気がする。
レティシアもその後口を開かず、隣の人物も黙っていた。
ノヴァのストールが自分の目の前の視界で風に揺られている。
ストールを握りしめて右足に左腕をかけ、レティシアは俯いた。
隣の人物は黙って慰めるように自分の胸へと引き寄せる。
「……っぐ…ひっく…うわぁぁぁ～」
声を上げて泣いていた。
それを何も言わずに頭を撫でてくれた優しさがありがたかった。
何も言えなかったんじゃなく、言わなかったと知っていた。
落ち着いた頃に屋敷へ戻った。
夕食時だ。
食卓に並ぶ料理は少しいつもより豪華だ。
「腕によりをかけて新しい仲間も増えたことだしぃ？　歓迎会しなくちゃね」

とルクチェが言って微笑んでいる。
レティシアは俯いてルクチェに詫びた。
「……ごめん。さっき外で食べてしまったんだ」
「あら…そう……」
本当にごめんと言ってレティシアは静かに上の階へと上がっていく。
下の階では連れ戻してきたリュシファーが、ルクチェの意味ありげな視線に落胆の表情を浮かばせながら首を横に振っていた。
だがそれは誰もが聞かなくてもわかっていただろう。
口数も少なくルクチェが作った豪華な食事に手をつけていた……。

次の日――。
レティシアは一晩悩んだあげくにリュシファーの元へと行った。

「――話がある」

突然のレティシアの言葉に、少し圧倒された様にリュシファーは答えた。
「ど、どうした…改まって……」
「……時計塔まで後で来い」
とそう言ったレティシアは時計塔まで先に向かった。
――リュシファーが来たのは5分程後のこと。
「――ふぅ～…今日も天気がよいな…。――で、なんだ。話って…」

声にレティシアは振り返る。
目で座るよう合図を送り、レティシアのその合図にリュシファーは座り、手には煙草。
リュシファーは白い煙をふぅっと吐きながら、黙ってレティシアと同じ方向を見る。
息を吸い、そして深く吐いたレティシアはリュシファーの方を見

ずに少しずつ言葉を紡ぐ。
「リュシファー…、その……私――」
しかし、言えずに言葉を詰まらせたレティシアにリュシファーは口を開いた。
「――『魔法を教えてくれ』…か」
「！」
驚いた――。
レティシアのなかなか言えない言葉をリュシファーは紡いだのだ。
驚愕の表情を浮かべて自分の方へ向いたレティシアに、リュシファーは続けた。
「…言うと思ってたよ。お前ならそう言うだろうって」
「なんだ――全部……お見通しなんだな……悔しいが…」
「はは…少しお前といればわかるさ。理由も何も聞かなくてもわかってるから言わなくていい…」
少し睨みつけるようにリュシファーを見た後、レティシアはその表情を崩して静かに言った。
「……頼む」
レティシアは俯いてそう言った言葉に、リュシファーは少しふっと微笑んで答えた。
「――了解」
リュシファーはその後煙草の煙を吐いて、レティシアの頭を強めに撫でた。

――昨日一晩中考えて…、――逃げていてはいけないと思った。
ノヴァが――教えてくれた…。
もう一度、ノヴァに会えて聞かれたとしたら、こう答えるだろう。

――――“勿論、使える”――

と……。

つづく。

【第四章】†ｅｐ．１　教えてくれたこと†（後書き）

欝回終わってついに決意回ってところですね。
いやー良かった良かった。
少し哀しい曲をかけながら書いてました。
曲はヴィーナス&ブレイブスより【Ｗａｌｔｚ　Ｆｏｒ　Ａｒｉａｈ】がニコ動にピアノ弾いてる人がいて高音質だったので、気に入ってかけてました。それかけると雰囲気伝わるかもしれないですね。
ちなみにピアノ私も独学で1年目です。↑結構どうでもいい。　ではまたっ読んでくださりありがとうございます。次は欝回脱出です。

【第四章】†ｅｐ．２　心強さ†（前書き）

チェックしてないですが…毎度すみません。

【第四章】†ｅｐ．２　心強さ†

実は私は、リュシファーに魔法を指南してくれるよう頼んだ朝、寝ずに一晩考えていた。

そのきっかけとなったのは、精霊の女神レティシアに言われていた言葉だった。

――もともと、水の妖精族は力なき者であり滅ぶ運命にあったこと。

もし、怖れを持っていなければ炎の魔法で一掃出来たということ。

しかし、そうでなくとも私が行ったから、魔物ともども封印するとノヴァは決意し、一人生き残ったという変化があったということ。

妖精族たちの犠牲となった惨劇をしかとレティシアに見せて、強くなり怖れを消す勇気を持って欲しかったということ。

私が怖れを持ち続けている限り、これからも高い魔力を秘めながら何も助けることは出来ないということをよく考えるようにと言った。

――私は、そんな酷なことをした精霊の女神レティシアを軽蔑していた。

でも、苛々として考えて泣いて…結局、今のままでは何も出来ないんだと知った。

幼い時にその力の強さを何も知らなかったと今は違い、今はちゃんとわかっている。

自分が何故高い魔力を秘めていたのか――。

だから私は決めたのだった――。強くなる、そしてもう逃げないと――。

そして今、レティシア達はサンザルス大陸へと向かっていた。

サンザルス大陸は、砂漠地帯――。

ここに、紅蓮の洞窟という洞窟があり、そこに“聖なる炎石”と

いう石が眠っているという。
何個か精霊の女神レティシアに言われた場所を紙に書きとめたが、砂漠とか嫌な場所は早めに済まそうとミグが言ったから決まっただけであったが、サンザルス大陸は三日はかかる程南で、船での長旅をしなければならない。
そして、船旅一日目の夜のこと――。

する事もなくミグはベッドに横になり本を読んでいる。
レティシアはぼーっと窓の外を眺めていた。
「…暇だ。ちょっとリュシファーのところにいってくる」
「――ほーい…」
ミグの心のこもってない生返事を聞いて、レティシアは部屋を出た。

「――で、なんで俺のベッドに一緒に入って来るんだお前は…」
レティシアはリュシファーがベッドに横になりながら眼鏡をかけて本を読んでいるところに、ずかずかと上がりこんで直行したのだった。
しばし何も言わずにため息を吐いたリュシファーは本を閉じてそう言った。
レティシアは少し考えたが良い言い訳は浮かばずに、こう答えた。
「――わ…すれちゃった」
リュシファーが怪訝そうな顔でレティシアを見下ろした。
「ほ、ほぉ～…まぁ、城じゃないし別に構わないが…？」
そう言って苛々とした様子でリュシファーは突然、レティシアの両手首を掴み、頭の横辺りで布団に押し付けて動きが取れない様にした。
「え、え、あっあの…リュシ…ファー？」
レティシアは、困惑しつつも自然と焦りとともに頬が紅潮していくのを感じた。

「――…何も用もないのにこんな時間に男の部屋に来て、身の危険は覚悟の上で来た方がいいな…」
「…えっ、あ？　み、身の危険…？」
「はぁ……仕方ないな。例えば――…」
「――な、何を馬鹿な事をっ…大体そういうのはっ、す、好きな人と…するんだろう？」
リュシファーが言ったのは、エンブレミア王国で見たちょっと大人な場面のあった映画のことだった。レティシアは慌てて腕の拘束を解こうとするが、全然動かず近づいて来るリュシファーが耳元で囁く言葉に目を見開かせた。
「――俺は、お前は可愛いヤツだと…思うが？」
リュシファーの言った言葉。
びくっとして愕然としているレティシアを見て、リュシファーはちょっと自分でも照れた様子でふっと微笑んで少し気まずそうな顔を作ると、ため息を吐いて表情を整えてから言った。
「…安心しろ。王女じゃなかったら知らないが、俺は一応立場はわきまえているつもりだ」
レティシアの腕からぱっと手を離してリュシファーは最後に言った。
「――今のは、ちょっとした教育的指導だ…。じゃ――」
リュシファーが起き上がって、部屋を出て行く。
どこへ行くのかわからなかったが、レティシアは腕が自由になったというのに頭の横で腕をそのまま横たわらせ、衝撃の先程のリュシファーの行動に唖然とし動けなかった。
そして、脳裏には“ある事”がレティシアの頭にぐるぐると回っていた――。
実は、リュシファーに魔法の指南を頼んだ日、怪我をしているので指南は明日からということになり町を散策することになった。

その際、レティシアはちょろちょろとしていて色々見ている隙に気がつけばリュシファーがいなくて探している時、町の片隅に占い師のお婆さんに呼び止められた。
占いなどしたことのなかったレティシアは、じゃあちょっとだけと占いをして貰った。
そして、その時占いで言われた言葉とは――。

“強い運命に導かれた者とその者は、結ばれるじゃろう。その者は、そなた自身を高め、様々なことを教えてくれる者。それからそなたは少々荒っぽい気質があるのぉ……。
しかし、相手はそれを上手くコントロールして見守ってくれる――…そなたにとって必要な相手じゃな…。見ようとせねば見えぬ相手。まぁ自然に時がやってくるじゃろう…”

『そなた自身を高め』『様々なことを教えてくれる』……
――教育…係……？
はっ…私、何考えてるのだ…？
ほんの冗談じゃないか…いつもの言い合い。からかっただけ…。
リュシファーはムカつくヤツでいつもからかって、そうやって子供扱いして。
偉そうにしてて、――なのに時々優しく見守ってくれて…、全部お見通しみたいに考え読まれてて……『上手くコントロールして、見守って』――…くれる？
――そうだ。
私、何度か思った事がある。
……。

“可愛いと思うが”――？
“でも俺は立場をわきまえているつもりだ”――…

最後にリュシファーの言葉を思い出し、レティシアは飛び起きた。

バンッ…

リュシファーの部屋のドアが乱暴に閉められ、そこに人の気配は消え去った。

レティシアが向かうは、甲板だった――。薄暗く、僅かに灯ったランプで照らされた甲板の上に、ちらほらと人が風に当たっている。風は少し強く、海の上と夜の冷え切った空気が体を少し震わせる。空は灰色の雲に覆われ、星ひとつ見えない。

レティシアは軽くくしゃみをしてから、寒そうに腕を抱えながら知る姿を探す。

歩みを進めながらきょろきょろと周りを見ていたが、船の先端の方へ来てもどうやらリュシファーはいない様だった。

戻ろうかと思ったがレティシアは少し寒さに慣れたこともあり、しばし手すりごしに闇に揺れる水面を目を凝らして眺め、ただぼーっとしていた。

どのくらい時間がたっただろう――。

「――あの、失礼ですが…おひとりで旅ですか？」

後ろからポンっと肩を触れる感触とともに言われた言葉に、びくっとして振り返る。

「え……」

見知らぬ男。薄く透き通る様な薄紫色の髪の毛。透き通る様な肌。透き通る様な黄金色の瞳――。穏やかで優しいその声までもが透き通っていた。歳は兄エルトと同じくらいだろう。身なりは吟遊詩人の様だったが、何故かどこかで会ったことがあるような気がする――。

レティシアはそれでも知らないその男を警戒の色を見せつつ、じっと凝視していた。

「――あ、ひょっとして警戒されてますか？　それと、そんなにじっと見つめられると吸い込まれそうになってしまいます…あなたの瞳は…綺麗ですね――」

レティシアに男は優しく微笑んで何故か自分の羽織っていたケープをかけてくれた。
「夜は冷えます――少し貸して差し上げます」
「あ…えと、あ……ありがとう」
「いえ、――で、おひとりなのですか？」
「あ、いや部屋に仲間がいる。少し風に当たりに来たっていうか…」
レティシアが言うと、綺麗な薄い紫の髪を揺らす男は穏やかに微笑んだ。
「そうですか、それなら良かった。どちらへ向かっているのですか？　あ、申し遅れましたね。わたくしは旅の吟遊詩人で、名は――伏せておきましょう。あなたも名乗らなくていいですよ。お嬢さん、吟遊詩人さん。これで呼びましょう」
男の言葉に怪訝そうな表情をしながら、レティシアは名乗らなくていいなどといわれると思わなかったので、少し唖然ともしながら微笑んで頷いた。
「――私はこれからダムルニクス王国へと帰る途中なのです。明朝に船が着きますから、そこでお別れですからね。名も知らず――というのも、いいんじゃないでしょうか。ふふっ…」
少しおどけるように笑って見せたかと思うと、男は静かに歌を紡ぎ始めた。

“澄んだ緑石の妖精は消え
幼き頃の思いに胸をはせ
私は独り海と共に旅に出た

水辺に映る移ろう月は
静かに僕を照らし　同じ微笑を浮かべ
その月明かりを讃えん

今独り行く　旅路の果てに

何を得たのか　わからぬまま
彷徨う星は　海へと還る

今も君を想う僕の思いを　月は消してくれるか
深い海に　沈んで消してくれるか”

とても澄んだ声だった――。
周りにいた中年の男性や、若い女性など散らばっていた筈の人たちも少しこちらに集まってきていて聴き惚れていた様だった。
「すごいっ、兄ちゃん歌上手いなぁ～他にも何か歌ってくれよ」
「素敵でしたぁ。私も次何かお願いします～」
と、口々に拍手と共に吟遊詩人に歌を依頼する声が聞こえて来る。
レティシアも勿論その歌声に聞き惚れていた。
「お、お前凄いなぁ。すごく綺麗な声だった。私も何か他にも聴きたい」
そうして、何曲か披露した後吟遊詩人は依頼を締め切り、吟遊詩人が断るも聞かずに無理やり感謝の気持ちにお金を手渡していた。
「ああぁ、べ、別にいいんですよ。お金など、船の上で少し歌っただけなのですから」
と慌てている吟遊詩人がレティシアは面白かった。
「では、そろそろ休むとしましょうか。楽しかったです。また、是非どこかでお会いできたら――」
吟遊詩人にレティシアは借りたケープを返し、去っていく吟遊詩人に挨拶をした。
この甲板でついさっきまで聴こえていた歌の余韻に少し浸ってから、部屋に戻り、ベッドで眠りについているミグの隣に潜り込んだ。
こう寝る前に思っていた。
――素敵な夜だったなぁ……不思議な人だったけど。ふふっ…。
リュシファーのことは勘違いだ――うん。あいつもからかっただけだ。

と――――。

「あーあ、――で、結局お前は俺に手間をかけさせるわけだ…」

レティシアは次の日、リュシファーのベッドで寝込んでいた。

夜に甲板に長いこといたせいかレティシアは熱を出し、朝早く起きた時にミグが気付いた時には高熱が出ており、慌ててリュシファーのところに報告に行って、レティシアはリュシファーの部屋へと隔離されていたのだった。

「えへへ…まぁいいじゃないか」

「――…ま、まぁいいじゃないかだと……？？」

リュシファーがふるふると震えながら怒りを爆発するのを抑えつつ、ピンと魔法で洗面器に氷を入れ、元々入っていた水にタオルを入れてかき回しているのを、レティシアは苦笑しながら見ていた。

ため息を吐いたリュシファーは強めにタオルを絞ってレティシアの額に乗せた。

寝起きのままリュシファーは髪も整っていなくて、疲れた表情を浮かべている。

「――とにかく、今日は大人しく寝てるんだぞ…？」

そう言ったリュシファーの目は怖かった。確実に怒っている目をして見下ろしていた。

「は、……はいー…」

「――よろしい」

リュシファーとレティシアはそうして部屋でほとんど二人過ごすこととなった。

レティシアが熱でボーっとする中、リュシファーは時折タオルを替え、それ以外は読書に更ける。途中抜けてちゃんと風呂にも入りにいったりもしていたが、その間はルクチェが来てくれていた。

外は雨が降っていて、波も荒い様だ。レティシアが少し眠った時も、寝ているベッドで大きな揺れに時々目を覚ます。

「リュシファー…」

レティシアは目を覚まし、声をかけた。
「ん？　目ぇ覚めちゃったのか？」
「…うん。…船…今日は随分揺れるなぁ……」
「そうだな…この天気じゃ仕方あるまい…嵐にならなきゃいいんだが――」
と、そう言った時だった。
何かの大きな衝突音の様な重い音と物凄い揺れとともに船が激しく揺れうごめき、重力の方向が変わる様にベッドごとレティシアはドアの方向へと凄い勢いでずれて行く。
「わぁっ！」
レティシアは悲鳴をあげながらドア側の壁にぶつかった。
そして今度は窓側にと重力が変わった様でレティシアはまた悲鳴をあげながらベッドの上で慌てふためいていると、ドアがバンと開いたと同時に、一気に水が溢れて来て部屋中に水位を上げていき、一瞬で首辺りまで浸水した室内でレティシアはあたふたしながら息を吸った。
…嵐！？　まさか船が…、沈没する……！？
フリシールを咄嗟に使って、前を進むが水の中では勢いもつかない。リュシファーを探すが水の中では何も見えない。
ひとまず甲板の方へと急いで向かうが息も限界に近い。薄れそうな意識の中、レティシアは急ぐ――。　なんとか甲板への階段を上がったが、そこは既に海の中で渦を巻くような何かの水流にレティシアは飲み込まれ、あがいたがその流れに抗えずレティシアは意識が遠くなる。
――だめ…もう苦しい……っ
薄目で最後に見たのは、激しい竜巻のように全てを飲み込む勢いを増した水流だった――。
――――……
――――…
――…

うっすらと気がついた時には、レティシアは寝ていた。
…天井が、違う――…！
ばっと起き上がったそこは、船の部屋じゃなかった。
コテージの中…？
そして、自分の目の前にずれ落ちてくる白いタオル。意識が朦朧としながらもレティシアは苦しい呼吸を整えながら、辺りを見回す。
「はっくしゅっ」
寒い…っ。寒気がする…。
レティシアは一度くしゃみをしてから、ベッドの布団の中の毛布を引っ張り出すと、羽織った。腕の力が余り入らない。歩こうとして、レティシアは視界が渦を描く様にぼやけて、ぐらっとして倒れた。
痛っ…ぁ――…
気持ちが悪い。なんか、吐きそう…。そう思った時だった。
「レティ…！！　駄目だ！　今起きては――さっき薬を飲ませたばかりだっ」
怒鳴りつける声にびくっとして見上げた途端、レティシアは抱きかかえられ、ベッドへと寝かされた。
「リュ――…シファ……？」
視界がぼやけてはいるが、名前を呼んだ。
「あぁ、そうだリュシファーだ。喋らなくていいから、じっとおとなしくしてろ。大丈夫か…？」
リュシファーは心配そうな顔をレティシアに向けて、レティシアの頭を撫でた。
「き…持ち悪い――し、寒い…。それより、みん…なは…？」
一瞬リュシファーの動きがぴたっと止まった気がした。
「――そりゃ気持ち悪い筈だ。熱がかなり高い。…なんとかお前は助けたが、あの海の嵐で船は沈没して皆は途中まで一緒だったがはぐれた。でもきっと、どこかで再会出来る筈だ。今は俺とお前の二

人だけだ。熱が収まったら探すとしよう…」
リュシファーは言った。
「…そ…か……」
そうして、しばらくしてレティシアは目を閉じた――。
少し眠っていて目を覚ました時には、リュシファーが隣で眠っていた――。
顔が目の前にあるから驚いたが、まだ熱があるのかぼーっとしていて、リュシファーも疲れたんだなと思って、リュシファーにバレないようそっとふらふらする体を起き上がらせてベッドを降りようとした時に、レティシアはぱしっと手を掴まれた。びくっとして振り返ると、リュシファーが薄目を片目だけ開けてこちらを見上げていた。
「こらこら、どこへ行く？」
「あ…起こし…ちゃったか、悪い…トイレだ」
ふらつくレティシアをトイレまで誘導してくれたリュシファーは、トイレから出たレティシアを抱きかかえてベッドに寝かせた。
ひと息ついてリュシファーもベッドに横になったままタオルを洗面器に入れて冷やす。
「具合はどうだ…？　寒い寒いと寝言で言うので、一緒に布団に入っていたが…つい眠っていたみたいだ」
「さっきより少しいい気がする…さっきはなんか気持ち悪かったし…」
「そうか……なんとか落ち着いて来たようだな」
「――それより、そういえばここは？」
「…それが、ルーセスト大陸の南西の端っこみたいだ。かなり細い半島が長く続いてるところの端の端ってとこで、近くの国や町に行くにも結構距離があるな…。皆流されて皆散り散りになったかもしれないな……」
「！」
レティシアは驚いてリュシファーに耳を疑って聞き返す。

「――そう、新緑の宝石とも呼ばれるダムルニクス王国が近い。お前が嫁ぐ筈だった国――というわけだなぁ…一応、侘びでも入れといたらどうだ。ははは…」

リュシファーはそう言って笑ったが、レティシアは笑えなかった。でもこうも思った。精霊レティシアの示したひとつにダムルニクス王国近くがあったのだ。王国近隣にある新緑の洞窟の中にある“大地の眠り石”。これを先に入手すれば…。

「詫びるのは勘弁してほしいが、どちらにしても新緑の洞窟には行かなければ…」

「――…そうだな。まぁひとまずは熱を治せ……それからだ……」

「うん…あ～あ、ダムルニクス王国…やだなぁ～…見つかったらどうしよう」

そう言ってレティシアはリュシファーが呆れた様に「…いいからもう寝ろ」と怒るまで、嫌だ嫌だと愚痴を言っていた。

エルトによると、ダムルニクス王国はとても美しい国だと以前に聞いた。

吟遊詩人の国でもあり、王族達も皆澄んだ声を持つと――。

そう言えば名前の知らないあの歌声が綺麗な吟遊詩人も、ダムルニクス王国に向かうと言っていた。吟遊詩人の国だっていうし、ああいう人がたくさんいるんだなぁと思った。

――突然の嵐で散り散りに何処かへはぐれてしまった災難に見舞われた他の皆がどうしているか心配だったけど、『きっとどこかで会える』というリュシファーの言葉が、何故か本当にそんな気がして心強かったから心細くはない。

だって、私は――ひとりじゃない。

リュシファーが一緒だ…。

私は私の出来ることをしよう――とそう思って、

レティシアは眠りについていったのであった――。

つづく。

【第四章】†ｅｐ．３　一難去ってまた一難…！？†

「――いいか？　魔法の源から流れて来る力を小さくするだけだ。消すんじゃない。もう一度だ」
「えぇ～だから出来ないんだってばぁ」
「つべこべ言わずにやるんだ」
リュシファーは鬼の様に厳しいと思う。
コントロールする力があってこそ魔法を扱えるというものだと言って、発動する魔法の力を抑える修行をさせられていた。魔力を高める法というのは、どんなに大きな威力の魔法でも同じ小さい玉状の光に抑えるという様な、地味に見えるが大変なこの積み重ねが実を結ぶのだと彼は常々指導する。
しかし、レティシアはまともに魔法の授業を受けたことは幼い頃にあるが、呪文を覚えさせられる、使うといった簡単な事しかやったことがなかった。
どう頑張っても魔法は小さい玉にならず、弾けてしまうか誤爆するかどちらかで、若干負傷もしながら頑張っていた。
ダムル二クス王国に向かうまでの道のりは長い――。途中から山岳地帯が続くルーセスト大陸の細い半島のその山にレティシア達はいた。
船が沈没してからレティシアの熱が下がるまで大事をとって二日、隊長が復活してから今現在は三日目、宵も更けそうな深夜に近い時刻。
そしてその移動の最中、魔物と戦う時も剣は禁止されており、『剣を出せ』と言われたので異次元空間から三本剣を出したが、まさかそれを没収されるとは思ってもみなかった。一応予備に体に護身用に短剣を忍ばせてはいるのだが、短剣では威力もあまりない。
あぅぅ…と嘆いてみせても、リュシファーはぎろっと睨みつけるとこう言っただけだった。

『剣は没収。それと俺はお前が危なそうな時にしか手出ししないので、ちゃんと魔法で倒せ。風は禁止』

と――なんとも手厳しいと思う今日この頃。

「――す、少しだけ休憩…しても――…？」

「――いいって言うと思うか？」

「だ、だったらいいなぁ…なんて」

「……駄目だ――と言いたいところだが、まぁいいだろう。今日はこのくらいにしよう。少しだがこの前よりマシになったしな…」

レティシアとリュシファーはコテージへ戻ろうとした。

その時、リュシファーは突然立ち止まる。おかしいと思いレティシアはリュシファーを見ると驚愕の視線をレティシアに向けて硬直しながら口を開く。

「――レティ……マ――…ズいっ。…に……げろ――」

……え……！？

次に見えたのは目の前をゆっくりと倒れていくリュシファーの姿。

「！？」

リュ――シファ……ー？

「！！」

そして、そう思考しながら唖然として立っていた自分にも襲う何かの衝撃。

一瞬、何が起こったのかわからなかった。

自分の背中にチクッと何かが刺さる軽い痛みを感じたのを最後に、どんどん目の前がぐらっと歪み、背中から痺れが全身に駆け巡ってくる中、最後にレティシアは思った。

“リュシファーの倒れた理由――これ……だ。”

ドサッとその場に倒れてレティシアは意識が遠のいた。

その二人に近づく数人の影――。

「……こんな時間にこんな場所に来るとは、馬鹿な二人だな…油

断したか。娘――だけでよかったんだが、まぁ後々連れ戻しに探されても困る。縛り付けて閉じ込めろ。あ、娘は丁重に扱え。上玉だな――こりゃ、貴族の娘かもしれんな…ふっはははははっ」

不気味に口元を吊り上げさせるこの三人は、レティシアとリュシファーを連れ、山の洞窟の中へと運んでいったのだった。

――…う……

――ここは…ど…こだ……？

ぼんやりとして目を開けても意識がぼーっとしている。起き上がろうとして気付いた。

両手足を拘束されている事に。そして、口には布で猿ぐつわをさせられていた事も。

……な、なんだ？

「んーっ……」

駄目だ…縄が取れない…。辺りは洞窟――の様だった。外の月明かりさえ通る穴すら見当たらない続く岩壁で囲まれたこの場所には、松明がその灯りを灯す――。

レティシアは、何故か布団を2枚ほど重ねた上に寝かされていた。後ろ手に縄をかけられ横たわる布団は少し匂った。男の臭い汗の臭いの様なひどい臭いだ。

レティシアは嫌な顔で布団から降りようとして、身をよじらせて布団から落ちる様に降り、座り込んだ。見渡すと牢獄の様な鉄格子が見える。下に視線を向け、レティシアは驚愕した。「！」

――リュ、リュシファー…ッ！

しかし、猿ぐつわを噛まされていては『んー』と言うくらいしか何も話しかけられない。

リュシファーは同じ様に後ろ手に縛られたまま、意識を取り戻していないらしい。

くっ、とレティシアは怒りに体を震わせると犯人について考えている時だった。
足音がする。

はっとしてレティシアはその足音のする方向へと目を凝らした。
そして近づいて来る影ひとつ――。
……壁の方へ後ずさらなきゃ……。
ザザザ…、というその音に駆け寄る影はレティシアを見て口元を吊り上げた。
「ほぉ…気がついたか。いや、まだ少し子供だがやはりすごい上玉だ……。ははっ、後ずさっても手足が縛られていては上手く進めないだろうな…はっはっはっ……」
「！！」
レティシアは男の屈辱の言葉に地に横たわったまま、きっと鋭く睨みつける。
男が一瞬動きを止めた。目の前の娘が向ける鋭い眼からは、その意を聞かずとも感じ取れ、怖れにも似た感情を抱く。しかし、少しして男はふっと微笑むと近づいてきた。
レティシアは後ずさりする。
「これはこれは、どうやら気の強い娘の様だな――。この状況下で怖れを抱かないとは…世間知らずの貴族か何かの娘か…。…しかし、少し立場をわきまえて貰おうかな？」
岩壁にぴったりとその背がくっつくまで、レティシアは後退しながらも男をその鋭い眼で睨み付け続けた。怖れより屈辱を受けた怒りの方が勝っていたのだった。
それでも背が岩壁にくっついた時、逃げ場が無い事を知りレティシアははっとして警戒の色も見せた。ちらっと鉄格子のある場所に視線を向けるが、リュシファーは倒れたままだ。
「…あぁ、あの男か。後で処理するが、お前は売れば高く売れるだろう――」

「…！」

「さて、なるべく傷はつけたくない。上玉の味見でもするかなぁ…」

レティシアは目を見開いた。――それは怖れだった。――体が震え、拒否していた。

しかしぐっと抑え、レティシアは睨みつけるのは続行していた。

「やっと、大人しくなるかと思ったら気が強いな。…大人しくしていればすぐ済む――」

レティシアはその言葉に少し恐怖が勝り、びくっとする。とっさにリュシファーをちらっと見るが、意識を失ったままの様だ。男の手がレティシアにかけられる。覆いかぶさって太ももをまさぐっている。鳥肌と恐怖が一気にやって来て、レティシアは言葉を発せないまま暴れて拒絶する。

――――いっ…嫌だ…！！――――――

「こらっ、暴れるんじゃない。ハァ…本当に気の強い娘だ。仕方ない――態度の改め方というものを教えてやろう」

そう言って男の手がレティシアの髪を掴んだ時だった。

男がやって来た方向から、何故か騒がしい声と数人の足音がこちらへ向かってくる音が聞こえてくる。悲鳴も混じり、ぞろぞろとやって来ている様な気配だ。

一人姿を現わしたその姿に目の前の男は異変を尋ねる。

「大変だッ。役人が来たッそれも大勢――ぐあっ…」

走ってきた男の後ろからザッと足音が聞こえると同時に、男は殴られて倒れた。

「くっ……何！？」

レティシアの髪を掴んでいた手を離し、レティシアを立ち上がらせた男は剣を構えた。

「――見つけたぞッ、お前が親玉だな。悪いがもう手下の者はおらぬぞ？」

という声は聞き覚えがあった。しかし、知っている声はもっと穏やかだったがよく知っている…

はっとしてレティシアは困惑の表情を浮かべて、その瞳を声の主に目を向ける。

「！？」

なっ――…！？

琥珀の様な金の髪――、琥珀の様な金の鋭い瞳――。

整った顔立ちは今、獅子の様に男に牙を向いて威嚇している――。

あ…兄上――！

何故かエルトはエンブレミア王国の兵士達をぞろぞろと率いてここにいるという紛れもない事実に、レティシアは少し困惑しながらも安堵する。

兄上が助けに来たならもう安心だとそう思った。が、しかし――。

「…何ッ、お前――エンブレミアの紋章……ッ。くっくっく、だがどうする？　このお嬢ちゃんがどうなってもいいのか…？　一歩でも動いてみろ――？　何の罪もない女の子を殺されたくなかったらな」

男がそう言って持っていた剣を手の中で持ち替え、レティシアの胸に突き刺そうと言わんばかりに剣先を向けた。

「く、舐めた真似を…ッ……っ」

「では、剣を捨てて貰おうか……」

しばし、鋭い眼で男を睨みつけたエルトは剣を捨てるよう兵に合図して捨てさせた。

「――ぐ……っ、――先にその子を放せ」

兵たちが剣を捨て、自分もゆっくりと捨てようとするのを、レティシアは驚愕しながら見ていたが、レティシアは思い切って片方の自分に巻かれている男の腕を思い切り噛んだ。

男は驚いて腕を離しよろめいた所を、レティシアは前へとジャンプして倒れ込んだ。

――兄上…！　今だ……ッッ！！

そう思うより先かエルトは勿論踏み込んでいた。レティシアは冷たい地面に体を打ち付けられる衝撃を感じながら、その男の結末を確信していた。

一人の兵がもう大丈夫と優しい言葉をかけながら体を起き上がらせてくれた。

「でも――む、無茶をするなぁ…君は」

後ろを振り返ると、既に男には剣先があてがわれ、兵たちがその周りを取り囲んでいた――。男は縄をかけられ、兵士に捕らわれ連れられていく。

「――大丈夫だったか？　君のお陰で隙が出来た。助かった」

そう言ってレティシアの縄をエルトは解いて、口に猿ぐつわにされていた布も取った。

その瞬間。

「兄上～ッッ…！　怖かったぁぁ――」

レティシアは安堵して兄エルトに抱きついて言っていた。

エルトはばっとレティシアを離し肩を掴んでよく見ると、唖然として硬直している様子だ。

「ひっ、ひひひ姫様ッッッッ！！？？」

兵たちが発した一言にはっとしたエルトは、レティシアに初めて見せる表情を浮かべた。

そして次に、パンッ、と響いた音とともに、しんと兵たちも静まり返り静寂が訪れる。

「何故ここにいるッッ！　ミグはどうしたッ、馬鹿者……ッッ！！」

エルトに平手打ちをされた事に、レティシアは愕然としていた。

初めてだったのだ。獅子の様な顔を自分に向けた事も、ぶたれたことも――。

頬がじんじんと痛む。心も――痛む。兵達も誰も何も言わない―

―。

頬に手を触れながら驚愕の視線をエルトに向け、目からついに涙が溢れて来る。

はっとしたのかエルトが少し元の表情に戻り、黙って立ち上がると兵に合図をしてレティシアを連れさせ、牢獄の中のリュシファーも連れ、歩みをダムル二クス王国まで進めた。

馬に乗り、先頭を走らせながらエルトは行く。

レティシアとリュシファーは、荷台にしている一台の馬車の中に乗せられた。

レティシアは目を覚ましたリュシファーに状況を聞かれても、「見つかった…ダムル二クス王国へ向かうそうだ」と言っただけで、俯いて黙っていた。

――――…

「……お前がついていながら賊に窮地を追われるとは、情けないぞ」

「も、申し訳ありません。不意を突かれ――」

「――言い訳はいい。何故妹を連れ戻しに行ったお前が帰って来ない。理由があるならば聞くから今のうちに言っておけ」

ダムル二クス王国クリスタルバード城――。

客間の一室で、レティシアとリュシファーを前に座らせ、目の前に立つエルトの姿がそこにあった。

「あ、兄上ッ…リュシファーはッ――」

レティシアがあまりに冷静沈着な表情を見せるエルトにつっかかるが、リュシファーが手を前に差し出して静止した。

「――姫は少し黙っていてください。姫を守りきれず、失態をしたのは全て私の責任です。厳罰な処分でも何でも覚悟しております」

「！」

リュシファーが言った言葉にレティシアは唖然とする。

口調もそうだったが、“責任”、“厳罰な処分”という言葉が胸に突き刺さる――。

「レティシア…、心配をしていたのだぞ？　父上も母上もな…なのに、事もあろうか山賊の巣窟にいて――ついには人質になり命の危険を冒していたなどと…。ついかっとなって手を上げてしまった事はすまなかったな…だが、だからといって許されることではない。そもそもだ。ノイエル殿が便宜を図ってくれたお陰で盟約の証はなくなった。しかしだな、お前が大人しく言う事を聞いていればエンブレミア王国は約束を果たせた。その責任だけでも重大なのに今回の事まで知ったら父上はお怒りになるぞ。一応まだ黙っているよう伝えてあるが…」

「あ…それは…その――」

エルトが的確な言葉を並べるので、レティシアは俯いた。

「もう良い――お前は城の中を探索でもしていろ…私はリュシファーと話があるのでな。ダムル二クス王国は子供の頃に来たことがあるが覚えてはいないだろう。――少し頭を冷やせ…話は後で聞こう」

「は、……はい」

レティシアはそう言って客間を後にした。

エルトは、ダムルニクス王国の問題のためにも足を運ぶことがあるとは聞いていた。

エルトが冷静沈着といわれる理由も、少しわかった気がしていた。

数日前父エリックは城を訪れてレティシアの状況を説明し二日程滞在し、その折、山賊討伐の話を引き受けたのだそうだ。

偶然にしては出来すぎている。やはりルーセスト大陸に足を運んでしまうこととなってしまったことを後悔した。今連れ戻されても、私はまた城を出なくてはならないというのに…。

そんな事を考えながら、レティシアはふと聴いたことのある歌声に足を止めた。

歌声は中庭園の方から聞こえてくる様だった。

中庭園には水が高層階から極細い一本の滝の様に流れ落ちて、小

さな池に注がれている。周りを木や草で取り囲み、色とりどりの鳥たちもが歌に同調している。

鳥達の視線の先には、一人の男の姿がある。

透き通る様な薄紫色の髪――…

…どこかで会ったことあると思ったら…船の上で会った吟遊詩人か…？

レティシアが中庭園に足を踏み入れた時、ザっと音がなり鳥達が一斉にバタバタバタッと音を立てて飛び去っていき、その吟遊詩人が歌を止める。

はっとして立ち止まったレティシアと吟遊詩人はお互いにゆっくりと近づく。

「――あ…なたは、ひょっとして…どこかでお会いしませんでしたか？」

吟遊詩人は言った。

レティシアは兄エルトに髪の色を戻す様に言われ、戻していた。

レティシアはすぐわかったのだが、吟遊詩人はすぐにわからなかったようだ。

「船の上で会っただろう。名も知らぬまま別れたが」

「ぶ、無事だったんですねっ！　良かった…心配していたのです。し、しかし、何故あなたがここへ…」

レティシアはふっと微笑んで、見つかってしまってエルトにココにつれてこられたことを話した。そして、吟遊詩人の方も侘びを入れながら自分がここの王族であったことを伝えた。

でも、名は二人とも名は口にせず、名乗っていなかった。

「――なるほどね。だから名は名乗らぬ方がよいと言ったのか。変わった吟遊詩人だなと思った」

「ふふ…でも、僕もなんとなく気付いてましたよ。貴族か王族だろうなって。さすがに、エンブレミア王国の王女だとは思いませんでしたが。とにかく、お互いに素性を明かさない方がいいのだろうと思ったんです。でも、どうしてここにおひとりで？」

「――そう。はぁ……私、さっき兄上に叱られて、頭冷やして来いって言われたんだ。確かに私が悪い――。でも、それよりも…一緒に来た教育係でリュシファーって言うんだけど、すっごい魔法を使い、すっごく偉そうなんだけど、なんだかんだで城で自由がなかった私を理解してくれて…多少大目に見てくれたり、皆の前でしか敬語は使わないし、子供扱いするしイライラもするんだけど……だけどっ…私に加担したせいで厳罰な処分が下るかもしれなくて、そんなこと――私思いも…よらなくてっ、どうしたらいいか…わからなくてっ……えと…」

レティシアは、色々と考えが巡って気がつけば泣き出していた。

「――ふふ…何も変わらないね、君は」

王子の言葉にレティシアは耳を疑った。

聞き返したレティシアは、自分のことを昔知っていたみたいに言う王子に怪訝そうな表情を向ける。

そして、そういえば名前を聞いていないことも聞いたが王子は静かに水辺にある石に座ると歌い出した。

“いつか見た絵本を覚えているかい
もう絵本を開く事はなかったかもしれないけれど
僕があげたその絵本　嬉しそうに君は手に取ってずっと眺めていた
遠い遠い昔の記憶　子供の頃の話

美しかった君は　周りから怖れさえも抱かれて
友達の輪に入れて貰えず　ひとりぼっちで
泣いていた――……

僕はその子に声をかけ　歌を紡ぎ　その子は笑ってくれた
笑顔に溢れたその面影を　今でも僕は胸に抱き

僕より君は小さくて　きっと記憶の片隅にも覚えていないだろう
でも　僕は今でも　覚えている

久しぶりに会った君は　美しいまま　また泣いていた
でもその理由はきっと　僕の想いの終わりを告げる
その僕の想いは　絵本の人魚の物語の様に
海に泡となって消えるのか

今一度思い出してくれないか
泣く君の隣で僕は歌おう　笑ってくれるまで”

歌い終わりゆっくりと立ち上がると王子は、真っ直ぐにレティシアを見て言った。
「――僕はリーフ。君が婚約する筈だった相手というのは、僕のこと」
レティシアは驚愕した――。
ダムルニクスのリーフ王子だとは思いもよらなかった。
驚愕したまま動けないレティシアに、更にリーフは言った。
「――その…教育係のこと、レティシア王女は好いていらっしゃるのですね」
「!?」
レティシアははっとして何か言おうとするが、言葉が何も出てこなかったのであった。

【第四章】†ｅｐ．３　一難去ってまた一難…！？†（後書き）

はぁ。

ついにレティシアに新しい感情がやって来るのでしょうか。

ミグたちは何処に？

兄エルトが珍しくレティシアにも手厳しい一面を見せ、ショックを受けていますね。城と外では話が違うのでしょうが、レティシアは少し可愛そうといえば可愛そうですね。ではまた。

【第四章】†ｅｐ．４　本心†

レティシアは逃げる様に中庭園を去っていた――。
走って。走って。エンブレミア王国の屋上にいつも向かう様に、ひたすら上を目指して階段を駆け上がる。
「うわぁっ！」
悲鳴と共に階段を踏み外して前にレティシアは転んだ。擦り剥いた足と手を見て、リュシファーがいつも治してくれていたことを思い出す。しかしすぐに頭を横に振った。
――なんであいつの事を思い出しちゃうんだッ……どうでも――良いんだってばっ…
レティシアはゆっくりと立ち上がると、膝から血が出ているのも気にせずにゆっくりと段を上がって行った。この城はマールシェスタ城の様にいちいち途中の階を経由せずに真っ直ぐ階段を上がれば屋上へ抜けられた。
風が吹き荒れる屋上から見渡したのは、全て緑に囲まれている様で、湖や丘、草原など全てまるで絵のでも見ているような風景だった。新緑の宝石と言われるのも頷ける。――そのことを兄エルトから聞いて何となく想像はしていたが、想像以上にそれは綺麗で美しかった。
“その教育係のこと、レティシア王女は好いていらっしゃるのですね”
名前…なんで知ってた？　…あ、でもエンブレミアには王女は私一人だった。そうだ。
その後にリーフはこう言った。
“気付こうとしなければ気付かない――そんな想いもあるのですよ。
檻に閉じ込められた鳥は、外を知らない。

あなたはきっと恋を知らなかったが、――きっと初めて知ろうとしているんですよ…
その者にね――…”
『違うッッ』と言って思わず逃げて来たのはいいが、人の心を見透かす様なあの穏やかな目。どこかで見た事あるんだ。ていうか、そうだ。リーフは幼い時に私を知っていると言っていた。確かにここに来た事があるらしいが、覚えていない。

吟遊詩人に貰ったあの絵本――。

単純に話が好きで大事にしていたのかと、思っていた。――でも、違った。思い出した。
歌にあるとおり、私はダムルニクス王国に同じ様に集まった王族貴族の子供達と打ち解けられずにひとりで、庭に座っていた。誰も自分のことを気にかけてくれる者もいなかった。
どうして、ミグがその日一緒に連れてこられなかったんだろうって不思議に思ってた。
来ていたら一緒に遊べたのにって…。でも、誰かが話しかけてきてくれて絵本を読んでくれた。そして、その絵本の世界みたいな歌を歌ってくれた。その絵本は後から吟遊詩人が城にやって来てくれたけど、吟遊詩人の国でもあるダムルニクス王国から来たのは明確だ。
――その絵本くれた吟遊詩人の後ろに小さな吟遊詩人の服を着た子も立っていた。
話はしなかったけど、あれ、リーフだったのかな…？
リーフに読んで貰った本だから、嬉しくて微笑んでた。
そんなことすっかり忘れてた。そっかぁ、リーフだったんだ。

そして突然浮かぶリュシファーの言葉――。
“お前が王女じゃなかったら知らんが”

“俺はお前のこと可愛いヤツだと思うが？”
そこまで考えたとき、はっとして頭を振り乱しながら自分の脳裏に言い訳した。
――違うっ、今のはちょっと血迷っただけで、違うんだ。絶対に…違う――…
それに、どちらにしても教育係と恋に落ちるなんて許される筈ない――。
初恋は儚いものって誰かが言っていた。
儚くも胸に抱いていたその想いもいずれ消える――って。
そう、この想いは抱くだけ無駄だ。馬鹿みたい…。
レティシアはそう結論を出して、ただ流れていく雲を見ていた。
――――……

「お呼びですか。兄上…」
レティシアはノックをして客間を開けた。
「あぁ、リュシファーから話は聞いた。信じ難いがお前にはやらねばならないことが山ほどあるそうだな…どうしたものかと思っていたが、父上にどう話すと言われても言う訳にはいかないだろう。そこでだ――」
「…そ、そこで？」
「――父上には内緒にしておこう。ただし、終わったらすぐに帰ってくること。それから、無事で帰って来い…それが兄としてしてやれることだ」
エルトが言ったその一言に、レティシアは兄エルトに抱きついて感謝する。
「おいおい、仕方ないな。全くお前はさっきのことは反省してるのか？　ほんと、お前は城のお騒がせ者で頭が痛い。あ…あと、ミグも探すんだぞ。その任務も言い渡す。一緒につれて帰って来い。あ…リュシファーも苦労をかける。この一件のようなことが今後ない様にしっかり守ってやってくれ」

そう言ってエルトはレティシアの頭を撫でながら、リュシファーへ目線を送った。
きびすを返してリュシファーは頷くと、レティシアの足を見る。
「ん？　レティシア様、足は一体どうされたのですか？」
「あ、あぁさっきちょっと階段を上がる時に擦り剥いてしまって…」
レティシアが苦笑して手も見せると、リュシファーはハァ…とため息を吐いた。
「――また手間をかけさせてくれますねぇ、レティシア様は」
と言って、聖の魔法をかけてすぐに傷を治し、微笑んだ。
「はは…すまないなリュシファー。じゃ、悪いがちょっとノイエル殿へ挨拶に行って来る」
「いってらっしゃーい」
レティシアがそう言うと、エルトは大きなため息を吐いて言った。
「――お前も行くんだぞ、リュシファーに言ったんだ。今のは」
「えっ、わ、私も…？」
そういうわけでやって来た大広間。
ダムルニクス国王ノイエルの元へエルトに連れられてやって来たレティシア。
エルトの後ろにこそこそと恥ずかしそうに隠れながら向かう。
ノイエルはそんなレティシアを見て、くすっと微笑んだ。
「――よくいらっしゃいましたね。レティシア王女…。隠れなくても怒ってはいませんよ」
ノイエルは穏やかにレティシアにそう言うと、玉座から立ち上がって、レティシアの元へと歩みを進めてきた。微笑んでレティシアを見つめるその顔はとても端整で男性とは思えない面持ちだ。おまけに父エリックと違って穏やかな物腰に、レティシアは安堵して盟約の証の件の侘びを入れた。
「いえ、お気になさらないでください。時が来るまで伝えないこととしていた私たちこそ詫びねばなりませんと、エリック殿にもお話しました」

「え……ノイエル様……」
レティシアはエルトの顔を不思議そうに見た。怒られるかと思っていたら、何と穏やかな方なのだと不思議だったのだ。エルトはレティシアに微笑むと、よかったなと頭を撫でた。
「誠にノイエル殿にはなんと感謝の言葉も思いつきません」
「いえいえ、まぁおかけください。お茶を淹れさせましょう」
そう言って手を叩くと、侍女にひそひそと耳打ちして茶を頼んだ後ノイエルはエルトから事情を聞いた。
「なんと…それは、数奇な運命に立たされましたね…しかし、エリック殿に言えばおそらく旅立ちを阻止されるでしょうねぇ。…では、私も内緒ごとに加担いたしましょう…ふふっ」
「へっ??」
「レティ、ははっ…そう驚くことはないぞ。ノイエル殿はこういうご理解のあるお方なんだと、前にも言っただろう?」
レティシアはノイエルの心の広さに、これでもかってくらいいい意味で精神ダメージを受けた。よくコレで王様やってるなと正直思ったことは内緒である。
「あ…そうそう。ひとつだけお願いを訊いて貰えますか?」
話している間に侍女が運んできたお茶に、ノイエルは砂糖を4杯にミルクをたっぷり入れて掻き混ぜている。甘党…?　とどうでもいいことにレティシアは気が取られていた。
エルトに声をかけられてからレティシアは、はっとして頷いて返事をした。
「――では実は今夜ちょっとした舞踏会がありまして、ドレスは用意させますから参加を」
「えっ!?　ぶ、舞踏会って…私そのっ――」
動揺しているレティシアにエルトが苦笑して『レティシアが踊ったことがない』とノイエルに教えたが、くすっと笑ってノイエルが『殿方に任せていれば大丈夫』と言った。
レティシアは先に戻っている様に兄エルトに言われたので、廊下

を歩きながらため息を吐いた。
——ノイエル殿、穏やかそうな顔して主君のオーラは皆無だと思っていたが、気がつけば承諾させられている。美しい罠にかかって周りを取り囲まれた気分だ。
能ある鷹は爪を隠す——穏やかそうに見えて頭は切れる方と兄上も言っていた。
侮れぬ方だ…よりによって舞踏会……。そりゃたいした事じゃないけど…。
そう思って客間のドアに手をかけてドアを開けた。
リュシファーがいない——……と思ったらベッドで寝ている。
ため息を吐き、忍び足でリュシファーが寝ている側のベッドの傍にしゃがみ込もうとする。
しゃがみ込むと同時にリュシファーは口を開いた。
「——どうした…俺の寝てる横でため息なんか吐いて」
「わっ！　お、起きてたのか。…なんだ、驚かすなッ…何でもない。別に…」
慌ててレティシアはそっぽを向く。
くすっと微笑を浮かべてリュシファーは起き上がった。
「——それより…レティ、…今日は本当にすまなかった——俺がついていながら…」
「とっ、突然何を言うかと思えば…仕方ないじゃないか。済んだことだ——気にするな」
「あ…いや、だけど、何——ともないか？　その…無事だったか？」
リュシファーは起き上がって心配そうな表情を浮かべてレティシアの顔を覗き込む様に見ていた。レティシアは少し顔を曇らせて口を開く。
「…ぶ……無事と言えば無事だ。……無事じゃないと言えば無事じゃない…兄上たちが来る前に少し一悶着あったからな。でも大した事じゃないさ……別に」
レティシアはそう言って微笑を作った。

「――お、おいっそれってまさか……」
レティシアは少し慌ててそう言ったリュシファーに首を振って、エルトが来る前のことをリュシファーに話した。
「まぁそれでも、少しだけ怖かったけど終わり良ければ全てよしっ。――何ともない…」
リュシファーは少し安堵の色もその顔に浮かべて息を吐いた。
「…それでも詫びさせてくれ。本当にすまない…俺はなんて情けないと思っている…」
「お、おいっ。な、何をそんなに気にしているんだ。そう落ち込む事もあるまい。お前が起きたところで縛られていては何も出来なかったんだ。兄上が来たという幸運のお陰で助かったんだ。よしとしようじゃないか。らしくないぞぉ…お前でも落ち込む事があるんだなぁ」
その言葉にリュシファーははっとした様にレティシアを見て、一度俯いて顔を上げると言った。
「あ、当たり前だっ――！」
突然怒鳴られたのでレティシアはびくっとしてリュシファーを見る。
「――あ、いや…すまん。つい声を荒げてしまった。とにかく俺だって本当不甲斐ないと落ち込むことくらいある……」
落胆した様子で息を吐いたリュシファーがベッドにうつ伏せたので、少し心配でレティシアは隣に一緒に横になった。
「――ほら、気にするな…お姉さんがよしよししてあげようなぁ～元気だせ…」
リュシファーはよしよしと頭を撫でられているのを不快だったのか、冷めた目線と棒読みで「ありがとなー…」と言った。慰められることはあってもいつもと逆でレティシアが慰めている構図は、第三者の目線から見てもなんだか少し可笑しくて、レティシアはふふっと微笑んだ。
少ししてから、勝ち誇った様子のレティシアに静かにリュシファ

ーは口を開いた。
「――俺さ…初めてお前に会った時、薔薇みたいに美しく綺麗だと思った。薔薇の棘までちゃんと持っていたがな。はは…しかし、それがいつしか放っておけない存在になって、俺はお前が王女じゃなかったら…とか思わされる事が時々あった。でもまぁ、お前は俺のこと妙に敵視してたからなるべく考えぬようにしていたが、こういうことがあると駄目だな…」
レティシアは耳を疑った――。きょとんとしてリュシファーを見る。
リュシファーは苦笑して少し起き上がって、そして唐突にそれは言われた。
「――悪いが、嫌だったら言っていいからじっとしててくれないか…」
リュシファーはレティシアに顔に近づいて来た。手の指が顎にそっと触れた。
それはゆっくりと上を向かせていき、リュシファーの唇がゆっくりと近づいて来る今のこの状況下にレティシアは困惑していた。それでも抵抗することなど容易な事だったが、レティシアは抵抗どころか力が抜けて動けずただリュシファーを目を見開いて見ていた。しかし、唇が触れると思った瞬間、リュシファーの唇ではなく何故か人差し指が唇に当てられた。
はっとして唖然としていると、リュシファーは少し複雑そうな表情を浮かべて一度息を呑んだ様に言った。
「――お、お前…抵抗はしなくていいのか?」
その表情はいつものからかう様な意地悪いものではなかった。からかわれたと文句を言おうとしていたのに、出来なくなったレティシアはただ困惑の表情を浮かべる。
リュシファーは意外そうな顔をしていたが、ため息を吐いてこう言った。
「…その…な、何ていったらいいか。お前さ――素直じゃないだろ

う？　だから少し試させて貰おうかと思ったんだが…少し予想外だった。よ、要するに、お前がもし俺のことが嫌いなら拒む――、そうでなければ受け入れる――。そして、さっき…お前は――――…」

――え……っ

……

そして――夜。

舞踏会の時間がやって来て、レティシアはドレスに着替えて大広間にいた。

髪は紫色、瞳はピンクに変装をして出席をした。薄いピンクに白いレースのついたドレスはレティシアに良く似合っている。髪も舞踏会用に整えて貰い、ドレスアップしていた。

「僕に任せていれば大丈夫ですから…」

最初の一曲をリーフと踊るために呼ばれていたが、舞踏会が初めてのレティシアは大広間の中心で緊張していた。そんなレティシアにリーフが小声で言った言葉であった。

緊張しながらも曲が始まり、皆がレティシアとリーフを見ている。レティシアは何度かリーフの足を踏みながらも、何とか要領を掴み始めたところだった。

曲が終わり、拍手が一斉になった。

しかしレティシアは俯きながらエルトとリュシファたちのいる場へと戻った。

「レティ、まぁまぁ初めてにしては上出来じゃないか？　ははは」

それでも兄エルトに少し褒められたのは嬉しかった。

次の曲が始まると、他に呼ばれた貴族たちがたくさんの輪を作り踊り出す。

「リュシファー、お前も踊れるか？」

「あ…ええ、まぁ一応」

「じゃ、レティと踊ってやってくれ。多少足は踏まれるかもしれな

いが――」
エルトが少し意地悪そうに微笑んで言った。
「あ、兄上…」
「ははは、冗談だ。せっかくなんだから少し慣れるといい」
そう言ってリュシファーとレティシアを前に押して促した。
端の方で立って向かい合い、ちらっとリュシファーの顔を見ると、困った様に微笑んで手を差し出したのでレティシアは手を取り踊り出す。
先程慣れたのか上手くステップが踏める。しかも、リュシファーは一応と言いながらダンスが上手い。失敗しそうなところも上手くカバーしてくれる。
あれ…さっきより、踊りやすい……。
曲が終わり少し疲れたレティシアはメイドに飲み物を受け取って、バルコニーに行くとエルトに告げて向かうと、リュシファーが後ろからついて来た。
格子に手を乗せながら、はぁ…とため息を吐いてレティシアはグラスに口をつける。
その瞬間、とっさに口を押さえる。想像と違う味に戸惑った。
「ど、どうした…ッ――ってこのグラス…お、お前子供はこんなの飲んじゃ駄目だっ」
「こ、子供じゃな――――あ、ありゃ？　なんかくらくらするぅ～」
そう言ってレティシアは何故かふらふらとして倒れそうになったのを、リュシファーが慌てて支えてバルコニーにあるソファに座らせてくれた。
そして、水を取りに行くからこのまま座っててと言っていなくなる。
顔がぽかぽかとしてなんか頭が浮いている様に感じて何か心地がいい様な変な感じだとレティシアは思っていた――。
――――…

――リュシファーが水を持って来て飲ませたが、レティシアは相変わらずくらくらするらしくリュシファーはレティシアの酒の弱さを知った。

『ここに座れ』だとか『あはは』だとか『あーもぉらめらー』とか言いながら、レティシアは顔を赤くしながらご機嫌な様子である。

はぁ…完全に酔ったな。しかも超厄介に絡んで来る…。大体、たった一口だぞ…

リュシファーはそう思いため息を吐くと、レティシアは何故か嬉しそうに微笑んでいる。

次の瞬間だった。

「…りゅしふぁーいつも面倒見てくれてありがとー」

一瞬リュシファーは耳を疑ったが、確かに言われたその一言に唖然とした。

そして、事もあろうか腕をリュシファーに回してレティシアは抱きついて来た。

――こ、これはさすがに驚いた……。どうやら酒飲むとすっげー素直な様だな…。

いつも素直なら手がかからなくていいのだがとも思っていた。

…いつも素直なら――…

「――こら、酒飲んだ後にそういう事言うと後で大体後悔するんだ」

「珍しくおれい言ったんだから感謝しろおっ、はぁーなんか気持ち悪い……」

リュシファーはレティシアをやれやれと介抱しながら、ふと客間で話した自分とレティシアの会話を思い出す。

“さっきお前は――抵抗しなかった。ということは嫌いではないということの様だな。”

――ち、違うっ。ただ驚いて動けなかっただけだっ…

“まぁ、どちらにしても俺はお前が王女で良かった。どうこうしよ

うと思わないからなぁ。はは。不相応だろう。教育係と王女なんて。とにかくそういうことだ”

――な、何考えてるんだっ、私は少し疲れたっ。少し休むからそこどいてくれ。

…今なら――――？

「……レティ」

「ん～なあに？」

「もし――――俺が、お前のことを好きだって言ったら――どうする？」

一瞬、レティシアはきょとんとした。

そのあと俯いて言った。

「もしそうなら嬉しいかな……。よくわかんないんだけど、いつのまにか好きになってて。でも、りゅしふぁーは言ったもん…おうじょじゃ相手にしてくれないって――」

「！」

「――不相応だって、言ってた……。きっとね、好きでも無理なの。だから……あきらめ――――」

リュシファーはそう静かに哀しそうに言うレティシアの言葉を思わず止めていた――。

……。

――それが言葉によるものではなかった事を、レティシアは覚えていないだろう。

レティシアは大人しくしていたが、気がつけば寝ていたのであった。

――――…

そして明朝――。

「――レティ、いつまで寝てる。起きろ」

兄エルトの声とともに、目の前にエルトの呆れ果てた顔が見えゆっくりと起き上がる。

途端に頭痛がして頭を抑えて顔をしかめた。

「…頭痛むのか？　未成年でも少しくらい酒を飲む事はあるが、レティそれは2日酔いというヤツだ。リュシファーによるとたった一口。弱いな、さすがに…はは。朝食だ、行こう」

「うぅ……はぁ～い」

少しだけ簡易魔法で身支度を整えると、レティシアは気だるい身体を兄エルトに支えられながら大広間へと足を運んだ。

ノイエルが苦笑しながらやって来た二人を見ている。

「レティシア王女、ふふっ…どうやら二日酔い…でしょうか？　ぷっ…くすくすくす」

レティシアが辛そうなのでだんだん可笑しくなって来たノイエルは、吹き出すように笑い始めて詫びたが、あの酒はダムルニクス王国で一番弱く軽いアルコール濃度のものだったとそう説明を加え、リュシファーやエルトは苦笑していた。

席には他には誰もいない。エンブレミア王国では日曜だけ何もなくとも大広間で食卓を囲うが、そういうわけではないらしくリーフ王子の姿も見えず、ここにいるのはノイエルだけである。

兄エルトとノイエルが話をする中で“新緑の洞窟”へは王家の者しか入れないので、リーフとともに行くといいという話を聞いた。しかし、二日酔いでは困りましたねとちらっとノイエルがぎこちなく微笑んでレティシアを見た。

「――ご心配なく、ノイエル殿…」

とリュシファーが口を開く。

「二日酔いの薬を後で調合して1時間ほどで治る様に致しますから、時間通り10時に出発ということでよろしいかと……」

「ほぉ、そなたは医学も心得ているとか聞き及んでおりました。いえエリック殿が優秀なと仰って説明しておられたのですよ。それならご心配ありませんね」

レティシアははぁ…とため息を吐くと、少しして朝食を半分くらい残して朝食を終えた。
客間へ3人で戻っている際、そういえば酒を飲んでからどうしたのかを思い返していた。
しかし、全く覚えていない――。
「兄上、私酒を飲んでからの記憶が全くないんだが、すぐ寝ちゃったのかな…？」
それを聞いたリュシファーがため息を吐いていた。エルトがそれを見て苦笑して言う。
「ははは、何も覚えていないか。俺は知らないが『座れ』だとか『あははは』だとか上機嫌でリュシファーに手間を焼かせていたらしいぞ。…お前は酒を飲まぬ方が良いらしいな」
全然…覚えてない。酒というのは飲まないようにしよう。
エルトが酒は飲んでも飲まれるなという言葉を言いながら、大して飲んでないというのに…と付け加え、リュシファーと二人で笑っていた。
エルトは今日、エンブレミア王国へと帰還するらしいのでエルトは支度をしている。
その中で、レティシアはベッドになだれ込んでリュシファーの作る二日酔いの薬を待っていた。
支度を終えたエルトがレティシアに、包装紙で包まれた小さな箱を手渡した。
「さて、私はこれで失礼するが、二人とも気をつけてな――ミグにもよろしく頼む。レティ、無事を祈っている。ではまたな――」
「え、兄上これ――」
パタン…
そう言った時には既に客間のドアは音を立てて閉じていた。
「…はは、行ってしまわれたな…」
レティシアは頷いて包みをゆっくりと開けた。
そこに現れたのは赤いルビーで出来たピアスだった。涙の形にカ

ッティングされたそのピアスの入っていた箱の内側に、何かメッセージが書かれた紙が入っている。

『兄から大事な妹へ　祝いの言葉がまだだった。誕生日おめでとう。少しは女の子らしく振舞うよう願いを込めて贈り物をしよう。無事を祈る。　エルトより』

「兄…上……ずるい…こんなの、泣いちゃうじゃないか……っ」

レティシアは少しの間、涙が溢れて止まらなかった。

何も言わずにちゃんと誕生日祝いの贈り物を用意していたなんて、思ってもみなかったのだった。そして、鏡をリュシファーに持って来て貰うとピアスを耳につけた。

それは片方だけ。

「――ん？　両方しないのか？」

「うん。なくすと困るから片方だけ…城へ帰ってからもう片方はつける」

レティシアは微笑んでそう言った。

１０時になり、リーフが部屋に来た頃にはすっかりと二日酔いも治っていた。

新緑の洞窟へ向かっている最中に、精霊の女神レティシアが話しかけて来た。

精霊の女神レティシアは、たった今目を覚ましたという。

何故――。と聞くと船が難破して乗客を救うために力を使ったため、眠っていたんだとか。

それと、その時に、海の底から邪悪な気を感じて気がそれた拍子に皆を助けたはいいが、散り散りに何処かの大陸へと送ってしまったのだとか。

ちなみに、レティシア達には何もしなかったというので私は怒って文句を言った。

――心配ありません。あなたたちはお互いに魔力が高く、うまくやると思ったのです。

とあっけらかんと答えた。

ふざけるなと私は思った。

精霊の女神レティシアはさらに、それに――と言いかけたが続きを濁してとにかく助かったのだからと私の進む先を促した。

精霊の女神レティシアは、石を集めろとしか言わない。

集めたらどうするのかもその時にとしか言わない。

導いてくれているような導いていないような微妙な女神だと思ったら、怒って出てきてしまいには泣いたので慰めた。女神の癖に時々手がかかるとレティシアは思っていた。

新緑の洞窟までの道のりはあと数キロだ。

エンブレミア王国と違い周りは美しい木々や草原などが生い茂り、あたりは見渡せばレティシア達が通ってきた細い半島の山岳地帯も見え、空気が澄んで綺麗だった。

数キロ先に湖があり、そこの近くに洞窟があるという。

「よしっ、じゃあ私が先頭～っ」

レティシアはそう言って少し遅れをとった二人のもとへと走っていったのだった。

つづく。

【第四章】†ｅｐ．４　本心†（後書き）

時間かかってすみません。
やっとｕｐしましたぁ。
ちょっと本編から抜けたような話ですが…。ちょっと必要だったのでｗ
ではでは…。

【第四章】†ｅｐ．５　待ち続けていた者†（前書き）

今回少し長いかもしれません。誤字等あるかもしれませんが、報告していただけると幸いです。校正をそのうち加えます。すみません。
そして第四章はまだ続きます。

【第四章】†ｅｐ．５　待ち続けていた者†

「え？　ここが……新緑の洞窟？？」
「はい。洞窟というより森なんです。しかし森というよりは木々が洞窟のように屋根を作り、続いているんです」
しかし、レティシアが見る限り湖の側にただ木が続いているだけで、木が洞窟のようになっている場所などどこにも見当たらない。
「リーフ……そんな場所ないぞ？」
レティシアは怪訝そうに言った。
「ええ、ですから王家の者しか入れないのです。父上からハープを預かって来ましたので、その音色を奏でれば森が開きます」
リーフはそう言うと、ハープで何やら物悲しげでせつない旋律を奏でた。
奏でていると、鳥が集まって来てリーフの肩に止まる。そして、ピー……と甲高い声で鳴いた。
しんと静まる中、辺りに白い霧が浮かんで来た。それはどんどん視界を遮っていく。
「わ、ちょ……っ」
ついに何も見えなくなりレティシアは焦って後ずさっていると、途中で音色が止む。
「レティシア王女っ、ご心配なさらずーっ。……霧は少ししたらおさまりますっ」
リーフの声がして安堵して待っていると、霧はどんどんと薄くなっていき、徐々に視界がはっきりとして来て霧は晴れていった。目の前には確かに洞窟のように、木の枝が絡み合う入り口の様な物が出現していた。しかし人が屈んでなんとか入れる程入り口は狭い。
リーフが微笑んでそこに進むので続いて入っていくと、どんどん入り口は狭くなっていった。
「……リ、リーフ――、何かどんどん狭くなっていってないかぁ？」

「ふふ、もうすぐ広くなりますよ。ここらへんが一番狭いんですよ」
「……とはいっても狭いな。四つんばいで通らなければならない程狭いとは……」
三人はそうしてついに狭い木の枝の細い洞窟の道をやっと潜り抜けた。
手も膝も服も土で汚れていた。パンパンと土埃を払うとレティシアは息を吐いた。
見渡した先には大きな樹木が一本立っているのが見える。
「あの、大きな木のところまで行きましょう。ここからは広い道ですから安心してください」
「あぁ……あのリーフ。魔物はココにはいないのか？」
「百年以上前に封印されたと云われていますが、最近ここに調査に訪れた城の研究室の者が巨大な植物の魔物を見たと言って逃げ帰って来た様ですので、少し気をつけた方がいいかもしれません」
リーフは微笑んであっけらかんと言ったので、間の抜けた空気を作る。
「き、気をつけた方がいいかもしれませんじゃないだろうっ。怖くないのかっ？」
少し考えてリーフはさらに微笑んで言った。
「大丈夫ですよ。僕は歌を歌うこと位ですが、少しはお役に立てると思いますし」
歌を歌うのが何の役に立つのだと思い、レティシアは呆れた顔をしてため息を吐いた。
そんなリーフにレティシアは一本道だし後ろに下がっている様に言った。
リュシファーが先程からあまり口を開かないので、レティシアは気になってリュシファーの目の前で立ち止まった。
「わ、何だ突然立ち止まって」
「――お前、なんか今日変だぞ？　何かあったのか？」
レティシアの質問にリュシファーはため息を吐いて、色々あるん

だとだけ伝えて先を歩いていった。
レティシアは首を傾げながら、リュシファーの後ろに続いた。
そのまま進んでいくと、大きな木がもうすぐ目の前に見えて来て、レティシアは歓喜してリュシファーの隣に来て話しかけたが、リュシファーは立ち止まるとため息を吐く。
「お前さ……随分浮かれてるが、俺は手出ししないということをちゃんとわかっているのか？　植物の魔物は何に弱いか当ててみろ」
「え……えーと、雷？」
「まぁ悪くない選択ではあるが、水以外の他の魔法はどれも似た様なもの。だが、ひとつだけよく効くものがある……」
そう言ってリュシファーが歩みを進め出したのでレティシアも歩みを進めていたが、はっとして立ち止まる。
リュシファーは常日頃から敵の弱点となる魔法を見抜き、最善の方法で倒すように言っていた。今回のそれは、未だにまだ挑戦したことのない火の魔法。炎――の法術だった。
レティシアは動揺しながらも息を吸い、そして吐いて心を落ち着けていた。
「――レティシア王女、どうしたのですか？」
後ろから来たリーフに話しかけられてびくっとしてレティシアは二歩程後ずさった。
「お、驚かすな！！」
寿命が縮まる程驚いて、心臓が激しく鼓動していた。詫びたリーフに着いていくと、大きな樹木の前についに到着し、――そこにレティシアは立っていた。
近くで見ると一体何千年立っていたのだろうと思う程に太い幹に、広い天井の様な張り巡らされた枝たちがその枝に葉をつけ、緑に彩っている。その幹の根元には穴があり、下へと続いている様だ。
「す――ごいなぁ……こんな木みたことない」
「――『大地の精霊樹』。この木には大地の精霊が眠っているんだと云われていますよ」

確かに、ルーセスト大陸は大地の精霊に守られていると聞いたことがある。

その大地の精霊の加護を受け、大地は豊かに地に根を張り、この自然を産んでいるのだろうか。昔はエンブレミア王国近隣も荒野ではなく木々が溢れていたという。

続く戦争により草原と化してしまったが、ダムルニクス王国は自然を復活させるために努力を惜しまなかった。従ってダムルニクス王国近隣には美しく深緑の宝石といわれる自然を取り戻したのであろう。もしかしたら大地の精霊の導きによりそうさせられたのかもしれないとレティシアは何となく思っていた。

その時だった――。

「――わぁっ！！」

リーフの声がして後ろを振り返ると、植物のつるがリーフの足元に絡み、リーフを逆さ吊りにしていた。そのつるの先を辿ると、もう一本巨大な木がつるをうねうねと動かしながら立っていた。

「！！」

その巨大な植物の魔物って、これ！？

で、でかいっ！

レティシアはリュシファーに声を荒げて言った。

「リュシファー！　剣をッ！！」

「……駄目」

緊迫した空気だというのに妙に余裕なこの男は、ちっとも動揺せずに冷めた目で言った。

「あ……やっぱり？」

少し間の抜けた空気を感じつつ、レティシアは苦笑いして前を向いた。

――仕方ない。こういう時だというのに全く……、じゃ魔法か――。

巨大な木の魔物はその場に重心をかけたかと思うと、一気に地を蹴り高く飛び上がった。

レティシアは驚きながらもごくっと息を呑むと、落下点を目を光らせて測っていた。

リュシファーが息を吐いて身を浮かせて後退した。

レティシアは5歩後退すると、計算通りの位置に巨大な木の魔物はついにズシーンという重低音がなり響き、地を揺らした。

「わぁ……っゆ、揺れるっ……、ちょ、ちょっとっ！　リーフを離せっ！」

レティシアはそう言ってフリシールで身を浮かせると、とりあえず稲妻を呼んだ。

リーフを捕まえているつるに向かって雷を放ったのだが、あと一歩の所で避けられてしまう。

こ、こいつ……でかいくせに速い……！

そうしているとつるがレティシアにひゅんと鞭打つように飛んで来て、避け切れなかった腕を強く打った。

「……っ痛……！　こ…っのーーッッ！」

鞭打たれた部分から血が滲んでいたが、レティシアは短剣を太ももからスッと出すと、つるを避けながらリーフを巻いているつるに勢い良く刺した。

怯んだ植物のつるは一瞬緩み、リーフを落ちそうになったのをリュシファーがうまくキャッチした。

それをちらっと見る隙もなく、つるはレティシアに飛んで来る。

パシッと腕につるが絡み、先程の傷に食い込んでいる。

痛ッッ、駄目……ッ、痛痛痛ッッ！　死ぬッ、く……ッ。や、やば……。

とレティシアは痛そうに慌てて食い込んだつるを外そうとするが、余計につるは食い込んでいく様だ。

「れ、レティ……！　馬鹿ッ！」
リュシファーがリーフを離れた地に降ろそうと急いで向かうが、その間にも別のつるがレティシアの背を打つ。
「ぁッ…！　痛……ーー……ッ！　はぁ、はぁ……こ……この……ッ」
レティシアは悲鳴をあげてしゃがみ込んだ。
しかしそれでも息を切らしながらきっと魔物を睨みつけると、なんとか立ち上がって言った。

「……ッ……ちょ……調子に、乗るなぁあッッ！」

更につるが迫る中で、レティシアは静かに目を閉じた――。
自分の中でまだ眠っている炎のかけらの微かな熱を感じる――。
自分の奥底で何重にも鍵をかけて閉じ込めておいた力――。これだけは、ずっと怖れを抱きながら、ただ逃げて来た。
でも――もう私は――！　逃げないと決めた……！！
――――。

リュシファーがリーフを地に降ろし振り返った時には、レティシアの周りの地に円を描く様に燃える様な赤とオレンジ色が混合した光がゴオッッと轟音をたてて勢い良く真っ直ぐに湧き上がっていた。炎を巻き込んだ突風が地から吹き、二匹の龍の様にそれはとぐろを巻く様にぐるぐると魔物に向かって威嚇する様に静止する。その双龍の威嚇の前に、魔物のつるは動きを止め、互いに睨み合い沈黙している様に見える。
「――なッ……！？」
リュシファーが驚愕してそう呟くより早く、レティシアが人差し指を目標を差し、その命に応える様に炎を纏ったその双龍が巨大な木の魔物に襲いかかり、一瞬にして魔物全体に火が回り炎上していく。

突き出した人差し指を下ろしたレティシアは、その場から飛び上がるとくるっと宙を一回転して、高見から燃え苦しむ魔物を見下すように見下ろした。その後にこちらに向き直ったレティシアは、ゆっくりとこちらへ飛んで来る。

一瞬だが、リュシファーはぞくっとした――。

レティシアは不敵な笑みをその口元に携え、そしてその後ろではまだ燃えさかる火炎が全てを燃やし尽くそうとその業火を讃え、逆光のせいか少し恐ろしく感じたのだった。

――後ろの魔物の結末は、最後まで見なくてもわかっていた。

リュシファーはレティシアが怖れていた炎とはこの事だったのかと、幼い時に恐怖を抱いた理由を少し納得した。しかし、とはいえあんなに怖れていた筈だったのに見事な炎の魔法を使い、その後の怖れを全く感じない妙な落ち着き具合と、不敵なその笑み――。変だ…。

しかも、魔力を鍛えている最中だというのに、その威力は半端ない。

他の魔法はここまでの威力だったか…？　と、思考していた。

その時だった。

「――おい、二人ともどうした？」

レティシアの言葉にリュシファーははっとして、ぎこちなく微笑んだ。

怪訝そうな表情で顔を覗きこむレティシアの顔からは、不敵な笑みも消えいつも通りの表情が取り戻されていた。

「――あ、あぁレティ。よくやったな――それより怪我見せてみろ。血が出てるじゃないか。他にはどっか怪我はっ？」

リュシファーはくるくるとレティシアを回して色々診て背中の傷を見つける。

しかも、服がさっくり切れて血が付着している。ため息を吐いた。

「あ～あ、お前…背中も傷があるッ。じっとしてろ」

小言を言いながらレティシアを地面に座らせると、聖の魔法で傷

を修復するために聖の気を集めた。傷を治し終わったのをリーフが見て言った。

「えと――そ、そろそろ外はもう夕方になりますから……今夜はここら辺に結界を張って休んでいきましょう。ここから先は、木の穴の中が入り口なんですが、地下洞窟に繋がっていて少し足場が悪いですから、明日の朝に向かいましょう」

リーフのその言葉に頷いて結界を張りコテージを出したリュシファーは、レティシアと一緒に木々を拾い集めに向かう。リーフはもし魔物がいたら危険なので、結界の中にいるように言ったのだった。木の枝がたくさん落ちていそうな場所を探し、レティシアとリュシファーは歩みを進めていた。

――昨日は、大変だったなぁ…。覚えてないみたいだけど、本心を知っては少し接しずらいというかなんというか…。おまけについ拒絶の言葉をその口で紡がれるのが怖くて――酒で何もわかっていない無垢なコイツに、俺は――…あー消えろ消えろ、何を考えているんだ俺はっ……。

……良くも考えてみれば手で口を塞げば良かっただけだ――。

――まぁ、覚えていないのが幸い――か……。しかし……

「リュシファー、ねぇ。ねーってばっ」

思考を迷走させていたリュシファーは、顔を覗き込んで来たレティシアからばっと身を後退させて驚いた。

「――わッ、おッ…脅かすなッ」

「――な、なんか今日のリュシファーは変だぞ？　――朝からだ。何か文句でもあるなら言えばいいだろう？」

レティシアは腰に手を当て不服そうに言葉を紡ぎ、その目の表情も同じに向けていた。

――はっきり言って悔しいが、可愛いヤツだと思ってしまう。大体、俺そういうキャラじゃなかったし、何でこんな…突き刺すような瞳で真っ直ぐに俺を見るんだ、こいつは…。何も知らぬ無垢な瞳。長いまつ毛。柔らかい唇…いや、ここは柔らかそうなと言っておい

た方がいいか…と、そんな事を考えている自分にさえ恥ずかしくなり、馬鹿馬鹿しいとさえ思う。
口に手を当て邪魔なその思考を消し去ろうとしてレティシアからそっぽを向き言った。
「べ……別にいいから早く枝を拾おう。それに、いつもいつも手間かけさせられていては疲れる時もあるんだよ。こっちの身にもなってみろ――」
そう言った後でリュシファーは、振り返らなくてもわかるその表情にはぁ……やれやれとため息を吐いていた。
しかし、次の瞬間背中にぶちまけられた数本の木の枝――。

……え？

慌てて振り返った俯いたレティシアは――、手を強く握り締め小刻みに身を震わせていた。
それは全くの予想範囲外。まさか本気で怒るとは思っていなかった。
脳裏に思考が並び始める。そして――マズイ……――とそれらは言っている。

「そうか……じゃ、いい――城に戻って休めばいい」

レティシアは俯いたままで冷淡にそう言った。
「レ、レティ……俺は――」
はっとしてそう言いかけた時だった。
きっとその瞳はリュシファーを捕らえていた。鋭く見開かれたそれは目に涙も浮かばせているが決して溢さない。
吸い込まれる様な光を強く放ち、睨みつけていた。
体が硬直して動かない。焦りとともに、レティシアの怒りと何か拒絶の様な意志をはっきりと感じていた。

案の定レティシアはその後、予想通りの言葉を吐いて走り去り、呼び止めたが振り返りもせずにコテージへと入って行くのが遠くに見えた。そしてリーフがその後を追うのが見える。

やめておいた方がいいのに……

と思いながらも呆然と立ち尽くすリュシファーは、少しして枝を拾いため息を吐いた。

――……

バンッッ……！

乱暴に閉めたコテージの部屋の一つのドア。

知らぬッ……もうあんなヤツ知らぬッ！

誰が世話を焼いてくれと頼んだんだっ。お前が勝手について来たんじゃないかっ。

大体、昨日少し落ち込んでたし、少し気にかけてやったのに何だあの言い草はッ！

あーーーーーーーーーーもうッッ！　イライラする……！！

レティシアはものすごく苛々としてベッドにある枕を取ると、ドアの方へ振り返りながら思い切りそれを投げつけていた。

「――わぁっ！？」

「！」

途端に聞こえた声とともに、リーフが飛んできた枕に当たった衝撃で後ろへと尻餅をついている。投げつけて枕が飛んでいる間にドアが開かれていたのには気付いていたが、もう手から離れていた枕をどうする事も出来なかったのだった。

「リーフッ……！　あぁあぁ、ご、ごめんっ。痛かった？」

急いで駆け寄ってリーフに侘びを入れると、身を起こすのを手伝った。

リーフは何が起こったのかわからないといった表情できょとんとしていた。

「あ……いえ、少し――び、びっくりしただけ……です。ははは…

…はは、な、何かあったのかなと思いまして……」
まだ少し唖然としながらもリーフはそう言った。
レティシアはぷいっとそっぽを向いて「べ、別に何もっ」と言った。
そうですかと言いながらもリーフは恐る恐るリュシファーの名を口にして来たので、レティシアはかっとなって枕を持って立ち上がると声を荒げて言った。
「あんなヤツっ。今度と言う今度はもう怒った……！」
「――やっぱりなんかあったんじゃないですか……」
「とにかく私は少し休む。飯が出来たらリーフが起こしに来てくれ」
そう言ってレティシアはベッドの布団に潜り込んだ。
リーフは『あ……はい。ではおやすみなさい』と言って部屋を出て行った。
しんと静まり返った部屋のベッドからゆっくりと起き上がると、レティシアはため息を吐いて呟いた。
「――馬鹿……」

次に目を覚まし、ボーっとしているとタイミングよくノックの音がしてレティシアは起き上がってドアを開けた。ご飯が出来たと微笑んでリーフは言った。
コテージを出るとリュシファーの姿が見え、レティシアはぷいっとそっぽを向いて向かいに座った。
いつもは寝て起きれば忘れられた筈だったのだが、今回はやはりレティシアはまだ苛々としていた。ため息を吐きながらリーフが手渡すご飯を受け取る。
リーフは言った。
「さて、では食べましょ～っ」

リーフは元気に言ったがこの二人は微妙そうな雰囲気で空返事を

した。
　気まずそうな表情を浮かべながらも笑顔を作るリーフは、正直困っていただろう。
　食事も終わり、レティシアは少し散歩に行って来ると言ってひとりでその辺を歩いて気晴らしに向かった。リュシファーは珍しく止めなかった。それにも少し苛々としながらレティシアは乱暴に地を踏みつけながら、足を進めていた。
「なんだっ、もー苛々するっっ」
　はっとしてレティシアは口を押さえて振り返るが、もう大分コテージは遠い。
　おそらく聞こえていないだろうと思い、安堵した。
　その時だった。目の前をぼんやりとした緑色の光が横切っていく。ミールティアの神殿にあったみたいな光の――玉？　ってことは精霊の魂…？　でも、それにしては少し大きい。確かリーフが大地の精霊が眠っているとか言ってたな……うーん。
　光の玉を追うようにレティシアは歩みを進めていく。光はコテージの方へと進み、大地の精霊樹の根元の穴へと入っていく。コテージを見るとその前にリュシファー達の姿はない。
　思い切ってレティシアはその穴へと入ってみることにした。
　暗くて良く見えないので、レティシアは人差し指の上で小さな炎を浮かばせ、松明の様にそれは辺りを照らした。土のついた根の様な物がぶら下がっていて、その木の根が洞窟の様に周りを形作っていて、足場が悪い。なんとか歩みを進めるが光を見ると、それはレティシアを待つように途中、その場に静止してはレティシアが近づくとまた先へと進んでいく。
「？？」
　レティシアは首を傾げて立ち止まってみた。光も気付いた様で宙でぴたっと静止している。
　――な、なんかよくわからないがついて来いということらしいな……。

レティシアが通り抜けるこの穴の中は木の中というのは信じられない程長く続いている。
リーフは、途中で本当に洞窟に抜けると言っていたが、それらしき物はない。
ため息を吐きながら光を見ると、光は上へと姿を消す。レティシアは光を見失わない様、焦って追い、ついに穴の外に抜けた。

「！！」
視界一面に飛び込んできた舞い落ちてくる新緑の葉――。
そして、中央には小さな泉が湧き左右見渡せば木の中だというのに森が広がっている。
思わず口を開けたまま、その光景に言葉も出ない。
黙ったままレティシアは何かに吸い寄せられるように小さな泉まで足を運んだ。
先程の光が上からゆっくりと降りてきて、泉の真ん中で静止する。
そして突然の眩しい光。きつく閉じた目の前ではなく後ろから声がした。
「――レティシア様、よくおいでくださいました」
「えっ……」
レティシアは薄目を開けてみると、視界を奪う光は消えている。
ゆっくりと振り返るなりレティシアは驚愕した――。
その身をぼんやりとした新緑の様な黄緑色の光が纏い――人の形をしているがおそらく人ではない男。髪は短くて新緑の様な黄緑がかった銀色。瞳も同じ。歳は３０歳前後だろう。
振り返ったレティシアの前に膝をつき顔を見上げている男の存在にレティシアだったが、精霊の女神レティシアの声がしてはっとした。
――ウレハ……ついに時は来ましたよ。
精霊の女神レティシアは、明らかに自分ではなくウレハというこの者に話しかけている。

「このお方が、ラクロエ様なのですね――……」

――えぇ。そうです。……あ、レティ。この者は大地の精霊ウレハ――。

精霊にはそれぞれに統率者がいるのですよ。最も力を強く持ち、同じ属性の配下の者を従える役割を持つ――ウレハは大地の精霊を仕切る大精霊というわけです。

ついに、話す時がやって来ました。精霊の属性に関する話を致しましょう。

魔法には、水、風、雷、土、聖、そして火――。六つの属性がありますね。

勿論それぞれに精霊はいて、ウレハの様な大精霊がいます。

精霊はその属した属性の力を持ち、生まれ持った属性の力以外は持っていません。

ですが、そこに例外があり、あなたはそれに当たります――。精霊の世界にも王族がいて、あなたは精霊界の王女ラクロエ――。王族は全ての属性の力を持ちます。

「！！」

その続きをウレハが口を開いて説明した。

「ラクロエ様――王族は無属性といえど、一緒に交わる精霊の力を強く受け継ぎます。土の法術しか遣わない私と違いあなたは全ての法術を使えますが、中でも火の力が強い威力を発揮する筈です。何故ならあなたは無属性の王と、火の精霊の間に生を受けられた王女なのです――おわかりですか……っ？」

ウレハが真っ直ぐと切なそうな表情で視線を向ける。

――ずっと、お待ちしておりましたという声が聞かずとも聞こえるような、そんな瞳だった。

「ラ……ラクロエ……わ、私が、精霊界の王女――」

耳を疑いながらも見たウレハのその目の前で、――現実逃避など出来る筈がなかった。

精霊の女神レティシアだけではなく、土の大精霊ウレハもまた…私が訪れるのをずっと待っていた。

精霊たちは皆、最後の希望を王女ラクロエを転生させることで託した――と。

そういうことなのだろう。

「――あなたは姿こそラクロエ様ではなくともラクロエ様に代わりはありません。あなた様ならば大魔神ザロクサスを倒し、精霊界を救える筈……ッ」

ウレハは地に膝をつけたまま俯き、地にポタッ一滴の涙を溢した。

「ウレ……ハ……」

待ち焦がれていた希望の光。王女の来訪。強い願いと想いと無念さ――。全てだった。

レティシアはしゃがみ込んでウレハの涙を人差し指で拭って言った。

「――永く、待たせたな……ウレハ。でも私はまだ未熟だが――きっと必ず…ザロクサスとやらを倒して救ってみせるから…顔を上げてくれ、泣くな――」

レティシアはしゃがみ込んで人差し指でウレハの涙を拭った。

「ラクロエ――様……っ、勿体無いお言葉――」

ウレハは涙を自分でも拭って、息を吐いてから言った。

「ラクロエ様は私どもが守らねばならないというのに……ラクロエ様はお強い。誇り高く王の血を引き継いでおられる。その意志を強める王妃の火の精霊の血も――よくぞご立派に……」

ウレハはよくわからないが褒めている様子だった。少し慌ててレティシアは言った。

「お、おおげさだ……っ。ラクロエという者が私に転生したのはわかるが、精霊の女神レティシアに使命を聞かされても、正直あまり実感がなかった。ただ、お前を見ていて思った。１４年間私が立ち上がるのを待ち続けて来たのだろうなと……。そう思ったら、何も精霊の事は知らないがやはりやるべきだってな……。私は、自分の

知る者がこれ以上、傷ついて欲しくない――それだけだ。ラクロエとしての言葉ではなく、私自身の言葉で悪いがそれだけだ――」

レティシアはそうやって静かに微笑んだ。

ウレハは涙を堪えている様子だった――。

そして意を決した様に言った。

「ラクロエ様――我、土の大精霊ウレハ。あなたを守護致します――」

「――えっ！？」

そう言った瞬間光が視界を奪う――。

目も開けていられない程のその光――。

光がおさまりレティシアが目を開けた時、ウレハの姿はどこにもなかったのであった――。

つづく。

【第四章】†ｅｐ．５　待ち続けていた者†（後書き）

この設定を眠らせたまま話が進んでいました。
さてさて、レティシアはあんなに怖れていたのに火の精霊の血も持っていたんですね。幼い頃に巨大な炎もまたそれが原因でしょう。怖れることにはなりましたが、今回、怖れていません。何故なんでしょう。とまぁ新たに意外な真実が明かされましたが今後をお楽しみに。でわりんごでした。

【第四章】†ｅｐ．６　現れしもの†（前書き）

誤字あったりしたらすみません。

【第四章】†ｅｐ．６　現れしもの†

声がする――。
深刻に話をする二人の男女――。
両方とも知っている声だ。
精霊の女神レティシアと、土の大精霊ウレハ――。
そう、精霊の守護を受けたレティシアの中にはウレハがその魂を宿していたのだった。

――ところで、ラクロエ様。
貴方様の心に住まい、わかったことですが気がかりな事があるようですね。

“――あ、駄目です。ウレハ……それを言ってはなりません。”

――い、いやしかし……、素直じゃないのもよろしいと思いますが……男として言わせて貰えばはっきりして頂かないと煮えたぎらないというか何というか……。
好きなら好きと何故言わないのです。

「なっ……！？　ちょ、ちょっとぉっお前らうるさいぞ。別に私は何ともっっ」
――隠されてももうこのウレハ、ラクロエ様の気持ちは手に取るようにわかってしまうのです。
“――ウ、ウレハッ……レティはまだ子供なので戸惑っているだけ。私も温かい目で見守っているのですから。”

そう精霊の女神レティシアが言った瞬間ウレハは黙り心に静寂が訪れた。

しかし、とても気分が悪い――。そして、すごく腹が立つ。
人の心に勝手に住まい、自分でもよくわからない気持ちをベラベラとはっきり話せるほど、この二人はレティシアの感情を知ることが出来る様だ。おまけに子供と言った……悔しい。
しばらく精霊の女神レティシアが大人しくなったと思っていたら、大地の大精霊ウレハという新入居者が増えたこの状況を、レティシアはこれを厄介事と言わずに何というと思った。
レティシアはため息を吐いて、大地の精霊樹の中を歩きコテージまで歩みを進める。
精霊の女神レティシアは、それぞれの精霊の石を集めろとは言っていたが、石を集めろではなくその大精霊の魂の守護を集めろという意味だった様で、石に眠った魂がレティシアに守護を与えたこの新緑の洞窟の大地の眠り石には、もう何も用はないのだという。

「――あッッ!!　いた!　レティ!!　どこへ行っていたんだッッ、心配したんだぞッ!」

リュシファーとリーフが走ってきた。
怒鳴りつけられ、レティシアはそっぽを向いてリュシファーの顔を見ずに言った。
「――関係ないだろ……」
そう言った次の瞬間だった。
リュシファーがガッと肩を掴み、レティシアをすぐ後ろの木にドンッと強く打ち付けた。
「っ痛ッッ……な、何をする!!」
「いつまで拗ねてるんだッ、子供じゃあるまいし。心配してリーフも俺も探し回ったんだぞッ――」
ふとリュシファーの服を見ると、森を探し回ったらしく土ぼこりで手も服も汚れていた。
レティシアはそれにはっと気付いたが、睨みつけると言った。

「そ、そんな言い方しなくてもいいだろっ！　それに拗ねてる訳じゃないッ。大体ッ、人の気も知らないのはどっちだっ」

そう言ってレティシアは稲妻の力で弱い静電気の様な稲妻をピシッと発生させたかと思うと、怯んだリュシファーの手を抜けてコテージの寝室へと走った。

「こ、こらっ！　待てッ……、ったく。しっかり力抑えて――って違うっ……唐突過ぎて思わず手離してしまったじゃないか――あの馬鹿姫……ッ」

怒りを露にするリュシファーは、コテージへと真っ直ぐに向かう。

リーフは気まずそうに様子を見ていたが、リュシファーがコテージの中へ消えてからくすっと微笑んだ。

「――喧嘩する程仲がいいってヤツかなぁ～……これは僕の入る隙はないみたいですね。残念ですが……ふふっ」

そうため息混じりに呟くリーフの顔は少し嬉しそうであった。

一方コテージの鍵のかけられない部屋の中では――。

レティシアは布団を被り、叫ぶように言った。

「うるさいッ、黙れッ。お前と話したくなどないッッ」

そのレティシアのいるベッドの布団をリュシファーがガバっとめくる。

「あっ……！」

布団はリュシファーの座布団へと用途を変えた。

きっと睨みつけレティシアはむしゃくしゃして枕を投げるが、リュシファーは近距離だというのに軽々と避けた。

「――ムッ……やるな……ってそうじゃなくて、布団返せッ」

と、レティシアはベッドから降りてリュシファーの座っている布団

を引っ張るが、ため息を吐いたリュシファーは冷めた目でレティシアの腕を掴んでぐっとそのまま引いた。
レティシアは倒れこむ瞬間に睨みつけて見た勝ち誇った様子のリュシファーの微笑のあとで、布団の上に倒れていった。

「念願の布団の上だ……満足したか」

その言葉に下からきっとリュシファーを睨みつけたレティシアは、起き上がるのも面倒くさくなりそのままうつ伏せたままで静かに言った。
「――お前、いい加減にしないと……怒るぞ。本気で」
とレティシアは言った。
リュシファーがため息を吐く。
「いい加減にして欲しいのはこっちだ……まともに話を聞けないのか」
「話などしたくない。人の気も知らないで……」
「――レティ……。悪かった……謝る。お前が木の枝ぶちまけて走って去った後、反省したさ……心配してくれたのに、俺はなんて馬鹿なことをしたと――。すぐ許してもらおうとも思ってないが、その事は本当に悪かった」
レティシアはうつ伏せた顔をリュシファーに向けた。
どうやら反省している様でその表情には申し訳なさが浮かんでいる。
レティシアはため息を吐いて、珍しく許してやる気になったので許すと言った。
「ただし、今日一日様子がおかしかった理由を話せ。そしたら許してやる」
リュシファーは驚愕の表情を浮かべて、焦っている様子なのでレティシアは起き上がって腕組みして冷めた目で見た。
「――い、いや……それはマズイ……」

リュシファーが拒むので少し怪訝そうな顔を浮かべて再度聞くと、やはり答えられない様だ。

「あーもう、やっぱりお前手間がかかって面倒くさいと思ってただけなんだろう。言わなくてもよーくわかった……」

「いや、だから……そうじゃないんだっ……自分で言い出しておいて何言ってるんだと思うだろうし、さすがにこれは口が裂けても言うべきじゃないから、言えないんだ…わかってくれっ」

「……ん？　はぁ……もういい……疲れた。はっきりしないし……苛々するからお前今日ここで寝ればいい。私はお前の部屋で寝る」

そう言って立ち上がりドアの前へと歩みを進めたが、やはり気になって言った。

「あーやっぱり気になるっ。何で言えないんだッ。どうせ大したことじゃないだろう。言わないならもう知らぬッ。一生許さないっ。これでも言わないのかっ！？」

「――だッ、だからッお前が好きでどうしようもないなんて言えるわけないだろうッ……！」

「！！」

怒鳴ったリュシファーの声はレティシアの頭にこだまするように響いていた。

驚愕のあまりレティシアはへたっと座り込み、唖然として動けなかった。

リュシファーははっとして口を押さえている。しかし、少ししして俯いた。ため息も吐いた。そして困った様にも微笑んでゆっくりと歩いてきて、目の前にしゃがみ込んで静かに言った。

「ほんと……お前には調子を狂わされる……。――ついでだ。お前にも聞こう――」

レティシアはリュシファーの切なそうな目から視線を逸らそうしても逸らせなかった。
目を閉じて顔を近づけて来るリュシファーの行動は、想像が出来ていたのかもしれない。
ちっとも私の心は拒絶の意志を持っていなかった――。
もし嫌な相手なら拒む。そうじゃないなら受け入れる――……。
よくわかっていなかった。その感情自体、誰かに抱いたこともない。
ただその時私は拒ませずに、そっと目を閉じていただけだった――。
リュシファーの唇が離れ、すぐ目の前でリュシファーは照れた様に微笑んだ。
「それが答えと受け取っていいのか……？」
少しの間の後、こくっと頷いた時に見たリュシファーの微笑みは、多分今までに見た事がないものだった。そしてやれやれとため息を吐いてリュシファーは私を自分の胸に抱き寄せた。互いに顔を見ずに少しずつ言葉を紡ぐ。リュシファーの話す声は優しかった。
その時何故かはわからないけど、妙にほっとしていたと思う。ずっとここのところ苛々としていたのに、何も苛々しない――。情緒不安定だったのかな――。
リュシファーは、この感情は抱いてはいけない、勘違いだ――と思おうとしていたと言っていた。私もそうなのかもしれない――と思った。
こうお互いの気持ちを知ったというのは確かだったが、何も変わらない気がした。
でも、この時から何かが少し変わっていくのだと思う――。

色々と話をした後、気がつけば眠くてベッドまで行けず二人とも床で布団をかけて眠っていたのだった――。

そして――。

「おっはよぉーございまーす。レティシ――」

リーフがドアを開けて目の前の二人に目をとめる。

「んぁ？　リーフ、もう朝～？」

レティシアのその声にリュシファーも目を開ける。

二人して起き上がり、リーフのその表情が何を意味するかがわかりはっとした。

二人は離れ、お互いに弁解する様にリーフに詰め寄る。

リーフは呆れた様に息を吐いた。

「はいはい。何を弁解なさっているのかわかりませんが、二人が仲が良いのはわかっていましたから、別に驚きませんよ。――いつも喧嘩してるみたいですけど、何だかんだでお二人はとても馬が合ってると思うしね。まぁ……少し、悔しいですけどねぇ。元婚約者としては」

リーフは複雑そうな表情で微笑んだ。

「あ、いや別にそんなんじゃ。えと、だからちょっと話をしていたら眠くなって寝ただけだ」

「そ、そうそう。きょ、教育係と姫がそんなことあるわけないだろう。ははは」

リーフはじっと冷めた目で二人を交互に見る。

気まずそうにぎこちない笑顔を作る二人を見て、ため息を吐いた。

「――じゃ、そういうことにしておいてあげます。行きましょう」

そういうリーフの表情は穏やかに微笑んでいた。

おそらく気付いてしまったのだろう。でも、何だか嬉しそうにド

アの外へと出て行った。
「……あれ、絶対バレたよ…お前がぎこちない表情するから」
「いや、俺は冷静に対処した……つもり」
「ノイエル様といいリーフといい、ダムルニクス王国って少し怖いな。なんというか何を考えているかよくわからない」
「ま……“穏やかな面持ちに隠れた微笑”といったところだろうな」
リュシファーが言った一言に、レティシアはそれだと思った。
そういうわけで――。
大地の精霊樹の穴に入る必要のない三人は、ダムルニクス王国大広間へと足を運んでいた。
「――それはそうと、なんだかレティシア王女もリュシファー殿も眠そうですね……大丈夫ですか？　そんな体で発つなんて……少し休んで行かれては……？」
ノイエルは目を閉じかけているレティシアと、少し疲労の色が垣間見えるリュシファーに心配そうな面持ちを向けた。
「いや、えと、先を少し急がねばならないのでなんとかなると思う。ミグたちを探さなければならないし……」
「そうですか……しかし今サユラナの街の船は休航している様ですよ。今航海に出てもまた原因不明の嵐に見舞われる怖れがあるとのことで、皆困っているそうです。どちらへ向かわれるのですか？」
リュシファーが一歩前に歩み出る。
「転移の杖でとりあえず移動致します」
「転移の杖――？　何それ」
レティシアが始めて聞いたと怪訝そうな表情をリュシファーに向けた。
それに苦笑してリュシファーは異次元空間から杖を出した。
「この杖は、行った事のある街ならば全て移動できます。二つ大陸を移動するたびに修理しなければなりませんが、私の故郷エルフィードにある不思議な杖なので多分初めてご覧になったと思います」
「なんと……そんな物が――。で、どちらに」

「まずは一度遠くの大陸ですが、ミスレイル大陸へ向かわなければなりません。一度、この杖は使用しておりますので回復も兼ねてエルフィードへ向かおうかと――」
「ほぉなるほど……って、えっ聞いてないぞ……？　リュシファー」
「あぁ、でも姫様は――ノープランですよね？」
リュシファーが困った様に微笑んでいる。
ぎこちなく微笑みを浮かべるレティシアを見て、ノイエルがくすっと笑った。
「レティシア王女、この者には頭が上がりませんね。ふふっ」
「あ……はは……」
あぁ、ノイエル様も痛いところを…。
「とにかく、まぁそういうわけでさっそく向かおうかと思うので、ここで移動してしまってもよろしいでしょうか？」
な……なぬっ！？　も、もうっ！？
「――えぇ、構いませんよ。では、お気をつけて。いつでも遊びに寄ってくださいね」
「ありがとうございます。では、リーフ王子もお元気で――」
「はい。レティシア王女の事、よろしくお願いします」
リュシファーは軽く頷いて杖を掲げる。
「――失礼致します……」
ちょ、ちょっと待って……！
「リッリーフッ、私なっ――――」
最後まで言い切れぬまま、シュッと風の様な物が目の前に広がり、私は気がつけば森にいた。
風の波動が二人の周りを水面に水紋が広がる様に吹き抜けていた。
「あ……あ～あ、消えるの早くて最後まで言えなかったぁ」
「わ、悪いな……。でも、何を言おうとしていたんだ？」
リュシファーがへたっと座り込んだレティシアに言った。
「――色々ありがとうって……小さい時、ダムルニクス王国に遊びに連れて来られて、でも見慣れない私と誰も遊んでくれなくてひと

りぼっちだった私に、リーフが声かけてくれたんだ。『何してるの？』って。絵本読んでくれて、歌も歌ってくれて。ずっと忘れてたんだけど、思いだしたよとも――言いたかったなぁ……」

レティシアは少し哀しそうに俯いて言った。

「――また、会えるさ……その時言えばいい。無事にやることやったら寄ればいいさ」

リュシファーが詫びてからそう言った。

私は黙って頷いた。

エルフィードの街と言っていた割に辺りは深い森。

森ばっかりで嫌になるなぁと思いながらリュシファーに着いて行く。

すると、奥に街の様な景色が広がっている。

「あ、あれ？　エルフィードって。なんか来ると思ってなかったからわくわくするなぁ～」

「はは、別にここは人間は来ないだろうから、姿戻して大丈夫だぞ。俺も戻す」

そう言ってリュシファーは金の髪と瞳から元の姿へと戻したので、レティシアもそうした。

エルフィードの街並みは、森にあるとは思えない程大きくたくさんのエルフがいた。

皆若いということが不思議でならない。同じ歳くらいなのに、中にはオッサンやオバサンもいるということなのだから、イマイチよく理解に苦しむ。

「おっ、リュシファーじゃないかっ！　久しぶりだなぁ～。あれ？後ろの人間の子、誰？」

「あぁ、久しぶりだな。コイツはまぁ人間だけど少し特殊かなぁ、ちょっとわけあってここに立ち寄ったんだ」

「おばば様が言ってたのはまさか…。あ、いや何でもない。それより、この子すごい可愛いけどひょっとしてお前の――？」

「――ん……？」

レティシアが首を傾げると、赤く燃えるような髪のエルフはレティシアの顔を覗きこんだ。
「ごめん、先をちょっと急ぐんだ。後で時間があれば――」
リュシファーは苦笑してレティシアの手を引くと、誤魔化して先を急いだ様だった。
「はぁ……あいつには気をつけろ。いいヤツなんだけど女に軽いヤツだからな。狙った獲物は１００％落とす――がポリシーだからなぁ。ま、とにかくこっち」
レティシアは首を傾げながらも、そうなのかと納得しておいた。
そして、一軒の赤い屋根の民家の前に立つと、息を吐いてレティシアの手を引いた。
ドアをノックする音。少しして開けた紫の瞳と銀の髪の若い女性。
そして女性は顔を輝かせてリュシファーに抱きついた。
「きゃー帰って来たのねぇ。突然どうしたのぉ？」
レティシアは怪訝そうな顔を浮かべていた。
少しムッともしていたかもしれない。
「あぁ、ちょっと事情があってな――母さん」
「母さん……？？　え、え、え…えええぇぇッッ！？」
レティシアはリュシファーの母親を下から上まで見た。
「だ、だから言っただろう？　こっちでは少し勝手が違うと。その…エルフと交わると人間でさえ少しその影響を受けるとは言ってなかったが……まぁ、そういうことだ」
「あらぁ、かわいい子ねぇ……。でも人間の女の子なんて久しぶりに見たわぁ。私この子の母親よ、さっ入って」
そう言うと、妙に母親らしくないこのリュシファーの母親はにこにこしながら二人を通した。
小声でリュシファーが言った。
「すまんな…少し疲れるかもしれんが我慢してやってくれ」
レティシアは少し可笑しくなってきてくすっと笑った。
二人にお茶を淹れにリュシファーの母親がソファーからいなくな

り、レティシアは言った。
「宿屋の部屋よりは広いな」
「……はぁ、城と一緒にするなって。ここじゃ悪くない方だ」
とかリュシファーと話していると、コンコンと玄関のドアがノックされる。
「あ、親父かな――俺出る」
「お願～い」
と親子の会話をレティシアは聞いていると、リュシファーとそっくりだが髪が肩くらいまでのリュシファーと同じ歳くらいの若い男が一緒に居間に来た。
レティシアを見るなり、リュシファーの父親と若者はにっこりと微笑んだ。
「おや、お前がまさか人間のお嬢さんを連れてくるとは意外だな」
と父親はからかうようにリュシファーに言った。
「リュシファーの父のセルディオだ。よろしく頼む」
「えっ？　ぁあぁっ、えとっ、エンブレミア王国国王の娘レティシ――」
とそこまでつい自己紹介を返していると、リュシファーが駆け寄ってきて手で口を押さえた。
「こらっ……馬鹿ッッ……！」
「ご……ごめん。つい――」
ちらっと振り返るとリュシファーの母親が持っていたお茶の乗ったトレイをコト…と台所のテーブルに置き驚愕の表情、セルディオは額に手を当て何やら頭を悩ませるような険しい表情だ。その沈黙の中、誰も何も言えずに緊迫した時間が流れていた。
セルディオはため息を吐いてレティシア達の目の前に座った。
そして、目を細めてじっと睨む様にレティシアに視線を向けると、次にリュシファーの方へと厳しそうな面持ちを向ける。
一体、何を考えているんだ……。
「リュシファー――」

そうセルディオが口にした時、緊迫した雰囲気は一気に高まった。
レティシアはごくっと息を呑んだ。そしてついにセルディオが額に当てた手を下ろした。

「――随分とかわいい女の子だな……」

ずるっとレティシアは妄想の中でこけた。
ち、違うだろうッ。リュシファーの父上ッ、言うべきところはそこじゃないと思うんだが…。
「い、いや……親父、それは俺もそうだと思うけど……、ってそうじゃない。気になるところはそこじゃないと……」
リュシファーが代弁して聞いてくれたので少しほっとした。
父セルディオは、ふっと微笑んでソファーに座った。
「そりゃま、一国の王女が何故お前とこんなところにとは思ってはいるが、何やら訳ありという感じだ。とくに聞かない方が良いのかと思ってな――」
「！」
似てる――……
そう思った。リュシファーも同じ時そうやって何も聞かずにいてくれる。
この父にしてこの子あり――とレティシアは感心していた。
「で、えと自己紹介が途中だったが、名はレティシ――なんだったかな？」
にこにこと笑顔でレティシアに聞いて来たセルディオにレティシアは、ふっと微笑んで言った。
「――えと、名はレティシアで、リュシファーにはいつも世話になっている。礼を言おう」
リュシファーが唖然としてレティシアを見ている。

レティシアはふふっとリュシファーに微笑を向けて言った。
「何ぼーっとしている？　座ったらどうだ？　お前も」
「え、あ……あぁ」
そう戸惑いながらレティシアの隣に座ったリュシファーの向かいに、母親も座った。
母親はアリシアと名を名乗った。この目の前にいる二人が、あのかけおちをしてこの街に来たのだなとレティシアは思い返していた。
「で、何をしにここまで？」
「あ……あ、転移の杖を回復しに来たんだ。でもってついでに寝かせてもらおうと思って。昨日寝てなくてな」
リュシファーが困った様に微笑んだ。
セルディオは呆れた様に微笑むと言った。
「構わん。ただし、もうひとつだけ聞こう――」
おっと、何だかノイエル様の様にやはり掴み所がないぞ…。何か裏があるぞ、父上殿は…。
そう思った時、リュシファーが聞き返し、セルディオは唐突にこう言った。

「――で、お前らは付き合っているのか？」

リュシファーは苦笑を浮かべて否定した。
「――そうか、ならばお前はサーシャの部屋で寝るといい。レティシア王女はお前のベッドに寝かせてやれ」
「な……なんだ……。ははは、そんなことか…」
リュシファーがぼそっと呟いた。
「なんだそんなことかじゃない。一緒に寝るわけにはいかんだろう？　王女様なんだから」
「あ、いや何でもない何でもない。とにかく、じゃあ上に上がらせてもらう。行こう、レティ」
「うん。で、では…また後で」

「はい、おやすみ――」

そう言って二階にあるリュシファーが使っていた部屋に向かうと、そこには本の山というかめちゃくちゃ難しい本がたくさん本棚から溢れて山ほどあり、リュシファーらしいとレティシアは苦笑を浮かべた。

とりあえずベッドに横になるよう言われたので、レティシアはひとまず横になった。

「――リュシファーの父上は少し変わっているのだなぁ。なんというか掴みどころがないというか」

「ははは、まぁいつものことだ。それより、一応隠してはおいたが…気を悪くしたらすまないな」

「あ、いや別に気にしていないぞ。あまり公言は出来ないからな…はは」

そう言ってリュシファーはレティシアの額に唇を触れると、おやすみと言って去って行った。

部屋にいてベッドから部屋を見渡して思った。なんだか変な感じだ。

リュシファーの匂いがする布団。リュシファーが住んでいた部屋。リュシファーの家族。どれも城にいたら見る事はなかった物たちだ。

ミグたちはどうしてるかなぁ～……。

気がついたらレティシアは目を閉じて寝ていた。

“――レティ、起きるのですッッ！”

『――ラクロエ様ッッ！！　お目覚めになってくださいッ。』

「ん？　…なんだあ？　ウレハにレティシア…」

レティシアは精霊の女神レティシアと大地の大精霊ウレハの声で目を開けた。

『――大変ですッ。魔の者が現れましたッ』

「え…？魔の者…？？　魔物？　魔王？　大魔神じゃなかったー？」

レティシアは寝ぼけて魔の者だか魔物だかわからなくなっていた。
――いつまで寝ぼけているのですッ。説明している暇はありません。
外へ出て倒すのですッ。
――ラクロエ様ッ、お早く。
「なっ……！？」
窓の外を見ると人々は逃げ惑い、外に急いで出ると何人かのエルフが戦っている。
雷が辺りに落雷してはそれを避け、風の魔法を放っている。
しかし、それを避け、ひとりのエルフが雷に当たりその場に倒れる。
「ッ……！」
そしてその先に見えた魔の者――。
女だ。巻き毛ががった銀の髪を後ろに高く一つに束ね、背には黒い悪魔の様な翼――。
胸元が谷間が見える程開いた黒いロングドレス。横にはスリットがきわどい所まで入り、何だかわからないが妙にセクシーな格好だ。
大人な女の色気がぷんぷんしている。
そして残忍な笑みを浮かべたその魔の者の妖しい紫に魅せる瞳は、逃げ遅れ転んだ小さなエルフの女の子に向けられている。
「あ、危な……ッ間に合え……！！」
レティシアは一瞬で自分の中の炎の力を高め、放っていた時精霊の女神レティシアとウレハの声がする。
『いけないッ、その力は駄目だッ』
――レティッツ！　なりませんッツ！！
――え……？
つづく。

【第四章】†ｅｐ．６　現れしもの†（後書き）

ふー。
やっと出来ました。次回四章が最終回となっています。
多分。

一体何者なのか…。では次回…。

【第四章】†ｅｐ．７　芽††（前書き）

校正してないのですが見つけ次第修正します。ＵＰします。

【第四章】†ｅｐ．７　芽†††

精霊の女神レティシアたちの声が聞こえていたが、レティシアが前にかざしていた発動の合図により、目標の魔の者の足元に描かれた赤字の魔法陣からはすでに物凄い巨大な火柱が湧き上がっている。

更に赤く燃える炎の色の光の玉が魔法陣から多数出現し、それは魔の者へと集まっていきちょっとした爆発を巻き起こす。自分でも唖然とする程巨大な魔力だった。

「…くッ…！　おのれ、何者だッッ！！」

魔の者の身を纏った炎はまだ続いているというのに、その目はきっとレティシアを睨みつけ、全く動じてはいない様子である。

「！？」

えッ、き――効いていない……！？

嘘――…！？

レティシアは驚愕していた。

魔の者がレティシアに向いた隙に母親が小さい少女を抱えて、レティシアにお辞儀をすると走り去っていく。

炎は目くらましをしただけかの様に、魔の者とレティシアが睨み合う間に消えていく。

おさまってから魔の者は口元を吊り上げた。

「――しかし、炎とは…お嬢ちゃんは馬鹿か…？」

なっ…ッッ。

「馬鹿とは何だッッ、それにお嬢ちゃんじゃないッッ！！」

思わず口にする言葉に、魔の者はふっと微笑んだ。

「――はぁ、わかっていない様だから教えてやろう…。我は雷鳴を愛でて操り、人々の泣き叫ぶ悲痛な旋律を聴く…。――我が名は、大魔神ザロクサスの配下――殺戮の四天王。雷鳴のセルローズだ。稲妻に炎を放っても無駄だ――。効かぬ……」

セルローズという魔の者はやれやれと呆れた様に、手の平を真横に開いてみせた。

“―だから言ったのですが、遅かったですね…。”

くっ……。

何たる余裕な感じ。気に入らない――。

「セルローズだかなんだか知らないが、何をしに来たッッ」

レティシアはそう言ってセルローズを鋭く睨みつけていた。

「あぁら、可愛いこと。この私に楯突こうって言うの？　小娘が生意気な…。でも私はその目、好きよ――…だってこれから、絶望に打ちひしがれて懇願の目に変わるのだものッッ…！！」

そう言ってセルローズはレティシアに向けて手をかざした。

「！？」

――レティシア、何してるのです。早く避けるのです…！

はっとしてレティシアは慌てて避けて移動した。

先程いた場所に物凄い稲妻が雷鳴とともに空に落ちる。

「――さぁ、逃げ惑うがいいッッ！」

セルローズのその声とともに天へとかざす手。そして数々の雷鳴と、乱射される稲妻――。

な、何ッッ！？

レティシアは天から乱射される稲妻を寸時の所で避けた。続くその動作を何度行ったかわからない。

しかも、避けるのだけで、精一杯だ――。

くッ…このッ…っっ。と睨みつけた時だった。

稲妻がレティシアの身体に触れ、全身を駆け巡る激しい痺れと熱さにレティシアは悲鳴をあげる。

「――あああぁぁぁぁぁッッ……！！」

この感じ…味わったこと・・・…ある――妖雪の…森だ…・・・。

レティシアは稲妻の電流に、気を失いかけていたがここでやられ

る訳にはいかないと、必死に気を強く持つが、既にふらふらと下へと下降していきそうになる。
駄目…ッッ、体が…痛くて死にそう……ッ！
身体は少しずつ痺れをとっているが、下降しないよう気を張っているだけで精神的にも身体的にも精一杯だ。そしてぼやけ始めた視界を覆う何か黒い影。
…セルローズだとレティシアは思った。しかし、逃げる力を残していない――。
くッ…死ぬのか…私――…
あざ笑う様に微笑む声がする・・・。

「…ちょろちょろとこしゃくな小娘だったが、やっと当たった…。まぁここまで逃げ続けたのは褒めてやろうか。だが口ほどにもないな――。でも、そういえばお前がさっき使った炎――人間にしては威力が大きかったわね…」

そう言っている最中に大地の大精霊ウレハは言った。

『ラクロエ様ッッお気をしっかりと――。なんとかして風の力を最大限にお集めください！　風に弱いのですッッ』
わかった…！
はっとしてレティシアは風の気を一気に全身に集めた。
そして解放する風の魔力――。はっきりした視界に入る足元に現れる金色の魔法陣。
眩い金の光は線となり天へ舞い上がり、目の前には金色の光を纏う女性がスッと現れた。
髪の毛で隠されてはいるが、裸体である。
「な、何ッ！？」
セルローズが身を怯ませてレティシアからばっと後退する。
――行けっッッ……！！　お願い……ッ！

なんとか突き出した人差し指の命に従う様に、その女性はレティシアに手で投げキッスをしてスッと消える。次に、後退するセルローズの周りに現れる金色の光を纏う風の渦――。

「――何だとッッ……！？」

避けようとするセルローズを風の渦は激しく飲み込んだ。

その目前に、金の髪の女性はスッと出現する。そして、風の渦で動きを止められたセルローズに向かい、その女性が投げキッスを送った瞬間だった――。

先程の風の渦だけでも激しかったというのにすごい轟音を響かせながら、さらに大きく竜巻の様に凄い速さで激しくセルローズを覆う――。瞬時にして真空の刃で身を切り裂く様に、激しい渦の中で血しぶきが飛び、悲鳴も聞こえている。

投げキッスというよりセルローズには『死のキッス』といったところだろう。

人々がおおっと歓声をあげている。その時だった――。

「――レティッッッ！！」

その声の方へ振り返ると、リュシファーの姿が見えた。

リュシファーは急いでこっちに飛んで来ていたかと思うと、何故かレティシアを思い切り突き飛ばした。

「ぅ、わぁッッ…！！」

吹っ飛ぶ間で見える風の渦から突き出された手――。

手から巻き起こる激しい稲妻がリュシファーの姿を覆っている――。

「！！」

――ゆっくりとそれはレティシアの視界を遠ざかり、何とか勢いに逆らおうと身をひるがえした時、稲妻がおさまり両手を額の前で交差させてそれを防いでいたリュシファーの姿が目に止まった――。

「リュ、リュシファー！！」

急いで駆け寄るレティシアに、息を切らしながら意識が遠ざかりそうなリュシファーは微笑んだ。

「――あ…ぶない……だろっ……馬――鹿…ッ」
レティシアは泣きそうになりながらリュシファーに頷いた。
次の瞬間、息を切らすセルローズの声がする。
「――く、はぁ…はぁ…ッおのれ……ただの小娘だと思っていたら、無事だっただけでなく風の法術をあそこまで扱うとはッッ。んッッ…？　そうか――…ふっ、まぁ良いだろう――面白い。今日の所は退き下がってやろう…っ…」
そう言って後ろを向いたセルローズにレティシアは言った。
「くっ待てッ！　逃げるのかッ!?」
ぴたっと立ち止まってセルローズは瀕死の致命傷を負っているというのに残忍な笑みを浮かべた。
そして手を上にかざすと紫色の魔法陣を宙に張った。
姿を消えさせながら答えた。
「――安心しろ。ここではなくお前に用があった様だ……逃げても必ずや探し出してお前を消しに来よう……次会う時がお前の最期だ――。ふっ、あっははははっ……！」
高々に笑い声だけがそこに残され、魔法陣から放たれた直線状の光によってセルローズは消えた――。

肩に手が添えられはっとして振り返ると、リュシファーがもたれかかって来てレティシアは慌てて支えて名前を呼ぶが、リュシファーは既に気絶していた。
セルディオと何人かの者が宙に飛び上がってきて、リュシファーを連れて自宅へと運んだ。
深刻そうな面持ちで様子を見るセルディオと街の者の様子に、心配でレティシアは言った。
「リュ、リュシファーは、無事…だよなぁッッ？　無事なんだよな？　し、死んじゃ嫌だぁッッそんなこと許さぬッッ」
と泣いているレティシアをアリシアが優しく抱きしめて頭を撫でる。

「大丈夫よ、レティシア王女様…そんな柔な子じゃないわ。それより、あなたも休まなくては…傷は治　したけど、体を休めなくては…」

そう言いながらもアリシアも心配そうな面持ちをしていた。

「――かばうために飛び込んだのでダメージが大きかった様だ…。でも心配はいらない。直で受け少し気絶しただけだから、大丈夫大丈夫」

セルディオは人差し指を立てて微笑んで言った。

安堵してリュシファーの側へと向かってセルディオが譲った席に座る。

「レティシア様、座ってなどおらずにお休みになられないと――」

そう声をかけるアリシアの言葉は聞こえていない様で、レティシアは俯いて膝にかかるスカートを　ぎゅっと握りしめて呟いていた。

「――リュシファー、ごめん…」

そんなリュシファーを黙って見つめるレティシアを、今はそっとしておこうと誰もが思って部屋を出て行った。

――――…

――

私が…しっかりしていれば、リュシファーはこんなことにならなかった。

魔の者――大魔神ザロクサスの配下…。四天王…稲妻を司るセルローズ以外にも、あと3人いるということか――。

炎…水…風…大地…。

このどれかだろう。聖は魔物は使わないはず…。

あんなに強大な力を持つ者がいるなんて…。大魔神ザロクサスは更にそれを上回るのだろう――。駄目だ、今のままじゃやられる…。

『――ラクロエ様…。少しずつ見守れば良いと思っていましたが、迂闊でした――。まさかもう四天王が動き始めるとは……』

…ウレハ……。で、一体何なんだ四天王って。知っているのか？

『――大魔神直属の右腕と呼ばれる配下の者達。魔族です――。おそらくまだあなたが力を目覚め切らせていない芽の内に摘み取ろうと派遣されたのでしょう。ラクロエ様…一刻も早く大精霊達のもとへ』

――レティシア、気をおとさないでくださいね。今のあなたでは、残念ながら葉が立たないでしょう…。ですが、よくやりました――。私の想像以上の風の法術を使いましたよ。

『風の大精霊セイレシルはあなたとともにあったのですよ。セイレシルはとても穏やかで何も言葉を発しないが、常に貴方を穏やかな優しい風で見守って来ました。あなたを守り、この時が来るのをずっと待っていたのです。――先程、ご覧になったでしょう？　セイレシルの姿を――』

…えっ…じゃああの金の髪の女の人が風の大精霊…！？

――えぇ、そうです。あなたが魔法をあまり使わない内から風の法術だけは使えていた様ですが、セイレシルのおかげでしょう…。

『残るは水と炎と雷――聖…この４つの守護を得れば、あなたは気付くだろう。その身に覚える更なる力に――今はそれしか言えません。ラクロエ様、お気を落とさず――前に進みましょう……』

――……レティ、今日はゆっくりおやすみください…私達はこれで。

……。

魔族――…

大精霊の守護――…

それはあと４つ――…

更なる力……。
前に進まなければ、時々迫り来る恐怖心に押しつぶされそうだ……。
それに怖れている暇など――ない……。
セルローズの様な魔の者の手が、進軍を始めている――――……
私を消した後は、おそらく――――……
――……

はっと気がついた時――。
私はベッドに寝ていた。
天井が低い…そう思った。ここは城でもない。夢でもない。現実の世界のリュシファーの部屋のベッドの上だった。
ぼんやりと目を覚ましていたが、リュシファーの事が頭に浮かび、慌てて飛び起きてリュシファーの寝ているサーシャの部屋へと向かうと、リュシファーの姿はなかった。
「!?」
急いで階段を駆け降りて私は階段から落ちそうになり声をあげた。
「あっ、わぁぁッッ…！」
咄嗟に目をきつく閉じた。
しかし、私は体を打ち付けられずに誰かに受け止められた。
「――おっと、危ないなぁ相変わらず。…朝から騒々しい。お前、本当に怪我するぞ…」
見上げた先にあるリュシファーの呆れた様な表情――。
私はリュシファーの顔を見た瞬間涙が溢れていた。
リュシファーに抱きついて泣いた。
「お、おいおい。なんだっていうんだ。怪我していないだろう」
そう言ってリュシファーが私を降ろしても、抱きついたままで泣きながら言った。
「死んじゃうかと思ったっ、馬鹿ぁぁぁ」

その様子に、セルディオとアリシアが口を開いた。
「あら、レティシア王女はすっごく心配していたのよ？　あっけらかーんとどうしたじゃないでしょーが…ねぇあなた」
「そうだぞ…少し、羨ましいが」
その言葉にやはり間の抜けた空気が吹き抜けていく。
泣いていた私でさえぴたっと涙が止まっていた。
セルディオははははと睨みつけるアリシアに笑って誤魔化すと、レティシアの頭を撫でた。
「まぁ、隠すつもりだったんだろうが、いやぁまさかお前も人間の女の子に恋をするとは、思っても見なかったなぁ…」
ぎくっ・・・リュシファーとレティシアは顔を引きつらせていた。

「……お、お父上、なんでわかったんだ？」

にこにこするセルディオと引きつるレティシア達。その間に耐えられなかったレティシアが聞いた言葉だった。
それを慌ててレティシアの口を手で押さえたリュシファーは言った。
「ばっ、馬鹿ッ。これは親父の戦法だっ――」
「――ほぉ…、やはりそうか…一足遅かったな、リュシファー。ははは…別に隠す事はあるまい。悪いことじゃあるまい。お前たちを見ていればなんとなくわかるさ……」
「えぇ、私は初めからそうじゃないかなと思っていたけどっ」

ソファーに座らされた二人にセルディオは、にこにこと微笑みながら話を聞いていた。
「――立場が怖くて恋心を消せる物だとは思わないがなぁ…。かけおちでもなんでもすればいい。といっても今回は勝手が違うな。…まぁ……なんとかなる――。全てが終わったらここに寄る様にな……大事な話をしてやろう」

「大事な話ぃ？　今じゃ駄目なのか？」
「――今は駄目だ。こっちも色々と段階っていう物があるからなぁ」
「はぁ？　まぁいいけど、とにかくそういうわけでコイツについているという訳だけど、危なっかしくて見ていられなくてなぁ…常にノープランだし、先が思いやられるからなぁ…」
「なッ何だそのノープランとか先が思いやられるとかっ。私だってちゃんと考えているのだっ」
　レティシアは何となくカチンと来てリュシファーに言ったが、やれやれとため息を吐いて言った。
「はいはい…悪かった悪かった。まぁ、とにかくだ。そんなわけで杖も回復して来て貰ったみたいだし、ひとまず安心だ。この大陸にあるフィナーテルの街付近にある“雷迷の遺跡”に向かおうと思う。そこにある“天罰の石”――それに雷の大精霊が眠っているだろうから…」
　リュシファーはやはり地理も知らないレティシアと違い、さくっとプランを立てていた様だ。
　セルディオとアリシアが少し深刻な面持ちで言った。
「そういえば、そのセルローズとか言う銀の髪の魔族が探していたのはレティシア王女だと言ったと街の者が言っていた。気をつけるんだぞ…。何かあったら死ぬ覚悟で守ってやれ…」

「――で、お前は何か考えていたわけ？」
　少しの間の後でレティシアは言った。
「い…いいから、行くぞっ。リュシファーの父上殿母上殿、世話になった――感謝する」
　レティシアは歩みを進めて外へと出て、家の外で赤い屋根のリュシファーの家を、リュシファーが来るまで私は眺めていた。

　次にこの家を見る時は、

芽を摘み取ろうとする追っ手を倒し、

――全てが終わった時だ――と、

私はそう思ったのだった――。

第四章終わり第五章へつづく。

【第四章】†ｅｐ．７　芽†††（後書き）

ついに４章がおわりました。
魔の者…不穏な気配ですね…。
相変わらずリュシファーの父は何を考えているのか、的が外れているようで心のうちではわかっているのでしょう。
でぁでぁ次回は第五章でお会いしましょう。
頑張って描いてますっ。読んでくれてありがとうございます。

お楽しみに。

【第五章】ラクロエ†ｅｐ．０　それぞれに†（前書き）

ネットがおかしかったのでやっとアップです。
エピソード１も夜中にｕｐします。

【第五章】ラクロエ†ｅｐ．０　それぞれに†

「なぁ、この塔何階まであるんだぁ？　ルクチェ～」
「うーん。そこまではわからないけど、でもそろそろだと思うんだけど」
「ふふ…、疲れちゃいましたか。ミグは」
ミュイエは一番後ろを続くミグを振り返り言った。
「疲れたも何も、疲労困憊ってところだ。さっきから魔物も多いし。魔物は外で元気に歩いていればいいんだ」
そう言ってうな垂れた様子でルクチェの後を続きながら、ミグはため息を吐いた。
「――あ、ねえ階段よ。目印が今までと違うわ」
ルクチェが指を差した階段の傍の壁、そこによくわからない古代文字の様な絵が刻まれているのだが、そこの絵は毎回同じだったが今回は違った。
「おっ。ってことはやっと“聖魔の石”に近づいたかもってことか…」
「そうね」
階段を上がった三人は、塔の頂上へと辿りついた様だった。
頂上には誰が炎をこんなところまで保持しに来ているのかはわからないが、中央に四方を松明の炎を囲んだ祭壇がある。風が穏やかに吹き、松明の炎が揺れている――。
「――こ、これが“聖魔の石”…なのですね」
ミュイエがその石を見てあまりの美しさに圧倒されていた。
サファイアの様に青く、ダイアモンドの様なカッティングが施されてあるその石は、少し大きな宝石の様である。台座にただ一つだけ置いてある石は、玉座に王が君臨するように存在感を持つ。
ルクチェが前に立ち、跪いた。
ただ目を閉じ、手を胸元で組んで祈る――。

その祈りに聞こえる声はルクチェに語りかける。

――巫女よ、…我はリザルト。聖なる力を導きたまえ。
魔の者は忍び寄る……。我らの希望の新芽を摘まんとする魔の手――。

その力の前に、今はどうすることも出来ぬやもしれん。
しかし、希望の光を見失う前に――、我を持ち、僅かな希望の新芽の元へと参られよ……――
そなたたちに僅かな我の加護を与えん。

そう語りかけた石は、淡い光を携えて浮いた。
一瞬パッと眩い光を放ったかと思うと、石は光を失いルクチェの手の内におさまった。
真剣な面持ちでルクチェの後姿を見つめていたミグが近寄る。
「――ルクチェ、今度は何て？」
一瞬ミグの方をはっとした表情で振り返ったルクチェは、深刻な面持ちで言った。
「新芽――摘もうとする魔の手――…、今は、どうすることもできないかもって…。き、希望の光を……見…失う前に…新芽の元へと――」
ルクチェは声が震えてしまい、動揺していた。
ミグの表情も驚愕した表情へと変わる。
「――せ・・・“静寂の滝”のところでは…そんなこと言っていなかった…よな？　えと、“急ぎ希望の光を讃えるため、我を持ち希望の元へ届けたまえ”だっけ？　な、なんだよ。新芽を摘もうとする魔の手…って」
「魔の者――と言っていたわ…忍び寄る魔の者と…」
二人の深刻な様子にミュイエは、自分もその表情を浮かべながら静かに塔から遠くを眺めた。
三人がいるのはムテール大陸――。

ルーセスト大陸からはるか西のこの大陸は、レティシア達が現在いるミスレイル大陸の南に位置している。精霊の女神レティシアがレティシアに言った場所を書いたメモを写していたところによると、流れ着いたここ――ムテール大陸には、偶然にも二つの石が眠る場所があった。

“静寂の滝”に『流水石』――。

“聖魔の塔”に『聖魔の石』――。

他には、

ルーセスト大陸には、“新緑の洞窟”に『大地の眠り石』――。

サンザルス大陸には、“紅蓮の洞窟”に『聖なる炎石』――。

そして――。

ミスレイル大陸には、“雷迷の遺跡”に『天罰の石』――。

メモをもう一度眺めながら、ミュイエはため息を吐いた。

「――ここまでレティシア達とはぐれた間に、二つ石を手にしました。…芽を摘まれない内に石を渡せと言われても、船が出ていないのではどうすることも出来ませんねぇ……。この大陸に訪れるのを待つしか――」

「……でも、きっとこの大陸に来るよ。アイツ、簡単にのたれ死ぬ様なヤツじゃないし――。

魔の者だかなんだか知らないけど、アイツはやられそうになっても睨みつけて屈したりしない。きっと大丈夫だ」

ミグの妙に説得力のある発言で、ルクチェとミュイエも少しだけ微笑んで頷いていた。

「そう――きっと、大丈夫…」

ミグはもう一度、遠くの空に思いをはせる様に眺めてそう呟いた――。

――――…

――――。

一方――。
レティシアとリュシファーは喧嘩をしていた。
「だーかーらっ、私だって色々考えていたと言っているんだっ」
「ほぉ？　じゃあこの大陸のこと知ってたのかぁ…いやぁ、城の中にいながら雷迷の遺跡のある場所を知っているとは大したものだなぁ…」
「く……、そういう地理のことは確かにわからないが、そんな言い方しなくてもいいだろうッッ」
少しだけ目に涙を浮かべてまで怒っているので、リュシファーは仕方なく軽く詫びてじゃあ何を考えていたかと優しく聞いた。
「――…意識的な問題だ。――このままではいけないとか心の準備の話だ。そういう石を探せだとかいうのはよくわからんのでお前に任せるが、私は今のままでは何も出来ないただのッッ…ただの……城を抜けてきた無知な――王女だ…」
歩きながら俯いたレティシアの顔を横から覗きこむと、悔しそうに下唇を少し噛んでいる。
かと思うと、レティシアは立ち止まって呟くように小さな声で言った。
「魔の者…セルローズ…それ以外にもたくさんいるんだ。あの様な者が…三人。私という芽を摘みに――。またやって来る…。さらに大魔神ザロクサスはその上をいくのだろう？」
「……」
「今のままじゃ――駄目なんだ。悠長に構えていては…ッ」
リュシファーは黙ってレティシアを抱きしめた。
優しく頭を撫でてやった。
レティシアは体を小さく震わせていた。
それは、怖れの言葉は吐かないが怖れでもあるとリュシファーは思った。
怒りかもしれない。自分の未熟さへの憤り、新たな敵の到来によ

り、レティシアなりに色々と思うところがあったのだろうと、少しからかった自分を反省していた。
しかし、強い――とも思った。
弱さを見せぬところはエルトに似ていると思った。
セルローズとの戦いの際、レティシアは窮地に立たされながらも敵を睨み続けていたと聞いた。
怖れを怒りに変えるのは大したものだ。
だが本人は気付いていないだろう。
それが怖れであったことさえ、今も怖れから生まれ出た怒りに体を震わせている事を。
リュシファーは言った。
「よし、じゃあ雷迷の遺跡へ急ごうじゃないか」
レティシアは顔を上げると前を力強い瞳で見て頷いていた――。
――……
――……

――セルローズよ……無様だな……。

『は…、も、申し訳ございません……』

――して、何故にお前ほどの者がエルフの街ごときでやられて帰還した…

『それが…ついに不穏因子らしき原因を突き止めました。それで、無様な格好をお見せしてでも報告しなければと、帰還いたしました――』

――それは真か……。して、どのような…。

『はい。一人の娘――…。強大な魔力を持っていました。私が稲妻

を扱う事も知らずに炎を放って来ましたが、その炎はかなりすさまじい威力でした。もしこれがブルガローズに向かっていたら、一溜りもなかったと始めに思いました。そして、それよりは威力は弱かったですが、風も放って来ましたが、その風に大精霊の姿を見ました――』

――な、何ッ!?　精霊界は我らが封印したではないか…何故ッ。

『――わかりません。しかし、確かに見たのです。僅かながらに不穏因子が妖雪の森付近で発見された時、力が大きくならぬ内に摘み取れと大魔神様は仰いました。ですが、ひょっとしたら何やら良からぬ動きがある様な気がしてままなりません』

――……わかった。お前はよくやった。引き続き様子を見ろ。状況がわかり次第報告をと、他の者にも伝えよ。あぁ、まだ殺すな。探して様子を見るだけでいい。

『――なッ何故です?　芽の内から摘み取れと――…』

――状況が変わった。こうなんというか、余興の様なものを見たくなった。
ただ征服するだけでは、つまらんからなぁ～…少し楽しませて貰おうじゃないか……。

大魔神ザロクサスと、雷鳴のセルローズ達四天王――。

――単なる余興――
不穏因子の存在はまだその程度のものだった――。
しかしそれが、――精霊の宿りし者――だということを、魔の手達はまだ知らないのであった。

レティシア、リュシファーの二人が向かうミスレイル大陸の雷迷の遺跡――。

移動できず留まるしかないムテール大陸にはミグ、ルクチェ、ミュイエの三人が、レティシア達二人がやって来るのを待つばかり――。

そして残るはサンザルス大陸の紅蓮の洞窟。

五人の行方はどうなっていくのであろうか。

それは神のみぞ知るのであろう――。

つづく。

【第五章】ラクロエ†ｅｐ．０　それぞれに†（後書き）

それぞれの会話を…
という始まり前のエピソード０でした。

【第五章】†ｅｐ．１　突然の寂しさと†

「なぁ……また戻ってないか？　同じところ……」
「そのようだな……」
フィナーテルの街で一泊して、雷迷の遺跡へと向かったレティシアとリュシファーの二人は、崩れ落ちた石造りの神殿の様な遺跡へと足を運んでいた。中は結構広く迷路の様になっていて、地下へと繋がっているらしいのだが、目印らしき物もない――。
お互いに左と右分かれて進んだというのに、どう頑張っても一回りして同じ場所に鉢合わせてしまう。
唯一目印といえば、この鉢合わせる中央の場所に石像が立っているだけである。
猫の様な耳としっぽのついたミュイエの様な容姿の女の像らしいが、その体のラインは全然わからない。
円柱にただ顔と体を刻んだだけの簡素な造りであった。
したがって何故か美しいというよりは、醜い――。
「むぅ、もうこうなったら稲妻で壊しちゃうっていうのは？」
「や、やめとけ。考古学者達が怒るぞっ」
「だって、こんな迷路みたいなところで一体何回ぐるぐる回ってお前と鉢合わせれば気が済むんだ」
はぁ……とリュシファーはため息を吐いて、少し思考していた様だった。
レティシアはその間退屈なので、石像に何か異変がないかをもう一度詳しく見ていた。
すると、石像の裏にひきずった様な痕がある。
「リュ、リュシファーひょっとしてこれ……動かせるのかも」
リュシファーが一緒にそれを見て、レティシアの頭を撫でた。
「たまにはお前も洞察力あるじゃないか。よし、動かそう」
そう言ってリュシファーは石像を引きずられた方向へと押そうと

手を添える。
しかし、レティシアはきっと睨みつけてしゃがんだまま動かない。
「一言訂正しろ」
「あ？」
「たまにはとは何だッ、お前はたまにいちいち余計な一言をっ」
「……はいはい。わかったから早く手伝え……一人じゃびくとも動かないみたいだ」
くすっと微笑んで呆れたようにリュシファーが言った。
ため息を吐いてレティシアも一緒に石像を思いっきり押した。
「えっ！？　きゃぁっ」
レティシアが押すのを手伝った瞬間に、石像は全然重くもなんともなくスッと動き、レティシアは石像に額をぶつけた。
「い……たたたぁ……ッ」
「だ、大丈夫か。お前意外と馬鹿力だな……俺今大して力入れなかったんだが」
リュシファーは座り込んだレティシアに手を貸してくれて起き上がった。
痛む額を手で押さえながらレティシアは言った。
「あぁもう、……全然軽いじゃないか……馬鹿力でもなんでもない」
そう言ってレティシアは先に下へと歩みを進めた。
階段を降りると、そこは暗闇が広がっていた。
当たり前だ。地下なのだからと思いながら人差し指に炎を出した。
小さな炎に照らされた地下は真っ直ぐに続いている様だ。
歩みを進めながら真っ直ぐ続いた先の中央に二人が進んだ時だった。
突然、足元の床が抜け、レティシアは悲鳴を上げながら落下した。
リュシファーの悲鳴も聞こえた。レティシアは咄嗟にフリシールを使い上昇しようと思ったが、何故か風は起こらずにそのまま落下し、足を着地したつもりが嫌な捻り方をした気がした。
そのまま身は傾き、ドシンッとレティシアは床に倒れた。

「うッ……痛―ッッ……、いったたたッ。足……捻った……かな……ッ、はぁ……」

人差し指に炎を再び照らして見上げると、大した距離でもないがとても自力では上がれない距離だ。

そして前を向き直ると、何か祭壇が遠くに見えるが近寄って見ないとよくわからない。

それは真っ直ぐにまた通路が続いた先にあったのだ。

ため息を吐いて立ち上がろうとしたが、やはり足を捻ったらしくその場に尻餅をついた。

フリシールの魔法を使おうとしても何故か身体が浮き上がらない。

リュシファーはどこへと見渡すが、後ろにも通路が続いているだけで何も左右にはない。壁だけであった。

「リュシファーーー！」

叫んでみるが、辺りはしんと静まり返っている。

ため息を吐いて仕方なく壁に手をつき起き上がる。

そしてレティシアは足をかばいながら壁伝いに祭壇の方へと向かった。

近づいていくと、赤い石が置いてある。

ひょっとしてあれが天罰の石とそう思った。よく見ると祭壇のある壁に文字が書かれている。

『天罰を受け入れようとする者、我を同時にその手に触れよ』

そう書いてある。

同時に――？　どういう事……？　二人で触れってこと？　とは言っても今は私一人だ。

ていうか、大精霊はいないのか……？　これ偽者なんじゃ……。

と疑わしい目で石を見つめた。

そして恐る恐る手で触れようとしたが、突然ピシっと静電気の様な稲妻が石の周りに発生し、レティシアは慌てて手を離した。どう

やら触れさせてはくれない様である。
「もーーーっ意味がわからんッッ！　ココまで来たのにっ」
そう言った時だった。壁の奥からリュシファーの声が聞こえてきた。
「おーい、レティーッお前そっち側にいるのか？」
「あぁーいるーッリュシファーッ、足を挫いたからあまり移動できないし、フリシールも使えないんだーッ」
「……後で診てやるー。それよりッ、お前の所にも祭壇と青い石があるかーッ？」
そうリュシファーが聞いて来たが、ここにあるのは青い石ではない。
「いや？　赤い石だー。同時に触れよって書いてあるー」
「お前のところにも書いてあるかー、多分、そっちとこっちの石、同時に手に取ればいいんだと思うんだーやってみよう」
「そっか。同時ってそういうことか……！　わかったー」
レティシアは石を見つめて、リュシファーの言う「せーの」の声に合わせて赤い石を手に取った。
途端にゴゴゴゴゴ……という音を鳴らしながら地が揺れたかと思うと、祭壇が右にずれて行く。
「！」
ずれた先にはリュシファーの姿が見えた。向こう側の祭壇も同じ様にずれたらしく、通路が繋がった様だった。
赤い石がレティシアの手から離れ、リュシファーの持つ青い石もその手から離れ、二つは宙に回り始めた。赤い石からは赤い光、青い石からは青い光が発生し、石はどんどんと回る速度を強めて、そこに見える二つのその光は次第に重なり合い紫色に見えていった。
素早く回りだした石がゆっくりとその動きを弱めていった時、石は不思議と一つになっていた。
石は赤と青が混ざった様に紫色の光を纏い、一瞬眩しく光を放ったのでレティシアは目を閉じた。

光がおさまり目を開けた瞬間に見えた、目の前の紫色がかった銀の髪の短い綺麗な女性。

気の強そうな顔立ちをして、真っ直ぐにレティシアを見据えるその姿は半透明だ――。

ミュイエのように猫の耳としっぽのようなものがついていて、おそらく大精霊に違いなかった。

大精霊はその場にひざまずいた。

『ラクロエ様――お待ちしておりました』

リュシファーは怪訝そうな表情でレティシアを見ていた。リュシファーにはこの大精霊の姿が見えていないらしい。

「――雷の大精霊……か？」

レティシアは言った。

『はい――。雷の大精霊、イシュタリスです。――ウレハ、女神レティシア様お久しぶりでございます。それに、セイレシルも……。ついに、この時が来たのですね』

その声に穏やかな風がどこからともなく吹いた気がした。

そしてウレハが言った。

『――えぇ、久しぶりです。イシュタリス。ラクロエ様はこの通りちゃんと転生して無事我らとともに…助ける者たちもラクロエ様を援護し、あなたも含めて我らの守護は三人となり、残る大精霊達も三人……』

――すでに、魔の者も動き始めました。どうやら思ったより早かった様です。

精霊の女神レティシアの言葉に、レティシアははっとして鋭くイシュタリスを見据えて言った。

「イシュタリス……力を貸して欲しい……」

イシュタリスはそのレティシアの瞳に、微笑を浮かべると静かに

言った。

『勿論でございます。ラクロエ様の盾となり、力となりましょう。このイシュタリス、あなたを守護いたします――』

パァッと眩しい光が視界を遮ったかと思うと、レティシアはその場に倒れていた。

――――……

――……

――ん……。

「……あ、れ？　ここは……」

レティシアがそう言った時だった。

「気、気がついたか…もう、驚いたぞ。一人で何かと話していると思ったら倒れたのだから」

「あ……ごめん。雷の大精霊が現れて話をしていた……力を貸すと言った瞬間に意識が遠くなって……」

レティシアは起き上がると、辺りを見渡した。

先ほどからどうも身体がふわふわとすると思っていたが、この部屋の感じはどこかで見た事がある気がした。そして、窓の外を見て気付いた。

「あれ？　ここは？　船の中！？」

「そうだ。よくわかったなぁ――。今はムテール大陸へと向かっている。船はロンダルト海域は閉鎖されているが、ミスレイル大陸とムテール大陸を結ぶセレス海域は特に問題がないということで、開放になった様なのでな。気絶している間に、なんとか次の大陸へと準備してましたよ。足ももう捻挫治ってる。本当にお前は怪我が耐

えない。俺がいて良かったな」
リュシファーが得意気に微笑んだ。
リュシファーがおさらいのためにレティシアに見せた地図にペンで書き記してある文字を見せた。
ムテール大陸に水と聖の文字が書かれている。
ミスレイル大陸には雷の文字。サンザルス大陸には炎の文字。
そしてルーセスト大陸には大地の文字と、エンブレミア王国の場所に最初からレティシアに宿っていたという風の文字が記されてあった。
なんというマメさだとレティシアは感心した。
そしてもう一つ言った。
「それと、ミグたちがいる可能性も高い」
「どうしてだ？」
「――はぁ……、ロンダルト海域で嵐が発生。その左右には俺達が非難したルーセスト大陸と、ココ。俺達が今向かっているムテール大陸がある。ここに飛ばされた可能性は非常に高い――というわけだ」
「な、なるほど……お前、本当に頭に辞書入ったみたいなヤツだなぁ。ちゃんと、考えてるんだなぁ。そんな様子ないのに、いつ考えているのかは知らんが――」
レティシアはそう言ってベッドを降りた。そしてドアの方へと歩みを進め、ドアを開いて立ち止まってから言った。
「――助かっている。感謝する……ちょっとトイレへ」
そう言ってレティシアはトイレへと足を運んだ。
リュシファーはふっと微笑んだ。
何も変わらない――。あいつは……。と思っていた。
それでも見ていて少しだけ思う。
時々、素直に礼を言う時が増えただけ信頼は深まっているなと――。
――……

甲板――。

「はぁ……イシュタリス――お前の力はかなりの物だな……気絶するとは思ってもみなかった」

『おや、ラクロエ様の方が凄い力をお持ちの筈なんですよ。まぁ、まだ少し成長途中ですからきっと身体が驚かれただけです』

「――まだ未熟、そう言いたいのだな……」

『…い、いえ、私は別に…仕方がないではないですか。炎の精霊の子でありながら炎を怖れ魔法をまともに勉強してこなかったんですから…』

“――そうです。魔力が少しまだ低いのですよ……。”

そう横から入って来たのは精霊の女神レティシア。

『お、お二方、…そうは言ってもラクロエ様もしっかりと成長して来ておられるのだから、そう仰らずに』

遠からず近からず二人でレティシアの魔力が低いと言うことに、ウレハが優しくフォローをしているがあーだこーだと論議が始まっている。

「はぁ……人の心に住む住人がさすがに増えると騒々しいな……はは……」

思いっきり聞こえていないふりをするかの様にレティシアは言った。

甲板の手すりに腕をかけ、海風に当たりながらレティシアは少し伸びた緑石色の髪に触れた。

ミスレイル大陸やムテール大陸はエンブレミア王国から少し距離がある遠い国。したがって正体を知る者もいないだろうと髪色と瞳を元に戻したまま過ごしていた。

そういえばここにこうしてミグと話していたのがなつかしいとレ

ティシアは思った。

『何してるんだ？』

『いつか、一緒に冒険の旅に出れたらいいなぁ』

『――どうしたぁ？　浮かない顔して』

『あはは、なんとかなるって』

『風邪引くぞ。そんなとこにずっといたら』

ミグの言葉が頭に次々と浮かんでくる。

思えば、ミグの部屋にレティシアは行ったことがない。

いつもミグはレティシアの部屋にノックもナシで入ってきて話をしに来てくれていた。

いつも、一緒だった。

こっそり魔物退治に行った時も一緒。怒られるのも一緒。ずっと小さな時からいつも一緒だった。

でも――今はいない。一緒にどうでもいい話をしたりすることが、普通だった。

ミグはいつも自分を気にかけていてくれていたこと――。

前のミグと同じに切って貰った髪の毛は大分伸びてしまったと、その指で髪に触れていた。

そして――。

なんだか、寂しい――。

レティシアは物哀しげに遠くを見つめながら、そんなことを思っていたのだった――……

――――……

――……

「レティ、あともう少しで港に着くぞ」

リュシファーが言った。
甲板から帰ってきて、リュシファーと夕食を食べに食堂に行き少し話をしていたが、食堂の窓から見えた小さい島々に灯る灯台の光に、レティシアは驚愕した。
「えっ！？　もう？」
リュシファーはため息を吐いて言った。
「お前というヤツは……。雷迷の遺跡にいたのは着いたのは昼前。倒れてお前が気がついたのが日が沈む前だが夕方近くかもしれんが、船には三時頃に乗ったんだ。ミスレイル大陸とムテール大陸は近くてな。だから船も開港したんだろう。それでもざっと六時間か……」
「へー。じゃ、今、夜の九時？」
「あぁ、そうだ。あと２０分くらいでつくだろう。しかし、夜じゃ何も出来ないからドーラの港町に一泊するしかないな。行動は明日だ。少しドーラの港町でも観光してみるか？　夜とはいえ港町は賑やかだ。それに、ミグたちもいるかもしれないしな」
レティシアはその言葉に顔を輝かせて頷いた。
ミグたちがいるかもしれないと聞いて、いてもたってもいられなくなり部屋へ早く戻って荷物を片そうとリュシファーをせかした。
リュシファーは呆れたようにゆっくりと席を立ってレティシアに続いた。

ドーラの港町――。
夜だというのに賑わったその港には、様々な人が様々な想いをはせながら船の到着を待つ。
しばし離れていた恋人との再会。帰郷して来た息子を迎える者。やっと航海を終えた船乗りの夫を待っていた者――様々な者が温かく船から降りる者を歓迎している様だった。
船の運行の復旧は、レティシア達が乗る前日に開始したばかりでやっとのことだったのだ。
前日から船はほぼ満員状態で、リュシファーが買ったチケットが

最後の二枚だったと後で言っていた。
立ち並ぶ店の明かりは夜だというのに灯り、眠らない町と言いたくなる風景だった。
ひとまず宿を取るためにホテルを回る。

「申し訳ございません。満室でございまして……」

この台詞を何度聞いただろう。
ため息を吐きながら、ホテルの入り口を後にする。
リュシファーとレティシアは最悪外で結界を張ってコテージで休もうという話までしていた時だった。
「――イヤッ、離してッッ……嫌ッッ」
という女の声。
町の端っこに近い辺りにあるホテルにまで空室を尋ねに向かっていたレティシア達は、その声の方向に視線を向けた。見ると柄の悪そうな男が大人しげでか弱そうな女性を路地に連れ込もうとしている。
レティシアは、だっと走って叫んだ。
「こらーッッ、お前ッッ何してるッッ！　嫌がっているだろう！」
その様子にリュシファーはため息を吐いてゆっくりと後をついて行く。
柄の悪そうな男がレティシアを見るなり、女性の手を離す。
「なんだお前――……おっ……？　こ、これは威勢がいいお嬢さんだが驚いたな。なんて綺麗な顔だ。まだ子供の様だがそれはそれで、なかなか可愛いな」
その言葉にレティシアはきっと男を睨みつけて言った。
「――おい……今何て言った……」
その言葉は冷淡に言われ、目は男をきっと睨みつけており、男は

思わずびくっと体を硬直させた。
「なッ――なんて目をしやがる……ガキの癖に……ッ」
そう言った時、女性は男の隙を見てレティシアの後ろへと非難した。
「あっ……おい！　ちっ、てめぇ……ちょっと可愛いからって邪魔しやがって――」
男がそう言って怒りを露にして、レティシアに襲い掛かろうとした時だった。
目の前を走る紫に発光する線が織り成す防壁――。
その防壁に手をついた男の視界を奪う稲妻の曲線の数々。体を駆け巡る熱と痺れと痛み――。
「わあああああッッ！」
睨みつけたレティシアの目の前には稲妻で出来た防壁が存在していたのだった。
雷の大精霊イシュタリスのふふっと微笑む声が頭の中で聞こえた。
『――威勢がいいのはどっちかしら？』
イシュタリスは割と血の気が多いらしい。勝気な台詞を吐いている。
「何もそこまでしなくても」とレティシアはイシュタリスと少し会話していた。
しかし、怒りにまかせ少しこの者に思い知らせてやろうと力を使ったことは確かであった。
イシュタリスは自分の意志に同調して応えたまでだったと思いなおし、ため息を吐いた。

一方。リュシファーはその様子に唖然としながら立ち尽くした。
な……何ッ！？　防壁の張り方なんて教えていないぞ……いつの間に……ッ
レティシアは目の前に倒れた男の上に片足を乗せると、ふっと微笑んだ。

「今度、私を子供扱いしたら次は知らんッ、ふんっ」
男は足元で苦痛に顔を歪ませながらなんとか頷いていた。
よしと気が済んだレティシアはリュシファーに向き直り、その場を去ろうとしたのを女が呼び止めた。
「あぁっあのあのッッ、お、お待ちくださいッッ。た、助けていただき本当にありがとうございましたっっ。黙って行かれるなんてそんな、何かお礼をッッ」
「――礼？　礼なんてよいよい。別に困っているわけでもな――あ、まぁ唯一困っているといえば宿が空いてなくて困っているというくらいだ。はは…それより大丈夫か？　怪我はないか？　怪我があったらリュシファーが治してくれるから、少し診て貰うといい」
そう言ってレティシアはリュシファーの元へと女と一緒に歩みを進めようとした時だった。
「ぁ、あのっ、私の家でよろしかったらお泊め致しますっっ！　助けていただいたのですから、大したことじゃないですがお礼させてください……っ」
「ヘッ？　本当ッ？？　いいのか？」
「はいっ」
――こうして、このことがきっかけで宿を確保出来た二人はシーシェルというこのおとなし気な雰囲気の女性の家へと足を運んだ。
シーシェルの家は何故か民家よりも大きくて、家というより屋敷だった。玄関を入って真っ直ぐの壁には、船の碇の形をしたオブジェが飾られている。
それに目を留めて立ち止まるレティシアにシーシェルは言った。
「あ、それ……。私の父、船を所有しているのです。あなた方もどこか他所から来たのでしょう？　多分父の船でやって来たのだと思います。ふふっ。さぁ、こちらです」
シーシェルは薄桃色で巻き毛の髪を揺らしながら微笑んで二人を居間へと案内した。
お茶を淹れにシーシェルはキッチンへと足を運び、二人はソファ

ーへくつろいだ。
　少しだけレティシアは伸びをすると息を吐いた。
「はぁ……こんなに宿が空いていないとは思わなかったなぁ」
「はは……仕方ないさ。まぁなんとかなったんだから幸運を感謝しなければな……」
「――お茶が入りました」
　レティシアはシーシェルが入れてくれたお茶を微笑んで受け取った。
「シーシェル、本当に感謝する。助かった」
「いえ、助けられたのは私の方ですわ。こんなことでお礼が出来るなんて、まだ申し訳ないくらいです」
　なんて控えめな穏やかな女性なのだろう。なんだか癒される様なそんな感じだと思った。
　そのシーシェルの微笑みはマリアにどことなく似ている気がした。
「あ、でもとても聡明な魔法使いさんなんですねぇ。女の子なのに大丈夫なのかしらと不安だったんですが、驚きました」
「あぁはは、いや、そのつい子供扱いするので無気になってしまっただけだ……」
　レティシアが少し照れて言っているので、リュシファーは少しふっと微笑んだ。
「えと、リュシファーさんでしたっけ。リュシファーさんとレティシアさんはどうしてこの大陸に？」
　シーシェルが聞いたので、レティシアは静かに言った。
「人探しも兼ねて少し用事があって来た。双子の兄のミグという者を探していてな……多分この大陸にいると思うんだが――」
　そこまでレティシアが言った時、シーシェルが「あっ……」と小さく呟いた。
　レティシアとリュシファーはその様子にシーシェルを見て気付くことでもあったのかと尋ねた。
「いえあのっ思い出して。三人の旅の方たちの中にすごい美少女が

いて、『私と同じ顔をした女の子を知らないか』と尋ねられたんです。でも、双子のお兄さんならば多分、別の方ですね。でもその女の子、髪の色は違いましたけど顔がそっくりだったので――」

「そ、それって――……！」

「まさか……！」

間違いないと二人は頷いたのに、シーシェルは少し驚いた顔をしていたが、レティシア達はその女の子の特徴を聞いた。

髪はピンク色、瞳は紫水晶の様な紫色だとのことで、それは間違いなくミグの姿だとレティシアは思って更に聞いた。

「あ、はい、でもそれは二日程前のことで、ひょっとしたらもうこの町にはもういないかもしれませんが……確かにその方が変装されているレティシアさんのお兄さんならば、きっと私もすぐに見かけたらわかる筈ですから。私も気にして見てみます」

シーシェルはそう言ったが、レティシアは少し肩を落とした。

ため息を吐いたのをリュシファーがやれやれとため息を吐いた。

「あぁ、頼む。まぁちょっと明日、用があって出なくてはならないので今夜はすまないが、もう休ませて貰うことにしよう」

「あ、はいっ寝室はこちらです。どうぞごゆっくり」

「――ありがとう」

シーシェルに礼を言ってレティシアは寝室の窓から外を眺めた。

リュシファーが後ろからレティシアの肩を、ぽんぽんと優しく叩いた。

「……リュシファー……」

「そんな寂しそうな顔するな…すぐに見つかるさ……」

「――早く休め。私は今日結構寝ていたからな。もう少しここで外を眺めてから寝る」

「そうか……じゃ、お先に……」

リュシファーが寝静まってから、レティシアは窓の外に風に乗って出た。

シーシェルの屋敷の屋根に上り、一人考えていた。

ミグ……早く会いたいな…なんか急に寂しくて――。

離れている時間が長いせいかな――どこにいるんだろう。

ルクチェもミュイエも元気かな……。

もし、この町でリュシファーがいなかったら、誰も私を知っている人はいない。

今は一人じゃないのに、やっぱりミグがいないと何かおかしな感じがする。

双子ってそういうものなのかなぁ……そういえばミグは私が泣いている様な気がしたとか、何かあった気がしたとか言って不思議にも気付いて声かけてくれていたなぁ。

今ミグは私が寂しいのを、どこかで気付いているのかなぁ。あはは……私なんだか今日おかしいや。

もう寝よう……。

はぁ、とレティシアはため息を吐いて最後に呟いた。

「――おやすみ、ミグ……」

――夜空には星は雲って見えなかったが、

雲に隠れた月明かりだけはぼんやりと辺りを照らしていた。

つづく。

【第五章】†ｅｐ．１　突然の寂しさと†（後書き）

★やっとアップしました。
ネット調子悪いみたいで、とりあえずアップしましたが、再会が近そうな感じですが、これからどうなるのかお楽しみを。相変わらず誤字とか修正必要箇所が多くてすみません。
読み直して気付いた所は直しております（汗）
ではでは。りんごでした。また次回。

【第五章】†ｅｐ．２　歓喜†（前書き）

ふぅ。やっとエピソード2アップです。
校正出来てないですが、見つけ次第直したいと思います。

【第五章】†ｅｐ．２　歓喜†

明朝――。

居間へ行くなりレティシアとリュシファーは驚愕していた。

「おおっお前たちが娘を救ってくれたのかぁっ。がっはっはっはっはっ！　いやぁ～礼を言おう。コレは俺特製の海の男朝食だっ。さささっ、たーんと食べてくれっっ！」

圧倒もしていただろう――。出された料理と、もちろん豪快な性格のシーシェルの父にも。

海と船自体が好きなシーシェルの父は、船を持つだけではなく自分も航海に出ているらしい。

そして、朝から『料理は得意だ』と娘を救った客人のために腕を振るい、この美味しそうだがなんとも物凄く量の多い『海の男朝食』なる食事を作ったのだという。

焼いただけの魚がどーんと真ん中にあり、その周りに海老のカクテルサラダやパンやパエリア、そして魚介のミネストローネスープなど、朝食べるにしては量が多いしパンか米か統一もされていない。

二人は圧倒されながらも手をつける。

味はとても美味しいので思わず微笑んで食事は進む。そんな中でレティシアは口を開いた。

「お、お父上は船乗りもしておるのか。シーシェルがこうおしとやかなので物静かなお父上を想像していたというのに、イメージと違うな。はは……」

レティシアはリュシファーに『失礼だろ…』と呆れた様に叱られたが、シーシェルの父はそれに豪快に笑った。

「がっはっはっはは、いやぁ俺はそういうはっきり言うヤツは大好きだぞぉ。確かにちげぇねぇや。俺がシーシェルの父親とは確かに想像できんだろうな。がっはっはっはっは」

シーシェルが苦笑しながら、リュシファーにすみませんと目配せ

していた。
「――それはそうと、レティシアちゃんと言ったなぁ。いや驚いたなぁ。前に実はどっか、エン……なんとかって国の兵士だとかいう奴に尋ねられたんだ。『見なかったか』ってな。同じ名前の王女様と双子の王子様も一緒に城から逃げ出したらしくてな……。何でも、探しても全然見つからなくてお手上げ状態だとか言っていた――」
ぎっくぅ……！
ま、まずい。こんな所にまで捜索の手が……っ。
レティシアがそう焦って脳裏で冷や汗を垂らしながら駆けずり回っていると、シーシェルの父親はふっと微笑んで言った。
「――髪の毛の色は澄んだ翡翠みたいな緑石…色だったかな。要は黄緑色ってことだろう。俺の勘が間違いなければだが、お嬢ちゃんは、何かこう、一般人って感じがしないんだよなぁ～。色白で、妙に綺麗な顔してるしなぁ、大体『お父上』なんて言うのは貴族か王族くらいだろう」
レティシアは唖然とした――。
シーシェルの父は、がさつで何も考えてなさそうな豪快な者だと思っていたら、結構洞察力がある様だ。鋭い勘だ…。
とレティシアは思っていたが、多分誰が見てもそこは違和感を感じるところであろう。
「――おおかた、そちらのリュシファーさんは“護衛”というところか……まぁなんだ。娘を助けて貰ったわけだから、そんな焦った顔をしなくても別に公言なんてしないから安心してくれ……。それにイエスかノーも言わなくていい――。これはただの俺の憶測だからな……がっははははっ」
そう言ってシーシェルの父は意味ありげににっと微笑んだ。レティシアは少しだけほっとしていた。リュシファーをちらっと見ると、リュシファーも同じ様に安堵している様子だった。
「――そうそうシーシェルから聞いたが、その…双子の兄貴を探しているらしいが、はぐれたのか。とにかく、町の者や船員たちにも

声をかけておこう。その三人を見たら報告するよう言っておいてやるさ。女の子の格好をして目暗ましとはよくやるなぁ。がっはっはっ」

レティシアは豪快な笑いに圧倒されながらも礼を言った。

にっこり微笑んでシーシェルの父は『いいってことよ』と答え、更に言った。

「――これから、どこまで行くのかは知らんが、もしこの辺で宿がなかったり何か困った事があればすぐに家へ来るんだ。お前たちは娘の恩人だ――何でも力になってやる。それにおてんばな王女様…おっと言っちゃいけないなぁ。とにかくそんなご身分だというのに、城を大騒ぎさせてまでこんなところまでやってくるなんてぇ心意気が応援してやりたくもなるじゃないかぁ。お前達の頼みなら大歓迎だっ」

シーシェルの父はそう言っておきながら、間髪いれずに「さあさあじゃんじゃん食え」と言ってやはり『がっはっは』と豪快に笑っていた。これでは返事をする暇もない。

――しかも、先程は憶測と言っておきながら、もう完全に王女だと理解してしまっている。レティシアは引きつった笑みを浮かべながらもこう言った。

「あ……はは、ありがとう……」

そして、シーシェルの父親の作った大量の料理をなるべく残さないよう食べたが、やはり少し残した。さすがに多かった――。親切な者たちだったなとレティシアはシーシェルの家を後にしたのであった。

シーシェルの家は港に近く、町の出口まで結構な距離があった。相変わらず凄い人がいるなと、そこをリュシファーと歩いている時だった。

前方を歩いて来る女の子――。

その女の子を見てレティシアは驚愕した。女の子はきょろきょろと周りを見ながら一人で歩いている。人混みの中遠くに時々ちらちら

らと姿を見せるだけなのだが、レティシアは立ち止まってじっと先を見てその女の子を目で追った。

――ピンク色の髪の毛、――背丈はレティシアと同じくらい。その女の子は真っ直ぐ道沿いにこちらへと向かい歩いて来る。しかし突然女の子はレティシアと同じ様に立ち止まりこちらに視線を向けた――。

「ん？　お、おいレティ、なんだ急に立ち止まって――？」

リュシファーが人混みの中で突然立ち止まったレティシアに声をかけるが、聞こえていない様子だ。

同じ方向を見てみても、人混みが続いているだけだ。首を傾げた次の瞬間、レティシアは突然走り出して行ったので後を追う。

しかし――。レティシアは真っ直ぐにピンクの髪の女の子へと向かい抱きついた。

驚愕してリュシファーは少し足を止め少しずつ近寄ってすぐに理由がわかった。

そのピンクの髪の女の子はレティシアを抱きしめ、リュシファーは、ふっと安堵したように微笑む。

「――レティッ！！　やっと会えたぁ～ッッ」

その言葉に、レティシアはミグに抱きついたままこくこくと頷いて返事をした。

レティシアは嬉しさのあまり、ぼろぼろと涙を溢して泣いていたのだった。

「――あはは、しょうがないなぁ……。寂しかったのかぁ？　よーちよーち」

「……ひっく、ん……っく、……こども扱い……ッ、――するなっ……馬鹿……ぁっ」

「ははっ、相変わらずだなぁ。お、リュシファーも久しぶりっ。無事だったか……なんでそんなところに立ってるんだぁ？」

ミグがレティシアに抱きつかれたままで調子よくリュシファーに挨拶をした。
リュシファーは近寄ってきて、レティシアの頭をわしわしと撫でて呆れた様に言った。
「いや……再会の、邪魔をしては悪いかと思ってなぁ……。はは、こいつ昨日から突然すごく寂しそうだった……。――会えて良かった……」

リュシファーは照れくさいような困った微笑みを見せ、立ち話もなんだからということでカフェに入った三人。
まだ泣いてミグに抱きついたまま離れようとしないレティシアとミグが並んでテーブル席に座り、向かいにリュシファーが座っていた。
「レティ、なんだ今日は甘えんぼさんだなぁ……。そんなに寂しかったのか？」
「！　……べ、別にっ。――すっ、少しだけだ……っ」
そう小さな声で言ったままミグの服をぎゅっと握り締めていた。
ミグとリュシファーの二人は苦笑しながらこれまでの経緯を話していた。
ミグたちは三人ムテール大陸の西に位置するランガラフの港町付近へと流され、そこから北にある“水紋の滝”にある『流水石』を取りに向かい、さらにはるか東にあるドーラの港町付近にある“聖魔の塔”にも足を運び『聖魔の石』も取ってきたらしい。
とりあえず二人がここに来るのをこのドーラの港町で待ってみようという話になったらしいのは、ミュイエの意見らしい。
ルーセスト大陸側へと向かうロンダルト海域側はしばらく運行の予定が未定だったが、ここムテール大陸とミスレイル大陸を結ぶ小さな海域――セレス海域は、嵐が起こった海域とは関係がなく近々開港するかもしれないと聞いていたらしく、もし二人が来るならこっちの港町だ――とミュイエは踏んだようだ。

それと石はルクチェが持っていて、ルクチェ達はホテルにいるらしい。

ミグから離れずにレティシアは口を開いた。

「……じゃあ、それを受け取れば残るはあと一つということか……？　えと、炎の洞窟だっけ」

「――はぁ……」

リュシファーが呆れたようにため息を吐いたので、レティシアは片眉を吊り上げた。

「――サンザルス大陸、“紅蓮の洞窟”の『聖なる炎石』だ…まぁいい。とにかく、残るはその一つというわけだ」

リュシファーがレティシアの間違いを訂正して、深刻な表情で言った。

「しかし、問題がある。俺はそこの大陸には行ったことがない。したがって、転移の杖は使っても意味がないということだ。行く手段がない――。どうしたものかなぁとずっと考えてはいるんだが。結構遠いからなぁ。飛んでいくわけにもいかないだろうし…」

と額に手を当てて頭を悩ませている様子だったが、ミグはあっけらかんとこう言った。

「――なんとかなるって、じゃそろそろホテルに戻ろう。ルクチェたちも心配してたし、そういうことなら早く守護して貰った方がいいだろう？」

「あ……あぁ、まぁそうだが。相変わらずノー天気だなぁお前は……」

「考えてたってわからないことはわからないんだよ。ま、後でゆっくり考えよう――」

レティシアはミグのその台詞も久しぶりに聞いてなんだか嬉しかった。

ミグに連れられ、二人はカフェを出るとホテルへとやって来た。

ガチャっとミグドアを開けて調子よく言った。

「へっへーん。ルクチェさんっミュイエーっ、ついに見つけたーっ」

その声に二人が駆け寄ってきて、五人は久しぶりの再会に歓喜した。

経緯はミグから聞いていたので、こちらの経緯を話すとルクチェが深刻そうな面持ちで言った。

「――ラクロエ……？」

その表情は明らかに動揺の色も伺えたので聞き返したが、ルクチェは笑って誤魔化していた。

「あぁぁ、いや、何でもないわ。あはは…ただ、ちょっと聞いたことがある名前の様な気がしたけど気のせいだわ。えと、それでそうそう。石――。これよ――」

そう言って差し出された青いサファイアの様な色の石と、水色に澄んだ石をレティシアの前に差し出した。

石はそれぞれ青い光と水色の光を眩しく放ち、目をくらませたかと思うと、そこにひげを生やした青い光を纏った厳しそうな面持ちのお爺さんと、水色の光を放った体のラインが何やら色気を持った人魚の様な女性が姿を現わした。しかし…問題はここからである。

『――おぉぉラクロエ様……ついにお会いできましたなぁ。どうやら女神様も他の者たちも一緒の様で。よかったよかった～勢ぞろいじゃなぁ～』

『リザルト様？　一人まだいませんわ。炎のフレイ様がま・だ・で・す・よぉっ。ふふっ』

『――あぁ、そうじゃったそうじゃった。わしゃ最近物忘れがひどくていかんなぁ～。ま、とにかく守護させて貰いますぞぉ。わしは聖を司る聖の大精霊リザルトと申しますじゃ。そして、こっちのかわいこちゃんが水を司る水の大精霊のリーヴァちゃんじゃ』

『ちょ、ちょっとぉリザルト様私の台詞をとらないでぇっ。あ、でもまぁ。そおいうこ・とっ。よろしくねっ。私達、ラクロエ様の守

護しますからぁ～ふふっ』

・・・・・・・・・・・・。

レティシアはぽかーんとあっけに取られていた。

リザルトという聖の大精霊は、厳しそうな面持ちだというのに話を聞く限りレイモンドの様に怖い雰囲気を微塵にも感じられない。それどころか、なんだか…ただの陽気なお爺さんといった感じだ。

そしてリーヴァという水の大精霊は、セクシーな風貌なので色気むんむんな性格なのかと思いきや、くねくねと尻尾を揺らしながら、甘く可愛い声でリザルトとじゃれ合うように話す。

こ、この二人は本当に大精霊なのか……？　い、意外すぎる……。

とレティシアが考えているとウレハの笑い声がする。

『――ラクロエ様も、さすがにこの者たちの様子には呆れていらっしゃいますか。ははは。心配なさらずともちゃんと大精霊ですから、性格はこんなでも凄い力を持っていますからご安心を。陽気な方たちなのですよ』

「そ、そぉなのか……あはは……ちょ、ちょっとびっくりしただけだ……別に疑ってなどおらぬ……はは」

そう言ったレティシアの顔は引きつった笑いを浮かべていた。

レティシアのそんな様子に二人の大精霊はくすくすと笑い始め、

『ほらーリザルト様のせいで印象が悪くなっちゃったじゃなぁい。もぉっ』だとか『はっはっは。まぁ堅苦しい者たちばかりではないということじゃ』と何やら言っている。

ため息を吐いてはいたがその様子にもだんだんと慣れてきたレティシアは次第に楽しそうな大精霊達だと思い始めていた。

『では――呆れほうけられる前に、そろそろ儀式といこうかのう』

『そうねっ。ふざけてる場合じゃなかったわぁ～』

そう言うと、リザルトとリーヴァの二人は、互いに真剣な面持ちに戻して言った。

『――我、聖の大精霊リザルト。ラクロエ様を守護致しますぞ』

『――我ッ、水の大精霊リーヴァ。ラクロエ様を守護致しますッ』

そう二人が声を重ねて言った時だった。

眩い光にレティシアは耐え、光がおさまった時には身体が息を切らすほどに体力を消耗していて、体が重くなりその場に崩れた。

「れ、レティ！！　し、しっかりしろ……ッ。大丈夫かッッ」

ミグのその言葉にレティシアはかろうじて答えた。

「……駄目だ……、なんか、さすがに大精霊を二人同時に受け入れるのは……力が大きくて、しんどい……みたい」

その様子にとりあえずリュシファーがひょいとレティシアを持ち上げて、ルクチェも部屋の中の寝室のドアを開け布団をめくって手伝ってレティシアを布団に寝かした。

「……少し休むといい。後で様子見に来てやるから」

「……すまない。あ……えと、ミグ……、呼んでくれないかな？」

レティシアは弱々しい声でリュシファーに言った。

ふっとリュシファーは微笑むと言った。

「――了解」

――……

――…

「――俺さぁ、昨日夜中にさ、お前が寂しがってるんじゃないかなと思ったんだ…」

「え……っ」

「はは、なんとなくだ――」

「……」

レティシアは何も言わなかった。

ミグは同じ布団で寝て話をしていた。こうやって話すのも久しぶ

りだった。
　答えないレティシアにミグは手を頭の後ろに置いて、ふっと微笑んでから静かに言った。
「――そんでもってさ、俺も…なんだか少し、寂しかった……」
「ミグも……？」
「あ、やっぱり寂しかったんだなぁ？　ははっ。でも、なーんとなくなぁ……寂しかった。で、朝にちょっと一人で探してみようかなぁと町に出たらお前に会えた……。不思議だなぁ」
「……うん。不思議だ……」
　双子には――きっと不思議な何かがあるのかもしれない。
　他の人には理解できない何かが、絶対にあるとレティシアはその時思っていた。
　とにかくやっと会えて良かった。やっぱりミグとこうしていると、安心する――。
　そう思った時だった――。

『――かーわええのぉ……。ラクロエ様と人間界でのお兄様のミグ殿。……兄妹ってええのぉ……』
　聖の大精霊リザルトの穏やかな声が聞こえてきた。
　そして次に、勿論、水の大精霊リーヴァの声。
『んもぅっ。駄目よぉ、リザルト様っ。聞こえちゃうでしょぉ？　せっかく久しぶりの再会を喜んでるところ邪魔しちゃだ～めっ』
『――おおそうじゃったそうじゃった。すまんすまん。わしゃ最近涙もろくていかんのぉ』
『あらやだ、リザルト様ったら』
　レティシアはミグには聞こえていないこの声達に、引きつった笑みを浮かべた。
　その二人によって雰囲気はぶち壊しである。
　しかし、そういえば、再会を浸っている場合じゃなかったなぁと

レティシアは思った。
はぁ……とため息を吐いてレティシアは、ミグの隣で少し眠ることにしたのだった。

レティシアは目を覚ました昼の三時頃に、ミグと二人でフリシールで港へ向かっていた。
港で船に乗るわけではない――。二人は人を探しに来ていた。
船には乗客が乗っていく中で、船員たちの姿も見える。
レティシアは船員に駆け寄ると声をかけた。
「すまないが。えと、この船を持っている者を呼んでくれるか？なんかこうがっはっはとか言って笑う者だ。あとあと、シーシェルって娘の父上さんだっ」
「――ん？　船長のことかな？　ん？　――あッ、き、君はっ。えとちょっと待っててね」
何やらミグとレティシアを交互に見たかと思うと、船に入っていく船員。
レティシアとミグは船長をしてるとは思っていなかったので、少し首を傾げながらシーシェルの父や組員を何人か連れて戻ってきた。
どうやら出港も迫っており、組員達が止めるのも聞かずに急いで来てくれたようだった。
「おぉおおっ、見つかったのかぁ。いやぁよかったぁっ。がっはっはっはっ。報告にわざわざ来てくれたのかい？」
シーシェルの父はそう言ってレティシア達に大笑いをしたが、レティシアは首を振って言った。
「それもあるんだが、頼みがあって来たっ」
レティシアが言った一言に、シーシェルの父は快く何か聞いて来た。
「サンザルス大陸に行きたいんだ。――でも、船は出ていないし困っている――」
最期はレティシアは俯いて言った。

シーシェルの父は相変わらずの大笑いをすると言った。
「がっはっはっはっ。俺にそれで、船を出してくれないかと頼みに来たというわけか。――よし。おいお前、舵見習いをして何年になるっ？」
そう言ってシーシェルの父はおもむろに、追いかけてきた船員の内の一人に聞いた。
圧倒された様な表情でその船員は「に、2年です…」と答えた。
「よし、じゃあしばらく代理でお前が舵を取れ。しばらく船はお前の物だ。俺は、この子たちのためにサンザルス大陸へちょっくら向かってやることにしたっ」
船員達が口々に驚く中で、シーシェルの父はレティシアとミグの真ん中に立ち、二人に両手で肩を組んだまま船に背を向けた。そしてがっはっはっはっはっと笑いながら歩みを進めていく。
後ろを振り返ると船員達がざわめいて誰も動けないままそれを見送っていた。
このシーシェルの父、どうやら船長の権限を大いに利用して勝手な真似をしているのではと思うような大胆な男である。
とはいってもレティシアはそのことに礼を言ってから聞いた。
「……でも、良かったのか？　突然船放っぽりだちゃったりして…船長さんだろう？」
「いいんだいいんだ。あいつらもいい勉強になる。それに海の男はそう簡単に挫ける柔な男達じゃないからなぁ。ま、非番の船員に声かけて明日の朝迎える様に手配しておくから、明日7時に港に来てくれ。ちゃんと船はあるからよぉ。しかも、海賊船みてぇにカッコイイ船があるぜ。俺のコレクションのひとつってヤツさぁ」
そう言ってまた大笑いをすると、ぎこちなく微笑む二人に静かに続けた。
「――まぁお前ら……俺の憶測だが何か事情がありそうだからなぁ。勿論、深い事情は聞かない。じゃ明日なっ。寝坊するなぁ？　今日は早く寝ろ。朝七時にこの港に来るように。――がっはっはっはっ

はっ……」

そう言って去っていくシーシェルの父の後ろ姿を見て、圧倒された表情のミグが呟いた。

「――ほ、ほんとだぁ…」

その様子にレティシアはふふっと微笑んだ。

レティシアは港に向かう途中、シーシェルの父のことをこう話していた。

豪快。おおざっぱ。ガサツな感じだがとても良い者で、そして『がっはっはっはっは』と笑うと――。

ここまで来た経緯は、レティシアとミグが目が覚ました時リュシファー達のいる部屋に戻ると、皆深刻な顔をしていい移動手段が思いつかない様子であったのだが、さりげなくミュイエがぼそっと言ったのだ。

「船を持っている人でもいれば頼んでみる価値はあると思うんですがねぇ～」

と――。

その言葉にレティシアはシーシェルの父のことを思い出し、ミグが見つかった報告もかねてやって来たというわけであった。

そして、勿論――。

「「承諾ッッ」」

というレティシアとミグの報告に、皆歓喜した。

二人が人差し指を高々と上に突き上げた所を見て、ミュイエはくすくすっと笑い出した。

怪訝そうな顔をしてレティシアがミュイエに尋ねると、二人元気にそう言った姿はとても可愛らしかったと言った。
安堵もしたこともあり、ミュイエにつられて皆笑っていた。

――……

――ドーラの港のホテルの一室のバルコニー。風呂上りのミュイエとリュシファーが涼んでいた。
夜空には星が輝き明日の天候を予期させ、心地いい風がそこに吹く。
「――やっぱり、元気ですねぇ～お二人揃った方が」
「……そうだな～。城にいる時から二人揃うとろくな事もしなかったが、まぁ片方欠けては調子も出ないんだろう……」
「ふふっ、そうでしょうねぇ～。あの二人見てると目に浮かぶようです。……ですが、明日はいよいよサンザルス大陸へ出港ですね。精霊の導き通りに大分進んできました。……レティシアは数奇な運命に立ち向かう強さがあると……あ、いえ、強くなって来ているといった方が良いでしょうね。苦境を乗り越えてひとつずつ、対抗する強さを身につけていっていると僕は思います……」
ミュイエがバルコニーの格子まで歩みを進めて言ったその言葉に、リュシファーはため息を吐いた。

「――潰れなきゃ……いいんだけどな……」

「え？」
ミュイエが聞き返し振り向いたのでリュシファーは慌てて弁解するようにこう言った。
「あ、いや……ほら、あいつ言わないだろう。そういう弱さみたいなことめったに。いつも、前だけ向いてさ…、負けてたまるかッって感じだろう？　でも、奥底には怖れも眠っていると思うんだ……」

ミュイエもため息を吐いて少し納得している様子だった。
「――そうですね。出来るだけ支えてあげたいものですね……」
しばし沈黙が続き互いに何か考えていたが、ため息を吐いてどちらからともなく寝室へと戻って行った――。
リュシファーが寝室に向かうと、レティシアとミグは二人一緒のベッドに丸くなり眠っていた。
それにふっと微笑んで、リュシファーはレティシアの頭をそっと撫でてこう呟いた。

「おやすみ――」

と――……

つづく。

【第五章】†ｅｐ．２　歓喜†（後書き）

★やっと再会を果たせてよかったよかった。
さて、航海へと無事話を進んできました。
シーシェルのお父さん、なんか豪快だけどとてもいい人じゃ～ないですか。
というわけで次回お楽しみをっ。

【第五章】†ｅｐ．３　炎殺のメルローズ†（前書き）

校正必要箇所あるかもしれません。
載せてから読み返すと変な所に気付くのは何なんでしょう…。
今度じっくりチェックしようと思います。

【第五章】†ｅｐ．３　炎殺のメルローズ†

『ブラックウィングロッド号』という名の黒い船。シーシェルの父の名はロッドである。

「黒き翼――ロッド様の船ってわけよ～がっはっはっはっは」

と、その名の由来を話すロッドの顔はとても満足そうだった。

ロッド率いる船員が５人――。それと、レティシア達五人がサンザルス大陸を目指し、航海を始めてから二日近く程。時刻は昼の一時頃であろう――。

甲板では、シーシェルの父が『そろそろ入港の準備をしておけっ』と船員に向けて威勢のいい声をあげている。ゆっくりと流れる船から少し遠くに見える、砂浜にある小さな港――。

じりじりと暑い日差しに額の前で手をかざしながらそれを眺めたレティシアは、暑さにうな垂れつつも、渡り鳥が遠くを群れて羽を急がせ、突如聞こえる『みゅーッ』という鳴き声にはっと耳を澄ます。それはうみねこの鳴く声であったが、思い出したエミュ～のこと――。

「――ミグ、そういえばエミュ～は？」

そう聞いたレティシアに思わずミグが顔を曇らせた。

――。エミュ～を野に放すということは、飼う時から決めていた事だった。ずっと隠して飼い続けることは出来ないのは解かっていたし、ましてや自分達が城を抜け出しマリアだけに世話を頼むわけにもいかない。どのみち誰かに見つかって野に放されるだろう。

それならばミグ自身の手で、野に放して来たとミグは言った。眠りの魔法をかけ結界印を張った場所に寝かせておいたと言っていた。エミュ～は発見した時こそ子猫の様であったが、大きくなり一度森へ連れて行った事があった。突然二人に襲い来た魔物に向かい、エミュ～はその時猛獣とも思える攻撃を仕掛け助けてくれたのだが、二人は唖然としていた。しかし、『ミュ～』というあの愛くるしい

声で鳴いて二人の無事を喜ぶエミュ～を置いて帰るなど出来ず、一度諦めたのだった。野に放しても無事なのはわかってはいた。――わかってはいたが、「そぅ…」とそう言ってエミュ～の鳴く声に似た鳥の声に、レティシアはただ耳を澄ましていたのだった。

その時だった――。リュシファーがやって来て二人を発見して言った。

「お前らもうすぐ到着だっていうのに、のんびりしてるなぁ…はい、準備準備」

二人が苦笑いをリュシファーに向け、リュシファーが指差す部屋への階段へと降りて行く。

それはまるで魔法でも発動したかのように二人がぴゅーっと部屋へと向かって行ったので、リュシファーはその場でくすっと微笑んでいた。

「じゃ、待っていなくていいんだなぁ？　その転移の杖とか何とかって言うのは便利だなぁ」

ロッドが船着き場で腕を組みながら言った。

「――あぁ、行った事がない場所には使えないから、ここまで来たらもう自分達で戻れる。本当に感謝する。シーシェルの父上」

レティシアはそう言ってロッドに微笑んだ。

ロッドは珍しく深刻な顔をして言った。

「事情は大体わかったが、気を…つけるんだぞ。なんか娘が増えたみたいでさ、ちょっと何か寂しいじゃねぇか…。王女様を娘だなんておかしな話だけどよ、あんたは城におさまる玉じゃねぇなぁ…。――元気な姿、またいつか見せに来てくれ――。歓迎するからよっ」

そう言ってロッドは背を向けた。めずらしく大笑いしないことに、レティシアは言った。

「――なんだシーシェルの父上、らしくないぞ。がっはっはっはーって笑ってくれないと、調子が出ないぞ？」

その一言にロッドは『こいつはいいや、その通りだ』とやはり大笑いをして、後ろ向きに手を振って言った。

「よし、辛気臭いお別れはここまでだ。じゃあなっっ――」
ロッドが船に乗り込んで来るのを船員達が、同情するような目でロッドを見ていた。
ロッドの船が遠くに消えるまでレティシア達は見送っていた。
「さてと…では、参りましょうか」
ミュイエが言った一言に皆歩みを進めた。
砂浜を歩くレティシアは、歩けど歩けど砂浜が続くこの海沿いの辺りにだんだん苛々としてきた。暑さと足を取られる様なこの砂の歩きにくさ――両方であった。
「――もぉ、歩きにくいし暑いしいつまで砂浜歩くんだぁ。ちゃんとした道はまだか？」
ため息を吐いてルクチェが言った。
「ティアラちゃん、あのね…ここの大陸。全部砂浜みたいな地面しかないのよ。これを“砂漠”っていうのよ」
「！」
ガーン。砂漠とは聞いたことがあるけど、海沿いだから砂浜なのだとレティシアは思っていたのに、ずっと続くと思うとうな垂れずにはいられない。おまけに海を船着き場まで降りたというのに港町らしきものはない。時折木で出来た家がぽつぽつと並ぶくらいである。
「――どっかに、カフェとか休む場所はぁ？」
「――あと1時間くらい歩けばザルークスの街があるわ。我慢してね…それにしても暑いわね…」
「はぁ…」
仕方ないのでレティシアは風に乗り身を浮かせた。
レティシア達は暑い中、途中魔物を倒しながら進んでいき、やっと着いたザルークスの街。
疲れ切った様子で町並みを歩いていた。
ザルークスの街は砂漠のオアシスを囲む街で、宮殿もある。
歩く人々の格好は白いターバンを頭に巻き、男は上半身裸だった

り、軽く薄い生地のボレロを羽織っているだけであった。女の人も下着だけで歩いている様な上と下しか覆う部分がない服を着ていた。お腹周りや腕や脚は露出しているので、なんだかセクシーである。暑い国での適応した格好というものなのだとレティシアは感心していた。

「おや、旅の方――珍しい。その格好じゃ暑いでしょう。服を買いませんか？」

その声は服屋の店員の声だった。

丁度いいのでレティシア達は服を買う事にした。

皆、街の者が着る服の様に露出度の高い格好になった。

さすがにレティシアとルクチェは踊り子の様な薄く透けた布が一応パンツに着いた様なやや露出度が低めの物を選んだ。それでも露出度の改善は微々たるものである。

「なんか異国に来たって感じだな…はは」

リュシファーが二人を眺めながら実感して言った。

「少し涼しくなってから紅蓮の洞窟に向かった方がいいだろう。少し宿で休むか――」

そうリュシファーが続けて言った時だった。

前方より歩いて来る赤いルビーの様な髪の毛の女性――。

美しいその顔立ちは高貴な感じがプンプンとした。レティシアは真っ直ぐ歩いて来るその女性をじっと見ていた。

その女性は立ち止まり、レティシアを見て言った。

「――ん？　お前、王族だな？　そこの隣の女も」

「？」

レティシアとミグは顔を見合わせた。何故一目見てわかったのか不思議だったのだ。

真っ直ぐに女は歩いてきて、レティシア達の目の前にやって来た。

「辺境のこんな国に足を運ぶとは、何をしに来た？」

偉そうな口調のこの女にレティシアは怪訝そうな表情で言った。

「何故わかった？　私が王族だと」

「同じ王族としての勘――といったところか。…それに、なんだかお前は私と同じ匂いがするのでな。宮殿へ参られよ――私はザルークスの王女リアジュだ。…茶でも飲め。宿などむさ苦しい場所に他国の王女を泊まらせるわけにもいかぬだろう」

そのリアジュの言葉に、レティシアが何かつっかかって言うんじゃないかと、周りの四人はひやひやとしていた。しかし、レティシアは苛々とした様子もなく、真っ直ぐにリアジュを見据えたままで名を名乗っていたので、四人はほっとしていた。

レティシアは、リアジュに確かに自分と同じ匂いを感じていた。

――なんとなく――であった。

名を聞き、リアジュは少し視線を左上に向けて呟くように言っていた。

「――ほう、大地の大陸の城から来たのか。では、お前の事か――」

「ん？」

怪訝そうに眉を吊り上げるレティシアにふっと微笑むと、『何でもない』と言ってレティシア達を連れ宮殿へと歩みを進めて行った。

ザルークス宮殿――。質素な作りの街並と違い、豪華な宮殿は半透明のシースルーのピンクの布や紫の布が所々にかかり、宝石が散りばめられた壁の模様も美しくその造形を誇っていた。宮殿の廊下を通る侍女がリアジュが通り過ぎるまで足を止め、お辞儀をしている。

堂々とそれに足を止める様子もなく歩みを進めていくリアジュに連れられて、レティシア達五人はリアジュの部屋へと通された。

「適当に座って寛いでくれ。今、茶を淹れさせよう。――誰か！誰かおらぬかっ！」

リアジュの強い口調に一人の侍女が急いで姿を現わした。

茶を淹れる様リアジュが頼んでいる。

レティシア達はひとまずソファへと座る。

リアジュは肩で揃ったその髪と瞳の色は同じ赤いルビーの様な色をしている。

歳はルクチェと同じくらいで２４歳くらいだ。化粧のアイシャドウも赤で妖艶である。
「ふぅ、では聞こう――。お前達は何をしにここまで？」
「あぁ、紅蓮の洞窟へと用があるのだ」
「――ぐ、紅蓮の洞窟…！？　あそこは王家の者しか入れぬぞ？」
怪訝そうな表情を浮かべながらリアジュは言った。
ダムルニクス王国の様にまた王家が守る石なのかとやれやれとため息を吐いた。
「じゃ、国王に頼もう。わけあってどうしてもいかねばならないのだ。別に石はあってもなくても良いのだ。見せてくれればよい」
リアジュがますます怪訝そうな表情を浮かべて、ため息を吐いた。
「――現在母上は不在だ」
その言葉にレティシアも怪訝そうな表情を浮かべていた。
するとリアジュはふっと微笑んでこの国が女王が治める国であると教えてくれた。
「なるほど……じゃあ、勝手に行くしかないか」
「――なっ、何を考えているッ。これだから世間知らずの王女は…ッ」
「なんだッ、いないなら仕方ないだろうッ」
「だからって勝手に入るなどと、炎の精霊の怒りを買っても知らぬぞッ」
「――ん？　炎の精霊の怒り～？」
レティシアとリアジュは少しの言い合いは、レティシアの疑問により静止した。
ため息を吐いたリアジュは、この大陸に住まう炎の精霊はこの地を守り、神として崇められていて、その炎の精霊を祭る祭壇が洞窟の奥深くにあり、この大陸の王族以外許されていない神聖な場所に勝手に入られては怒りを買うかもしれないので困ると言った。
レティシアはリアジュとしばし睨み合いをしていたが、ため息を吐いた。

ルクチェが言った。
「リアジュ様、お願いします。どうしても聖なる炎石のもとへと参らねばならないのです。私、はるかかなた北方は精霊使いの街ミールティアから参りました。神殿の巫女でございます。精霊の声を聞き、精霊の導きによりここまでやって参りました。他の石の元へは既に参り、後残るはこの紅蓮の洞窟のみなのです」
その言葉にリアジュは驚愕し、訪れるしばしの沈黙――。
そこへお茶を運んできた侍女がお茶を置いて去って行こうとする。
「――し、失礼致します……ご、ごゆっくり……おくつろぎ…くださ い」
緊迫した空気に耐えられなかったのか、侍女の声は上ずっていた。
リアジュは静かに言った。
「――どうやらわけがある様だな。“聖なる炎石”という精霊が宿ると言われている石の事は、王家の者しか知らないのだ。それをお前達が知っている時点で、信用せねばなるまい。祭壇はおろか紅蓮の洞窟の入り口でさえ、常に誰も入れぬよう厳重な見張りをつけている」
そう言って赤い花びらが浮かんだお茶に口をつけたリアジュに、レティシアは息を吐いた。
ダムルニクス王国のノイエル殿は簡単に承諾してくれたのに、今回はそうはいかないらしい。
レティシアはそれでも言った。
「リアジュ、この国のしきたりはわかる。しかし、その様な事を言っている場合ではないのだ。時間がない――。お前が駄目と言っても私は見張りを倒してでも行く。邪魔をした――」
レティシアは席を立って、皆が唖然とするのを無視して一人部屋の外に出ようとした。
「――おい、最後まで聞け。まだ話は終わっていない。本当にお前は私と似ているな。自分を見ているみたいでぞっとする」

リアジュは少し微笑まずに言い、レティシアもまた同じに振り返り言った。

「お前が私に似ているだけだ――」

この何とも言えないやりとりに、四人は声も出ずに圧倒されていた。

敵同士が冷淡な口調で戦闘を繰り広げているかの様な会話の言葉の数々――。

敵意が感じられるその言葉を放ちながらも、あくまでも冷静でお互いに取り乱しはしない。

それが緊迫した空気をそこに作り、ぴりぴりとしていたのだった。

しかし、リアジュはふっと口元を緩ませその空気を消し去った。

「――おいおい、そんなに睨まなくても、私は着いてってやるって言おうとしたのだ。事情があるのだろう？　私がなんとかしてやろうという話を聞かずに出て行っては、お前達は牢に入れられるぞ」

――――……

こうして、その夜。

変装したリアジュと宮殿を抜け、紅蓮の洞窟へ足を運ぶ6人。

砂漠の大陸の夜は寒い。

昼間はあんなに暑かったというのに、夜は冷えてレティシア達は元の服に戻していた。

延々と続く砂の地に吹く穏やかではない風――。

砂を含んだその突風にレティシアはノヴァのストールを鼻と口に巻いていた。

「しっかし、お前というヤツは本当に私と似ていて嫌になる。もっとも若い時の私だがな。まだその様に子供のような頃があった――」

リアジュのその言葉にレティシアはむっとした。

「――なっ何を言う！　子供などではないッッ」
「それそれ。そういうつっかかってくる辺りが子供なのだ。昔はそうだったなぁ。私も大人になったものだ…はは」
そう言うリアジュの言葉は妙に説得力があったが、レティシアはふんと拗ねて言い返さなかった。それを見て、ミュイエが苦笑を浮かべていた。
「ふふ、とはいってもあの二人とっても馬が合いますよ。似た者同士ね…」
「あ…はは。でもまぁ、時々見てる側はひやひやするわねぇ…」
ルクチェもその隣で先を行く二人の様子に困った微笑を浮かべている中、リュシファーはため息を吐いていた。
その時だった――。
ひゅぅぅ……と、突風が少し熱を持った風に変わった。
――ん？
と不思議に思ったレティシアは立ち止まった。
リアジュがどうしたのかと尋ねた。
レティシアは何か嫌な予感がした。
咄嗟にリアジュの腕を引き、後ろへと後退した。
「！？　な、何だッ」
驚いてレティシアを見るリアジュの顔に照らされる赤い光の影と熱風。
レティシア達がいた場所へと渦巻く炎の渦――。
「！」
そしてそこから現れた赤みがかった銀色の髪の女。
髪は巻き毛で胸の辺りまで伸び、その表情には残忍な笑み――。
「――うふふふ、みぃーつけた…っ」
女はそう言って微笑んだ。
……何…ッ、こんな所にまで魔の者がっ…！？
レティシアはきっと睨んで言った。
「――お前は何者だッ」

少し間をとって女はふふっと微笑んで人差し指をつんっと軽く前に突き出して言った。
「はい。よく出来ました。そういうことは、早く聞いてくれないとねぇ～。私は大魔神ザロクサス様の配下――殺戮の四天王、地獄の炎舞で全てを闇へ葬る…ふふっ、炎殺のメルローズとは私のこと」
炎殺のメルローズ……！？
やはり雷鳴のセルローズと同じ魔の者だ…ッッ！
くッ……。
ついに現れた――。
レティシアはリアジュに小声で後ろに下がっているよう言った。
「何を言うッ。私も戦うッ…」
「――リアジュ、頼む。こいつの狙いは私だ。それに、お前では歯が立たない」
歯が立たぬと言われて腹も立ったが、メルローズに向けるレティシアのその鋭い眼力に、強い意志をその瞳に見て大人しく引いた。
「――何をごちゃごちゃ言ってるの？　さぁて、そろそろ遊んで貰おうか」
メルローズが言った。
レティシアは何をすればいいか、既にわかっていて準備していた。
かざした手、それはどちらから差し出したものか区別できた者はいなかった。
ほぼ同時にぶつかり合う――物凄い炎の渦と物凄い氷の渦。
それがぶつかり合う様を遠目から見た時、驚愕してリアジュはへたっと座り込んだ。

リュシファーが静かに言った。
「強力な魔法が使えるヤツじゃないと、あれに下手に手出しは出来ないだろう…。俺も手助けは出来るが少し様子を見る。アイツなりの覚悟の前に、今、手出しすれば怒るだろう。あの目をした時のアイツは、誰も止められない――」

その言葉に唖然としたままリアジュはレティシアとメルローズの攻防を見ていたが、明らかにレティシアが押している。

「――なっ何ッッ！？」

メルローズが押されたその氷の渦に飲まれ、更に降り注ぐ激しい氷柱の攻撃を受けて、悲鳴をあげてもがき苦しんでいる。

レティシアはそれでも笑み一つ溢さない。

『――ふふっ、私を甘く見て貰っては困るわぁ～。まだ行くわよッッセイレシルッ！』

水の大精霊リーヴァは激しい水流を巻き起こし、風の大精霊セイレシルとともにそこに巻き起こし出来た激しい突風とともに勢いを増した激しい竜巻が更にメルローズを襲い、その後メルローズはその場に立っていられずに崩れ落ちた。

「なッ……何……貴様……何…者…、ッうぐッ……ッッ――…」

メルローズは身をさらっと黒い灰に変えていき、それは砂となり空に舞った――。

レティシアはそれを見るなり、ふっと意識が遠退き倒れた。

「――レ、レティ！！」

「――ティアラちゃん！！」

４人が駆け寄ってレティシアを揺すったが、どうやらただ気絶しているだけの様だった。

ひとまず命に別状がないことを知りリュシファーが安堵して息を吐いた。その傍に落ちていた黒い手鏡を手に取った。手鏡とはいってもそれは鏡の部分も薄っすらと黒く姿は良く映らない。

「な…なんでしょう？　それは」

「わからん…だがとりあえずそれは後だ。ひとまずレティシアを連れて今日は戻ろう。すぐに目覚めそうもない」

皆が頷いてレティシアを宮殿へと運んだ。

宮殿の客間の一室。一人一部屋与えてくれたリアジュを含む５人は、皆レティシアを寝かせた部屋のベッドの傍へ集まっていた。

レティシアに魔力回復剤を調合するリュシファーがその一番前で

皆に様子を説明した。
「――レティは自分の持てる魔力以上の力のを持つ精霊の守護を得ているのだから、身体の負担も大きいのだろう。まぁ心配することはない。休めば回復する」
「でも久しぶりに見たけどアイツ余裕で倒す程の力を持ってるんだなぁ」
ミグが言った一言にリュシファーはため息を吐いて薬を調合する手を止めた。
「ミグ、あれが余裕で倒した様に見えたか？　レティのあの目を見れば、お前ならわかるだろう。鋭いあの視線はレティ自身の決意を表す目だ。本気でやらねば、やられる――と真剣に挑んでいた。俺は余裕ではなかったと思う…」
ミグが黙り皆も沈黙する中、リュシファーが止めていた手を再び作業に移し、その横でリアジュが言った。
「お、お前達一体、何を成そうとしている？　それに、さっきの者…レティシアは『コイツの狙いは私だ』と下がっている様に言ったのだ。何故一国のただの王女が変なヤツに狙われるのだッ？」
四人が一斉にリアジュを見て、視線だけを送り頷くとミグが事情を話した。
「――何…てことだ。では告げは本当だったようだな」
「告げ？」
「“異国の姫、いつか重大な使命のためにやって来る。そなたは力を貸してあげなさい”と。確かあれは何年も前だ。城下に抜けた時に異国から来たという占い師の老婆に声をかけられ、そう言われた。実はお前達に会った時、ふとそれを思い出した。なんとなく王族の様な気がしたのでここへと招き入れたのだが、占い自体はまぁ半信半疑だった。自分が力を貸してやってもいいと思うかの判断が出来たので力を貸したまでだ。レティシアは意志が強く、何かを成そうとする者の目をしていたのでな――」
「…何者だ？　その婆さん。すげー占い師だな」

「うーん。そこまでは知らないが、とにかく私は紅蓮の洞窟へ向かって石をこっそり借りて来よう。誰も入らぬ洞窟だ。石を持っている事すら誰にもわからん。協力しよう」

遅いので今日は寝ることにして明日リアジュが石を借りて来てくれるということになった。

四人はリアジュに感謝して今夜は遅いので休むことにしたが、様子を見るためにリュシファーだけは部屋に残っていた。

雷鳴のセルローズ。炎殺のメルローズ。

次々と現れる魔の者の手――。

そのうちの一人、炎殺のメルローズを倒しただけでもこんな状態だ。

皆には言わなかったが、前回レティはセルローズと対戦して恐ろしさを知っている。

そのため自分の持てる魔力以上の力を僅かに使ってまで放ったのだろう。

やるかやられるか――その気持ちはわかる…。

だがレティ…、お前は死ぬ気か――ッ

持てる魔力以上の力を使いすぎれば死に至る事だってあるんだぞ?

考えていても仕方がない。

目を覚ましてからだな…。

おそらく、このまま今日は目を覚まさないどころか、二日は眠り続けるだろう。

困ったものだな……。

――こうして、リュシファーはその脳裏にレティシアへの思案をひとりで抱えていた。

そして眠ったままのレティシアが目を覚ましたのは、

リュシファーの予想通り二日後のことであった。

つづく。

【第五章】†ｅｐ．３　炎殺のメルローズ†（後書き）

名前考える事が結構多いですが、適当にいつも頭に浮かんだものを少し試行錯誤して考えて使ってます。
さてさて四天王一人あっさり倒せました。
意識的な物が今回は違った様です。
前回セルローズの時に恐ろしさをしっているので本気ということでしたが。リュシファーのひそかな心配も…ありみたいな回です。

【第五章】†ｅｐ．４　光と闇と†（前書き）

校正していないですがあとでチェックします。

【第五章】†ｅｐ．４　光と闇と†

――ラクロエ様…ラクロエ様……

…ラクロエ？　ああ、精霊界の王女の名じゃないか。

まぁ私はレティシアだぞって言っても皆大精霊達は皆ラクロエ様と呼ぶけど…お前は？

――私は、炎の大精霊フレイです。やっとあなたを守護できました。

…え、だってまだ聖なる炎石の所に行ってないのに、何で？

――あなたを助ける者が私をラクロエ様の側に置いてくれました。

あなたは気を失ったまま、今は眠っているのです。

…じゃあ、眠っている隙に守護したってこと？

――えぇ、その通り。そして、あなたは全ての力の守護を得ました。

ですから、ついに私達大精霊が力を合わせる時が来ました。

光と闇合わさる時、双の力は一つになり、双の二つは一つに目覚め、真の力となるでしょう。

光しか知らぬ貴方は闇を知り、光と合わさるでしょう。一つになるために――…

…え…意味がわからな――――

――さぁ、真の力を目覚めさせましょう――……

……！？

眩い光――。

その中で、私は意識が遠くに飛ばされていく様な感覚を覚えていた。

自分の存在自体が消えてなくなる様な、何故かとても怖かったのを覚えている――。

私は――――……
――――……
――……

……。

わたしは目を開けた。

あれ……？　どうして――……

あっ、わたしを覗き込んで来た少年の顔――、知っている。

話したことはないけれど、あの子が良く知っている者――。

「大丈夫かッ、目、覚ましたー良かったぁッッ」

そう言った美少年。たしか、あの子の双子のお兄様。

あの子は何て呼んでいたんだっけ――。そう、ミグだった。

「ミグ――？」

わたしは聞いた。

「ん？　なんだよ、レティ。寝ぼけてるのかぁ？」

そう言ってわたしの顔を呆れたように微笑んで見る。

「いいえ、寝ぼけてなどおりません。ただ、名前を呼びたかったのです。お兄様」

その言葉にミグは唖然としていたが、冷めた目で言った。

「――は…？　お、お前、…やっぱり熱でもあるんじゃないのか…？」

「いいえ、ですから平常です。それより、私は何日眠っていたのでしょう？」

「……え、だから…その口調――ま、まぁいいや。二日だ。二日も眠っていたんだぞ。心配したんだからな」

「そう…ですか。二日も……」

ミグはそんなわたしのもとから『少し待っていて』と言ってどこかへ消えた。

少ししして戻ってきたミグは、また知っている顔の男を連れて来た。

あの子の恋人、あ、でも内緒にしているんだった。気をつけなくちゃ――。

確か、名はリュシファー。

リュシファーはわたしの目をじーっと見つめている。それも怪訝そうに。

その目は青く澄み切った空の様に綺麗に澄んでいる。

「レ、レティ？　ど、どうした…そんな初めて見るような目で見て…。なんか、ミグの話だと少し変だとか…なんとか。いや、俺が見ても確かに少しおかしい気がするが…」

そう言われてわたしははっとした。

皆、わたしのことをあの子だと思っているから変だと思っているんだという事に――。

「あっえと、そうでした。言っておりませんでした。あの子ではないのですよ、わたし――」

「えっっ……!?」

――ど、どうやらかなり驚いて「えっ？」と言った後は、声も出ない様子だわ…。

少し段階を踏んでから言うべきだったみたいだ。

でも、段階と言ってもきっとどのみち驚くことになるのだから仕方がありません……。

「――ちょ、ちょおおおっと待った。じゃ、君は一体誰だと言うんだ」

「はい。ラクロエと申します。精霊界の王女ラクロエ――」

――やはり…、段階を踏んだ方が良かったみたいです。

皆さん驚かれてしまって、説明するのが大変でした。

あの子が知る者が全員集まって来て、深刻な顔をしています。

はぁ……。

言わないほうが良かったのでしょうか。

――――…

――…

――…

――…

「――つまりだ。今はレティシアじゃなくて、ラクロエの意識が覚醒しているということで――間違いはないの…かな？」

「はい。その様です。聖なる炎石を枕元に置いてくださっている間に、どうやら炎の大精霊の守護を得た様なのですが、目覚めた時には私の目が覚めていたのです。わたしはいつもあの子とともにおりました。だから皆さんの事もあの子が感じるとおりに知っています。どうしてかって聞かれてもわかりません」

ラクロエのその言葉に、ミグは引きつった笑顔を浮かべて呟く様に言っている。

「あは…ははは、なんてことだ……ていうか全然意味が解からない……」

しかし、ラクロエの意識が裏にあったとは…。

ではレティシアの意識はどこに……裏に回ったということなのか？

リュシファーは額に手を当てながら考えていたが、ラクロエは言った。

「えと、皆さん。考えていても仕方ありません。それよりも一刻も早くミールルティアへ向かいたいのですが…」

ラクロエは言ったその言葉にルクチェが明らかに表情を変える。

「――ラク…ロエ様、ミールルティアへは何故？」

「――行けばわかります。神殿に用があるのを思い出しました」

――ラクロエは何かを知っているが、多くを語らない。

何かを聞いても「わかりません」ということが多い。

普通に何か関係ないことを話しても普通に話すが、レティシアのようなつんつんした感じは微塵もなく素直だ。

おまけにレティシアの容姿でおしとやかに話されるととても違和

感がある。
レティシアがおしとやかな王女だとしたらこんな感じかと少し笑える。
「――リュシファーは何故微笑んでいらっしゃるのですか？　わたし変な事でもいいましたか？」
レティシア…いやラクロエが不思議そうな顔で尋ねてきた。
リュシファーは首を横に振って何でもないと答えておいた。
ここでレティシアなら確実に教えろと絡んで来るが、ラクロエは首を傾げたまま納得する。
転移の杖を使いミールティアへと戻ろうとすると、ラクロエが言った。
「あ、その杖には時の精霊の気が感じられますね。でも、その杖を使わなくともわたしがみなさんを移動させましょう――」
――――え――――？
そうリュシファーが思った時だった。
ラクロエが左手を上にかざしたかと思うと、大きな白い魔法陣が頭上に現れ、辺りに小さな丸い玉が連なった線が吸い込まれるようにその魔法陣に差していくのが見え、一瞬ぱっと眩い光を放った。
「わ……ッッ！？」
目を開けた時、リュシファーは目を疑った。
そこはミールティアの神殿の前――。
時空を移動した……！？　杖なしで……ッッ。
ラクロエはかざした左手を下ろし、リュシファーに微笑んで「ねっ？」と言った。
「――て、ていうか何故私も一緒に連れてこられたのだ？」
リアジュがラクロエに尋ねた。
「あ…ごめんなさい。全員連れて来てしまいましたね。帰りたければ送り返します」
ラクロエの言葉にリアジュは少し考えて、帰らないと呆れたように微笑んで言った。

どうやらラクロエは時の魔法も使うらしい。
「と…時の魔法なんて使えるヤツ初めて見た」
ミグが唖然として口にした一言だった。
時の魔法に大精霊はいないとラクロエは言い、存在自体が所属が違い、そこら中にたくさんの精霊達がいてどんな世界にも存在しているらしく、認められれば呼びかけにも応えてくれるのだとラクロエはミグに説明していた。
ラクロエは神殿の中に真っ直ぐに歩みを進める。
ルクチェがその後に続き、リュシファー達もその後ろに続く。
「――えと、ここですね」
ラクロエが進んだのは何やら女神像が左右に飾られた祭壇の前だった。
「！」
ルクチェは驚愕した視線を浮かべてラクロエから後ずさった。
「まさか……」
「――ん？　なんだルクチェ」
ミグがルクチェのその表情に怪訝そうに聞いた。
ルクチェは祭壇の裏に、実は“ラクロエ”という文字が書かれた錠前のついた扉があって、どう頑張っても誰も開けたことがないのだと話していた。
だから、ずっとラクロエという名を聞いた時から気になっていたらしい。
――その時だった。
ラクロエが前に手を軽くかざすと、祭壇が右にずれた。
現れた大きな錠前のついた扉――。
「――これは……！？」
リュシファーが言った一言にラクロエは微笑んで言った。
「ここにあるのですよ。光が――」
そう言ってラクロエは錠前に触れた。
その瞬間に錠前はチャッと音を立てて外れ、扉はゴゴゴゴ……と

ずっしりとした重低音を響かせて開いた――。
「あ、あんなに開かなかったのに……簡単に……！？」
ルクチェが驚愕しながら呟くと、ラクロエはふふっと微笑んで真っ直ぐに進んでその中へ入っていったので、リュシファー達も後を続く。
そこには何もない殺風景な白い部屋があった。
ラクロエは中央で立ち止まると、振り返って言った。
「――うーん。忘れてました…。えと、皆さんやはりこの部屋から出てもらえますか？」
「え、あ…あぁ、わかった」
そう言ってリュシファー達が去ろうとするのをラクロエはもう一度口を開いた。
「あ、リュシファーは残ってください。後の皆さんは外で――」
「えっ？　俺だけ…残る？」
「――はい」
不思議そうな顔をしながらリュシファーが残ると、ラクロエは入り口に手をかざして扉を閉めた。そこには何もなかったかの様に白い壁だけが広がっている様に見える。
何だか閉じ込められた様な気になりながらリュシファーはため息を吐いた。
「――で？　どうして俺は残らせたんだ？」
「いえ、とくに儀に必要というわけではありませんが、個人的に話しておきたいことがあったのです」
淡々と動じた様子もなくラクロエは真っ直ぐにリュシファーの目を見て言った。
「――あなたとレティシア。二人は好き同士なのでしょう？」
「えっ！？　あ、あ…あぁ、ま、まぁ――し、しかしこれは一応内緒であって」

「くすっ、心配なさらずとも、だからこそ皆は下がらせたのですよ。少し話がしてみたかったのです。レティシアが好きになったあなたと…」

レティシアの容姿をしたラクロエは少しだけ俯いて言ったので、リュシファーはまるで別の女の子と浮気でもしているかの様な気分に陥り、気まずそうな表情を浮かべた。

「え、あ…そ、そうか」

「くすくす、そんなに困った顔をしないでください。あの子ね、普段は偉そうなのに時々優しいと始めは苛々としていたのですよ。それが恋だとも知らずに…。わたしもまるで自分の事のようにそれを感じて来ました。でも、私達はどちらかしか表にいられない――。それに、あの子とともにずっと傍にいて、すごく近くにいるというのにわたしの声はあの子に届かない――そんな場所にどちらかがいなければならないのです。光と闇――表裏一体です。わたしは、六人の大精霊全ての力を持って表に目覚めました。しかし、今あの子とわたしの場所が入れ替わったまで。わたしの裏には今あの子がいる…」

「!?　…じゃッ――じゃあ、レティはッッ」

リュシファーはその言葉にラクロエに少し声を荒げて言った。

「――ご心配なさらず…この儀が終われば戻ると思います」

「…光があるというのは、どういう意味なんだ…？」

「――えぇ、それはわたしにとっての光。予想ですが、なんとなくわかるんです。暗闇にいたわたしと、光の場所にいたあの子――。きっと同じ光を見る――わたしはあの子、あの子はわたし」

相変わらずラクロエは少し難解に物を言う…。しかし、なんとなくだが大体予測は付くが合っているかを聞いても、また難解に返されて混乱して来るだろうなと思考していた時だった。

……！？

唐突に触れた唇――。

驚愕の視線で身が硬直していた。

その唇の柔らかさはレティシアと同じであるものの、それは明らかにラクロエとしてのレティシアのもの――。ゆっくりと離れていくラクロエの口づけに、リュシファーははっとして唇を押さえて困惑していたが、ラクロエはふっと微笑んで立ち上がった。

そして唱える様に呼ばれる6大精霊達の名――。

「――今こそ目覚めよ、さらなる光――――!!」

そうラクロエが言った時だった。

視界は眩いばかりの光に奪われて、真っ白になる。

きつく目を閉じて耐えている最中、聞こえた気がした――。

ラクロエの、ふふっ…、と微笑む声――。

――――…

目を開けた時、そこにはラクロエが倒れていた。

しかも、ここは神殿の外であり、泉の女神像の前にいた。

――なッ!? い、一体どうなっているのか、さすがの俺にもさっぱりわからない……!

そう思ってラクロエを抱き上げると、神殿の中まで足を運ぶ。

そこにはルクチェたちが祭壇の扉をじっと見つめて待っている様子があり、ため息を吐いてリュシファーは事情も説明できない面倒くさいこの事実をどう伝えるか頭を悩ませていた。

「ん!? あれ!? え? え?」

と、ミグがリュシファーに気付き驚愕した表情を浮かべながら言っ

た。

その声にルクチェとミュイエとリアジュも駆け寄ってきた。

はぁ……なんて説明するよ……。

「い、いや、眩しい光が差したかと思ったら、なーんか神殿の外にいたんだが…こいつが倒れていたのでさっぱりよくわからんのだ」

何故か苦し紛れに言ったその事実の一部だけで皆は納得して、ラクロエをひとまずルクチェの屋敷へと運ぶこととなった。

そして、ラクロエの目が覚めた時――。

リュシファーはその鋭い瞳に睨まれ、掴みかかられていた。

おまけに大声でわめくそれはラクロエではないと告げていた。

さらにその側にいたミグとルクチェ、ミュイエ、リアジュは唖然と驚愕の表情を浮かべてそれを始終誰も口を開けずにいた様だった。

しかし、ルクチェがついに口を開いた。

「え……嘘――……」

それに触発されたのか、口々に皆が口を開き始め、ミグは言った。

「――う、嘘だろう……？」

ミュイエが言った。

「えと、でも僕は初めから仲が良いなぁと思ってました」

リアジュが言った。

「…なんだかよくわからんが、隠していたのか？」

・・・・・・・・・。

嫌な沈黙――。

ラクロエではなくレティシアに戻ったレティシアと、リュシファーはお互いに苦笑を浮かべてみんなの方をおそるおそる見た。

既にため息を吐くミグと、ルクチェはにやにや、ミュイエは嬉しそうに微笑み、リアジュは相変わらず良くわかっていない様子だ。

「――ミ、ミグ…こ、これにはちょっと事情があってだな…その」

というレティシアの側までやって来て、ミグはにっこりと微笑みながら言った。

「――どういうことかなぁ？　レティシアちゃん。……お兄さんにじっくりと聞かせてくれないかなぁ～？」

ひぃぃぃぃという文字が久しぶりにレティシアの脳裏に浮かんだ。

笑顔だというのに物凄く怖い――。

レティシアはリュシファーの後ろに隠れ、こっそりミグの顔を見ると、もう笑ってもいない。

……ついにバレた。

皆と再会してからなるべく怪しまれる行動をとっていない様に気を使っていたというのに…。

しかもそれは自分が口走った一言が撒いた種だったのであった。

――……

つづく。

【第五章】†ｅｐ．４　光と闇と†（後書き）

ついに全ての守護を得て一体化しましたが、新たな力とは…。
あと、バレました。
次回謎を明かして次の章に行きたいですが…。
なんとかここまで進みました。
大分長編になってしまいましたねぇ。小説描くのは初めてですがもっとすっきり進められたらいいんですが。どうしたらすっきり出来るのかよくわからないので書きたいように書いてしまいます。未熟者ですみません。
ではではまた。りんごでした。

【第五章】†ｅｐ．５　さらなる光†††（前書き）

第五章が終わりです。
後でチェックしますがおかしい所、間違いあったらごめんなさい。

【第五章】†ｅｐ．５　さらなる光††

正座――。
皆の突き刺さる様な視線――。
顔を上げられない――。

「…黙っていてはわからないだろう？」
とは言っても黙るしかない。
「一体全体…いつからなんだ？」
とそう言ったミグはより一層怖い顔で腕を組み、鋭い瞳で真っ直ぐに私を睨んでいる。

リュシファーは別室。ここにはミグと私しかいない――。
どうしてこうなった――いや、理由はちゃんとわかっていた。
『リュシファーッ、お前は他の女と何をしているのだッッ』
と私が怒鳴ったことが原因だ。
はぁ……。

「――レティ、お前聞いてるのか？」
少し考え事をしていた私ははっとした――。
「えとえと、ミ、ミグ…で、な――なんだっけ？」
この一言がミグの怒りを爆発させることになろうとは、レティシアは思ってもみなかった。
レティシアは腕を引っ張られて引きずられたまま、リュシファー達のいる部屋に連れて行かれた。
「――ミ、ミグッ痛いッ」
そう言って連れて来られた部屋の者全員がその声に驚愕して二人を見ていた。
ミグはぱっと手を離したので突然、ビタッとレティシアは床に伏

せた。
　起き上がろうとしたレティシアの背中に軽く手をつくと、そのままミグは座った。
「ぬわッ…お、重い」
「…全然口を割らないから苛々して連れて来た。仕方ないからお前に聞こう――いつからだ」
　リュシファーは、はぁ…とため息を吐く。
　既にルクチェ達には話していた様子で、ルクチェが口を開いた。
「エルフィンちゃん…な、何をそんなに怒っているのよ…いいじゃないの、ね？　別に城を出ているんだからせめてその間だけでも――」
とフォローもしていたが、ミグは視線さえ向けずに口を開いた。
「ルクチェさんは黙ってて――。二人は、俺達と再会する前だよなぁ？　既にこうなってたのは。で、そんな素振りも見せずに隠していたってわけだろう？」
　真っ直ぐに突き刺すようなミグのその視線――それにリュシファーは見覚えがあった。
　レティシアの婚約の儀を知った時の呟きを聞かれ、問い詰められた時――。見透かすようなその視線に怖れさえ抱いて焦ったことが頭を過ぎる。
　レティシアがミグに下敷きにされながら、ため息を吐いた。
「――ミグ、黙ってて悪かった。リュシファーは悪くないっ…。立場がどうとかで止められるならこんなことになっていないし…それに父上達に知られれば許される筈がないから、それなら誰にも言わぬ方が良いと思った――。それは…、いつからと言われても答え難いが――ひょっとしたら城にいる時から気になっていたのかもしれない…でも、気づかなかった。…知らなかった……誰かを好きになるなど、私には知らぬ想いだった。だから、…だからっ――」
「――よーしっ。じゃ、この件は終わりだ」

・・・へ・・・？

「――お、終わりってミグ…え？」

ミグがレティシアの背中から腰を上げたので、レティシアは起き上がってミグに怪訝そうな表情で詰め寄る。

呆れたようにため息混じりにミグは答えた。

「深くは聞かないよ。別にいいんじゃないの？　お前ら結構お似合いだと俺思ってたし。何だかんだで馬が合ってるっていうかなぁ…バランスいいってゆーか？　リュシファーってお前のこと上手い事コントロールしてくれてると思うよ――」

「！」

さっきまで怒っていた様に見えたと思ったのに、そうではなかったのだろうか。

おまけにコントロールって…、占い師の婆さんと同じ事……。

…誰にも言わなかったけど、そういえば当たったことになるのかな…。

「――ちょっと苛々してたのはお前が全然言わないからだ。父上の目の届かない場所だし、なーんにも気にすることはないんじゃない？　城に戻ってから考えればいいよ。今考えても仕方ないことは考えなくていいさ」

ミグは呆れた様に微笑みを浮かべ、レティシアの頭を強めにくしゃっと撫でた。

「わっ、…ミグ……」

レティシアはミグに思わず抱きついていた。

ミグは優しく微笑んだ。

「それはいいとして、…リュシファーが他の女とあーだこーだというのはどういうことなのかも聞かせて貰いたいんだけど。場合によっては俺はリュシファーに文句でも言わなければならないんだけど？」

「あ、そうだった――すっかりバレたことで忘れてたっ」
そう言ってレティシアはミグに抱きついたままでリュシファーを睨んで言った。
「この男は私という者がありながらっ、ラクロエと口づけした浮気者で、好きだと言っておきながら腹が立つッッ」
・・・・・・・・・。
しかし、レティシアに同調する声はない。むしろ誰もが引きつった笑みを浮かべて何も言えない様子だ。眉をしかめているレティシアに皆が口々にこう言った。
「――えと、でもそれってレティシアですよねぇ？　意識は違えど身体はレティシアの物なのですから、…何かイマイチ怒るべきことではないような……」
「う…うん。確かにそんな感じ。違うのかも…しれないけど、うーん。他の女ということでも…」
「なぁんだ。そんなことかぁ」
リアジュに至ってはくくっと吹き出すのを堪えている様子だ。
レティシアは当の本人までもが呆れた様にため息を吐いていることに、精神的ダメージを受けた。
「だ、だって…私だけど私じゃないじゃないか…っ」
そう小さく俯いて言ったレティシアを誰もが可愛いヤツと思っていた。
「――まぁでも、ラクロエとわかっていて口づけをしたということには変わりないとレティシアはそう言いたいのだろう。リュシファー、その弁解はどうするつもりだ？」
と自分の言いたいことを代弁したリアジュに、レティシアは輝いた目を向けて頷いた。
リュシファーは戸惑いながらも息を吐いて説明した。
「いや、だから…突然ラクロエがそうして来たから、意表を衝かれすぎて動けなくてだな…で、気がついたらラクロエが何か唱えてて、眩しい光に包まれて、目を開けた時には神殿の外にいただけで俺は

別にっ」

レティシアはその事実は知っていた。

それでも、避けられなかったリュシファーに少しだけ嫉妬していただけであった。

ラクロエの真意を思うと、レティシアはため息が出た。

「はぁ、やっぱり怒る気なくした…もう良い。それにな…？　ラクロエは、私に転生し生まれ出でた時からずっと私の中に存在していたんだ。ラクロエの意識が私の表に出ていた時、私はラクロエが今まで居たその場所にいた…。そこは、とっても寂しい場所だったんだ。だから、ラクロエが皆と話していたことも、心の中で思っていた事も全部自分がしている事のように感じられて、でも、何かを叫んでも誰にも聞こえることはない――。でも、そこでわかったんだ」

レティシアがそう言って、息を吐いてからソファーに歩みを進めるとそこに腰かけた。

遠い目でも見るかの様にどこか物哀しい視線をテーブルに向けて続けた。

「――私がリュシファーを好きになった様に、ラクロエもまた――お前のことを好きだったとでも言えばいいだろうか。でも、ラクロエはちゃんとわかっていたんだ。その想いは私が想うからこそ抱くものだということも、一瞬表に出られただけで自分がいた裏に私があるということも…。ただ、表に出られてどうしてもお前と話がしてみたかった。それと、口づけがしてみたかった。…ラクロエは私に転生させられて、自由に恋をすることも許されない。口づけをリュシファーにする前に、『ごめん…最後のわがままを許して欲しい』と私に言った。それを思うと怒れなくなる……」

レティシアはため息を吐いてソファーに横になった。

「…なんか、…可哀想だな……ラクロエ…」

ミグが思いつめたように言った一言に、レティシアはふっと微笑

んで言った。
「――でも、唯一の救いはラクロエはもう裏にいるわけじゃないってことだ。私とともにあることには変わりないが、完全に同化した。だから、私はラクロエであり、ラクロエは私でもある。だから、消えちゃったわけではないんだ。…せっかく表に出れたのに、満喫もろくにせずに早く同化して私を解放してあげなくちゃという優しい気持ちとか、寂しかった気持ちとか、全部私に根づき、今は全て理解できる。…それと――すごい『力』も」
「！」
ミグはレティシアに駆け寄ってきて驚愕の表情で言った。
「じゃあ、あのすごい時魔法も…ッ！？　お前、全部得たってことかッ？」
ミグだけじゃなく皆も集まってきて返事を待つ中、レティシアは起き上がって言った。
「そう――全部だ」
――――……
――…

精霊界の危機の際、ラクロエを完全に融合させて転生を図る時間がなかったため、ラクロエは、レティシアの奥深くに隠されていただけであった。
融合させる儀を後に行うため、六大精霊たちはその自分達の魂のかけらを密かに特別な守護石に宿し、時を待っていたが、無論――。
――その魂のかけらは力と意識だけであり、本体である大精霊の魂のある精霊界の封印により実体化することは出来ず、宿す媒体がなければ何も出来ない。
レティシアに媒体を移し守護した六大精霊がやっと全員揃い、ラクロエとレティシアを融合させるための儀をやっと執り行った今――。

レティシアとラクロエの魂と力は一つに合わさり、力を与えた――。

さらなる光――それは……。

レティシアにそう精霊の女神レティシアが説明した後、大精霊たちは語り出した。

『――ラクロエ様、ついに我らの役目果たせました。
王族のあなたは、全ての力と同時に王族特有の無属性の力を持つ――。
無とは光――。
さらなる光を、その頭上に掲げ、闇をも打ち消す日はもうすぐです……』

――と土の大精霊ウレハ。

『――とはいっても、ラクロエ様は融合したばかり。
我々の力にお体が負ける事はなくなっただろう。
ただし、油断は禁物です。お早く、四天王を倒し、魔鏡を――』

――と雷の大精霊イシュタリス。

『そうすればぁ、塔は壊れちゃってぇ、貸せる力も増えるっても・の・な・の・よ・ねぇ？
リザルト様っ』

――と水の大精霊リーヴァ。

『そうじゃそうじゃ、そして封印を解くには大魔神ザロクサスの奴を倒さねばならんのじゃ。
手強い奴じゃがラクロエ様のお力でぱーっと倒しちゃってくださいですじゃっ』

――と聖の大精霊リザルト。

『……』

――風の大精霊セイレシルは何も言わなかった。

『――ラクロエ様、我ら大精霊の守護のもと、必ずや大魔神ザロクサスを倒し、精霊界をお救いください。それが、お母上の願いでもあり、我らの最後の希望なのです』

――と炎の大精霊フレイ。

そして――。

最後に精霊の女神は静かに優しく言った。

――レティ、よくここまで私たちの導きに応えてくれました。

あなたはその強さと、元々魔力の高い資質により適合したのでしょうね。

今ははっきりとわかります――。

私は祈りましょう――。

精霊界全ての者達の願いを込めて――――……

……

第五章終わり。　第六章へ続く…

【第五章】†ｅｐ．５　さらなる光†††（後書き）

第五章が終わりました。
初めからここまで読んでくれている方ありがとうございます。
初作品でいきなり結構長い作品書いてますが、だんだんと終わりが見え始めましたぁ。あ、でもまだ続きますが。
ラクロエ…少し可哀想な役柄ですね……。
でも一緒になったからそんなに哀しいわけでもありません。
色々と張った伏線も大分明らかになってきましたぁ。少しすっきりしました。ではでは、第六章からはついに迷いもなく進める展開かなぁと思っています。応援してくださる方は感想でもなんでもください。りんごでしたぁ。

【第六章】それでも私は†ｅｐ．０　少年†（前書き）

うーん。エピソード０…あまり今回必要ないけどかいたきがしますｗ
校正出来てないので間違いあったらすみません。

【第六章】それでも私は†ｅｐ．０　少年†

私は夢を見ていた――。
ラクロエが私に感謝している夢だった。
その姿はよくわからなかった。
口元が微笑んでいたことだけは覚えている。
それと、最後に聞いた――ずっと一緒だね――という言葉。
夢ではなくラクロエの言葉だったのかと思いながら、まだ薄暗いこの町並みをひとり上から見下ろすその場所は、勿論時計塔の屋根の上だった。
「――ラクロエ…かぁ……」
そう呟いてレティシアは再度眠れない気晴らしのために来たこの時計塔で、ため息を吐いた。
エンブレミア王国からサユラナの港街、クレトスの港町、カザフールの村、ミールティアの街、ダムルニクス王国、エルフの街エルフィード、ドーラの港町、ザルークス国…他にも様々な場所に足を運んで来たが、何故かミールティアの街は落ち着く。
精霊達の魂のかけらが神殿に集まっているからなのか、そういえばここに来た時にも何だかすごく嬉しいようなわくわくしていたのを思い出す――。

ラクロエは私、私はラクロエ――。

――でも、私と直接会話することはなかった。

私が裏にいる時、ラクロエは私が裏に存在していることを知っていたから『ごめん』と思考したけれど、私の返事は聞こえていない、近く遠い存在……。
それに――。

『――えっ…ちょ、ちょっとっ。だっ駄目――――ッ！』

と私が叫んでいたなどとは、誰にも言えない――。

レティシアは少し顔を紅潮させながらばたばたと手足を暴れさせた。

少ししてその動きをぴたっと止めて、ため息を吐いた。

――ラクロエに嫉妬してどうするんだ…。

そんなにアイツのこと好きなのか……私は。

なんだか悔しいと――思う。

それでも、その通りなのかもしれないと口元を軽く緩ませた時だった。

「――何ひとりでじたばたしたりにやけたりしてるんだ？」

「！！！」

ばっと見た宙には、ミグの姿があった。

ミグは呆れた様な表情をしている。

「――わっ！　なっなんでもないッ…。し、下にいたなら言えっ」

「…お前が上にいるとは知らなかったんだよ。――起きちゃってさぁ、ちょっと気晴らしにと思って時計塔にいたら、どたどたと上から音がするから上がってみれば、お前か……」

レティシアはため息を吐いてその場から右にずれると、ミグに座るスペースを空けた。

ミグと二人時計塔の上。レティシアが遠く眺めていたエンブレミア王国のある方向。

前もこうやってその方向を眺めていたことがあった。

「っくしゅ」

早朝の空気は朝冷えして少し寒い。レティシアはくしゃみをして腕を抱えた。

ミグはレティシアの肩に自分の上着をかけて穏やかに微笑んだ。

「少し朝は冷えるな…」

「――あ、ありがとう…」

そう言って上着を着ると、思いついたかの様にエンブレミア王国の方角を指差した。

「あ……なぁミグッ。エンブレミア王国の近くの森――行ってみないか？」

「えっ――――？」

ミグは何を言っているんだとか言っていたが、レティシアは右手をかざして白い魔法陣を上空に出すと、目を輝かせて納得して頷いていた。

――ラクロエは左手をかざしていたと森に着いてからミグは言った。

少し考えて、ラクロエは左利きなんだとレティシアは言って微笑んだ。

懐かしいエンブレミア王国の近隣の小さな森――。ここには色々な思い出が詰まっている。

１０歳くらいの頃、『魔物討伐だぁ！』と言って森に二人でこっそりと出かけた。エミュ～とはそこで出会ったというのは過去にも触れたが、レティシアはここに昔、絵本の通りにエルフに逢えると思って探しに来たことさえあったこと、暇で森へひとり探索に来て迷った私をミグが見つけてくれたこと――。思い出すと懐かしくて笑えてくる。

朝靄のかかるこの森の空気は湿気を含んでいるが心地いい。

鳥達がまるで二人を招き入れる様に歌うこの森を、少し歩いてレティシアは突然歩みを止めた。

――こっちだよ…こっち。

レティシアは突然聞こえたその声の方向を向き、目を凝らすが何もない。

「？」

そして首を傾げるレティシアにミグが不思議そうにしている。

しかし聞こえる声は確かに、こっちだよと呼んでいるみたいだ。

「なんか、声、しないか？」

「…いや？」

どうやらミグには聞こえていないらしい。

とにかく呼ばれているみたいだと伝えるとレティシアはその方向へと足を進めた。

少し広場のように草原が広がる場所に歩みを進めた時、少し遠くの一本の木の前に誰かが立っているのが見え、近づいて行ってみると白銀の様な髪をした可愛らしい少年が木の前でこちらを見て立っている。

「！」

レティシア達は立ち止まった。

少年はレティシア達より少し幼いと思う。耳はミュイエの様に白い猫の耳の様な耳が頭にぴんと立ち、しっぽもある。どうしてかわからないが懐かしい様なそんな気がした。そしてその名を呼んだ。

「――エ…エミュ～なのっ？」

レティシアが言った一言にミグは驚愕している。

そう声をかけられた少年はレティシアに向かって微笑みをうかべた。

「えっ…えぇえぇえぇっ！？」

ミグが驚いて声を上げるのも束の間、レティシアは少年に駆け寄

った。
　少年の緑石色の瞳はレティシア達の瞳の色に似ているが、エミュ～もその色の瞳をしていた。白いエミュ～の毛は白銀の様な色をしていて、しっぽも長くてふさふさとしていたのを思い出す。
　そしてエミュ～は羽はあったが猫の様な容姿だったのだというのに、何故かわからないがレティシアは少年がエミュ～の様な気がしてならなかった。
　エミュ～（？）も、だっと駆けて来てレティシアに抱きついた。
「エミュ～！　エミュ～なんだなっ！？　さっき呼んだのも、エミュ～だったのか！？」
　少年は頷いてレティシアの顔を見上げた。
「ぜったい来てくれると思ってたんだっ」
と、天使のような愛らしい顔と可愛らしい声で言った。
　しかし、これはどういうことだとミグは二人を一周して眺めている様子だったが、エミュ～に横から尋ねた。
「あ、僕、始めから本当はこの姿なんだけど、びっくりすると困るし。とりあえずあの姿のままで過ごしてただけなんだ」
「え…えとイマイチ意味がわからないんだけど、エミュ～お前は一体何者なんだ？　魔族か何かではないよなぁ？」
「魔族じゃないよ。精霊族。光の精霊族なんだけど、でも…、滅んじゃった…」
「せ、精霊族ってじゃあミュイエと同じ――」

　レティシア達が驚愕してエミュ～を見て詳しくエミュ～の話を聞くと、とある大陸の森に住んでいた光の精霊族は大魔王ザロクサスの手先に滅ぼされてしまい、エミュ～はなんとか逃げて来て平和そうなこの森に身を潜めていた。しかし、危機を二人に助けられて一緒について行った。
　という話であったが、いまいち理解不能な気がしてレティシアは言った。

「――ん？　ちょっと待った。エミュ～さっきお前、光の精霊族って言わなかったか？」

「うん。言ったよ？」

「――六大属性じゃないじゃないか…。光の精霊族って…」

「ふふっ、やっぱりそこ気付いちゃった？　じゃあ詳しく話すかぁ…もう済んだみたいだし」

「？？」

エミュ～は困った様に微笑むと、怪訝そうな表情の二人にこう説明した。

――精霊界の王族が無…と言っているが光の属性を持ち、全ての精霊を取りまとめている様に、精霊族にもまた光の精霊族がその中心として君臨している。

…先程、ややこしくなるので『とある森』と言ったのは、精霊界につながる森のことを差していた。

光の精霊族だけは精霊界に住まい、人間の世界の精霊族達を取りまとめているのだとか。

精霊界の危機――これにより、ラクロエは人間へ転生して逃がされたが、光の精霊族を一人でも残すため、エミュ～もまた風の大精霊セイレシルによって逃がされた。

そして、風の大精霊セイレシルとともに時が来るまでラクロエ王女を見守る役目に協力した。

エミュ～は光の精霊族の王子だったが、まだ幼く、セイレシルに育てられながらここまで来たと言っていた。

レティシア達が１４の誕生日近くになり勝手に抜け出した様子だったが、もし城を出ないならば自分がミールティアまでセイレシルとともに力を合わせレティシアを導こうと思っていた。
しかし、城を抜け出すなど予想外だった――とも苦笑して最後に話していた。
「――な、なーるほどぉ…では、要するにお前は用済みってことだな？」
「よ、用済みって…ミグいくらなんでもそれは…言いすぎだ」
「でも無事ラクロエ様復活したみたいだし良かったよ。――ねぇ、僕も連れていって――」
その時太陽が明るくエミュ～の顔を照らし、緑石色のエミュ～の瞳はきらきらと不思議な力を持つ様に強い意志と願いを込め、真っ直ぐに向けられていた。
――エミュ～にも関係のある話で、その目に自分は逆らえないと、そう思った。
「…そうだな。ミグは城に残すわけには行かないと思って森に放したようだけど、そういうことなら置いて行くわけにはいかないな…」
と言ってレティシアは頭上に時空移動のゲートを作る。
シュッと移動して時計塔の上――。
エミュ～に言った。
「その、悪いんだけど他の皆がびっくりするといけないから猫（？）に戻ってくれないか。それが条件だ」
玄関からルクチェの屋敷に戻った二人とエミュ～は、予想通りにリュシファーに叱られた反面、エミュ～に驚く皆の顔を見て、レティシアはふふっとも微笑んだ――。
ルクチェとリアジュは目をきらきらとさせて、エミュ～を連れて行って遊んでいる。
白銀の様な毛色――それはふさふさとした猫の様に毛が長く生え

ている。
愛くるしい緑石色の瞳――それは大きくて丸い木の実のような形。
背に生えた天使のような小さな羽根――それはパタパタと飛び回り猫ではないと告げる。
愛くるしく『ミュ～』と鳴く声――それは誰もを、きゅん、ときめかせるように可愛らしい。

そして――。

猫――？　と言ってみるが、猫じゃないみたいだと言い、
それでは何――？　と聞かれてもやはり猫…？　としか答えようのないエミュ～は、
猫ではなく光の精霊族であったのだが、皆には内緒にしておこうと思う――。

レティシアとミグは、顔を合わせてにっこりと微笑んだのだった。

つづく。

【第六章】それでも私は†ｅｐ．０　少年†（後書き）

エミュ～うちの猫モデルですが、マスコットキャラだったのに勝手な設定無理やり入れましたｗ

色んな精霊族や精霊たちの願いも込められながらラクロエ＆レティシアは成長しながら大魔王ザロクサスに立ち向かうことでしょう。

ではでは、エピソード１からが本編的になりますので、どうぞお楽しみに。全部終わったら番外編とかも書いてみようかなぁと今思いました。

長くなりましたが読んでくださりありがとうございますっ。

【第六章】†ｅｐ．１　放っておけない†（前書き）

校正チェックしてませんが…すみません。

【第六章】†ｅｐ．１　放っておけない†

レティシア達が次に目指すのは、精霊の森のある世界地図の中心部にあるセルク大陸――というより、島であった。

例により、ドーラの港街へ時空を移動してやって来たのだが、リアジュはそろそろ城に戻らねばならないと言って送り届けた。

リアジュは別れ際に言った。

『楽しかった』と――。

やけににやにやしながら言ったので、何となく想像が出来た。

ミグとルクチェとミュイエは、リュシファーとレティシアの後ろに続く。

レティシアの肩に乗ったエミュ～はきょろきょろと辺りを見回している。

シーシェルの屋敷の前に着いた時、シーシェルの父ロッドが上から『おおおおおっ』と声をかけてかなり高さがあったというのに、窓から飛び降りてきた。

だん、と見事に地に着地したロッドは、レティシアを抱きしめてぽんぽんと背中を痛いほど叩いて歓迎の言葉を述べた。勿論その後は大笑いである。

「――するってぇと、セルク島まで連れて行って欲しいってことか…」

深いため息を吐いたロッドは、そのセルク島は厄介だと深刻な表情へ変えた。

「――セルク島はロンダルト海域側だ。その海域を通る航海は今や全港が休止しているのは、知っているだろう？」

そうだった。物凄い嵐が未だに時折発生して、誤って向かった漁船を飲み込んでいるとロッドは言った。またそれは嵐だけじゃなく、何かがあるのかもしれないとも言った。

レティシアはそれでも頼み込んでみたが、ロッドは首を横に振っ

た。
「…すまないなぁ。危険とわかっている航海に出ることは出来ないんだ。一艘くらい船を貸してやることは出来るが、やめておいた方がいい――」
「――でも、行かなくちゃならな――ッ……。――あ…いや、すまない。邪魔をした……」
レティシアは事情も説明できないのにこれ以上頼んでも仕方がないと思い、屋敷を後にした。
頭を悩ませる5人は、カフェに入った。
リュシファーが煙草に火をつけて煙をふぅーっと吐く。
「――どうしたものかなぁ～。確かに原因不明の嵐に度々見舞われているならば、向かって巻き込まれでもしたら厄介だからなぁ…」
「でも、困ったわねぇ……」
「うーん。じゃ、船借りちゃえば？」
ミグが簡単に言ったが、レティシアはため息を吐いた。
「――はぁ、舵取れるのかぁ？　船の操縦が出来る者がいないと無理だろう」
「そ、そだな…ははは」
そう言ってうな垂れて机に伏せた時だった。
「――あれ？　船長に前にがっはっはっはって笑う人と言った子じゃないかっ」
という声が聞こえて、レティシアは顔をあげた。
見れば以前、港でロッドを呼んで来てくれる様に頼んだ船員の一人だった。
にっこりと微笑んで、船長ならあれから舵を見習いをしていた船員に度々任せて、屋敷にいると思うと教えてくれたが、首を横に振った。
「あはは…もう会って来た。でも、駄目だった……」
首を傾げて微笑んだ船員はテーブルに肘をついてしゃがみ込んで言った。

「ははは、どうしたんだ。また頼みごとでもしに行ったのかい？」
レティシアは冷めた目で船員を見ると、まぁ座れと席を少し詰めて空けて船員を座らせた。
事情を聞くなり、やはり深刻は表情を浮かべて船員は首を横に振った。
「ん～さすがにロンダルト海域はなぁ……。そうそう、あの嵐なんだがその時の生き残りの奴が『女を見た』って言って、少し前に話題になっていたよ。何か嘘みたいな話だが、恐ろしい笑みを浮かべて水の中で宙に浮いて静止しているみたいに立ち止まって嵐に揉まれる人々を助ける様子もなくただずっとそこにいたと、嘘か本当かわからないがね」
「！」
女――？
まさか――。
「そ、それはどんな女だったんだ？」
レティシアはテーブルに身を乗り出して聞いたが、船員は圧倒されながら言った。
「い、いや…髪は二つに結んでいたらしいが、よくは知らない…。まぁ、人魚じゃないかという噂もあるがとにかく、時々まだ嵐を起こして海に渦を作って船を飲み込んでいるという話だから、さすがに船長も海の男たるもの、危険な時は航海に出ないのが鉄則だと常々言っているから、難しいんじゃないかなぁ」
「そ、そうか……ありがとう、興味深い話だった」
船員にお礼を言って、船員は少し微笑んで去って行った。
「――水の中で恐ろしい笑みを浮かべた女…」
ミュイエが言った一言に、おそらく誰もが予想をつけていただろう。
深刻な表情で互いに顔を見合わせて誰からともなく言った。
「魔の者……」
「えぇ」

「――間違いないだろうな…」
レティシアは頷いて言った。
「だったら尚更行かねばならぬな」
レティシアは席を立ち、5人はロッドの屋敷の前へと再び訪れた。
リュシファーがドアをノックする。
しかし、返事はない――。
どうやら留守のようだ。
レティシアはため息を吐いて出直すことにしようと言って、宿へと足を運んだ。
宿は満室だったこの間と違い、簡単にとれた。
部屋に入るなり、レティシアはバルコニーへと出た。
海の匂いのするこの町の空気は、少し肌がべとつくようだが風が穏やかで心地いい。
日差しは雲に隠れ、少し影をおとしていた。
航海に出れなければ、魔の者を倒すどころか、精霊の森にさえ向かえない――。
駄目元でロッドに頼み込むつもりだったがロッドは外出している様子だった。
明日、もう一度…いや、今夜もう一度――頼み込むことくらいしか今は出来ない。
ため息を吐くレティシアに、薄紅色の飲み物が入ったコップが差し出された。
「ほら。のど渇いただろう」
赤の実のジュース――。
微笑んで頷いて礼を言ったレティシアは、リュシファーに呆れた様に微笑んだ。
「知っていたのか？　これが好きだと」
「…いや、いつもマリアさんに頼んでいたなと思っただけだ」

少し照れくさそうにリュシファーは視線を逸らした。
それでも、気にかけてくれたことは嬉しかった…気がする。
「参ったなぁ～シーシェルの父上、任せろっ、がっはっはっはって…言ってくれるかと思ったんだけどなぁ～」
困った表情でレティシアは格子に捕まって飛び上がったかと思うと、そこに外を向いて座った。リュシファーもため息を吐いて腰かけると、しばらくそうしていた。
心に一物の不安はあるものの、隣に座るリュシファーとただ眺める景色に、レティシアは心が穏やかであった。

「――リュシファー、お前さ…封環外した？」

「気付いてたか…」
「そりゃわかる。昔の私ならすごい力だと怖れていたかもしれないが、今は別に…まぁまぁだなーとしか思わないが、なんか違うなと今朝から気になっていた」
「はは、そりゃどうも。さすがに精霊様にはかなわぬだろう…いつの間にやら俺より高い魔力に目覚めたなぁ～。でもまぁ、このくらいしておかないと――これから先、お前を守ってやれないからな…」
レティシアは何も言わずに、そっとリュシファーを見た。
どちらからともなく触れる唇に、目を閉じていた時だった。

「あ」

その声にレティシアはばっと後ろを振り返ったそこには、ミグがぎこちない笑みを作り、悪い悪いと謝っていた。
レティシアは慌てていや、これはだから、その、なんていうか、としどろもどろにミグに弁解をした。
「ははは、いや何も弁解することないない。別に邪魔したのはこっ

ちだ、悪い悪い」
と面白いものを見たと言わんばかりに楽しそうな笑みを浮かべている。
レティシアはひょいっと格子から降りると、風呂に入ると言ってその場をそそくさと去った。

風呂はルクチェが入った後らしく、湯気が発ち込めていた。
「――はぁ……」
レティシアはもうすっかり髪も体も自分で洗える様になっていた。
全て洗い終わり、湯船に浸かってため息を吐いていた。
腕の上に顔を乗せ、恥ずかしい様な、苛々する様な、嬉しいような…複雑な気持ちになっていた。

――これからお前を守ってやれないと思ってな…

リュシファーの言葉に、レティシアはふふっと微笑んで呟いた。

「……ありがと――……」

レティシアは風呂に上がるなり、がっはっはっはという聞き覚えのある笑い声に、急いでバスタオルを巻いたまま走った。
「！　シ、シーシェルの父上ッッ！？」
とレティシアは驚いてそこにいた人物に声をかけた。
しかし、皆驚いた様にレティシアを見ている。
「――服くらいちゃんと着て来い…」
ミグが呆れた様に言った。
バスタオルは巻いてきたと思ったら、途中で落ちてレティシアは裸であった。
「いや、そんなのどうでもいいがシーシェルの父上何故ここにっ」

と全く構わない様子のレティシアに、ルクチェが見かねてせめてバスタオルを巻く。

「ははは、相変わらず元気がいいなぁ。レティシアは。いやぁ、考えてもみたんだが、やっぱり心が力を貸してやれって言うみたいに、どうも連れてってやりたくなってしょうがないんだ。俺にもよくわからんがなぁ…とにかく、明日朝またブラックウイングロッド号の前に来い。それを言うために、俺は宿を駆けずり回って探したんだぜぇ？　ははははは」

ロッドのその言葉にレティシアは歓喜してロッドに思わず抱きついていた。

「わっはっ、ありがとーシーシェルのお父上ッッ」

ロッドはさすがにバスタオル一枚のレティシアに抱きつかれ、少し照れている様子でぎこちなく微笑んだ。

「――ははは、まぁそれはともかくとして服位ちゃんと着ろ。風邪引いて航海に行けなくても知らんぞ」

と冗談を言うと、じゃあなと言って部屋を出て行った。

ぎこちなく微笑んだルクチェとミュイエが立ち上がってジャンプして手を合わせた。

「やったーーーっ」

レティシアとミグもジャンプして同じ様に歓喜する中、リュシファーは穏やかに微笑んで頷いていた。

「何はともあれ、これでセルク島へ向かえるな。あと――おそらく水の魔の者も…」

その重々しい発言に、四人も重々しく頷いた。

明朝、レティシア達は港へと足を運んでいた。

空はやや鉛色の雲が遠くに見え、曇りであるが心配するほどの天候ではなさそうである。

ブラックウィングロッド号に会うのもこれで二回目である。

「おはようございます。お久しぶりですね」

とシーシェルが見送りに来ていた。
「シーシェル～。久しぶり～っっ」
「気を――つけてくださいね」
元気に言ったレティシアと反対にシーシェルは心配そうにレティシアを見つめていた。
レティシアは少し俯くシーシェルに向けて静かに微笑んだ。
「大丈夫…。心配するな――きっと無事で帰ってくる…。私には皆もいるし、シーシェルの父上も海の男だ。簡単には死なない。がっはっはっはーって言って、無事に戻るからっ」
レティシアのその言葉は妙にシーシェルにとって説得力があり、シーシェルは顔を上げて「はいっ」と微笑んだ。

ブラックウィングロッド号が出港し、ドーラの港のシーシェルの姿が小さくなって見えなくなるまでレティシアは手を振っていた。
「――きっと、無事で帰ってみせるから……」
そう呟いて少し服の袖で目を擦ったレティシアは、甲板から下に降りた。
レティシアとリュシファー、ミグとミュイエ、はそれぞれ同じ部屋。
ルクチェとエミュ～も同じ部屋だった。
セルク島へ行くまでは、ウェルクス海域を通り、途中でロンダルト海域へと入る。
その頃まで一日はかかるとのことだった。
「少し昨日興奮しすぎて眠れなかったから休むかなぁ～」
レティシアは布団に入り、目を閉じた。
ふっと微笑んでリュシファーは黒縁の眼鏡をかけて読書にふける。
「――何の本読んでるんだ？」
レティシアは言った。
「――ルーザスの思想論の本、高等魔術師ルーザスの思想本だ。久しぶりに封環を解いたからなぁ、少し読みたくなってなぁ」

「…ふぅん。例えばなんて書いてあるの？」
「――寝るんじゃなかったのか？　仕方ない…力に奢れるな、力に学べ。だとか…力を持つ者の心構えだとか書いてあるんだ。自分の力に奢れては成長を止め、恥じなければならない者も多いだとか色々な思想が書かれているんだ」
「そうか。ありがとう…。――眠くなった」
そう言うとレティシアに向けてリュシファーはやれやれとため息を吐いていた。
レティシアはそのまま目を睡眠へと入っていったのであった。

――どのくらい時間がたったのだろう。
外は暗く、部屋の明かりも点いていない。
「暗いの…怖い……ぁぅ…」
レティシアはベッドで目を開けてゆっくり起き上がると、恐る恐るドアの外へと向かった。
レティシアは真っ暗なところが苦手であった。
廊下に灯る明かりのお陰で安堵してため息を吐くと、隣のルクチェの部屋をノックした。
返事はない――。
じゃあその隣のミグとミュイエの部屋を――と思ったらここも返事がない。
首を傾げながらレティシアは甲板へと上がった。
「おーレティ！　やっと起きたかぁ～。飯だ飯～。船の上で食べる飯もなかなかいいぞ」
とミグが言った。
甲板の上でテーブルを広げて、皆が凄い量のご飯を食べている。
どうやら食事に誘ったのだがちっとも起きなかった私を残して先に皆集まっていた様だ。
レティシアも席についてロッドが作った『海の男のおしゃれ豪快ディナー』という、どこがお洒落なのかが理解不能なとにかく豪快

さだけは目立った食事を食べる。
気付かなかったが、カフェで話しかけてくれた船員もそこにいた。
「あっ、お前も一緒に来てくれたのか？」
「ははは、今頃気付いたの？　ひどいなぁ～。せっかく船長に頼んであげたのに」
と船員は言った。
怪訝そうな顔で理由を尋ねると、船員は微笑んで言った。
「真剣な顔してたし、何か放っておけなくてね。船長のところに行こうと思ったら船長は船を整備してるし、どうしたのか尋ねたらどうもよくわからないが行かなければならない気がするって言ってね。これはいけると思って、俺も頼んであげたのさ。俺も宿を聞いて回ったんだぞ？」
「そうそう、なーんかお前は放っておけない気がするんだ。無鉄砲というか、危なっかしいのもあるんだが、真剣に何かに挑もうとする女にしちゃ珍しいくらいの鋭い目を時々する。どうもこれは協力してやらねばならんなぁって気にさせるのさ、がっはっはっはっはっ」
船員とロッドが口々に言う一言に、リュシファーはぷっと微笑んだ。
それに釣られてルクチェ達も笑い出した。
「――皆そうなのね。放っておけないなぁって私も思ってた」
「み、皆まで…もぉ、何か子供扱いされてるみたいじゃないかっ」
そう言ってレティシアはぷいっと甲板の先頭に立った。
皆はレティシアのことを誰もが同じ様に思っていた。
強がってはいるが、一生懸命というかなんというか放っておけなくて手助けしてあげたくなる。
レティシアは皆がそう思っているなどと、全く気付いてもいなかったのだ。
とはいえ、子供扱いとそれは言う――と不満であった。
暗く闇の様に黒い海の上を、波の音を静かに奏で進む船。

今は穏やかなウェルクス海域にいるが、明日はロンダルト海域に入る。
少し潮の匂いを含んだ風が吹き、緑石色の髪を静かに揺らしたのでレティシアは髪をかきあげる。
そして不機嫌そうにため息をひとつ吐くと、騒がしい後ろの皆の声を背にしたまま、レティシアは心落ち着くまでしばらく海を眺めていたのだった。

明朝――。
甲板へと朝早くから出ていたレティシアは、ロッドからここからロンダルト海域だと教えられた。
天候が悪く、海は少しずつ荒れ出している。
レティシアは船の先端で目を閉じて精神を集中させた――。
船が淡い金色の光に包まれていく。
ふぅ…と息を吐くとレティシアは視線を前に鋭く向けて言った。
「シーシェルの父上、光の防壁を張ったから水面に触れているようでこの船は触れていない。だから嵐が来ても大丈夫だから、心配しなくていい」
「え!?　な…えと、あ…え?」
ロッドはイマイチ理解が出来ていない様だったが、レティシアは水面に意識を集中させていた。
どのくらい時間がたっただろう。
海は荒れに荒れている。しかし船はちっとも揺れずに進んでいた。
ロッドは不可思議なと最初は困惑していた様子だったが次第に落ち着いていた。
その時だった――。

来る――!!

「ミュイエ!　船員やシーシェルの父上を船の中へ!」

レティシアのその叫びに、ミュイエは事情はともかく言う通りに中へと船員達を非難させた。

ザッと目の前の水面から水しぶきをあげて飛び上がってきたその姿は、水色がかった銀色の髪を二つに結わえた女だった――。

その背には白い飛竜の様な翼が生えている。

水面から水を巻き上げて自分の周りに纏わせた女は、くくっと微笑んだ。

「あら…船が全然びくともしないから様子を来てみれば、緑石色の髪…あなたが不穏因子のお嬢ちゃんなのねぇ……これはこれは、我が陣地に自ら入ってきてくれるなんて好都合。もっとも、そのうち現れると思っていたケド…」

相変わらず魔の者って奴は見下した様に物を言う――。

本当気に入らぬっ…。

きっと睨みつけてレティシアは上昇した――。宙で睨みつけてレティシアはため息を吐いた。

「水の魔の者はお前か」

「あら…知っているの。話しが早い。でも、これを言わせてくれなきゃ、何のために登場したかわからないわ――大魔王ザロクサス様の配下――殺戮の四天王、海に現る水龍の息、渦巻くその中に人は死す…水魔のブルガローズとはわたくしのこと……さて、やっと言えたところで、覚悟しなさい？　ふふふっ、あっはっはっはっはっ…！」

――あぁもう、いちいちキャッチフレーズとか別にどうでもいいのに…。

面倒くさい。一気に片付けるか……。

レティシアはその高々な笑い声がおさまる前に炎の力をその身に集め、人差し指をちょいっと突き出した。

はっきり言ってやる気なしである。

途端に炎上するブルガローズの様子に、ルクチェは驚愕していた。

攻撃も全く放てないまま、ブルガローズは黒い灰となりかけている。

「なッ……ッお、お前ッ……――ま……さか…、セイ……レ…ッッぐぅッ…！」

レティシアはふっと呆れた様に微笑むと、ゆっくりと灰になっていくそのブルガローズの身の側で言った。

「――舐めてるから痛い目に遭う……」

冷淡な目を浮かべて黒い灰から現れた魔鏡を受け取るために手を差し出した。

ぽとっと落ちてきた黒い魔鏡をその手に握り締めてレティシアは呟いた。

「あと2つ――」

つづく。

【第六章】†ｅｐ．１　放っておけない†（後書き）

さぁて、エピソード1がやっとUPできました。
少し余裕がみられるレティシアでしたが、これからどうなるのでしょう。
読んでくださる方ありがとうございます。
ではでは。次をお楽しみにっ

【第六章】†ｅｐ．２　割られた魔鏡†（前書き）

例により校正チェックしてませんが。すみません。

【第六章】†ｅｐ．２　割られた魔鏡†

レティシアは宙でため息を吐いて下を見下ろしていた。
眼下の海の水面は穏やかな波が揺れ、嵐の脅威はなくなったことを告げている――。
船の光の防壁を解いたレティシアは、船へと戻った。
「――すっげぇー……」
唖然としていたミグが一言言った。
「あはは、だってさっさと片付けないといけないだろう？　とにかく、やっともう一つ魔境が手に入って、あとは二つだ。――雷鳴のセルローズともう一人を倒すだけ……」
レティシアの言葉に船の下に避難していた筈のロッドが入り口で唖然としている。
「た、ただのお姫様かと思ってたら、すげー魔力じゃねぇか…。あの嵐、もうすっかり落ち着いちまってるし……こりゃいいや、がっはっはっはっ」
次第に状況を理解したロッドは大笑いしてレティシアのもとへやって来た。
ぎこちない笑みを浮かべながら、レティシアはロッドにばしばしと背中を叩かれていた。
「いやぁ、あの嵐の原因がやはりあの女だったとは。しかも倒しただなんて海の男を代表して礼を言おうっ。噂には聞いていたが本当にいると思わなかったし、実際死も覚悟して航海に出たんだが、これなら一安心だ。おいラテ、酒持ってこい酒っ」
そう言ってロッドは酒を持ってこさせて何やら船員達と朝っぱらから酒を飲み始めた。
しかしこの男――すっかりごきげんである。
「よーしっ心配もなくなったし、飲もう～」
あれ？　ルクチェ？？

何だかよくわからないけどミュイエもルクチェも船員達も飲んでいる。
「――俺も行って来ようっと」
ミグが行こうとしたが、リュシファーが止めた。
「……未成年はダーメ。おまけにお前も酒弱いんじゃないのか？」
「え？　飲んだことない」
そう言ってミグはリュシファーの言った一言に気付いた様子でレティシアを指差してリュシファーを見た。
リュシファーは頷いて言った。
「ダムルニクス王国で誤ってジュースだと思って酒一口だけでコイツは酔っていた」
「……お、覚えていないが……大変だったらしい」
「え、そなの……？　まぁまぁ、せっかくだしどうせあと二日はセルク島着かないだろうし今日位いいじゃない」
何やら盛り上がっている様子のルクチェたちの様子をちらっと見て、リュシファーはため息を吐いて微笑んだ。
「仕方ないな……ちょっとだけだぞ、介抱するのは俺の役目なんだからな」
そう言って三人も皆の輪の中に入って行ったのであった。
――……

「――で、結局こうなるわけか……」

リュシファーは酔っ払って騒ぐだけ騒いだミグを担いで、ミグの部屋へと連れて行って戻って来た。
レティシアはほよほよと浮いている様な気分でリュシファーに言った。
「やーん戻ってきたぁ。一緒にいてくれなきゃいやあ～」
「はぁ……壊れすぎだ。お前も……」
そう言ってリュシファーははっとした。

レティシアの目には涙がうるうると浮かんでいる。
ま、マズイ……っ。
「ひどぉ～い、リュシファーがおこったあ……わたしは……うれしかっただけなのにぃ……ぐすっ……」
くすんくすんと女の子らしく泣き始めるレティシアに怒っていないと弁解して微笑みながらも、コップに一口しか相変わらず口をつけていないことに呆れていた。
「わ、悪かった悪かった。お、お前もそろそろ少し横になった方がいい。さぁ行こうな」
とそう言うと、レティシアを抱っこして連れて行こうとした時だった。
「あはは～、ティアラちゃんかーわいい～あんなんで酔っ払っちゃうなんて、ふふっ」
ルクチェが嬉しそうにそう言った。しかもルクチェは半端ない量を飲んでいるというのに全然潰れる様子もない。――酒豪だな……とリュシファーはルクチェにも呆れてそう思った。
微笑んでレティシアを連れて部屋に戻ると、リュシファーはレティシアをベッドの上に降ろして座らせて言った。
「――お前は酒を飲んだ時だけは素直で可愛らしいな……」
「？」
レティシアはよく意味がわかっていないらしく、きょとんとしている。
ふっと微笑んでリュシファーはレティシアの頭を撫でた。
「――わからなくていいんだ」
そうしている内に子供のようにレティシアははたっ、とベッドに倒れこんだ。
寝ている――。
無防備な表情で眠るレティシアをちゃんと布団の中に寝かせると、その寝顔に向けてふっと微笑んでリュシファーは部屋を後にした。
時刻は夕焼けになる頃になっても皆は宴に騒いでいた。

ルクチェも大分酔っ払っていて、ロッドと肩を組みながら「飲めー海の男はもっと飲め～」とか言っている。周りの船員たちも浮かれて騒いでいる。

ミュイエはそれほど飲んではいないらしかったが、ルクチェを上手く介抱するために待機しているらしい。

リュシファーは一人船の先端に座り煙草を吸っていた。

「――平和だな……」

夕焼けの橙色に燃える空が映る海の水面。舵を適当にちゃんと時々ロッドは取りながらも酔っ払っているところはさすが海の男だ。

近づく足音にリュシファーは振り向いた。

――マズイ……。

そう思った。

「こらぁっそこのすかした男ーーっ、何で一人で黄昏ちゃって。酒飲めーっっ」

……やっぱり。レティより厄介だ、ルクチェは。

「いや、俺はもうかなり飲んだから酔い覚ましだ。はは、大分酔っているなぁルクチェ」

「何ぃ？　酔い覚ましなんてする必要なんてどこにあるのよー」

無気になって酒の入ったコップを手渡して来たルクチェの睨みつける様な表情。

それは、従っておいた方が良いと告げている。

やれやれと思い一気に飲み干すと、冷めた目でコップを渡した。

「満足したか。もういい加減そのくらいにしとけよ…」

そう言ったリュシファーにルクチェはふぅとため息を吐いて座り込むと、なおも絡んで言った。

「はぁ～、それよりねぇ、ティアラちゃんとどこまでいってるの？」

「……は？」

「だから、どこまでとかあるでしょうがぁ、チューとかあーんなことやこーんなこととか」

リュシファーはどこの酔っ払いのおっさんかと思いながらため息

を吐いた。
「――想像に任せる」
ルクチェはそう言ったリュシファーに不服そうにしていたが、ミュイエがやって来てルクチェを連れてそろそろ部屋へと連れ戻して行ってくれた。
やれやれ、やっと宴も終わったかと甲板の上を見ると酒の瓶は転がっているわ、船員は床で寝る者もいるわでとんでもないありさまだった。
リュシファーは仕方なく後を片していると、ミュイエが戻って来てそれを手伝った。
「やっとうるさいのが消えたな……はは」
とそう言うと、ミュイエとふふっと微笑んだ。

レティシアが目を覚ました時には、リュシファーは隣に寝ていた。
どうやら夜らしい――。
部屋が暗くて怖くなりリュシファーの服を掴んだ。
「……ん？　なんだ……目、覚ましたのか……」
「暗い……」
「あぁ、少し明かりつけないと眠れないんだっけ…子供じゃあるまいし」
「こ、子供ではないっいいから点けてくれっ」
「――嫌だと言ったら？」
「む……意地悪」
ため息を吐いてレティシアはベッドから起き上がってパチッと全点灯にした。
密かな仕返しだった。
レティシアはにっこり微笑んで、トイレ行って来ると部屋を出た。
リュシファーはがばっと起き上がって、頭をくしゃくしゃと掻いて呟いた。
「あの馬鹿姫……っ、わざとだな……。はぁ、酒でも飲ませりゃ素

直で可愛いんだがな……」
レティシアがトイレから戻ると、リュシファーは電気を点けたまま眠っている様だった。
「何だ、寝たのか。つまんないの」
そう言って明かりを一個だけ灯して薄暗くすると、自分も布団に入る。
レティシアは目を閉じて少したったが、なかなか寝付けずにため息を吐いた時だった。
「――レティ、お前はたいしたヤツだ。単なる一国の王女にしておくのは勿体無いくらい強い精神力だと思う。もちろん、魔力もそうだがな……」
リュシファーが起きていた様子でそう背を向けたままで言った。
「――な、何だ……急に……？」
リュシファーはゆっくりとレティシアの方を向き直り、顔をじっくりよく見る様に優しく微笑んで見つめていた。
「でも――お前は王女だ。俺とこうしていられるのもあとどのくらいだろうと、ふと思った……」
「え……何を……言って……」
レティシアは困惑した。
穏やかな顔をして、何か聞きたくない言葉を紡ぐ気がした。

「――大人扱いしてもいいんだが、やめておこうと思ってな……」

「……？」
よくわからない事を言われ、さらにレティシアは困惑の表情を浮かべながらリュシファーが重ねてきた唇を黙って合わせた。その後ふっと微笑むとリュシファーはレティシアを抱きすくめ、子供を寝かしつける様に背中を優しく叩く。
レティシアはその静かな沈黙の中、さっきの言葉を思い返していた。

しかし、考えても考えても何か哀しいことでも言われた気がして、しくしくと胸が痛む。

でも聞いてはいけない気がして聞けず、そして自分でもよくわからないというのに、目には浮かんで来る涙――。レティシアはそれを気付かれないように、何故か必死に我慢していた。

そうしている内にレティシアは、ゆっくりと眠りへと堕ちていく――。

そして、夜は二度更けた――。

「――おっ、見えて来たぞー！　あれがセルク島だ！！」

ロッドはそう手を額の前にかざして大きな声で言った。

入道雲が浮かぶ目の前の遠くの方向に見える島。

そこに見える紫色の靄――。セルク島のその雰囲気は妖しく包まれていた。

レティシアは真っ直ぐにそれを眉をしかめながら見つめていたが、ミグははしゃいで喜んでいる。おそらくミグには見えていない――そう思った。

ルクチェに視線を配る。。

「ルクチェ、靄見えるか？　紫色の」

「紫色の靄……？　いや……見えてないわ？」

「――じゃあ、誰にも見えていないということか……」

レティシアはため息を吐いた。

近づいて来て見える中央の森を取り囲む四つの塔――。

恐らくアレが“魔鏡の塔”――。

塔は黒く、遥か高くまでそびえ立っている。

レティシアはその場にしゃがみ込んで、リュシファーから昨日返してもらった剣を取り出した。

「！？」

皆が慌ててレティシアを囲う。

「リュシファー……魔鏡一個持っているだろう？　それを出してくれ」

レティシアはリュシファーの方を見ずに冷淡に言った。

言われた通りにリュシファーが手渡した魔鏡――。

それと自分の持つ魔鏡を二つ並べて床に置き、レティシアは目の前で剣の鞘を抜いた。

真横にぎらりと光る刃が太陽に照らされてちらつく中、レティシアは刃に少し触れて引いた。「なっ……！？　何を――」

少し流れ落ちる血は二つの鏡にぽとっと滴り落ちたのを確認すると、次にレティシアは剣を持ち替えて両手で思い切りひとつの魔鏡に向けて突き刺した。

ピシッという音を立ててひび割れた魔鏡。

それは次第に紫色の光をぼんやりと放ち、ボロボロと崩れ白い灰へと姿を変えていった。

そして顔を上げて見た前方の森にそびえ立つ塔は、一本スッと消滅していく。

跡形もなく塔が一本消えたので、レティシアは同じ様にもうひとつの魔鏡も灰へと葬り去る。

唖然として見ていた皆の内、リュシファーが口を開く。

「――お、おい……まとめて壊すって言ってなかったか？　大魔神にこっちの動きを知られるとかなんとか前に言ってただろう」

そう言ったリュシファーの言葉にレティシアはリュシファーを鋭く見上げて言った。

「――もう逃げも隠れもせぬという宣戦布告だ……」

リュシファーはその真意がわかったであろうか。

私は自分なりに考えてリュシファーが言いたかったことを想像していた。
そして聞きはしないが多分わかった。
リュシファーは途中までしか言わなかったのだと思う。
多分、聞きたくもないそのことをいつか言われる日が来るんじゃないかと思うと、レティシアはリュシファーとあまり会話をしないようになっていた。
何だか怖くて――苛々としていた。
昨晩のこと――。態度がおかしいとリュシファーに言われた。

“お前がどういうつもりかは知らないが、私は今やるべきことをやる――そう決めた。
だから、今はそれだけを考えたい。後のことは後に考えればいい――。
私の力はそのためにある――。……別に強いわけでもなんでもない。
“

それだけ言い残し、レティシアはミグの部屋に行き、ミグのベッドに入り込んで寝たのだった。
きっと睨みつける様な視線を送り、ぷいっと船の後ろに歩いていった。
そんなレティシアとリュシファーの様子には、勿論誰もがおかしいと気付いていた。
「……なんだ、まだお前ら喧嘩でもしてんの？」
「――……いや……まぁ……そうだな」
リュシファーはそう言うと、少し切なそうな表情を浮かべてレティシアを見ていたという。

セレス大陸――小さなその島にも人は住んでいたらしい。

しかし、今現在、人々は忽然と姿を消しどこにも一人も見当たらない。
あるのは大きな森と、草原、荒地――。
レティシアにだけ見えている紫色の靄が、頭上は遠く空に覆っているだけである。
「いやぁ～無人島ってヤツかなぁ～何もない……」
確かに……塔が見えてなければそうだろうな……。
「天気だけはいいんだからバカンスにでも来たみたいね」
どこが……天気が良いのだ。紫色の靄に覆われて薄暗いというのに…。
レティシアはミグとルクチェのその発言にツッコミを入れながらため息を吐いた。
「じゃ、俺はまた帰っててていいんだな？」
「あぁ、大丈夫だ。もう嵐もないからきっと安全だ。世話になったな……シーシェルの父上」
レティシアは言った。
しかし、ロッドに突然腕を引かれて少し離れた所に連れて行かれ、レティシアは困惑の表情を浮かべていると、ロッドはレティシアにこっそりと言った。
「！　なっ――」
「がっはっはっはっはっ。まぁその時が来たら声かけてくれ～じゃまたなぁ」
レティシアは顔を真っ赤にして慌てて否定、困惑、怒り、全ての言葉を混ぜてよくわからない言葉をロッドに投げかけようとしていたというのに、ロッドはそそくさと逃げる様に大笑いをして船に乗り、ゆっくりと去って行った。
な……なんという身のこなし、素早い。
と変な感心もしながらレティシアは困った様にため息を吐いて、皆の元へと戻って行った。
リュシファーをちらっと見ると、少し照れた様に視線を上に向け

た。

『結婚式とかやるなら呼んでくれよ』

とロッドは言ったのをリュシファーは絶対に聞いていた――とそう思い、レティシアはため息を吐いた。

その時だった――。

「――あっはははははっ」

という高々に笑う、女の笑い声――。

紛れもなくそれは雷鳴のセルローズの声だった――。

ばっと見上げた先には、ふふふ……と微笑を浮かべる見た事のない金と銀が混ざった様な短い髪をした女がセルローズと背中合わせに腕組みをして宙に立っていた。

「なっ！　二人……！？」

リュシファーが言った一言に、セルローズは言った。

「――お前、死んでなかったのか……なかなかの腕か……。まぁどちらにしても私の相手が出来るのかしら？」

「……かしら？　ふふっ」

その金と銀の髪が混ざった様な髪の短い女は、なんだか言うのが面倒なのかセルローズの語尾だけを言ったので、レティシアは怪訝そうに誰なのか尋ねた。

「……私？　……私は、風のエアローズ……ふふふ」

・・・・・・・・・・・・。

何だか緊迫した空気だというのにエアローズの言葉に、何か違和感を感じずにはいられない。

今まで雷鳴のセルローズ、炎殺のメルローズ、水魔のブルガローズ…皆、何かしら決め台詞があった筈だ。いや、本来ならばこれだけ言えば十分であったが、やはり何か物足りない気がした。

困惑した表情を浮かべていると、セルローズでさえため息を吐いてエアローズに言っている。

「――あっあんなに私が一緒に考えてあげただろうッ、それを言うんだ。早く――」
「……え……でも……」
「でもじゃないっ。かっこがつかないだろうがッッ」
・・・・・・・・・・・・・・。
何だこの二人、何だか揉めている様子だ。
しかし、ようやく上手く解決したらしく、セルローズが口を開いた。

「――か、代わりに教えてやる……待たせたな。この者は大魔神ザロクサス様の配下、殺戮の四天王――風に知るは風に泣く、双龍の竜巻は死の旋律…疾風のエアローズとはコイツのことだ。あ～人の決め台詞を何故私が……だるい……」
「ふふふ、……そう……それ」
エアローズは妙に冷淡にそう言っているが、自分が発する言葉自体が少ない。というより、セルローズでさえ絡みずらそうだ。
風……といえば、風の大精霊セイレシルは声を聞いたことはないが、風属性の者とは皆こういう者なのであろうかとふと思い、レティシアはやれやれと呆れてため息を吐いた。

「――それより、お前こんなところまで何をしに来た？　それに、メルローズもブルガローズも殺って魔鏡を壊したのはお前か……？」
セルローズは相変わらず偉そうに微笑んで言った。
見下ろされているのが気に食わず、レティシアは上昇して二人よりも少し高い位置に来ると、腕を組んで言った。
「――だと言ったらどうする」
「く、生意気な小娘め……」
セルローズはさらにレティシアより少し高い位置に上昇して口を開いた。

「――その罪、万死に値するが、ひとりではまた負けると思ってな。あまり相性は良くないが、こいつを連れて来た」
「ふふふ、連れて……来られた……」
…だ、だから…っ。
あぁ、もう、この者が喋ると少し間が抜ける……。
ため息を吐いてレティシアは風――。雷――と考えていた。
風は炎に弱い。そして雷に強い。一方、雷は風に弱い。そして炎に強い。
同属性の魔法を放てば無論それは効果がないどころか、強めることとなるだろう。
仮に、炎をエアローズに向けて放ち、それをセルローズがかばえば、効果はない。
そして風をセルローズに向けて放ち、ウィローズがかばえば、これも効果はない。
「――なるほど？　で、二人同時にとは少し卑怯だとは思わないのか？」
レティシアは余裕な表情を浮かべて言っていた。
「魔族に卑怯も何もあるまい？　私はお前の怖れ慄く様を見れればそれで良い」
そこまでセルローズが言った時だった。
「――レティ……！」
リュシファーが宙に上昇して来た。
「リュシファー、来なくていいぞ。別にどうってことない。黙って見ていろ」
レティシアは冷淡に言った。
しかし、それに怒り狂ったセルローズがエアローズに声をかけ、二人同時に手をレティシアにかざしてきた。そこから繰り出される激しい突風の渦の中心に真っ直ぐ向かう雷光と激しい稲妻――。
リュシファーがはっとしてレティシアの前に向かおうとする所を、レティシアは瞬時にリュシファーの頭上に白い魔法陣を発生させる

と、ふっと穏やかに微笑んだ。
スッと消えるリュシファーの姿。

「！！」
ミグが下から見上げたレティシアのその口元に浮かぶ笑み。

……！？　あ、アイツ……。
一体何を考えている……！？
避けないと死ぬぞ、あんな凄い魔法……！

その心配も虚しく、両手を左右に広げたレティシアは二つの雷風の渦に飲まれている。
「レ、レティーーーーーーッッ！！」
ミグはそう空中に向けて、叫んでいた――。
――……

つづく。

【第六章】†ｅｐ．２　割られた魔鏡†（後書き）

どうも。りんごです。
二人同時とは本当なんて事でしょう。エアローズ…なんとも言えないある意味かわいい不思議キャラ。しかし、何やらリュシファーとレティシア…ギクシャクしている様子ですが大丈夫なのでしょうか…。
その前に最後は一体大丈夫なのでしょうか…という不安も感じつつ、次の話へ進みます。

ではでは、りんごでした。

【第六章】†ｅｐ．３　何故…†

唖然――。
驚愕――。
愕然――。
焦り、困惑もその表情に加えながら誰もが頭上のレティシア達の様子を見ていただろう。

煙の様なものが巻かれていて、その姿ははっきりと見えない。
その中で最後に眩い光が鉛色の煙の中で発光して、稲妻と突風の渦は攻撃を停止した。
煙が晴れるのをただ待つのみのこの時間に、皆に緊張が走っていた。

そこに人影が二つ少しずつ姿を見せ始めた。
双方とも離れている位置にあるが、ひとつ足りない。
レティシアの姿の煙が晴れる前に、セルローズとエアローズの方の霧が晴れた。
「！？」
しかし、セルローズがいない――。
エアローズが唖然として目を見開いてレティシアの方を見ているのを確認してすぐに、レティシアの姿も見えて来た。おまけにレティシアが両手を左右に広げているその様は、攻撃を受ける前と同じである。
少し前方――セルローズのいたエアローズが今いる宙に浮いた場所の真下の地面に、黒い鏡が落ちている。
「！？　――ど、どういうことだ…！？　攻撃を受けたのはレティの筈…」
さっぱり理解不能と言ったミグは、手を降ろしたレティシアを見

たのだった――。
――――…
――…
レティシアは、手を降ろしてパンパンと服についた埃を払ってから言った。
「――やっぱり予想通りだな。セルローズだけか」
「……そう…それだけ…。でも何故…」
エアローズが淡々とそう言ったので、レティシアはため息を吐いた。
セルローズがしていた面倒くさい通訳の役目が自分に回ってきた様な気がしたのだ。
「――そう、ってあんた仲間が死んだのに、驚かないわけ？」
レティシアが言った一言に、エアローズはくす、と静かに微笑んだ。
「…私、…風のエアローズ。跳ね返しても…雷は…効かない」
「そうだと思った。でも、一人いなくなればもう厄介でもなんでもない」
「…そう…厄介ではない。…ね……あなた何者なの……？　ただもの…違うわね……」
相変わらず絡みずらい――。
レティシアはため息を吐きながら腕を組んで言った。
「――私は、苛々してるんだ。只者じゃないかどうかは知らないけど……」
そう言ってレティシアは自分の周りに炎の渦をゆっくりと巻いていく。

「…あ……それは……駄目…っ」
「――駄目って言われても、大魔神ザロクサスに滅ぼされた精霊界のために、お前達も倒さねばならないんだ。覚悟するんだな……」
組んでいた腕を降ろして人差し指をエアローズに向けるとレティシアは、最後に、ふっ、と微笑んで言った
「――さよなら」

――――……
――…

地上へと戻ると、レティシアは海の向こうから飛んできたリュシファーに怒鳴られる。
「――お、お前何だって船の上に移動させるッッ――って、あれ？あの魔の者はどうしたんだ？」
レティシアは答えずにぷいっとそっぽを向いた。
「…た、倒した。二人とも……な、何が何だかよくわかんなかったけど、煙が消えたらセルローズは死んでるし、エアローズとかいうわけわかんないヤツもすぐに炎に巻いてあっさりと…」
「そ、そうか……って、お前はいつまでそうやって拗ねてるつもりなんだ」
「……」
相変わらずそっぽを向くレティシアに、リュシファーはため息を吐いて言うが、何も答えたくなかった。何か苛々として仕方がない。
「――そうだ。魔鏡、これで残りの二つも手に入ったんだ。壊そう」
ミグが場を取り繕うように言われたそれに、レティシアは先の二つに行ったと同様にそれを壊す――。
その瞬間――。
魔鏡の塔はスッと姿を消して、森が金色の光を放ち始めた。

「なっ……！？　何だ…森が――……ッ」
少ししてその光はおさまり、森は不思議な金色の光をぼんやりと消していった。
レティシアは立ち上がると、指の傷を軽く舐めて剣を鞘にしまう。
「――さぁ行こう」
と森へ歩みを進めようとしたが、ガッと手首を掴まれて足を止めた。
はっとして手首を掴んだリュシファーの顔を見て掴んだその手を逃れようとするが、リュシファーは痛いほどにより強く手首を掴み離してはくれない。
「…おとなしくしてろ。血が垂れてる。さっきより深く切り過ぎだ――。よく自分でこんなに切れるもんだ」
そう言うとリュシファーは聖魔法で傷を修復した。
ため息を吐いてレティシアは言った。
「――もう、いいだろう。離してくれても…」
「はぁ、……そうだな…」
呆れたようにリュシファーは手を離す。
手首を強く掴まれて、少し、じん、と痛んでいたが言わなかった。

…そんな切なそうな目で見るな――。私だって、何でこうしちゃうのか…よくわからぬ…。
昔…みたいだ。
感謝の気持ちも素直に言えずに敵視した目でリュシファーを見て、ただ突き放していた。
そう――、昔は…いつもこうだったな。
なんだかその頃に戻ったみたいだ――。
もし、その頃にリュシファーが好きと気付いていたら、こんな気持ちになっていたのだろうか。
――でもきっと辛いだろうな……。

レティシアは脳裏に様々な思いをはせながら森へと進んだ。

森の入り口――。
レティシアは足を止める。
ため息を吐いて、振り返って皆が立ち止まったのでレティシアは黙ってひとり前に進み出た。
皆の方を再び向き直ったレティシアは、ふっと微笑んで両手を左右に広げた。
「先に謝る――。ごめん…」
「!?」
レティシアはそう言って皆と自分との境界線の部分に、光の空間遮断防壁を張った――。
皆が驚愕する中、レティシアは手を降ろした。
「もし、私が負けちゃったら…ごめんね。ミグ…私、ミグの事“ともだち”だと思っていたけど、城を抜けてみて、お前はやはり少し私より兄なのかなと思って頼りにもしていた――。いつも気にかけてくれて、本当にありがとう」
レティシアは穏やかに言った。
ミグは困惑した表情で何かを言っているが、聞こえない。
近寄ろうとしてミグは光の防壁に手をつけて驚いていた。
防壁は音も遮断し、それを放った術者の声しか向こう側に届かない。
だからこそ使った――魔法だった。
返事を聞かなくて済む――…
「ルクチェ、私を神殿まで導いてくれて感謝する。それに、少し姉上が出来たみたいで、少し嬉しかったんだ。私、男兄弟しかおらぬ

だろう？　おかしな話だが、なんだかんだで嬉しかったんだ。ありがとう」

ルクチェも困惑し、哀しそうな表情でレティシアを見ていた。

もう防壁で何も出来ないことがわかり、呆然と立ち尽くしている。

「ミュイエ…私が至らなかったばかりに、精霊族たち…ノヴァのこと…本当に申し訳ないと思っている――。もし無事に勝てたら、私がノヴァたちの封印を解くから…あ…負けてしまったら叶わないが、その時は私を恨んでいい。と言ってもお前は恨まぬだろうがな…優しいからな……とにかく、ここまで一緒に来てくれて、ありがとう」

ミュイエは困惑しながらも穏やかに微笑んで頷いていた。

ミュイエは理解が早い――。私の意志をきっと読んでくれている筈だと思った。

「それから――」

と言ってレティシアはリュシファーをじっと見て、くるっと後ろを向いた。

「――リュシファー、お前には何も言わない。……と思ったが、…やっぱり言っておかなきゃ気が済まない。私を一国の王女だと知りながら、関係なく好きと言ってくれてありがとう。お前がどういうつもりかは知らぬが、…お前はっ…この…件が…終わっ……ら――、はぁ、――やっぱり駄目だ…、言えぬっ。も…もう行くっ。必ず帰って…っきて、その後に言う…っ」

レティシアは言おうとして哀しくなって来てしまい、言えなかった。

動揺する姿、怒りに怒鳴る姿、ひょっとしたら哀しそうな顔、どれも想像することは容易い。

しかし、見ればきっと決意が緩む――。そう思うと表情を見ることが出来なかった。

皆には見えていない、目の前に現れていた紫色の靄のゲート。
涙を拭ったレティシアは、きっと睨みつけてそこに進む――。

必ず――、
大魔神ザロクサスを倒す――――！

靄に入ると、靄がどす黒く紫色もしている様な色の揺らめく炎に似た煙がレティシアを包んだ。
そして、視界を覆っていた煙が姿を消すと、そこには一本の道が広がっていた。
辺りは薄暗く、所々に灯っている炎は真っ直ぐ先へと配置されている。
しんと静まり返ったその暗闇の中で浮かぶその炎の色は紫、赤、緑、青の不思議な炎だ。

真っ直ぐに歩みを進め、きっと睨んだその先には誰かが立っている。
背が高く、長い銀の髪を一つに後ろに束ね、一瞬女かと思ったが女にしては少しだけがっしりとした体格をしている。それはやはり男であると告げていた。とはいえ、妙に顔立ちは端整である。
瞳は燃えるように血の色の様に残忍な色を見せている。その目が細められ、眉を潜めている。

こいつが…大魔神――ザロクサス――！

「――客人とは、珍しいな……。入るときはお邪魔しますと言ったらどうだ、人間の娘」

「な…ッ、馬鹿にしているのかッ！」

レティシアは細かいことだが気に障って投げ込んだ言葉に、大魔神ザロクサスはふっと鼻で笑う。

「――不穏因子……この様な美しい娘だったとは、いい目をするのだな……人間の娘」

相変わらず余裕な表情の大魔神ザロクサスに、殺意を覚えてレティシアはきっと睨みつけた。

「人間の娘人間の娘って…さっきからうるさいっ！　私の名は、レティシアだ…ッ！！」

「――ほぅ、レティシア…どこかで聞いた事がある名だな……まぁいい。人間の娘、私に何か用なのか」

冷淡な調子で物を言う大魔神ザロクサスは、先程から少し変な間合いを作って答えてくる。

それに警戒をしつつもレティシアは答える。

「――大魔神ザロクサス…ッ、お前を倒しに来た…」

ザロクサスの表情が一変して一瞬厳しいものに変えられたが、すぐにため息を吐いた。

「人間の娘ごときが俺を倒すだと……？　舐められたものだな…。お前程の美しい娘なら、可愛がってあげてもいいんだがな…殺すには少し惜しい――」

「くッ……ふざけたことを言うなッッ！」

レティシアはより強く、きっと鋭い眼力で大魔神ザロクサスを睨みつけ声を荒げた。

「ほほぅ、気の強い娘は嫌いではないぞ――…？　しかしお前のその目、どこかで見た事があるな…あれは――そうだ。精霊界を幽閉した時だったなぁ。王妃だ。その女が同じ様な瞳で、私をその様にきつく睨み上げていたんだっけなぁ…はははははっ……、最期まで怯えた目を見せなかった。相当、気が強い女だと思ったのを今でもよく覚えている――印象的だったなぁ…」

ラクロエの…母上――…ッ？

ゆ、許せん……こいつだけは絶対に……ッッ

「――そうそう、お前、我が配下の四天王――倒したのだなぁ。魔鏡の塔が消滅したということは、倒されたという証――。しかし人間の娘がそんなことをして一体何の得になるというのだ。…魔力が欲しいか――。精霊が幽閉されている今、お前に精霊が貸す力も微々たるもの…おとなしくこの私が時が来て征服を始める時まで待てば良いものを…」

「――勝てる見込みがないと言いたいのか…？」

「――そうだろう？　別にお前がここから立ち去るというならば、ここまで怖れも抱かずにやって来たことに敬意を払って、黙ってそれを見過ごしても良い――。ただ――」

そう言ったザロクサスの表情が残忍なものへと変わる。

「戦うというのならば、仕方ない――。四天王に勝ったからと言っていい気になっているのだろうが、俺の力を侮って貰っては困る…」

そう言って大魔王ザロクサスは宙に浮かび上がり、レティシアに向けて手をかざした。

途端にレティシアの周りにボッ、ボッ、と現れる黒い炎、回り出

すそれはレティシアに一つだけ向かってきた。

「ッッうわ！！！」

――は、速い……！

そう思った時だった。

『――くっ、間に合って…！』

水の大精霊リーヴァの声がした気がしたが、レティシアは炎に巻かれ苦痛に顔を歪ませた。

その場にうつ伏せに倒れこんでレティシアは下唇を噛んだ。

こ…ッ、こいつ…強い……ッッ

ザロクサスはレティシアに近づき、髪を掴むと顔を上に向かせた。

「――ほぉ、死んでいないとは…気に入った……、それに見れば見るほど美しいな……。やはり殺すには惜しくなった――」

レティシアは体が痺れた様に動かないまま、抱きかかえられた。

大魔神ザロクサスに抱きかかえられ、腕に触れられている部分が熱く痛み、その苦痛に歪ませる顔。

それでも瞳だけは大魔神ザロクサスを睨みつけて離さない。

しかし次の瞬間――。

ゆっくりと合わせられた唇――。

リュシファーの顔が頭に浮かぶが、リュシファーとしていたものではないその熱い口づけに、レティシアは意識が遠くなるのを感じた――。

頭がぼんやりとして視界がはっきりしない中、大魔神ザロクサスの声がする――。

“はっはっはっはっはっはっ・・・・・・・・・。
これでお前は俺のものだ――。さぁ、傷を癒してやろう――。
――――……”

――――……

――…

一方、ミグ達――。
「――今、何時だ…っ」

「…もう、5分起きに聞かれても困るわ、エルフィンちゃん。大丈夫よ」
ルクチェは困った様に微笑みながらミグに言うが、ミグは苛々として光の防壁をゴン、と殴りつけた。
「あーッ、痛…ぇ…ッ！　くそっ…あいつ何考えているんだッッ」
そう拳を押さえながら呟くミグにミュイエは、はぁ、とため息を吐いて言った。

「――先程から、もうそれでも1時間半は経ちました。少し…心配です」

その言葉にルクチェもミグもその表情に影を落とす。
リュシファーに至っては、腕組みをしたまま、じっと前を見つめているだけである。
しかし、ため息を吐くとその場に座った。

「アイツは勝手に背負い込む所は前からあるが、こんな最後の戦い

の時までひとりで背負い込むとは……困ったヤツだな――」
と呆れ返っている様子だ。

「――お前、こんな時に何でそんなに冷静でいられるんだッッ。好きな女がひとりで戦場に向かったんだぞッ？　知らなかったッ。お前はその程度の感情で俺の大事な妹を――」
そこまで言ったのをルクチェが肩に手を置いて止め、視線をちらっとリュシファーの膝元に合図するように向けたので、ミグはそれを追った。
膝に置かれた手は服を強く掴み、小刻みに震えている。

！　――あ…、そうだ。平気な筈ない――…。
どれだけコイツがアイツの事を想っているか、俺、ちゃんと解かっていた筈だったのに…。
ミグはそれに気付いてため息を吐いた。
「――ご、ごめん。いてもたってもいられなくて、つい八つ当たりした。…悪かった」
そう言った時だった――。

突如消えた場所からその姿を現したレティシアに気付き、ミグは顔を輝かせて言った。

「レティ――！！」

そう言っては見たものの、聞こえていないとも知っていた。
いてもたってもいられないが、今は来るのを待つしかない。
レティシアの表情は、少し影を作るように冷淡に俯いている。
レティシアは目の前で手をかざし、光の防壁を解いた。

そして駆け寄る４人。

エミュ～はそこに立ったままだった。

レティシアは皆が声をかけているにも拘らず、俯いたまま何も言わない。

「お、おい――どうしたんだ？　疲れたのか？」

「大魔神ザロクサス、倒したの？」

ルクチェのその一言に、レティシアはふっと鼻で笑ったのを見た瞬間だった。

「！？」

物凄い衝撃波に吹き飛ばされ、散り散りになる４人――。

それをあざ笑うかの様にふふっと微笑むレティシア――。

「大魔神ザロクサス様を倒す――？　寝言は寝てから言うんだな…」

「なっ…！？」

ミグは少し起き上がってレティシアを見た。

レティシアは残忍に微笑を浮かべながら、その目の前に手をかざしていたのだった――。

つづく。

【第六章】†ｅｐ．３　何故…†（後書き）

あれれ。なんか気がついたら終わりに向かって一直線な雰囲気です。

【第六章】†ｅｐ．４　弱さ†（前書き）

いえ、終わってません。

例によって校正してませんが発見次第直します。すみません。

【第六章】†ｅｐ．４　弱さ†

「――レティ、待てッ何故こんなことをッ！」
ミグが言った。レティシアは紫色に妖しく光る瞳をミグに向けながら手をかざしている。
「…こんな世界…絶望すればいい。私みたいに…」
「――な、何言ってるんだ…？　絶望――？」
レティシアのかざした手から稲妻の渦が巻き起こる。瞬時にその前に現れたリュシファーが風の防壁でかばって防ぎながら言った。
「ミグ！　レティシアは心を捕らわれている様だッ…俺らのこともわかってないッ！」
レティシアの稲妻の渦の強大な威力の前に、さすがに多少攻撃を受けたリュシファーは苦痛に顔を歪ませたが、それでもリュシファーはレティシアに少し微笑んでみせた。
「ず、随分な魔法を放ってくれるな…お前は……ッ、はは…」
立っているのがやっとといった感じだったのだが、無理をして言っていたその一言に一瞬だけ、レティシアの目に浮かぶ紫色の揺らめいた光が小さくなった気がした。
そして明らかにその顔には困惑の表情が浮かんでいた。
レティシアは一歩、下がった――。リュシファーはそっと声をかけたが、レティシアはきっと鋭い目でリュシファーを睨みつけ、そしてかざされた手より放たれる風の魔法――。
その威力は思っていたよりも小さく、リュシファーはあっさりと炎の防壁で防ぐ。
咄嗟の判断力のミスが命取りだと思っていたが、今回はどういうわけか威力が小さかったため、怪訝そうな顔をレティシアに向けていたのだった。

「――お前、ひょっとして今…力抑えただろう？」

「くッ……うるさい…ッ！」

――何故だ。私は確かにこの男の言う通り何故か力を抑えた――…。

そして優しく穏やかな表情と、どこか切なそうな瞳で私を見るこの男。

何故かこの男が苦痛に歪ませる顔を見た時から、私は何か焦っている――…。

その時に唐突に過ぎる思考の声に、何だか違和感を感じる。

『――この者がお前に与えたように、この男も絶望ニ打チヒシガレレバイイ――…』

――！？

――違う。――この思考、誰だ！？　私の思考ではない……っ

自分の言葉じゃない気がした。脳裏に次々と現れる言葉と自分の言葉、そして口から紡ぎだされていた謎の言葉――。

「――私の気持ちなど何もわかっていないくせに…！」

はっとして私は口を押さえていた。

何故私はこんな事を――。

勝手に紡ぎ出た言葉とともに、唐突に脳裏に次々と浮かんできた声と情景――。

“だから――お前が好きでどうしようもないなどと言える訳ないだろうッッ…！！”

――あ…これ、この男…？

“やれやれ、しょうがないなぁ…”

――何故だ…

“じゅうぶん子供だと思うが…？”

――これは昔の……

“怪我はないか――？馬鹿姫”

――記憶か……？
何だ…コレ……一体何なのだ…ッ？
困惑する中で、さらに浮かぶ言葉――。
“お前は王女であることには変わりない――”
“だから――”
――あ……これは駄目だ…ッ、嫌だ…。
その続きなど聞きたくないッ――！
そう思った時、私はその場にガクッと膝をついていた。
「！」
「レティッッ！！」
そう男が言ったが咄嗟に手を前にかざす。
しかしその手は震え、目には涙も浮かぶ。どういうわけか自然に手が炎を放つのを躊躇していた。自身の意志なのだろうか。心が乱れる――。
「――く、来るなッ、近寄るな。お前は一体、誰だっ何故私の心を乱す…。うッ――」
「！？」
――頭が、割れる様に痛む――ッ…。
さらに二、三歩後退したレティシアは、後ろから優しく抱きすくめられた。
「――何をしているかと思えば、何故こんなヤツらに手こずっている…？」
「！　ザ、ザロク…サス…様――」
レティシアが言ったその名に、そこにいた全員が驚愕の視線を二人に注いだ。
「くっ、こんな時に……ッ」
リュシファーがため息混じりにそう言って大魔神ザロクサスを睨

んでいた。
「――わぁ～…ラスボスが出た～…」
ミグは既に放心状態にあり、現実逃避に成功して客観的な言葉を吐いていた。
「――あ、あの…っえと、申し訳…ございませ…ん」
レティシアの戸惑う様な言葉に大魔神ザロクサスは怪訝そうな表情を浮かべている。
そして、レティシアを前にくるっと向かせ抱き上げると、リュシファーを冷淡な瞳で睨みつける。
「――ほぉ、お前の心を乱すのはこの者か…。何を言ったかは知らないが、心がかなり乱れ術が解けかかっている。術により何の縛りもなしに表に出た、絶望を与えるこの世界など滅べばいいというその憎念…消すほどの何があったというのだ？」

――嘘だ――。
でも私は…絶望を――望んでいた……？

「よほど精神力が強い者ではないと解ける事もないのだがな…。心を覗ける訳ではないので原因は知らぬが、ひょっとしてこの者はお前の恋人だったか？　ならばありえる……ただ悪いなぁ…この娘は私がとても気に入ったので手をつけさせて貰った。――下手な手出しをして貰っては困る……私の女に」
「！？」
その男の表情に驚愕と唖然の表情を垣間見た時だった。

「リュシファーッッ…！　違うっっ――」

勝手に紡ぎ出た言葉と共に――思い出した……。

私――絶望するのが怖かったんだ――――。

何かが弾けた様な音と同時に…ゆっくりと朦朧として縛られていた意識が解けていく。

レティシアは、一か八かで小さく紡いでいた。

知っている言葉――。

長くはないけれど、大いなる救いの言葉――。

そしてさらなる光をもたらす――光の言葉。

――――…！

「な、何……ッ！？！？　ぐ、あああああああッッッッ……！！」

ザロクサスが悲鳴をあげてその闇を覆うような真っ白な眩しい光に包まれ、辺り一体も金色の光に包まれたことで、誰もが視界を奪われて目を閉じていた。

――――――…

目を開けた時、大魔王ザロクサスの姿はそこになかった――。

あるのは崩れ落ちるレティシアの身体だけだった。

ドサっとその場に倒れたレティシアをリュシファーが起こすと、レティシアは目に涙を浮かべながらリュシファーに抱きついて泣いていた。

「――レティ……――？…」

リュシファーはレティシアを抱きすくめながら優しい声で慰めた。

「終わっちゃった…っ全部、終わっちゃったっ……っ、終わったぁぁ～ぇーん」

レティシアのその言葉に、リュシファーは怪訝そうな表情で聞き返してきた。

ため息を吐いてレティシアは言った。

「終わったら城に戻るんだ。お前はこの前、立場がどうとか言って、全てが終わったらもうこうやって一緒にいられないと言うつもりだ

ったのだろう？　この時が――私はずっと怖くてしかたなかった。でも、ついに来てしまった――。それでも私は、リュシファーと一緒にいたいのに……っっ」

『へ？』という顔のまま、リュシファーはぎこちない笑みを作る。

少し照れて視線を逸らしている様だった。

「め、珍しく素直に言っているというのに、何で答えないんだっ――」

「…いや、…笑った方がいいのかと思ってな。悩んでいた…」

レティシアはリュシファーのその言葉に怪訝そうな表情をした。

「――勘違いだ。いつ俺がそんなこと言った。確かに立場の事はあるから、少し内密な付き合いをせねばならないかもしれないが、時期を見て正直に陛下に話して、それでも駄目ならなんとやらという線が一番妥当だと終わったら話そうと思っていただけだ。ただ、認められなかったらその時は――」

レティシアがはっとして首を横に振った。

「そんなの嫌だっっ」

「――はは、最期まで聞け。俺の親父達みたいにかけおちでもするかぁ？　ってことだ。どうせお前はもともと問題児だしなぁ、またかと思われて終わりじゃないか？　ははは。城を抜け出してかけおちしちゃった姫の一人くらい、世の中いてもいい――なんてのは、駄目だと思うか？」

リュシファーはそう言って微笑んだので、レティシアは顔を輝かせて頷いた。

「…お、お前何か少し考え方が甘くなった気がするんだが、大丈夫か？」

「――お前のせいだ…それより…」

と微笑んでから静かにリュシファーは話を続けようとしていた。

「話が済んだ様子なので、俺も聞きたい事がある」

「！」

レティシアはリュシファーの表情を見てぎくっとした。

大魔神ザロクサスの言った――手をつけた――。――俺の女――。
この二つの単語をただリュシファーは言った。
冷や汗がぎこちない微笑とともに自分に現れていただろう。
「…仕方ないといえば仕方ないが、操りの呪文は言葉ではないからなぁ…。魔法陣と口づけ――強めるためにはそれ以上の場合もある。手をつけたというのはどの程度だ？」
「口づけしか覚えていないが、その後すぐに頭が朦朧として意識が遠ざかっていって気絶していた様な感じで、皆を攻撃したこともよく覚えていないんだ」
ため息を吐いたリュシファーは「あ、そ」と言って、それを聞いた後も少し不機嫌そうだったが、――何はともあれ、全て終わった――と思ったのだった。

時の魔法属性の転移の呪文を使ってセルク大陸からミスレイル大陸はエルフィードへと転移するため頭上に魔法陣を出した際、しばらくそのまま移動せずに立ち止まっていた。
紫色に頭上に見えた重々しい霧は、まだ消えていない――。
……ごくっと息を呑んだ。しかし、他の誰かに言ったとしても見えていないのだ。
「ん？　移動しないけど、どうした？」
レティシアは微笑んで首を横に振った。
そのうち、消えるのかなぁ…と思って納得することにしたのだった。
「なんでもない――ごめん。さて、行こうか」
――――…

エルフの街、エルフィード――。
リュシファーの家――。
「それで全てが終わったらここに来て大事な話をしてやるというの

は、一体――」
「――あ…それか。俺とお前だけで、少し外で話をしようじゃないか。出かけよう。姫様たちは疲れているだろうから、アリシア、休ませてやってくれ」
「はい」
二人が出て行って適当に寛いでいた四人は、静かな時間の流れに身を委ねていた。
レティシアとミグはソファーで眠り始めていたので、アリシアが毛布をかけた。
「ふふっ、よっぽど疲れちゃったのねぇ――」
ルクチェがアリシアとともに微笑んだ。
「そうそう、セルディオさんとリュシファーは一体何を話にいったんでしょう？」
「あぁ、今まで内緒にしていた話です――」
「はぁ…、内緒？」
「ふふっ…驚いていると思います」
そう言ってアリシアはキッチンへと去って行ったのだった。

夜になり二人が帰って来たので、食卓を囲んでセルディオが言った。
「いやぁ賑やかなのはやはりいいな…はは。――あ、にんじん食べなきゃ駄目だぞぉ？」
とセルディオが何やらはしゃいでいながらも皆の父親みたいになっていて、レティシアはなんだかおかしくてくすっと笑った。
その後も色々と会話をしながら夕食を終えて、レティシアはエルフィードの街をリュシファーと歩いていた。
街灯が照らされたエルフィードの街。道行く人がレティシアを見かけては近寄ってきてこの間の話をする。『この間凄い魔法を使って街を救った美少女』として、ちょっとした有名人だった。
「――はぁ…」

リュシファーはため息を吐いた。
「な、何をため息を吐いているんだぁ？」
「ちょっと突然すぎてなぁ…何で２１年間も黙っていたかな～…と思ってなぁ」
「だから、…何がだって聞いてるんだ…」
とリュシファーの前に立ち塞がって怒ったレティシアを見て、再びため息を吐いて言った。
「――そのうちな…」
――――…

そしてその後は、妖雪の森の泉の妖精族達の封印も解いてミュイエを送り、ミールティアへとルクチェを送り届けると、三人それぞれに憂鬱な気分で時の転移の魔法にてやっとエンブレミア王国――マールシェスタ城城門内敷地へとやって来た。
突如現れた三人に、兵士達が声を上げてレティシア達の帰還を叫びながら廊下を連れられていく。
「おおおッッ！　ミグ様ッッ、レティシア様!?　何処におられたのです!!　それにリュシファー殿もッッ!!」
宰相大臣レイモンドが声を荒げて兵士から引継ぎ、三人を途中から引き継いで国王のもとへと向かう途中で、兄エルトが走って来る。
「レイモンド、私が父上のもとへ連れて行こう。レティ、ミグ――お帰り。帰って来たということは済んだのだな…よくぞ帰って来た。リュシファーも護衛ご苦労だった」
エルトが相変わらずの理想の兄スマイルで優しく微笑んで、三人を父エリックのいる大広間へと連れて来る途中、上手く事情を話し、納得されているから心配するなと言った。
「レティッ、ミグッッあぁ良かった。…心配していたのですよッ。レティ、ミグ…どっちかしら?あら?　えと、何だか髪の毛の長さが一緒だと…うーん」
途中で困惑するリーディアの言う通り、実はミグが切った時につ

いでにレティシアも同じ様に切って貰ったため、二人は全く同じだった。

旅用のマントを脱ぎ、服装で男女の区別をつけてみせると、ようやく解かったようだ。

「――レティシアッッ、ミグッッ！」

父エリックの声である。

ミールティア町長の手紙を突きつけてみるが、それを見もせずに厳しい面持ちで二人の前にずかずかと歩みを進めて来て、じろっと睨みながら立ち止まった。

二人して抱き合いながら恐れおののく姿は、父エリックの目にどう映ったのかわからないが、厳しい表情をしていたと思っていた父エリックは、何故か二人をがっと抱きしめた。

きょとん、とした二人にエリックは穏やかに言った。

「――よくぞ無事で帰って来た。さすがは我が子供達じゃ。よし、じゃあそこに座ってくれ…リュシファーも」

大広間の椅子へと三人を座らせたエリックは、懐かしいものを観るかのような熱い眼差しに変わっていた。

「エルトから話は聞いた。レティシアよ、お前は王女にしておくのは勿体ない…兵士だったら称号をやっている所だ。しかし、お前は王女でありながら大儀を成し遂げたのであろう。うーん…とはいえ、さっきまでは怒ってやろうと思って待ち構えていたのだが…久しぶりに見ると、どうも、駄目だな……っははは…つい目が霞んでしまって…っ…よくぞ無事でっ…ぅぅ」

エリックが目に涙を溜めてそう言ったので、とても心配されていたことを知った二人は、素直に謝った。少し話をした後に、母リーディアが言った。

実はレティシアとミグが産まれる時、不思議な声を聞いたと――。

精霊の女神レティシアと名乗る女の人の声で、『時間』だとか『光』だとか『王女』だとか『最期』だとか何かを頼まれていたけど、リーディアはあまりよく意味がわからなかった。

しかし、頷いた途端に二人はあっさりと痛みもなく産まれ、とても楽な出産だったとか。

その頷きが、転生の承諾となったということは夢にも思っていなかっただろう。

そしてその声が名乗った『レティシア』とは良い名前だと思い、双子の女の子の方にその名をつけたという話だった。

「今日明日の所は疲れているだろうからゆっくり休みなさい」

リーディアの言葉にレティシアとミグは頷いた。

「…リュシファーよ、エルトから話は聞いているがよくぞ我らの子供達に力を貸し、保護者として側についていてくれた。礼を言う――。これからもよろしく頼む――まずは疲れたであろう。そなたも休まれよ」

ほ、としている様子だっただろう。誰もが安堵していた。

部屋に戻る途中に、マリア、厨房の者や城の兵などが集まってきて声をかけて来た。

怒られると思っていたのに、ちっとも怒られはしなかったのは多分エルトの計らいによるのだろう。

城の中は何も変わらない――。でも、何かが違う。

ではなんなのかと聞かれてもレティシアにはわからなかった――。

「じゃ、おやすみ」

リュシファーが言った。レティシアは横目で不満そうに目配せをした。

ぎこちなく困った様に微笑むリュシファーは首を横に振る、というやり取りを横から見ていたミグはため息を吐く。

「…お前ら、そんな合図してたらすぐばれちゃうぞ。ここは城の中なんだからな」

「ぁぅ…ミグっ」

イヤイヤ連れて行かれるレティシアを見てリュシファーは微笑んだ。

ここは城の中――かぁ。本当、帰って来たんだなぁ…と思った。

――それから、三日たった。

勉強の時間の真っ最中だというのに、レティシアは考えごとをしていた。

というのも、今日は朝から何か良くない胸騒ぎがして仕方がなかったのだ。

紫色の霧が晴れていないことがだんだん不穏に感じて仕方なくなってきただけではなく、精霊の女神レティシアから労いの言葉ひとつないのも、そもそもおかしいとこの三日間時々思っていた。

何かが引っかかってすっきりとしない。

――そういえば、ルクチェに「封印ってしなくてもいいのかしら」とさりげなく風呂に入っていた時に言われた事も思い出していた。

レティシアはそういえばそうだと思った。しかし、封印の事など精霊の女神レティシアから聴いたことがない。

「――そうだっ！」

「わっ、何だ突然っ…びっくりしたなぁ。まともに勉強に身が入っていないと思ったら、何を突然……」

黒縁の眼鏡をかけたリュシファーは、冷めた目をレティシアに向けた。

その目と現在のこの時間の主旨を思い出し、ぎこちなく微笑みを作りレティシアはため息を吐いた。

「いや…ごめん。ちょっと気になる事があってつい……」

「気になる事――？　何だ？」

リュシファーが教科書を閉じて、レティシアの少し乱れた髪を直してやりながら尋ねた。

レティシアは、ふっと微笑んで首を横に振った。

「いや、気のせいだ――悪い」

それをリュシファーは少し怪訝そうに見たが、そのまま授業を続けたのだった。

まだ少し話は続きそうである。

つづく。

【第六章】†ｅｐ．４　弱さ†（後書き）

時間かかりましたがちょっと忙しかったのですみません。
やっとＵＰです。
ではでは。まだ終わったようにみせといて終わっていない様子。
うーん久しぶりに戻って来た城ですが、何かあるんでしょうか・・・
ではでは。

【第六章】†ｅｐ．５　数奇な運命の結末？（前書き）

終わっても良かったんですが、番外編的なものも含めてもうひとつの話で終わりですｗ

【第六章】†ｅｐ．５　数奇な運命の結末？

授業が終わるなり、レティシアは「ごめん」とリュシファーにそう言うと、屋上へと走った。
外は鉛色の雲が辺りを覆い、天気があまり良くない。
エミュ～に話しかけようと思ったのに、エミュ～の姿はない。
精霊の女神レティシア、土の大精霊ウレハの名、雷の大精霊イシュタリス、水の大精霊リーヴァ、聖の大精霊リザルトの名を呼んでも、返事はない。
風の大精霊セイレシルは声をかけてはいないが、どうせ返事はないとわかりきっていた。
――いつからだ。
声がしないのは、そうだ。
確か、大魔神ザロクサスに闇の炎の魔法を使われた時、水の大精霊リーヴァが少し防壁を張ってくれていた。
その時は確かにいたのだ。
しかしその威力の強大さに倒れ、操られてからは声がしないのだ。
一体、どういうことなのだろう――。
とにかく、ため息を吐くレティシアはその場に座り込んだ。エミュ～が出てくるかもしれないと思った。
「！？」
低く重々しい声が聞こえた気がしたレティシアは、辺りを見回した。
しかし、誰もいない――。どこかで聞いたことがある声だった。
――レティシア……
もう一度はっきりと聞こえたその声は、自分の心の奥底から聞こえて来ていた。

「！？」
レティシアは驚愕して立ち上がった。
そして静かに語りかけるその声にこう言った。
「誰だッッ」
――私はお前、お前は私だ。
そして、お前がこの様な素晴らしい力を持つとは知らなかった――。
やっと私は目覚めた――。
「！？」
レティシアは心の中で確かに聞こえたその声に、その名を思い浮かべた。
――そう、私はお前に消されて身を失った大魔神ザロクサス。
お前に操りの術をかけて置いたおかげで助かったわ…。
突然だったがあの場で少しでも術が残って入れば、入り込むなど容易いからなぁ。
「な、何…！？　あの時から――私に……！？」
レティシアは目を見開いて後ろに後退した。
そんな…まさか……ッッ
――くっくっくっ、あれからちょうど三日たった今やっと目覚めた。
お前に食らった光の魔法――そのせいでお前に取り込んだが少々目覚めるまでには時間がかかった。
しかし…これでもうお前の身体を自在に操ることが出来るというもの…。
「な、何だと……！　そんな事させるか…ッッ」
――ふふふっ…悪いな。
お前の意志はもはや何の意味も持たない――。
この私に乗っ取られ、精霊達の力も及ばぬ…むしろありがたく使わせてもらおう。
ふっはははははっ……ッ

――……

――…

リュシファーは心配で見に行った屋上に倒れているレティシアを運び、ベッドに寝かせていた。

隣ではミグがため息を吐いている。

ベッドで寝かせてから30分くらいはたっただろうか。

やっと目を開けたレティシアは、具合があまり良くないようだ。

顔色が少し悪い。

「――大丈夫か？　心配したんだぞ？　今日は朝から変だし…」

「そう…？　そんなことはない…」

レティシアがそう言ったので少し安心した。

レティシアはトイレに行くと言った。

ひとりで大丈夫かと尋ねたが大丈夫と答えるので、ひとりで行かせた。

しかし、先程からミグが一言も喋らないので少し気になり尋ねた。

「――い、いや…なんかアイツ少し変じゃなかったか？」

「え？　具合が悪いからじゃないのか？　顔色も良くなかったし」

と答えたが、ミグはうーんと考え込んでいた。

その時だった――。

突然の悲鳴――。

驚いてばっとドアを飛び出して廊下へと出る。

「きゃあぁぁっ――姫様、どうしたのでございますっ！？」

侍女が何人かその場に倒れている。

「姫様…？　悪いな…お前達の知る姫様の身体は私が乗っ取っている。したがって姫様ではない…」

何……！？　…大魔神ザロクサス……！？

レティシアのその手に風の法術が発生し始めている。

マズイ…！

リュシファーは急いで侍女の前にスッと移動すると炎の防壁を張った。

「――くッ、またお前か……しかし、この私には攻撃出来まい」

レティシア――いやその姿と声をした大魔神ザロクサスは、その可愛い顔を不敵に微笑ませながら言った。

「おい、リュシファーッ、どういうことだっ。こいつ死んだんじゃなかったのか！」

ミグのその言葉に、大魔神ザロクサスは言った。

「悪いなぁ～、操りの術の毒牙にかかった者がたまたま側にいてくれて助かった…少しでも術が残っていればこんな風に乗っ取ることが出来る。しかもまさか精霊たちが残した最後の希望だったとは。ただの美少女じゃなかったわけだ。この身に入るまで全然知らなかったぞ――ははははは、だがもはやこれで終わりだな。最強じゃないか…？　この力があればもはや怖れるものなどないわ――」

そう言って大魔神ザロクサスは手を下にかざして地割れを起こした。

城がゴゴゴ…と揺れ、大地震で城が崩壊を始める。

既に廊下にも炎が放たれていた。

そこに様子を見にやってきた兵士長テヴァンと兵士達に向け、不敵な笑みを浮かべた。

「ほぉ、お前たちは剣を扱うのか。ならば剣には剣で相手をしてやるか…」

「な、姫――私は姫に刃を向けるなど出来ませんッッ」

一人の兵士がそう言ったがレティシアは問答無用で無理矢理剣を取らせたかと思うと、次々と薙ぎ倒していった。

…うわ～…剣も大した腕だ……とリュシファーは青ざめていた。

しかし、兵士長テヴァンが剣を構えた時、その場の空気はガラッと変わった。

二人の間には何ともいえない緊迫感が漂っていた。

廊下の絨毯がチリチリと音を立てながら燃える中、その睨み合いは続く。

テヴァンは目の前に縦に剣を構え、目は閉じているかの様に細め、大魔神ザロクサスは頭上上段に剣を構え、その刃を片手で僅かに支えて触れ、見合っている。

どちらからしかけるともなく物凄い速さで金属音が鳴り響き、スッとお互いに身を重ね、過ぎ去った後――。

ドサっと倒れる兵士長テヴァン。大魔神ザロクサスも腹部を押さえ膝を床に着く。

「ふっ…少しかすったか…。まぁこのくらい大した事ない。…さてと、次はお前達だ」

しかし、階段から次々と来る兵士達は膝をついた大魔神ザロクサスにさえ怯み、後退を始めていた。

テヴァンでさえ敵わない相手だということは、兵士の戦意を喪失させていた。

おまけに大魔神ザロクサスと聞いても、我が国の王女レティシアに剣を向けるなど…とざわついていた。

ついには「思いついた」と言って剣に風の魔力を秘めさせ、魔法剣として衝撃波を放つ最強のこの国の王女のその様子に、誰もが勝てる見込みがないと怯んでいた。

「――もう、誰もかかって来なければつまらぬ。やはりお前にしよう」

大魔神ザロクサスはその場に立ち上がると何故かスッと消えた。

そして、リュシファーは後ろを振り返れなかった。

気配はすぐ後ろにあった。

「リュシファー…ッッ！」

ミグの叫び声がする。

…こいつの手にかかって死ぬなら、それでもいいか――…。

そう思って少しだけ死を覚悟して目を閉じた。

しかし、「ッう…！」と聞こえるその声に、リュシファーはばっ

と後ろを振り返った。
何と、大魔神ザロクサスの胸に剣が刺さっている。
おまけにそれは自分で思い切り突き刺した様子で、後退をしながら苦痛に顔を歪ませながら、少し笑顔を作って見せていた。
「――グッ…オノレ…、コンナ事シテ、オ前モ命ヲ落トス…ノダゾ…！」
というレティシアの声じゃない邪悪な声が発せられていた。
はっとした。これは……。
その後に聞こえた元のレティシアの声。
「――リュシ…ファー…ッ、これで…いいね……ッ。ごめ――…ね」
剣に添えられた手から魔力が加えられたらしく剣が青白い光に包まれ、そして辺りをカッと眩しい光が包んだ。
奪われたその視界の中、レティシアが穏やかに微笑む姿を見た気がする――。
絶句――――。
視界を取り戻した目の前に広がっているその光景に、誰もがその二文字に当てはまる行動を取っていた。
誰も動けない――。
口に手を当てる者――。
現実逃避する者。
一歩も動けずにただ倒れている美しい少女から床に流れ、絨毯に染まる血を眺めていただろう。
恐る恐る近づくリュシファーは生死を確認した途端、発狂しそうになった。
首を横に振り、ざわめく中、不思議と涙は出てこなかった。
現実を、現実として受け止めていなかった――。

ミグが倒れているレティシアの体に深々と突き刺さった剣を抜くが、ただ横たわるだけのレティシアにミグは泣き崩れ、言えるだけの文句をたくさん並べていた。
見ていると痛痛しい程に伝わるその悲しみに、誰もが声をかけられなかった。
国王エリックと王妃リーディアが慌てて報告を受けてやって来た。
「お…おお、な……んということだ……」
「嫌ぁぁぁぁあぁぁーっっっ……ッッ！！」
王妃リーディアはそう叫んだ途端にその場に倒れ、国王はレティシアの遺体を清めるよう指示を出し、皆戻って行った。
ミグとリュシファーだけがその廊下に残っていたが、お互いにどちらからともなくレティシアの部屋へと戻った。
「嘘だ……嘘だ……ッこんなの…嘘だ……」
レティシアが先程まで寝ていた場所を見てミグが呟いている。
レティシアは今日、様子がおかしかった。
気になる事があると言っていた。
まだ大魔神ザロクサスが生きていることを知っていたのだろうか。
しかし今や、それも聞くことは出来ない。
何故だ……とても哀しいのに、現実に起きた事の様な気がしていないのか、涙の一つさえ出て来ない。
本当に悲しい時と言うのは、涙は出ないと――誰かが言っていたのを思い出す。

「ミグ――レティはこうなることを…知っていたのかもしれない」

――何を言っても何の意味もないことなど、わかっていた。

「――相変わらずひとりで背負おうとするヤツだと、思わないか？」

――ひとりで背負わせずに、力になってやりたかった。

「でも、あいつはこうでもしなければ俺達を助けられないと、ああしたんだぜ？　…ほんと、馬鹿だよな…ほんと…っ――」

――初めて涙が出た。

『ふざけるな』とか、続き言おうと思っていたのに言えなくなった。

文句を言いたくても言えないこと――実感して初めて涙が止まらなくなっていた。

そんな日から二日経ち、レティシアの葬儀が密かに執り行われた。

ミグはそんな俺を慰めていた。

自分も泣いていたというのに、見ていられなくなったのだろう。

「――リュシファー……」

レティシアは墓に入った。

次第に死を本当に認め始めてからが、地獄のような日々だ。

まだ、信じられない気がしていたのだが、墓の存在は大きかった。

一ヶ月ほとんど誰とも口を聞けない程に自暴自棄となったミグと同様、俺自身もそれに近かっただろう。毎日涙を流し続け、もう枯れたと思っていた。

そう言えばレティシアが最期に流した涙が、どういうわけか結晶化して宝石の様に水色の石となって落ち、俺はそれをこっそりと拾って大事にとっておいた。

真夜中、誰もいないレティシアの部屋に行き、バルコニーに出てそれを握り締め、俺は満月を見ながらひとり、こう語りかける様に言っていた。

「…レティ、やっぱり俺お前いないと駄目みたいだ――。いつからなんだろうな…ここまで存在感が大きいとは思っていなかった……

俺、駄目だ……どこにいてもお前のことを考えてしまう、もう…お前はいないのに――」

その場にがくっと膝をついて、握り締めた石を見ているともう涙は溢れて止まらなくなっていた。

その時、突然満月に少し影が出来た気がして、一瞬少し暗くなったかと思い、前を向いた。

「――あのぉ…な、泣いているので声をかけずらかったのですが…、願い事はなんでしょう？」

「!?」

俺は驚愕した――。

いや、絶句――。

硬直したまま身が動かせない。

その声は紛れもなくレティシアの物で、その顔立ちもレティシアによく似ている。

そして違うのは、髪の毛が金のような銀色で長いという事と、その背に天使の様な羽根が生えている事だ。他人の空似にしては良く似ている。というより、翼を持つ者など初めて見た。

「ぁ、あのぉ…？　呼んだでしょぉ？　それ――」

レティシア似の少女は俺の右手にある石を指差した。

これ？　呼んだ？　どういうことだ？

怪訝そうな顔を少女に向けると、おっとマズイ。少女は少し怯えてしまったようだ。

「あ、ご…ごめん。イマイチよくわからないんだが、これ…何だ？」

そう言った俺に少女は目を見開いて「ええっっ知らないで使ったのぉっっ？」と驚いた様子だった。

説明を聞くと、どうやら少女は女神（しかも見習い）で女神の涙石という貴重なその石に、自分も本当に哀しいと思って涙を溢した

者の元に、願いを叶えに女神はやって来るとのことだった。そして、その願いとは――三つ叶えてくれるのだと言っていた。

どうやら初めてこうして人間界に願いを叶えに来たというこの少女は緊張しているのか、もじもじとしている。その様は少し可愛くて、ふっと微笑んで俺は言った。

「――ど、どんな願いでも、いいの…か？」

「はいっ」

なかなか素直そうなレティシア似の女神に、少し考えて俺は尋ねた。

「女神というのはどういう者がなる？」

少し考えて少女は言った。

「生前にいいことをした者がなるそうですよ。でも、覚えていないんですけどね。何かとてもいいことをした者が女神になるんだとか神様が言ってました」

「へぇ……」

俺はしばらくそのまま考えていた。

少女が怪訝そうな顔をして時を待っていたが、次第に暇そうにし始めた。

くすっと微笑んだ俺は少女に言った。

「じゃ、一つ目の願い。君の記憶を戻して欲しい」

少しの沈黙の後、女神は驚いて聞き返してきた。

「…な、なんでそんなことをっ？」

「――理由ナシじゃ、願いって叶えてくれないものなのか？」

「い…いえ――そうではありません。でも、貴方にとってそれが幸せになるのかが理解できなくて…」

女神は困った様子で顎に人差し指を当てて言っている。

俺はふっと微笑んでこう尋ねた。

「どんな生前を過ごしていたか、知りたくはないのか？」

きょとん、として女神は答えた。

「そ、そりゃあ…知りたいと思った事はあるし、それを知る神様に

尋ねてみたことはありますが、生前の名前すら教えてくれずに、『知る必要はない』と言われてしまいました。でも、『お前の記憶は少し哀しい――だから思い出さぬ方が良いのだ』と言われたので、それ以来そのことは考えなくなりました…」

――哀しい記憶……。

「頼む――。この通りだ。もし、それが嫌な記憶であったら、他の願い事で消してやるから。頼む…この願いを叶えてみてくれないか…」

俺は女神に頭を下げた。

少しして、女神にその想いが伝わったのか女神は前にしゃがみ込み、俺の頭に触れた。

はっとして顔を上げて見た優しく微笑む女神の顔は、やはり見れば見る程レティシアにそっくりだった。

「――そんなに言うなら、わかりました。顔を上げてください…」

女神は手を胸の辺りで組み、目を閉じた。

女神の周りを金色の優しい光が包む――。

一瞬だけ眩い光に視界を奪われて、目を閉じた。

その願いは叶った様で、女神は目をゆっくりと開けた。

目の前の女神――。

その目には涙を浮かべ始め、身体は小刻みに震えている。

俺をそうやってただ見ていた。

一筋の涙が零れ落ちた時、女神ははっとして俯いた。

俯いたまま、口元が最後ふっと緩んだのを垣間見た次の瞬間、女神は言った。

「…お前な、こんな意味のない願いをするより、自分の為になる願

いをしたらどうなんだ…」

「！」

震えたその声は、やはり口調が変わりレティシアの口調その物だ。

「レティ――そうなんだろう…？　なぁ、お前なんだろう……ッ？」

俺は顔を覗き込む様にしてそう言った。

女神は床についていた手をぎゅっと握り締めて答えた。

「――そうだ。確かに私だ、リュシファー…。だが記憶を消して貰おう…」

「！？」

「――約束だろう？　思い出したくない記憶ならば消してくれると…」

女神のその言葉に、驚愕した。

「何故だ…レティ……」

女神は俺の言葉に顔を上げて、突然抱きついて来た。

「――こうしてっ、側にいたくなるだろう？　天界へ戻り、その記憶を持ったまま過ごすのは酷だと思わないのか…！？　なんてことしてくれたんだ……っ」

女神は俺の背を握った手でドンドンと叩いた。

俺のその手に、柔らかな羽根が触れる。

そう、レティシアは女神――。

記憶を戻したからと言って、どうにかなるわけでもない。

しかし、それは次に言う一言を言うまでだと俺は、ふっと呆れた様に微笑んでいた。

「――レティ、落ち着いてくれ…。二つ目の願い。お前が叶えたい願いを叶えていい」
「…え……何――言って…」
女神は顔を見合わせずにそう呟いた。
「それとも、俺が願おうか――」
俺の一言に女神は少し身を離して驚いた表情で見ていた。
俺はふっと微笑んで人差し指でその涙を拭った。
女神はそれでも涙を流しながら、微笑んで言った。

「――リュシファーと、ずっと一緒にいたいって…願うに決まってるじゃないか……」

俺は微笑んで頷いた。

そして、女神は手を目の前で組んで祈った。

もう一度、金色の光が女神を包み、視界がはっきりとした時、柔らかな羽根が頬に触れた。
飛び込んできた女神に向かって、俺は言った。

「――お帰り…レティ」

――――…

こうして、俺のもとにレティは戻って来た。

その日――。
初めて一線を越えたのは――、書くべきことではないかもしれな

い。

レティシアのベッドの上で、俺とレティシアは話をしていた――。

「――お前が女神様ねぇ…。俺は罰でも受けることになるのかなぁ～…」

「…前例がないからわからないが…お前という者は、本当に頭に辞書でも入っているかの様に想像もつかぬ事を言う…。明日、何て皆に説明すればいいんだ…？」

「うーん。ありのまま言えばいい――。それと、お前に言っておかなければならないことがある」

「ん？」

聞き返すレティシアに、俺は横を向きその顔を見て言った。

「――俺さ、エルフィードに寄った時、親父からその時初めて聞いたんだが、どうやらエルフの王族らしい――」

レティシアが何も着ていない裸のままで、ばっと起き上がってリュシファーに驚愕の視線を向けた。

「な…ッ、何でもっと早く言わぬッッ！」

「だから、あの時初めて知ったんだ。仕方がないだろう？　少し心の整理も必要だし…時期が来たら言おうと思っていたんだ」

少し俺も起き上がり、レティシアに毛布を掛けた。

「――親父あんなんだろう？　長男だから王位継ぐ筈だったんだけど、自由気ままに城を出て暮らしてるんだそうだ。王など弟がやればいいと言ってな…。お前みたいに問題児だったんだろうなぁ…とはいっても王族であることには変わりない…」

「じゃ、じゃあ…立場がどうのというのは――」

レティシアの言葉を遮って、俺は言った。

「――そう、不相応ということはない…ってことだ。そこで、聞こう。俺と一緒にいてくれるか？　姫君…」

俺は少し微笑んで言った言葉に、レティシアは微笑んで頷いた。

そして――。朝――。

目を覚ました時、レティシアの姿はそこになかった――。

ぼんやりとした頭で、夢だった――あんな事が起こるはずがない…と思った。

ため息を吐いて、レティシアのベッドから足を降ろしてドアへと足を進めている時、後ろからふんわりとした柔らかな感触とともに腕が回された。

「――おはようっ…どこへ行くんだ？」

ばっと振り返ると、レティシアは微笑んで確かにそこにいた。

俺は思わず「わぁぁッ！」と叫んでいたのだった。

――――…

最終話へ続く。

【第六章】†ｅｐ．５　数奇な運命の結末？（後書き）

ありゃーなんか哀しいエンドにはするつもりなかったんですが、こうして悲劇から一変させると、とんでもないことになってまいりました。
そしてリュシファー視点へと移って今後は展開を進めます。
どのくらい進めるかは未定ですが。ではでは。

「――お帰り…レティ」
――――…
で終わらせても良かったんですがね。
終わりで良い方はここで終わらせてくださいｗ
番外編的にもうひとつ書いて終わりにしたいと思います。

【第六章】†ｅｐ．５　数奇な運命の結末？†††完（前書き）

長らく読んで頂いた方ありがとうございました。
この話を持って最終話とさせて頂きます。

【第六章】†ｅｐ．５　数奇な運命の結末？†††完

「……どうしたんだ？　そんなに驚いて……」
レティシアは怪訝そうな表情で俺の顔を覗きこんでいた。
「――お、お前本当にお前なのかっ？」
俺は理解に苦しみながら、何ともわかりきった質問をした。
「ゆ、夢か何かだと思うのか？」
レティシアは宙で一度羽根を広げて、腕を組んだ。
その姿はやはり女神――神々しさに包まれている。
俺はレティシアのその姿のある点に気付き、ひとつ物を言っておこうと思った。
「――あ、いや。とりあえずお前は服を着ろ……裸はマズイ……」
・・・・・・・・・・・・・・。
「あぁ、そっか。――これで良いか」
そう言ってレティシアは普通に服を簡易魔法で着て、くるっと回ってみせた。
ふと俺はその姿を見て、羽根に触れた。
「だ、駄目だ……羽根には触れるな……。急所でもある部分がある」
「え？　そ、そうか……すまない。綺麗だなぁと思ってな」
レティシアは身を離し、少し怒って言った。
「――羽根の生えた根元の所は絶対に触れてはならぬ」
どうやら根元の部分を触れると失神してしまうらしい……確かに急所だ。
少しいい事を聞いたと俺は密かに思った。
「……では、まずミグのところへ行こう。あいつはきっと、いい驚き方をする」
「あはは、そうだな……アイツが一番、お前の死を悲しんでいた。多分俺より近かっただろう？　お前達二人はとても仲が良かった」
レティシアは、その言葉に照れくさそうに微笑んだ。

リュシファーはミグの部屋をノックした。
返事はない――。
ドアに手をかけると、ミグの部屋のドアは簡単に開いた。
ミグの部屋は荒れている。
ベッドに横になり、目はうっすらと開けているがドアを開けた俺を見向きもしない。
声をかけても、それは同じだった。
ため息を吐いて、俺は言った。

「――ミグ、レティシア……理由あって帰って来たんだ」

反応はないと思われたが、微かな希望を込めて放ったその言葉に、ミグはばっと起き上がってこちらを見た。
目を見開いて、驚愕した表情で俺を見ている。
「レティ、入って来てもいいぞ」
俺はドアの前で待たせているレティシアに声をかけた。
ドアがゆっくりと開かれて、そこにレティシアが姿を現した瞬間。
ミグは指を差したままで絶句していた。
……予想通りだ。
「う、……嘘――だって、えっ……あ、……おっ俺……今、変な夢……見てるっ？」
レティシアと俺はミグのその様子に、くすっとお互いに顔を見合わせて微笑んで、ミグに近寄った。
レティシアは近寄るなり、驚いているミグに抱きついたその勢いで押し倒した。
「わ、ちょ……っお前どうしてッッ！　っていうか、その姿は一体――！？」
レティシアはミグの顔を寝転がりながら微笑んで見ると、微笑んで言った。

「――女神……。生前にとても良い事をした者が女神になるんだとか。それと、女神になる器を持った者が流した涙が時折結晶化する。それを持ったリュシファーが願った願いにより、私はここでリュシファーと一緒にいなくてはならなくなったというわけだ」

レティシアのその説明に、少し訂正を加えるため俺はため息を吐いた。

「いや、いなくてはならないというのは少し語弊があるんじゃないか？　三つの願いの内、二つ目はお前が望む願いを言っていいと言ったんだ。俺は。まぁ、俺が願おうと思っていた願いと同じだと思ったので言ったのであながち間違いでもないがな……」

レティシアはその言葉にぎこちなく微笑んだが、起き上がってため息を吐いた。

「とにかく、そういうことだ。女神と言っても、神様が一番偉い――私達女神は、願いを神様に届けて叶えて貰う様に祈るだけだ――従って、別に何も普通の人間と大して変わらぬ。まずはミグに報告をと思ってな……すまなかったな。悲しませて……」

ミグは起き上がると、レティシアを抱きしめて泣いた。

困った様に微笑んだレティシアはミグの頭を優しく撫でて微笑んでいた。

その姿はやはり女神だ――と俺はそう思った。

その後、国王の元へと足を運んだ俺達は、会う者会う者に事情を説明して大広間へと着く頃にはさすがに少し疲れていた。

勿論、国王と王妃も驚愕して事情を説明すると涙を流しながら歓喜した。

そして俺は言った。

レティシアと恋仲であることや、自分の知らなかった素性のことを言った。

「な、なんと――！　も、勿論だ――。素性などという物はなくとも、始めからお前のことはとても出来た人物だと私は思っていた。

お前にレティシアを任せるなら私も安心だ――それにどちらにせよ、女神である今のレティシアは私達の娘の記憶を持ってはいるが、身はそうではないということであろう？　それでは私達がとやかく言う話ではないだろう」

国王はそう言って、そうかそうかと微笑んで二人の肩に手を置いた。

王妃リーディアも嬉しそうに微笑んでいた。

俺達二人は顔を見合わせて意外な返事に微笑んだ。

『今夜は宴だ』と国王は嬉しそうに手を叩いて侍女に伝えた。

そしてその報告は城中に伝わり、部屋に戻った二人のもとへエルトが急いでやって来た。

「――レ、レティ……！　本当にお前なのだな……！？」

「兄上ッッ！」

レティシアは嬉しそうにエルトの胸に飛び込んだ。

「――何はともあれ……、本当に人騒がせなヤツだな。お前は……」とエルトは落ち着いてからそう言った。

……その通りだと微笑んだ俺にエルトは少し表情を変えて言った。

「――リュシファー、お前にはひとつ聞いておかねばならぬな……」

その少し厳しい目に、俺は少しぎくっとした。

案の定エルトはいつから恋仲なのかと聞いて来た。

勿論、エルトは自分がダムルニクス王国で俺達に会った時に、既にそうだったのならば何故言わなかったのかという事を疑問に感じて言った様だったが、その時はまだそうではなかったと告げると、息を吐いて話を聞いた。

「しかし、まぁその直後とは…お前には恐れ入るなぁ」

「あ……はは、その……これからはお義兄様とお呼びしなくてはなりませんね」

「……はは、その様だな。物好きだなお前も。とにかく、手のかかる妹をこれからもよろしく頼む……」

エルトは優しく微笑んでそう言った。

そうして――しばらくして結婚式を終えた二人は、この城で引き続き暮らすこととなった。

俺とレティシアは結婚したとはいえ、何か変わったとは思えない。

教育係兼目付け役であることには変わりない。

女神に勉強を教えるというのもおかしな話だ。

レティシアはこの城のことを――こう例えていた。

“煌びやかな牢獄”だ――と……。

しかし、旅に出てみてそうでもないことがわかったと言った――。

自由に話し、自由に多少問題を起こしながらも、平和に過ごして来たこの城――――。

前ならば自分はいつも煌びやかな牢獄にいてなんて不幸なんだだと思っていたというのに、

『もっと不自由な場所にいた者がいた』と――レティシアは話す。

多分、それは精霊界の王女――――ラクロエのことを言っているのだと思う。

そんな風に転生させられたラクロエに込められた願い――。

それを無駄にする事がどうしても出来なかったレティシアは、大魔神ザロクサス諸共滅ぼす道を選んだ。

辛くて、でも守りたい物のためああするしかなかったというのは痛いほどわかる。

俺があの立場だったとしても、そうするかもしれない。

「――もちろん、お前をこの手にかけるのが嫌だったのもある……」

レティシアは得意気に微笑んで言った。

「――ほぉ……。それで、勉強を中断したいのかな？」

そう――。今は勉強の真っ最中だ。

中断させられても困る俺はそう意地悪い目を浮かべて微笑んだ。

「ぁぅ……」

こいつの考えそうなことなど、大体お見通しだ――。俺もレティシアと過ごして、手に取るように考えが読めるようになったものだ。

レティシアは『結婚してからも勉強させられてはため息も出る』と、呆れたように微笑んだ。

そして不満の声を並べ出すレティシアは、俺が赴任してきてから何も変わってはいないのかもしれない。

俺が呆れているとレティシアは、はぁ……と何やらため息を吐くとこう言った。

「だってぇ～、気分が悪いんだ。なんだか最近時々気分が悪くてこう、何か吐き気がする様な変な感じで――」

「！？」

その言葉に俺ははっとしてレティシアを見た――。

「――レ……レティ、それって…俺達の子供が出来たということでは……？」

レティシアも驚愕の視線を俺に向けていた。

それは、結婚してから四ヶ月後のこと――。

――レティシア懐妊の知らせはその日のうちに城中に伝わった。
そして驚いて未だに不思議でならないが、なんと三ヶ月で生まれて来た――。
おそらく、女神だし勝手が違うのかもしれないと俺は全知識を駆使しても理解不能なその疑問に答えを出した。

子供は、なんと女の子二人の双子だった。
エルフと人間のハーフと、女神の子――一体どんな子が生まれてくるかと思っていた。
しかし容姿は普通に人間の様でレティシアによく似ていた。
その王女たちはエリウとオニキスと名付けられたが、この双子の王女エリウとオニキス――。

……大体予想はしていたものの、レティシア同様――物凄い問題児であったことは言うまでもない。
俺は三人も手のかかる家族を抱えることとなったようである。はぁ……。

エンブレミア王国マールシェスタ城。
この国の問題児であった王女レティシアは、女神となった今でも天界にとっては問題児と言われているだろう。
たったひとつの願いにより地上に住まい――、禁忌を犯した女神レティシア――。

何はともあれ、この平和な日常はレティシアが煌びやかな牢獄と言ったこの城でこれからも続いていくのだろう。
もう何も嵐はやって来ないよう俺は願うばかりである――。

何かがあった時には、いつかまた別のお話で話すことがあるかもしれない――。

それまでは、やっと訪れた平穏が続いていると思っていてほしい――。

では――――。
またどこかで会うその日まで――――。

――――……

――……

†††　～ＦＩＮ～　†††

読んでくださりありがとうございましたぁぁっ。

【第六章】†ｅｐ．５　数奇な運命の結末？†††完（後書き）

やっと終わりましたぁ。
機会があれば続編を書いてみたいと思いますっっ。
それでは長い間お読み頂いてありがとうございました。
月葉りんご処女作完結出来ました。何か感想アドバイスとか、何かつまらなくても何か頂けると幸いです。
ではでは。本当にありがとうございました。
長かったのに読んで頂けた方感謝いたしておりますっ。
お疲れ様でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1416l/

†††Ｔｈｅ Ｃａｓｔｌｅ Ｌｉｋｅ Ａ Ｇｏｒｇｅｏｕｓ Ｐｒｉｓｏｎ†††

2010年10月8日12時43分発行